

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 114

百間川兼基遺跡 2 百間川今谷遺跡 2

旭川放水路(百間川)改修
工事に伴う発掘調査 XII

1996

建設省岡山河川工事事務所
岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 114

百間川兼基遺跡 2 百間川今谷遺跡 2

旭川放水路(百間川)改修
工事に伴う発掘調査 XII

1996

建設省岡山河川工事事務所
岡山県教育委員会



大地調査区の弥生時代後期水田（西から）

後期水田の稲株痕跡



五ノ坪調査区中世大溝の断面（溝71）（東から）



黒中調査区出土の分銅形土製品



大上田調査区出土の人形土製品



大地調査区出土の孤帯文の描かれた長頸壺

序

承応3年(1654)の旭川の大洪水は、岡山の城下町に大きな被害をもたらしました。この洪水をきっかけに、藩主池田光政の命を受けた土木技術者津田永忠が、熊沢蕃山の治水論「川除けの法」を取り入れて築造したのが旭川放水路(百間川)であります。

百間川は、築造以来多くの洪水から岡山市街を守ってきましたが、一方で百間川沿川では通水能力が小さく、また堤防が弱いことなどから、幾度か氾濫に見舞われることになりました。

このため、建設省では地元の方々をはじめとする関係者のご協力を賜り、昭和49年(1974)から本格的な改修工事を進めてまいりました。その結果、現在までに百間川本川の堤防は最下流端部を除きほぼ概成し、河川内道路の橋梁付け替えも平成7年4月28日中島・竹田橋の開通により全て完了し、治水機能の向上がはかられてきています。

また、改修工事によって新たに生み出された河川敷は、スポーツ・レクリエーション・自然観察の場として岡山市民の憩いの場を創造し、多くの方々に利用されるようになりました。

百間川に遺跡が存在することは以前から知られており、建設省では改修工事に先立ち、工事の影響する部分について記録保存するため、昭和52年から岡山県教育委員会に発掘調査を委託し実施しているところであります。

百間川遺跡群は、岡山市原尾島から同米田に至る約6kmの範囲に点在しており、その規模は発掘調査の進捗に伴い、昭和51年の確認調査時点での予想を上回る大規模なものとなっております。

また、土中に埋もれた遺跡は、縄文時代から室町時代のもものが折り重なるように残っており、いろいろな時代のもものが発見されています。今年度も中世としては稀にみる大規模な貝塚が発掘されるなど、今なお新たな発見がつついており、全国的にも注目されています。

本書は、百間川遺跡群の中で兼基遺跡・今谷遺跡発掘調査結果の一部をまとめたものであります。本書が、埋蔵文化財に対する理解の増進と、学術・文化等のため広く利用されることを期待します。

最後に、発掘調査並びに本書の編集に当たられた岡山県教育委員会を始めとする関係各位に対し、河川改修に対する御理解と御協力をいただき心より感謝申し上げます。

平成8年3月

建設省岡山河川工事事務所

所長 佐 合 純 造

序

岡山平野を南北に貫流する旭川の東岸には広い平野が広がり、豊かな穀倉地帯となっていますが、徐々に都市化の波が押し寄せています。この平野を東進し、操山の東端から南に大きく曲がって児島湾に注ぐ百間川は、岡山城下を洪水から守るために江戸時代に築造されたものです。現在、この百間川には豊かな自然が残され、動植物の宝庫としても知られており、市民の憩いの場としても利用されています。

昭和50年、かねてから建設省が計画していた旭川放水路（百間川）の改修工事が、本格的に着手されることになりました。岡山県教育委員会は、建設省岡山河川工事事務所と百間川遺跡群の取り扱いについて協議を重ね、やむをえず破壊される部分については記録による保存処置をとることとなり、昭和51年度の確認調査に引き続き、昭和52年度から全面調査に着手しました。

百間川遺跡群の発掘調査は、本年で19年をむかえています。その間、縄文時代から中世にいたる貴重な遺構・遺物が多数発見され、全国的にも注目されています。

これらの調査結果は、これまで調査報告書として順次刊行し、本書で12冊目となりますが、百間川兼基遺跡・今谷遺跡の報告書としては2冊目にあたります。本書に掲載した調査区からは、弥生時代の集落、弥生時代後期水田の稲株痕、古墳時代の大溝、中世の大溝などの遺構に加え、人形土製品や中世の土器などの遺物も多く発見されています。なかでも、稲株痕は弥生時代の田植えを考えるうえでの貴重な資料として注目されます。

この報告書が文化財の保護・保存、さらに今後の研究の一助となれば幸いです。

発掘調査の実施及び報告書の作成にあたっては、旭川放水路（百間川）改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員の先生方から種々のご教示を得、また建設省岡山河川工事事務所をはじめ、関係各位から多大なご協力をいただきました。記して厚くお礼申し上げます。

平成8年3月

岡山県教育委員会

教育長 森 崎 岩之助

例 言

1. 本報告書は、旭川放水路（百間川）改修工事に伴い、建設省中国地方建設局の委託を受け、岡山県教育委員会が1982（昭和57）年度から1986（昭和61）年度に発掘調査を実施した、百間川兼基遺跡・百間川今谷遺跡の発掘調査報告書である。なお、本書は百間川兼基遺跡・百間川今谷遺跡の報告書としては2冊目にあたる。
2. 百間川兼基遺跡・百間川今谷遺跡は、岡山市兼基・今谷に所在する兼基遺跡・今谷遺跡のうち、百間川河川敷に係る範囲をさす。
3. 発掘調査は1984年10月以前を岡山県教育庁文化課が、1984年11月以降については岡山県古代吉備文化財センターが担当し、その総面積は10650㎡である。
4. 発掘調査および報告書の作成にあたっては、旭川放水路（百間川）河川改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会を設け、下記の方々に委員を委嘱した。対策委員各位からは終始有益なご指導とご助言をいただいた。記して深く感謝の意を表す次第である。

池葉須藤樹（元岡山市犬島中学校校長）	鎌木義昌（岡山理科大学教授）
近藤義郎（岡山大学名誉教授）	〈1993年2月まで〉
出宮徳尚（岡山市教育委員会文化課）	角田 茂（元岡山市岡輝中学校教諭）
山本悦世（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター助手）	水内昌康（岡山県文化財保護審議会委員）
〈1993年4月から〉	
5. 報告書の作成は、岡山県古代吉備文化財センター職員柳瀬昭彦、平井 勝、岡本寛久が担当し、1988（昭和63）年度に行なった。
6. 本文の執筆は調査担当者である柳瀬昭彦、浅倉秀昭、平井 勝、江見正己、岡本寛久、宇垣匡雅が分担し、文責は各文末に示した。
7. 本書の編集は平井 勝が担当した。
8. 出土遺物ならびに図面・写真類は岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

凡 例

1. 百間川兼基遺跡・百間川今谷遺跡は小字名で調査区を分けているが、これとは別に遺跡全体に20m方眼を組んでいる。各方眼は北西角の軸線交点に区を付して、305F区、307G区等と呼ぶ。
2. 本報告書の遺構全体図および各遺構図の北方位は基本的に磁北であり、遺跡付近の磁北は西偏6°30'を測る。
3. 本報告書の土層断面図や遺構実測図の高度はすべて海拔高である。
4. 本報告書の遺構ならびに遺物実測図の縮尺率は下記のとおり統一しているが、例外については縮尺率を明記している。

遺構

竪穴住居・建物 1/80、井戸・土壇・土墳墓・溝断面 1/30

遺物

土器 1/4、土製品・石製品・金属製品 1/2、木製品 1/4、玉類 1/2

5. 土器実測図のうち、中軸線の左右に白抜きのあるものは、小破片のため口径推定が困難なものである。
6. 遺物番号は、土器以外のものについては材質を示すため、下記の略号を番号の前に付した。
石製品：S、金属製品：M、土製品：C、木製品：W、玉類：J
7. 写真図版のうち、遺物写真の番号は掲載土器番号である。
8. 本報告書に掲載した地図のうち、第2図は国土地理院の1/25000地形図、和気・西大寺・岡山北部・岡山南部を複製・縮小したものである。
9. 本報告書で使用した弥生時代から古墳時代前半期の時期は「百間川原尾島遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39において採用した、次頁に示す土器編年に基づいている。

編年対比表

遺跡 時代			百問川	雄町 ^(註1)	上東・川入 ^(註2)	
弥生時代	前期	津島	百問川前期Ⅰ			
		門田		百問川前期Ⅱ	雄町 1	
				百問川前期Ⅲ	雄町 2 船山 3	
	中期	南方		百問川中期Ⅰ	高田	
					雄町 3	
		菰池		百問川中期Ⅱ	船山 5	
					菰池 雄町 4	
		前山Ⅱ		百問川中期Ⅲ	前山東	
					雄町 5	
	仁伍			雄町 6	上東・鬼川市 0	
	後期	上東		百問川後期Ⅰ	雄町 7	上東・鬼川市Ⅰ
					雄町 8	
			百問川後期Ⅱ	雄町 9	上東・鬼川市Ⅱ	
				雄町 10		
		グランド上層		百問川後期Ⅲ	+	上東・鬼川市Ⅲ
酒津		百問川後期Ⅳ	雄町 11	才の町Ⅰ		
				才の町Ⅱ		
古墳時代	前期	王泊六層	百問川古墳時代Ⅰ	雄町 12	下田所	
				雄町 13		
			百問川古墳時代Ⅱ	雄町 14	亀川上層	
			百問川古墳時代Ⅲ	雄町 15	+	
				川入・大溝上層		

註1 正岡陸夫他「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1 岡山県教育委員会 1972年

註2 柳瀬昭彦他「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16 岡山県教育委員会 1977年

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
第1章 地理的・歴史的環境	1
第2章 発掘調査の経緯	7
第1節 調査の経過	7
第2節 調査及び報告書作成の体制	10
第3章 百間川兼基遺跡	13
第1節 遺跡の概要と調査区	13
第2節 黒中調査区	15
1. 調査区の概要	15
2. 弥生時代の遺構と遺物	17
(1) 水田	17
(2) 建物	17
(3) 土器棺	18
(4) 土墳	18
(5) 溝	18
(6) 土器溜り	21
3. 古墳時代の遺構と遺物	23
(1) 竪穴住居	23
(2) 井戸	24
(3) 溝	25
(4) 柱穴列	31
4. 包含層の遺物	33
第3節 和佐田調査区	37
1. 調査区の概要	37
2. 弥生時代の遺構と遺物	39
(1) 水田	39
(2) 竪穴住居	40
(3) 土墳	41
(4) 溝	47
3. 古墳時代の遺構と遺物	49
(1) 土墳列	49

(2) 溝	49
4. 包含層の遺物	49
第4節 大上田調査区	51
1. 調査区の概要	51
2. 弥生時代の遺構と遺物	55
(1) 竪穴住居	55
(2) 土器棺	55
(3) 土壇	56
(4) 溝	60
(5) 水田	63
(6) 土器溜り	64
3. 古墳時代の遺構と遺物	73
(1) 竪穴住居	73
(2) 土壇	77
(3) 溝	80
(4) 柱穴列	81
4. 中世の遺構と遺物	83
(1) 水田	83
(2) 建物	84
(3) 土壇	84
(4) 溝	87
(5) 畝状遺構	89
5. 包含層の遺物	90
第5節 東苗代調査区	91
1. 調査区の概要	91
2. 弥生時代の遺構と遺物	93
(1) 洪水砂除去後の自然地形	93
(2) 溝	94
(3) 土器溜り	95
3. 古墳時代の遺構と遺物	99
(1) 建物	99
(2) 溝	100
第4章 百間川今谷遺跡	101
第1節 遺跡の概要と調査区	101
第2節 大地調査区	102
1. 調査区の概要	102
2. 弥生時代の遺構と遺物	107
(1) 洪水砂除去後の自然地形	107

(2) 水田	108
(3) 溝	111
3. 古墳時代の遺構と遺物	113
(1) 井戸	113
(2) 土壇	115
(3) 溝	115
4. 古代・中世の遺構と遺物	127
(1) 建物	127
(2) 土壇	127
(3) 溝	128
(4) 畝状遺構	132
(5) 杭列	134
5. その他の遺構及び包含層の遺物	134
第3節 五ノ坪調査区	135
1. 調査区の概要	135
2. 中世の遺構と遺物	136
(1) 溝	136
第5章 まとめ	149
一覧表	151
1. 石器一覧表	152
2. 新旧遺構名称対照表	154
報告書抄録	157

目 次

第1図 遺跡の位置	1	第26図 井戸2・出土遺物	25
第2図 百間川周辺遺跡分布図 (S = 1/50000)	2	第27図 溝9 (S = 1/200)	26
第3図 グリッドの設定と調査区位置図 (S = 1/5000)	9	第28図 溝9出土遺物(1)	26
第4図 兼基遺跡の調査区 (S = 1/4000)	13	第29図 溝9出土遺物(2)	27
第5図 黒中調査区の土層	14	第30図 溝9出土遺物(3)	28
第6図 黒中調査区の位置 (S = 1/4000)	15	第31図 溝9出土遺物(4)	29
第7図 黒中調査区の遺構全体図 (S = 1/500)	16	第32図 溝9出土遺物(5)	30
第8図 黒中調査区弥生時代の遺構 (S = 1/500)	16	第33図 溝10	31
第9図 水田層の遺物	17	第34図 溝11	31
第10図 建物1・出土遺物	17	第35図 溝12	31
第11図 建物2・出土遺物	18	第36図 溝13	31
第12図 土器棺1出土状態 (S = 1/20)	18	第37図 柱穴列1	31
第13図 土器棺1	19	第38図 包含層出土遺物(1)	32
第14図 土壌1・出土遺物	20	第39図 包含層出土遺物(2)	33
第15図 溝1出土遺物	20	第40図 包含層出土遺物(3)	34
第16図 溝3	20	第41図 包含層出土遺物(4)	35
第17図 溝6・7	20	第42図 和佐田調査区の土層	36
第18図 溝8	20	第43図 和佐田調査区の位置 (S = 1/4000)	37
第19図 土器溜り1出土状態・出土遺物	21	第44図 和佐田調査区の遺構全体図 (S = 1/500)	38
第20図 土器溜り2出土状態	21	第45図 和佐田調査区弥生時代の遺構 (S = 1/500)	38
第21図 土器溜り2出土遺物	22	第46図 竪穴住居3・出土遺物	39
第22図 黒中調査区古墳時代の遺構 (S = 1/500)	22	第47図 竪穴住居4・出土遺物	40
第23図 竪穴住居1・出土遺物	23	第48図 土壌2・出土遺物	40
第24図 竪穴住居2	24	第49図 土壌3・出土遺物	41
第25図 井戸1・出土遺物	24	第50図 土壌4	41
		第51図 土壌5	41
		第52図 土壌6・出土遺物	41
		第53図 土壌7・8・出土遺物	42
		第54図 土壌9	42
		第55図 土壌10・出土遺物	42
		第56図 土壌11・出土遺物	42

第57図	土壙12	43	第90図	土器溜り3(上)・4(下)出土 状態	65
第58図	土壙13・出土遺物	43	第91図	土器溜り3・4出土遺物(1)	66
第59図	土壙14・出土遺物	43	第92図	土器溜り3・4出土遺物(2)	67
第60図	土壙15出土遺物	43	第93図	土器溜り3・4出土遺物(3)	68
第61図	土壙16出土遺物	44	第94図	土器溜り3・4出土遺物(4)	69
第62図	溝19出土遺物	45	第95図	土器溜り3・4出土遺物(5)	70
第63図	溝20出土遺物	46	第96図	和佐田調査区古墳時代の遺構 (S = 1/500)	72
第64図	溝21出土遺物	46	第97図	竪穴住居6	73
第65図	溝22出土遺物	46	第98図	竪穴住居7	73
第66図	溝23出土遺物	47	第99図	竪穴住居7出土遺物	74
第67図	溝23下層出土遺物	47	第100図	竪穴住居8	75
第68図	和佐田調査区古墳時代の遺構 (S = 1/500)	48	第101図	竪穴住居8出土遺物(1)	76
第69図	土壙列1	49	第102図	竪穴住居8出土遺物(2)	77
第70図	溝24	49	第103図	土壙19・出土遺物	77
第71図	包含層出土遺物	50	第104図	土壙20	77
第72図	大上田調査区の位置 (S = 1/4000)	51	第105図	土壙21・出土遺物	78
第73図	大上田調査区の土層	51	第106図	土壙22	78
第74図	大上田調査区の遺構全体図 (S = 1/500)	52	第107図	土壙23	78
第75図	大上田調査区の土層 (S = 1/80)	53	第108図	土壙24・出土遺物	78
第76図	大上田調査区弥生時代の遺構 (S = 1/500)	54	第109図	土壙25・出土遺物	78
第77図	竪穴住居5・出土遺物	55	第110図	土壙26	79
第78図	土器棺2出土状態	55	第111図	土壙26出土遺物	80
第79図	土器棺2	56	第112図	溝32	80
第80図	土壙17・出土遺物	57	第113図	溝34(左)・35(右)	80
第81図	土壙18	58	第114図	柱穴列2	81
第82図	土壙18出土遺物(1)	59	第115図	大上田調査区中世以降の遺構 (S = 1/500)	82
第83図	土壙18出土遺物(2)	60	第116図	建物3	83
第84図	溝25・26・27の土層	61	第117図	土壙27	83
第85図	溝26出土遺物	62	第118図	土壙28・出土遺物	83
第86図	溝27	62	第119図	土壙29	84
第87図	溝28・出土遺物	62	第120図	土壙30	85
第88図	溝29・出土遺物	63	第121図	土壙31・出土遺物	86
第89図	溝30	63	第122図	溝36	86
			第123図	溝37・出土遺物	86
			第124図	溝38	86

第125図	溝39	86	第151図	大地調査区遺構全体図〈1〉 (S = 1/500)	102
第126図	溝40	86	第152図	大地調査区遺構全体図〈2〉 (S = 1/500)	103
第127図	溝41・42・出土遺物	87	第153図	大地調査区の土層(1) (S = 1/40)	104
第128図	溝43・44・出土遺物	88	第154図	大地調査区の土層(2) (S = 1/40)	105
第129図	畝状遺構出土遺物	89	第155図	大地調査区洪水砂除去後の自然 地形と弥生時代の遺構〈1〉 (S = 1/500)	106
第130図	畝状遺構断面 (S = 1/200)	89	第156図	大地調査区洪水砂除去後の自然 地形と弥生時代の遺構〈2〉 (S = 1/500)	107
第131図	包含層出土遺物	90	第157図	自然地形高まりの土層 (S = 1/80)	108
第132図	東苗代調査区の位置 (S = 1/4000)	91	第158図	稲株痕跡検出状態	109
第133図	東苗代調査区の土層断面 (S = 1/80)	91	第159図	水田層出土遺物	110
第134図	東苗代調査区の遺構全体図 (S = 1/500)	91	第160図	溝56・出土遺物	111
第135図	洪水砂除去後の自然地形 (S = 1/500)	92	第161図	大地調査区古墳時代の遺構 (S = 1/500)	113
第136図	東苗代調査区弥生時代の遺構 (S = 1/500)	92	第162図	井戸3・出土遺物	114
第137図	自然地形高まりの土層 (S = 1/80)	93	第163図	土壇32・出土遺物	114
第138図	自然地形高まりの出土遺物	94	第164図	土壇33	115
第139図	溝44~47出土遺物	94	第165図	土壇34	115
第140図	土器溜り5出土状態 (S = 1/40)	95	第166図	溝57・58・59	116
第141図	土器溜り5出土遺物(1)	96	第167図	溝58	117
第142図	土器溜り5出土遺物(2)	97	第168図	溝57出土遺物(1)	120
第143図	土器溜り5出土遺物(3)	98	第169図	溝57出土遺物(2)	121
第144図	大上田調査区古墳時代の遺構 (S = 1/500)	99	第170図	溝57出土遺物(3)	123
第145図	建物4	99	第171図	溝57出土遺物(4)	124
第146図	建物5	100	第172図	溝57出土遺物(5)	125
第147図	溝50(上)・51(中)・52(下)	100	第173図	大地調査区古代以降の遺構〈1〉 (S = 1/500)	126
第148図	溝52出土遺物	100	第174図	大地調査区古代以降の遺構〈2〉 (S = 1/500)	127
第149図	今谷遺跡の調査区 (S = 1/4000)	101	第175図	建物6	128
第150図	大地調査区の位置 (S = 1/4000)	102	第176図	建物7	128

第177図	土壙35	128	第190図	五ノ坪調査区の遺構全体図 (S = 1 / 500)	136
第178図	土壙36	128	第191図	溝71 (S = 1 / 200)	136
第179図	土壙38	129	第192図	溝71断面 (S = 1 / 60)	137
第180図	土壙39	129	第193図	溝71出土遺物(1)	138
第181図	溝60・61	129	第194図	溝71出土遺物(2)	139
第182図	溝63	129	第195図	溝71出土遺物(3)	140
第183図	溝64	129	第196図	溝71出土遺物(4)	141
第184図	溝67	129	第197図	溝71出土遺物(5)	142
第185図	溝68	129	第198図	溝71出土遺物(6)	143
第186図	溝70	131	第199図	溝71出土遺物(7)	144
第187図	溝70出土遺物	132	第200図	溝71出土遺物(8)	145
第188図	包含層出土遺物	133	第201図	溝69	146
第189図	五ノ坪調査区の位置 (S = 1 / 4000)	135			

表 目 次

表1	百間川兼基遺跡・百間川今谷遺跡調査区一覧	8
----	----------------------	---

図版目次

- 図版 1 1. 黒中調査区弥生時代後期の水田 (東から)
2. 黒中調査区後期水田の畦畔と土層断面 (南から)
- 図版 2 1. 黒中調査区の建物 1 (北から)
2. 黒中調査区の建物 2 (北から)
- 図版 3 1. 黒中調査区の土器棺 1 (南から)
2. 黒中調査区の溝
3. 黒中調査区土器溜り 2 (北から)
- 図版 4 1. 黒中調査区竪穴住居 1 (南西から)
2. 黒中調査区竪穴住居 2 (南から)
3. 黒中調査区井戸 1 (西から)
- 図版 5 1. 黒中調査区井戸 2 (西から)
2. 黒中調査区溝 9 (南西から)
3. 黒中調査区柱穴列 (南から)
- 図版 6 1. 和佐田調査区弥生時代後期の水田 (東から)
2. 和佐田調査区 E11区 (東から)
- 図版 7 1. 大上田調査区の調査風景 (南東から)
2. 大上田調査区の土層断面
3. 大上田調査区の土層断面
- 図版 8 1. 大上田調査区の竪穴住居 5 (南東から)
2. 大上田調査区竪穴住居 5 の遺物出土状態 (東から)
- 図版 9 1. 大上田調査区土器棺 2 (北東から)
2. 大上田調査区土壌 17 (北から)
3. 大上田調査区洪水砂除去後の自然地形 (西から)
- 図版 10 1. 大上田調査区溝 27 (西から)
2. 大上田調査区溝 25・26・27 (西から)
- 図版 11 1. 大上田調査区溝 27 (303L) (北から)
2. 大上田調査区溝 25断面 (北西から)
3. 大上田調査区溝 27断面 (南西から)
- 図版 12 1. 大上田調査区弥生時代後期の水田 (東から)
2. 大上田調査区弥生時代後期の水田 (南西から)
- 図版 13 1. 大上田調査区土壌 18・溝 30 (西から)
2. 大上田調査区溝 29 (南西から)
- 図版 14 1. 大上田調査区土器溜り検出風景
2. 大上田調査区土器溜り 3
3. 大上田調査区土器溜り 3
- 図版 15 1. 大上田調査区土器溜り 4
2. 大上田調査区土器溜り 4 の人形土製品出土状態
3. 大上田調査区土器溜り 4 の人形土製品出土状態
- 図版 16 1. 大上田調査区竪穴住居 6 (南東から)
2. 大上田調査区竪穴住居 7 (南から)
- 図版 17 1. 大上田調査区竪穴住居 8 の遺物出土状態 (南から)
2. 大上田調査区竪穴住居 8 の櫛出土状態
3. 大上田調査区竪穴住居 8 (南東から)
- 図版 18 1. 大上田調査区 303・304L 区の遺構 (北から)

2. 大上田調査区溝35 (北西から)
3. 大上田調査区溝34 (西から)
- 図版19 1. 大上田調査区土壌22 (西から)
2. 大上田調査区土壌21 (南から)
3. 大上田調査区土壌19・20・溝32 (東から)
- 図版20 1. 大上田調査区の中世水田 (西から)
2. 大上田調査区建物3 (東から)
- 図版21 1. 大上田調査区土壌27 (東から)
2. 大上田調査区土壌30 (南から)
3. 大上田調査区土壌31 (南から)
- 図版22 1. 大上田調査区の畝状遺構 (303・304L)・溝41・42 (南から)
2. 大上田調査区溝43 (北から)
- 図版23 1. 大上田調査区の畝状遺構 (305H・I) (西から)
2. 大上田調査区の畝状遺構 (305H) (南から)
- 図版24 1. 東苗代調査区洪水砂除去後の自然地形 (東から)
2. 東苗代調査区洪水砂除去後の自然地形・溝50・51・土器溜り5・建物4 (東から)
- 図版25 1. 東苗代調査区溝45・46・47 (西から)
2. 東苗代調査区土器溜り5 (北から)
- 図版26 1. 東苗代調査区建物4
2. 東苗代調査区建物5 (西から)
- 図版27 1. 大地調査区洪水砂除去後の自然地形 (西から)
2. 大地調査区洪水砂除去後の自然地形 (東から)
3. 大地調査区洪水砂除去後の自然地形高まり土層断面
- 図版28 1. 大地調査区弥生後期水田 (南から)
2. 大地調査区弥生後期水田 (西から)
3. 大地調査区弥生後期水田の稲株痕
- 図版29 1. 大地調査区弥生後期水田の稲株痕
2. 大地調査区弥生後期水田の稲株痕
3. 大地調査区弥生後期水田の稲株痕
- 図版30 1. 大地調査区弥生後期水田の稲株痕
2. 大地調査区弥生後期水田の稲株痕断面
3. 大地調査区弥生後期水田の稲株痕断面
- 図版31 1. 大地調査区井戸3
2. 大地調査区溝57・58・59 (東から)
- 図版32 1. 大地調査区溝57・58・59 (南から)
2. 大地調査区溝57の遺物出土状態
3. 大地調査区溝58 (北西から)
- 図版33 1. 大地調査区溝70 (東から)
2. 大地調査区溝70の丸田材検出状態
3. 大地調査区畦状遺構C (305・306V~X) (西から)
- 図版34 1. 五ノ坪調査区溝71作業風景 (西から)
2. 五ノ坪調査区溝71 (東から)
- 図版35 1. 五ノ坪調査区溝71の土層断面 (東から)
2. 五ノ坪調査区溝71の遺物出土状態
- 図版36 土器棺1、溝1、土器溜り1・2出土土器
- 図版37 溝9出土土器
- 図版38 包含層、土壌18、溝29出土土器
- 図版39 土器溜り3出土土器
- 図版40 土器溜り3・4出土土器
- 図版41 竪穴住居7・8、土器溜り5・周辺後期包含層出土土器
- 図版42 溝57出土土器
- 図版43 溝71出土土器(1)

図版44 溝71出土土器(2)

図版45 溝71出土土器(3)、木製品

図版46 石製品

図版47 鉄製品

図版48 1. 玉類

2. 有孔円板

3. 土製紡錘車

第1章 地理的・歴史的環境

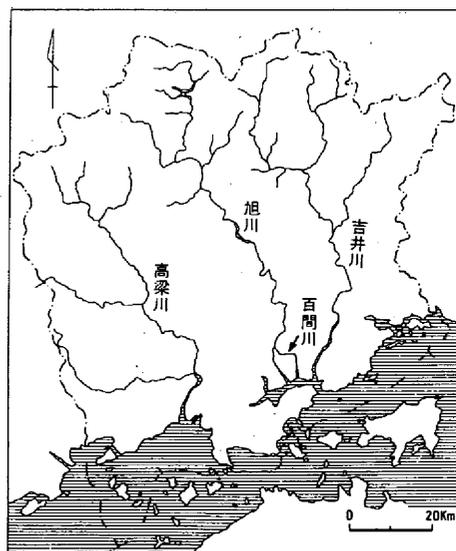
百間川は、江戸時代初め頃の寛文9年（1669年）から貞享4年（1687年）にかけて造られた、旭川の放水路である。岡山城は旭川の一部を堀に見たてて築城されており、また城下町がその周辺に広がっているところから、水害には弱い面を持っていた。そのため旭川の水量調節が必要となり、上流部から増水時に分岐して放水できる水路、つまりバイパスを造ったわけである。この事業は、岡山藩主池田光政の命を受けた津田永忠が、熊沢蕃山の治水論「川除けの法」を取り入れて工事の指導・指揮にあたり、城下の東側に広がる操山丘陵の北麓を右岸側の堤防に見立ててその裾部を東流させ、丘陵の東端を回って南流させて海に注がせる、流程約7～8km（現在では約13km）にわたる間的一大河川改修事業であった。

この百間川の上・中流部は、中国山地に源を發し吉備高原を深く削って流下する旭川が、高原の端部でどっと吐き出される土砂の沖積によって形成された、広義の岡山平野の南東部に位置し、旭川東岸の平野（以下旭東平野と呼ぶ）の南端にあたる。旭東平野は北に竜の口山丘陵、南に操山丘陵、さらに東を芥子山および山王山丘陵によって区画された、比較的まとまりのある水田地帯を形成している。しかし、この平野の微地形を、市街化の進む以前の大正年間発行の地図によって詳細に観察すると、旭川が平野に至る入口、つまり岡山市中原付近から、南南東方向へ祇園・新屋敷・清水・藤原、南東に振って赤田・兼基・神下・長利にかけてと、祇園から南東方向へ賞田・国府市場・雄町・乙多見・長岡・長利にかけての二ルートに、条里区画の及ばない水田・水路地形の乱れが看取される。これは、旭川の一部がこの平野の形成過程において、大きく二ルートの河道として存在していたものと思われ、その後200～300m幅の範囲で蛇行を繰り返し、土砂の堆積作用と相俟って三角州の形成や周辺の沖積化を促し、やがて河道自体も埋没してわずかに中小の蛇行する用排水路に姿をとどめて現在に至っている。また、旭東平野の北東部にあたる四御神と市場出村の間の周辺は、旭川の堆積作用が及ばないため、広範囲にわたってバックマーシュ（後背湿地）であった可能性が強い。

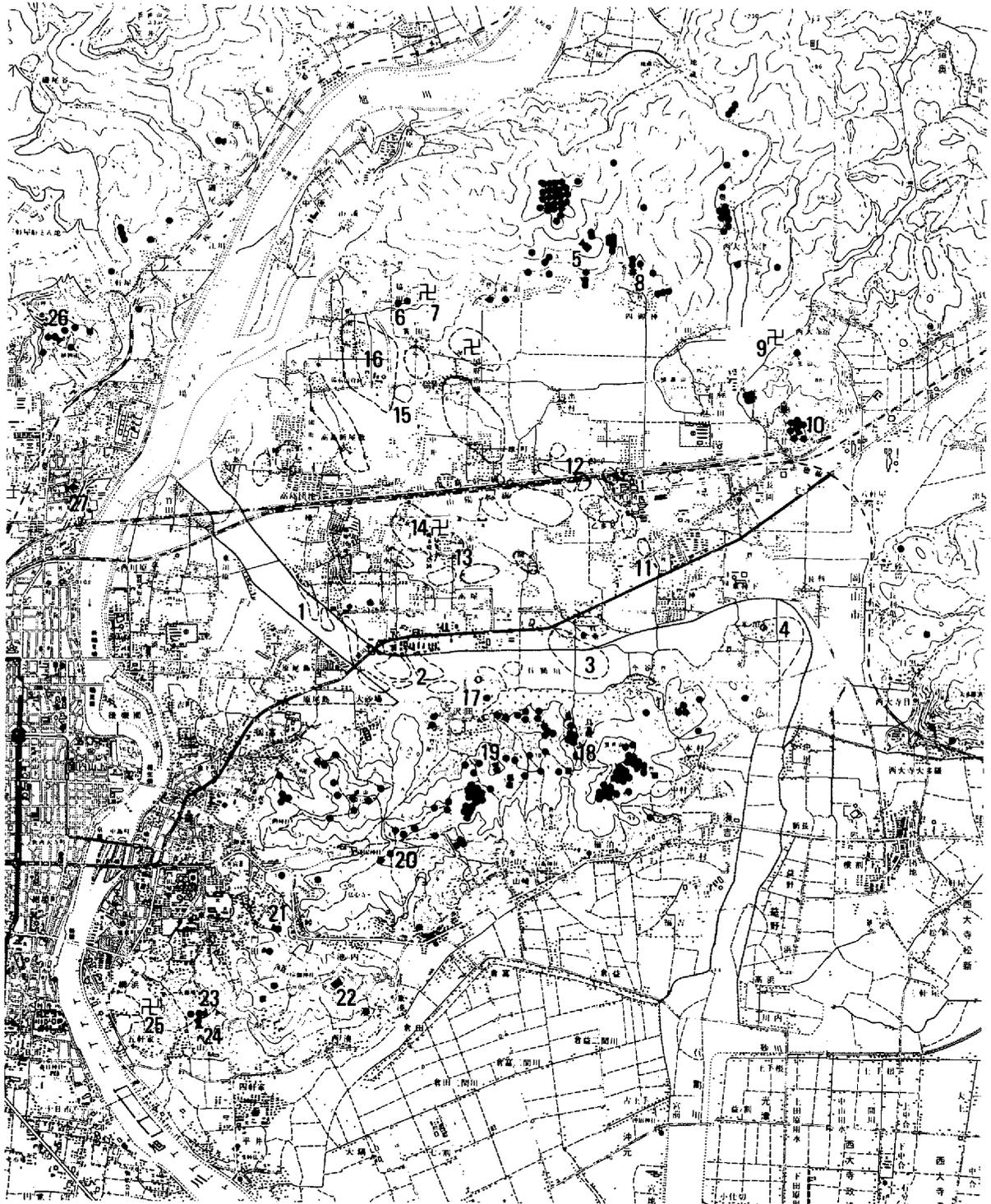
この旭東平野を中心とし、それを望む丘陵をも含めて、先土器時代の足跡はほとんど知られていない。唯一、操山丘陵の旗振台古墳北部遺跡（註1）でナイフ形石器、サヌカイトの剝片が少量表採されているに過ぎない。

縄文時代の遺構・遺物は、今のところ平野部のみ認められている。発見の発端になったのは、1959年に国道2号線百間川橋の橋脚部の工事に伴って出土した土器が、近藤義郎氏によって縄文晩期であることが確認されたことに始まる。その後、山陽新幹線建設工事に伴い調査された雄町遺跡（註2）でも晩期土器の出土を得て、沖積平野への縄文人の進出が十分予測されるに至った。

百間川改修工事に伴う発掘調査が開始された1977年以



第1図 遺跡位置



- | | | | |
|---------------|-------------|---------------|--------------|
| 1. 百間川原尾島遺跡 | 8. 四御神山の上古墳 | 15. 中井・南三反田遺跡 | 22. 湊茶白山古墳 |
| 2. 百間川沢田遺跡 | 9. 井寺廃寺 | 16. 備前国府推定地 | 23. 網浜茶白山古墳 |
| 3. 百間川兼基・今谷遺跡 | 10. 山王山古墳 | 17. 沢田大塚古墳 | 24. 操山109号古墳 |
| 4. 百間川米田遺跡 | 11. 乙多見遺跡 | 18. 兼基鳥坂銅鐸出土地 | 25. 網浜廃寺 |
| 5. 備前車塚古墳 | 12. 雄町遺跡 | 19. 金蔵山古墳 | 26. 一本松古墳 |
| 6. 唐人塚古墳 | 13. 赤田遺跡 | 20. 旗振台古墳 | 27. 神宮寺山古墳 |
| 7. 賞田廃寺 | 14. 幡多廃寺 | 21. 操山103号墳 | |

第2図 百間川周辺遺跡分布 (1/50000)

降、百間川原尾島遺跡や同沢田遺跡の微高地上あるいは端部、旧河道からも縄文土器の出土が相ついだ。そのうち、現在までに最も古い時期を示しているのは百間川沢田遺跡の旧河道から出土した中期の土器片（註3）である。これらは摩滅が激しいため、上流域あるいは丘陵部からの流入の可能性があるが、少なくとも旭東平野周辺を大きく外れて存在していたとは考えられず、当遺跡周辺の沖積化の進行に伴う微高地の核の形成が、以外と早かった可能性も捨てきれない。いっぽう、中期までは遡れないものの、沢田遺跡の微高地縁辺部から、比較的大形で摩滅の少ない晩期末の突帯文土器片（註3）が出土したことにより、晩期末段階での居住は推測されていた。そして、その後百間川原尾島遺跡の微高地上（弥生前期の基盤層下約50cm）から、後期後半の条痕文土器片の散布と焼土面が見つかり（註4）、さらに操山丘陵の裾部から微高地上にかけての百間川沢田遺跡で、ほぼ同時期の多量の土器片の散布とともに火どころやドングリ貯蔵穴なども発見される（註5）など、沖積地の一部が少なくとも縄文後期には、キャンプ地あるいは定住地に近い形で利用されていたことが明らかになってきている。

縄文時代晩期の遺物は、雄町遺跡をはじめ百間川遺跡群のすべてから見つかっており、地形からその存在が予測される三角州状の微高地のほとんどは、生活の場であったと推察される。しかし、出土遺物が確実に遺構に伴って出土した例が少なく、すでに水稻農耕を行っていたことを想起させる太形蛤刃石斧や打製石鋏さらに石包丁形石器（註5）などの、遺物として良好な資料もあるが、遺構配置等から導かれるところの具体的な集落のあり方は、今一つ不明である。ただ、1993年度の沢田遺跡の調査で、弥生前期の基盤層下の微高地上の撓み（幅7～8m、長さ20mの範囲）に、厚さ10cm程の縄文晩期土器包含層が認められており、畦畔は確認されていないが晩期水田の可能性もある（註6）。

弥生時代前期の遺跡は、縄文時代晩期から続いて同様の遺跡に認められているが、前期前葉の時期がいずれも欠けている。遺構の残存状況は比較的良好で、とくに百間川沢田遺跡で見つかった環濠はおよそ90×100mの規模で、内側に堅穴住居が4軒、円形周溝遺構2基等で集落が構成されており（註5）、前期の段階でこの地にも防禦施設の必要な緊張関係が顕在していたとみられる。そのほか、環濠とは旧河道を挟んで隣の微高地上の撓みには、前期後半とみられる小区画水田が2面（註4）、百間川原尾島遺跡でも同様の水田が1面（註7）検出され、立地・規模・形態などの初期水田のあり方に新知見を得ている。

弥生時代中期の遺跡は、前出の遺跡のほか赤田遺跡（註8）、乙多見遺跡（註9）などがある。調査された面積にもよるが、そのうち百間川兼基・今谷遺跡が遺構・遺物の量・質ともに他を圧倒しており、この時期の母村的位置を占める（註10）。とくに、20数棟にもものぼる掘立柱建物群は、規模・配置等からしても、単に倉庫群というより住居群の性格が強いと考えられ、最近西日本各地でも類例が増加しつつある。ただ、周辺から多量のガラス溶滓が出土していることから、ガラスそのものあるいは溶滓を副産物で排出するようなモノを製造した工房址の可能性も捨てきれない。関連するかどうかかわからないが、この遺跡を北に望む操山丘陵の谷部から3口の銅鐸が出土している（註11）、注目される。そのほか、この時期の水田は百間川沢田遺跡から同原尾島遺跡にかけての、微高地の端部あるいは低位部にかけて比較的狭い範囲に認められ、小区画ながら細長く部分的に五角形が混じる形態を示す（註5・12）。さらに、微高地上には用水路や一部に井堰も検出されていて、灌漑技術も完成されていたとみられる。

弥生時代後期になると、旭東平野に散在する三角州状の微高地の核は安定し、微高地を分断してい

た大小の河道や低位部も堆積作用によってある程度埋没し、その条件下で中期とは比較にならないほど、集落の大規模化や飛躍的な水田の拡大化が認められる。百間川原尾島遺跡の微高地は、とくに遺構密度が高く、後期を通じての母村的集落である。そしてその周辺は言うに及ばず、約3km離れた百間川今谷遺跡の東端までの微高地間に、ほとんど隙間なく展開する水田は、各微高地の縁辺部に沿って掘削された灌漑水路と有機的に結ばれ機能している。その様は、確かに自然環境に恵まれた地勢にもよるが、経済的自立を背景として社会的にも技術的にも成長が急激に進んだ結果だと思われ、後期段階での共同体内部の成熟度をうかがわせる。しかしながら、後期末には旭川の兩岸を含む広範囲にわたって大洪水に見舞われ、水田のほぼ全域が洪水砂で埋没しただけに留まらず、微高地上にもおよび、生産基盤を失っただけでなく集落構成の上でも壊滅的な打撃を被ったことは、想像に難くない。そして、埋没した水田はその後は改修されず、少なくとも百間川遺跡群の調査のおよぶ部分では古墳時代を通じて水田化された形跡はない。ちなみに、洪水砂の上面に形成された包含層あるいは土器溜り出土の土器型式は百・古・Ⅰの時期を示し、あたかも洪水から立直った時にはもう古墳時代が始まっていた感さえある。

古墳時代の集落遺跡は、今のところ丘陵部には認められておらず、弥生時代までの微高地にはほぼ継続されて分布するようであるが、この時代を通じて弥生後期との比較においてはかなり希薄である。平野を取り巻く丘陵上には、第2図のように多くの古墳が存在する。古墳は竜の口丘陵に約90基、山王山丘陵に約20基、操山丘陵に約120基を数え、その多くは後期の小円墳であるが、前半期の円墳も約30基ほど含まれる。

最古級の出現期の古墳として、備前車塚古墳(註13)・宍甘山王山古墳(註14)・操山109号墳(註15)などの中規模前方後円(方)墳がそれぞれの丘陵に存在し、とくに操山丘陵ではそののち、網浜茶臼山古墳(註15)・湊茶臼山古墳(註16)・金蔵山古墳(註17)と続く首長墳の系譜がたどれる。これらの首長墳は、当時では南に海を望む尾根上に立地しており、海浜集団との関係も無視できない。金蔵山古墳以降、この地域では5世紀代には前方後円墳は構築されておらず、操山山頂の旗振台古墳(註18)、竜の口山裾の四御神上の山古墳などの中小規模の方墳が、調査例で知られるに過ぎない。ただし、最近行われた中井・南三反田遺跡の調査(註19)で、5世紀後半から6世紀初めの時期の、数基の古墳が沖積平野の真中に確認されるに至り、百間川原尾島遺跡などで検出されているほぼ同時期の竈付き住居群や掘立柱建物群などで構成されるような一集団との、とくに古墳の立地を視野にいれての集団関係の検討が必要になってきている。

後期古墳は、前述のように丘陵尾根や山裾に群集するが、そのうち竜の口山丘陵の山裾の唐人塚古墳(註20)・四御神権藤塚古墳、操山丘陵裾の沢田大塚古墳(註21)や操山11号・51号墳のように、比較的大形の横穴石室をもつ古墳も数基混じる。ともあれ、古墳時代後期についても微高地上の集落構成は今一つ明らかでなく、終末期の古墳あるいは集落についても不明な点が多い。

飛鳥時代から白鳳時代にかけては、この平野に賞田廃寺(註22)や幡多廃寺(註8)、井寺(居都)廃寺が建立されている。とくに前二寺は奈良時代には壇上積基壇で整備され、中央寺院に匹敵するほどの内容をもつ。また、これらの三カ寺は上道氏の氏寺とされ、さらにそれぞれの造営・修復の時期に補完関係がある(註8)とされる。いっぽう、備前国府はこの平野の中では、前二寺をつなぐ位置の国府市場を中心とした範囲に想定されているが、いまだ確実な証拠はない。しかし、当時の海に近い百間川米田遺跡では建物群が検出され、さらにほど近い溝や包含層から出土した「上三宅」の墨書

須恵器杯や「官」印の須恵器、銅製の帯金具（丸鞆）などの遺物から、建物群は公的な倉庫群（倉院）の可能性が強く、国府の外港として機能していた可能性も指摘されている（註23）。ほかに百間川原尾島遺跡の奈良時代から平安時代にかけての大溝から、人形・刀形・斎串などの木製品が多く見ついている（註4）。大溝の周辺では、「大祓」の儀式が執り行われた蓋然性も高く、祓が公のまつりであり近くに国府推定地が所在することからも、国府関連の儀式と考えられている。

平安時代以降のこの平野の状況はあまり明確ではないが、百間川遺跡群の調査では、平安～鎌倉時代の施釉陶器・瓦器・土師質土器・輸入陶磁器などの遺物が、各微高地から数多く出土している。遺構的には比較的大形の条里方向に沿った溝が各遺跡で見ついている。とくに、鎌倉～室町時代の百間川米田遺跡の大溝は、東西方向に約90m離れて並走する2本の溝が、南北溝でつながれた形の「工」字状を呈し、幅約7mの大規模なものである。大溝の両岸には、一段下がったところに1m幅程の平坦部が見られることから、その部分を船曳き道と考え、さらに規模や地理的条件などから運河の可能性が指摘されている（註24）。この大溝の北側には、ほぼ同時代に何期かにわたって営まれた集落も検出されているが、建物の規模や種類、同時期の集落構成などから、港町的な海浜集落というより海に近い農村集落と考える向きもある（註25）。また、この集落の北方に約200m離れた地点の最近の調査（註26）で、ほぼ同時期の集落と河道にかかる橋梁（橋脚部分）が見つかり、前述の運河状の大溝とともに当時の土木・建築技術の一端を知る手がかりとなっている。ほかに、百間川原尾島遺跡でも鎌倉～室町時代の建物群が比較的広い範囲に検出されていて（註27）、集落の構成がかなり明確に判明しつつある。規模からすれば百間川米田遺跡の集落と大差はないと思われるが、周辺に見ついている数基の土壌墓のうち2～3基には、青磁や白磁の椀や皿が副葬され、そのうちの1基には湖州鏡が副葬されているなど（註4）、単なる一農村集落とは思えない面もある。

中世の遺構は、この平野に限らず遺存状態は良くない。これは、とくに県南部の沖積平野のほとんどの調査で確認されていることであるが、現代の集落にほぼ重なることと現代水田に至る地下げなどの影響と思われる。また、同様にとくに奈良時代から平安時代にかけての遺構が希薄であることが知られつつあり、その要因として中世の初め頃にかかなり大規模な構造改善（これは条里制に関連すると思われる）が行われたためと推測される。これは今のところ、1993年度の百間川兼基遺跡から同沢田遺跡にかけての調査で検出された、ほぼ重複する3本の溝のうち、平安時代の2本の溝がほぼ東西方向ながら蛇行するのに対し、鎌倉時代の溝は正確に東西方向の直線であり、さらに端部で直角に屈曲して北に向かうなどの状況から推測するしかなく、具体的にはほとんど捉まれていない。

以上、この章については註4文献の第1章を基調にして、部分的に書き改めたものである。

（柳瀬昭彦）

註

註1 鎌木義昌「岡山市域の無土器時代遺跡と遺物」『岡山市史・古代編』岡山市 1962年

註2 高橋 護・正岡陸夫他「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』1 岡山県教育委員会 1972年

註3 岡田 博他「百間川沢田遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』59 岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所 1985年

註4 柳瀬昭彦・高田恭一郎他「百間川原尾島遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』106 岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所 1996年

第1章 地理的・歴史的環境

- 註5 平井 勝他「百間川沢田遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』84 岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所 1993年
- 註6 この地区の調査報告は1996年度発行予定で、土壌分析の結果待ちである。
- 註7 宇垣匡雅他「百間川原尾島遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88 岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所 1994年
- 註8 出宮徳尚・根木 修他『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市遺跡調査団 1975年
- 註9 正岡陸夫「岡山市乙多見における溝改修工事に伴う出土土器」『岡山県埋蔵文化財報告』3 岡山県教育委員会 1973年
- 註10 高畑知功他「百間川兼基遺跡1・百間川今谷遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』51 岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所 1982年
- 註11 鎌木義昌「岡山県兼基遺跡」『日本農耕文化の生成』東京堂出版 1961年
- 註12 中野雅美他「百間川原尾島遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56 岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所 1984年
- 註13 近藤義郎・鎌木義昌「備前車塚古墳」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県 1986年
- 註14 宇垣匡雅「吉備の前期古墳Ⅱ 宍甘山王山古墳の測量調査一」『古代吉備』第10集 古代吉備研究会 1988年
- 註15 宇垣匡雅「竅穴式石室の研究―使用石材の分析を中心に―」『考古学研究』第34巻第1・2号 考古学研究会 1987年
- 註16 近藤義郎「湊茶臼山古墳」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県 1986年
- 註17 西谷真治・鎌木義昌『金蔵山古墳』倉敷考古館 1959年
- 註18 鎌木義昌「岡山市域の古墳時代遺跡」『岡山市史・古代編』岡山市 1962年
- 註19 桑田俊明「中井・南三反田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』92 岡山県教育委員会 1994年
- 註20 出宮徳尚「唐人塚古墳」『岡山県大百科辞典・上』山陽新聞社 1980年
- 註21 出宮徳尚「沢田大塚古墳」『岡山県大百科辞典・上』山陽新聞社 1980年
- 註22 出宮徳尚他「賞田廃寺発掘調査報告」岡山市教育委員会 1971年
- 註23 井上 弘他「百間川当麻遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』52 岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所 1982年
- 註24 平井 勝「百間川米田遺跡3―中世の遺構について・大溝―」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』74 岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所 1989年
- なお、百間川米田遺跡は註23報告書までは百間川当麻遺跡と呼称していたが、一連の遺跡である。名称変更の経緯については、当報告書の凡例を参照されたい。
- 註25 岡本寛久「百間川米田遺跡3―中世米田遺跡の構造と変遷―」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』74 岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所 1989年
- 註26 岡田 博「米田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』101 岡山県教育委員会 1995年
- 註27 註4・註12に同じ
- 平井 勝他「百間川原尾島遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』97 岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所 1995年

第2章 発掘調査の経緯

第1節 調査の経過

岡山平野を南北に貫流する旭川の東岸には多くの遺跡が所在するが、百間川の河川敷内にも国道2号線の百間川橋をはさんでA地点とB地点の2箇所が周知されていた。1968（昭和43）年、岡山県教育委員会は、建設省が旭川放水路（百間川）の改修工事を計画していることを知り、建設省岡山河川工事事務所に対し、事前に文化財の保護に遺漏のないように計らうよう要望を行なうとともに、以後計画の進捗状況に合せ、遺跡の取り扱いについて協議を重ねた。その結果、基本的には埋蔵文化財包蔵地の範囲が確定したならば、当該地は発掘調査が終了した後に改修工事を施工することで合意した。

1976（昭和51）年4月、建設省中国地方建設局岡山河川工事事務所長名で、文化財保護法第57条の3に先立つ事前協議の文書が提出され、これに基づきさらに協議を重ねた。そして1976年9月1日付けで、中国地方建設局長より確認調査の依頼文書が提出され、11月1日から確認調査を実施することとなった。

確認調査は1976年11月1日から1977年3月31日まで、低水路部分の遺跡の確認と古地形の復元を主に、一部新田サイフォン部分の全面調査を実施した。その結果、岡山市原尾島（第1微高地）、同沢田（第2微高地）、同兼基・今谷（第3微高地）の3箇所に微高地が広がり、そこに遺跡が所在することが判明した。

1977（昭和52）年度から第1期5箇年の計画で、低水路部分を中心に、建設省の工事計画にそって発掘調査が進められた。この間、調査の進展とともに各微高地間にも弥生時代後期の水田などが広がることを確認され、また当初海ではないかと考えられていた岡山市米田（米田遺跡）一帯にも、遺跡が広がることを判明した。さらに弥生時代の生活面から深い位置で縄文時代の遺構・遺物が発見されたことから、発掘調査対象範囲の著しい増加とともに調査深度も増すこととなった。

1982（昭和57）年度からは低水路掘削予定幅80mのうち、第1期5箇年で調査を終了した幅40mの兩岸を主に、工事工程にそって調査を進めた。このうち本報告書に掲載する調査区は表1に示すとおり、右岸側が中心となっている。

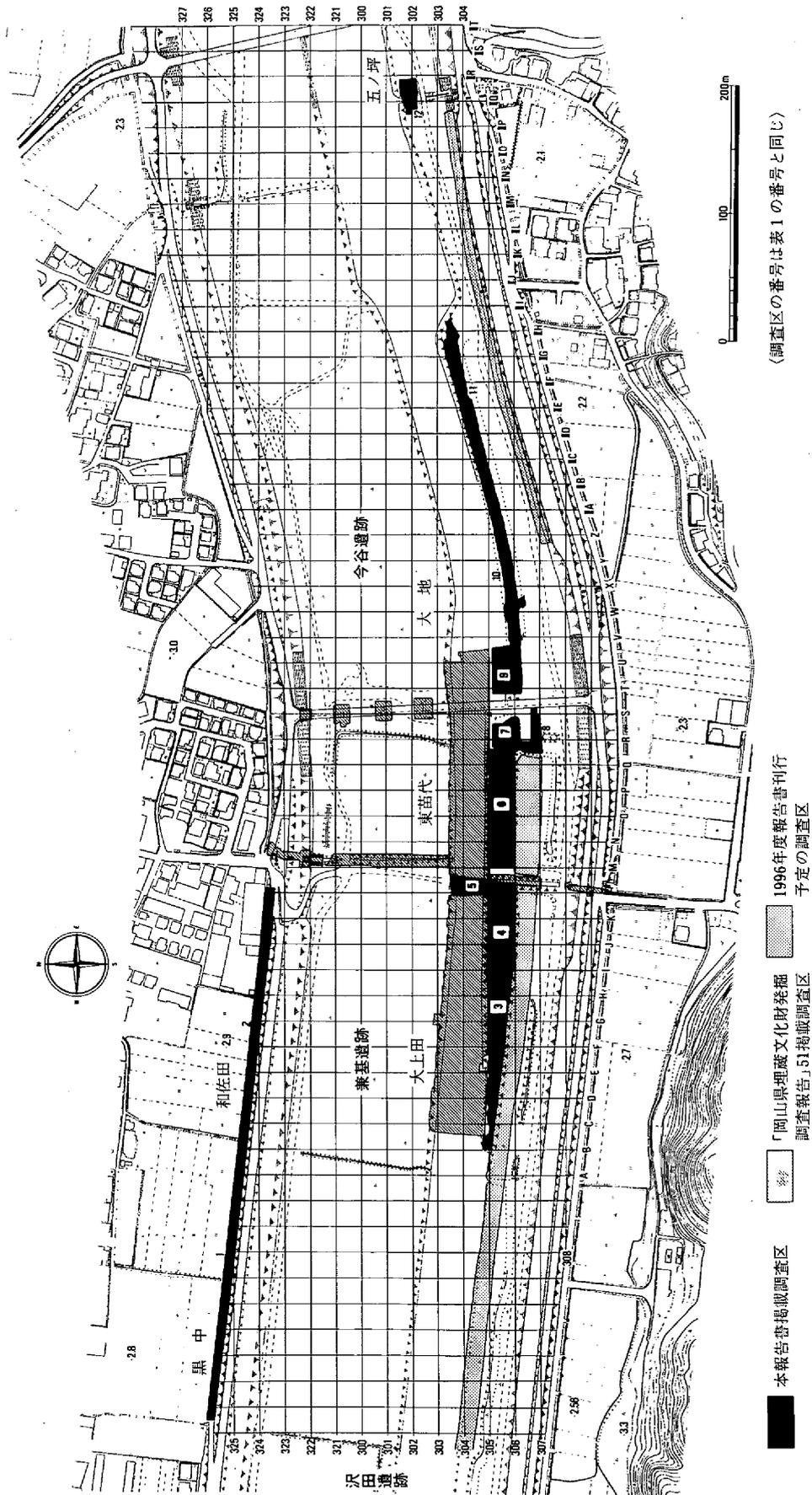
調査区の呼称は、第1期5箇年の調査当初では、微高地ごとに第1微高地（原尾島遺跡）、第2微高地（沢田遺跡）、第3微高地（兼基・今谷遺跡）としていたが、微高地間にも遺跡が広がることから、第1から第3微高地に対し、字名の前に百間川を付して百間川兼基遺跡というようにした。さらに各遺跡内は小字名で調査区を小区分するとともに、工事の名称をも合わせて用いた。

各遺跡には20mの方眼を組み、これで遺構の位置を示すとともに、実測等の基準点としているが、遺跡間で基準線の方位や名称の付し方は統一されていない。兼基・今谷遺跡でいえば、微高地のみを対象として方眼を設定したため、遺跡の拡大による増加した基準線の名称については不統一となっている。南北のラインは西から東へ向ってA・B・Cとアルファベットで標示したが、遺跡が拡大した

ため、Zより東はⅡA・ⅡB(AA・BB)と付した。またAより西側は東から西に向ってイ・ロ・ハと付し、沢田遺跡との境界はヌで終わっている。東西のラインは当初300から南に向って301・302と付していたが、北への拡大に伴い300の北側は北へ向って321・322とした。本報告書で遺構の位置を示す場合は、方眼の北西角の点で小区を示している。なお、方眼は磁北に合わせている。(平井)

表1 百間川兼基遺跡・百間川今谷遺跡調査区一覧

番号	調査区名	年度	遺物	面積(m ²)	調査担当者
1	兼基遺跡黒中(左岸用水W8~E3)	1982	94	1720	柳瀬・平井 岡本・井上 浅倉・古谷野
2	兼基遺跡和佐田(左岸用水E4~E13)				
3	兼基遺跡大上田(低水路305B~G)	1983	20	1070	平井・古谷野
4	兼基遺跡大上田遺跡(低水路304H~K)	1983	29	1590	柳瀬・岩崎
5	兼基遺跡大上田遺跡(低水路市道下)	1982	6	330	柳瀬・岡本
6	兼基遺跡東苗代(低水路305M~Q)	1983	8	1800	江見・山本
7	今谷遺跡大地(低水路305・306Q・R)	1983	4	460	江見・山本
8	今谷遺跡大地(低水路306・307Q~S)	1986	4	260	平井・高田
9	今谷遺跡大地(低水路305・306S~U)	1983	4	840	江見・山本
10	今谷遺跡大地(低水路304~306U~ⅡC)	1985	29	1400	柳瀬・宇垣
11	今谷遺跡大地(低水路303・304ⅡD~ⅡH)	1986	4	880	柳瀬・宇垣
12	今谷遺跡五ノ坪(低水路301・302ⅡP~ⅡQ)	1986	22	300	柳瀬・宇垣
	合 計		224	10650	



第3図 グリッドの設定と調査区位置図(S=1/5000)

第2節 調査及び報告書作成の体制

発掘調査は、岡山県教育委員会が建設省中国地方建設局から委託を受け、1977（昭和52）年度から実施しており、現在も継続している。調査開始から発掘調査の主管は岡山県教育長文化課であるが、1984（昭和59）年11月から発掘調査の実施については岡山県古代吉備文化財センターが担当している。

今回報告する兼基遺跡と今谷遺跡は、1982・1983・1985・1986年度に実施したものである。調査は3班6名の調査員があたった。また報告書の作成は1988（昭和63）年度に行なった。

発掘調査と報告書の作成にあたっては、遺跡の保護・保存ならびに調査の専門的な指導および助言を得るため、岡山県遺跡保護調査団の推薦を受けた方々に「旭川放水路（百間川）河川改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」の委員を委嘱している。（平井）

旭川放水路（百間川）河川改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会

池葉須藤樹	元岡山市犬島中学校長
近藤義郎	岡山大学名誉教授 岡山県文化財保護審議会委員
出宮徳尚	岡山市教育委員会文化課
山本悦世	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター助手（平成5年4月から）
鎌木義昌	岡山理科大学教授 岡山県文化財保護審議会委員（平成5年2月まで）
角田 茂	元岡山市岡輝中学校教諭
水内昌康	元岡山市桑田中学校長 岡山県文化財保護審議会委員

発掘調査

1982（昭和57）年度

岡山県教育委員会	主 任	田中建治
教 育 長 佐藤章一	主 任	遠藤勇次
教育次長 石原奂治	文化財保護主査	井上 弘（調査担当）
岡山県教育庁文化課	文化財保護主査	柳瀬昭彦（調査担当）
文化課長 早田憲治	文化財保護主事	浅倉秀昭（調査担当）
課長代理 橋本康夫	文化財保護主事	平井 勝（調査担当）
文化財主幹 高原健郎	文化財保護主事	古谷野寿郎（調査担当）
埋蔵文化財係長 河本 清	文化財保護主事	岡本寛久（調査担当）

1983（昭和58）年度

岡山県教育委員会

教育長 佐藤章一（～6月30日）
 宮地暢夫（7月1日～）
 教育次長 石原奥治（～7月15日）
 肥塚 稔（8月1日～）

岡山県教育庁文化課

課長 早田憲治
 課長代理 橋本康夫
 課長代理 吉本唯弘

文化財主幹 高原健郎
 課長補佐 河本 清
 主任 遠藤勇次
 文化財保護主査 柳瀬昭彦（調査担当）
 文化財保護主事 平井 勝（調査担当）
 文化財保護主事 古谷野寿郎（調査担当）
 文化財保護主事 江見正己（調査担当）
 文化財保護主事 山本明雄（調査担当）
 主 事 岩崎仁司（調査担当）

1985（昭和60）年度

岡山県教育委員会

教育長 宮地暢夫
 教育次長 肥塚 稔

岡山県教育庁文化課

課長 松元昭憲（～12月15日）
 課長 高橋誠記（12月16日～）
 課長代理 逸見英邦
 課長代理 吉本唯弘
 埋蔵文化財係長 正岡睦夫
 主査（兼） 遠藤勇次

岡山県古代吉備文化財センター

所長（兼） 松元昭憲（～12月15日）
 所長（兼） 高橋誠記（12月16日～）

次 長 橋本康夫
 総務課
 課 長 佐々木清
 主 査 遠藤勇次
 主 任 花本静夫
 調査課

課 長 河本 清
 文化財保護主査 井上 弘（調査担当）
 文化財保護主査 柳瀬昭彦（調査担当）
 文化財保護主任 平井 勝（調査担当）
 文化財保護主事 江見正己（調査担当）
 文化財保護主事 岡本寛久（調査担当）
 主 事 宇垣匡雅（調査担当）

1986（昭和61）年度

岡山県教育委員会

教育長 宮地暢夫
 教育次長 石井敏雄

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 橋本泰夫
 総務課
 課 長 佐々木清
 主 査 遠藤勇次
 主 任 花本静夫

調査課
 課 長 河本 清
 文化財保護主査 柳瀬昭彦（調査担当）
 文化財保護主任 平井 勝（調査担当）
 文化財保護主任 岡本寛久（調査担当）
 主 事 宇垣匡雅（調査担当）
 主 事 高田恭一郎（調査担当）
 主 事 阿部泰久（調査担当）

第2章 発掘調査の経緯

報告書

1988（昭和63）年度

岡山県教育委員会	課長	佐々木清
教育長 竹内康夫	総務主幹	藤本信康
教育次長 前 亮治	主任	花本静夫
岡山県教育庁文化課	主任	岡田祥司
課長 吉尾啓介	主任	片山淳司
課長代理 河野 衛	調査第一課	
課長補佐（埋蔵文化財係長事務取扱）伊藤 晃	課長	河本 清
主 査 藤川洋二	第二係長	柳瀬昭彦（報告書担当）
岡山県古代吉備文化財センター	文化財保護主任	平井 勝（調査・報告書）
所 長 水田 稔	文化財保護主任	岡本寛久（報告書・調査）
総務課		

最後になりましたが、酷暑、厳寒の中、発掘調査に従事されました方々、また報告書作成にあたり、多大な御協力を得ました方々に厚くお礼申し上げます。

第3章 百間川兼基遺跡

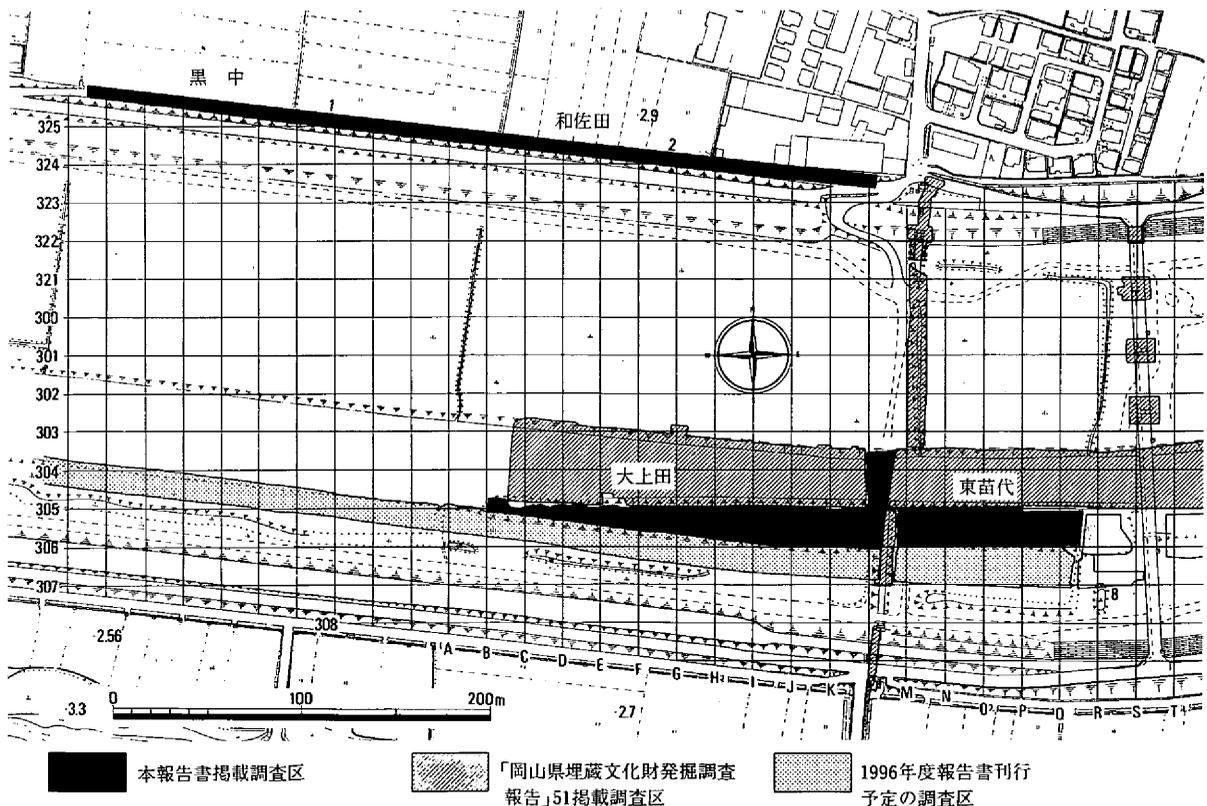
第1節 遺跡の概要と調査区

岡山市兼基に所在する兼基遺跡は、操山の北側に北西から南東方向に延びる微高地を中心とする遺跡である。この内、百間川の河川敷にかかる部分を百間川兼基遺跡と呼ぶ。なお、東側に接する今谷遺跡は同じ微高地上に所在するが、遺跡名を字名で表示するため、別々の遺跡名となっている。

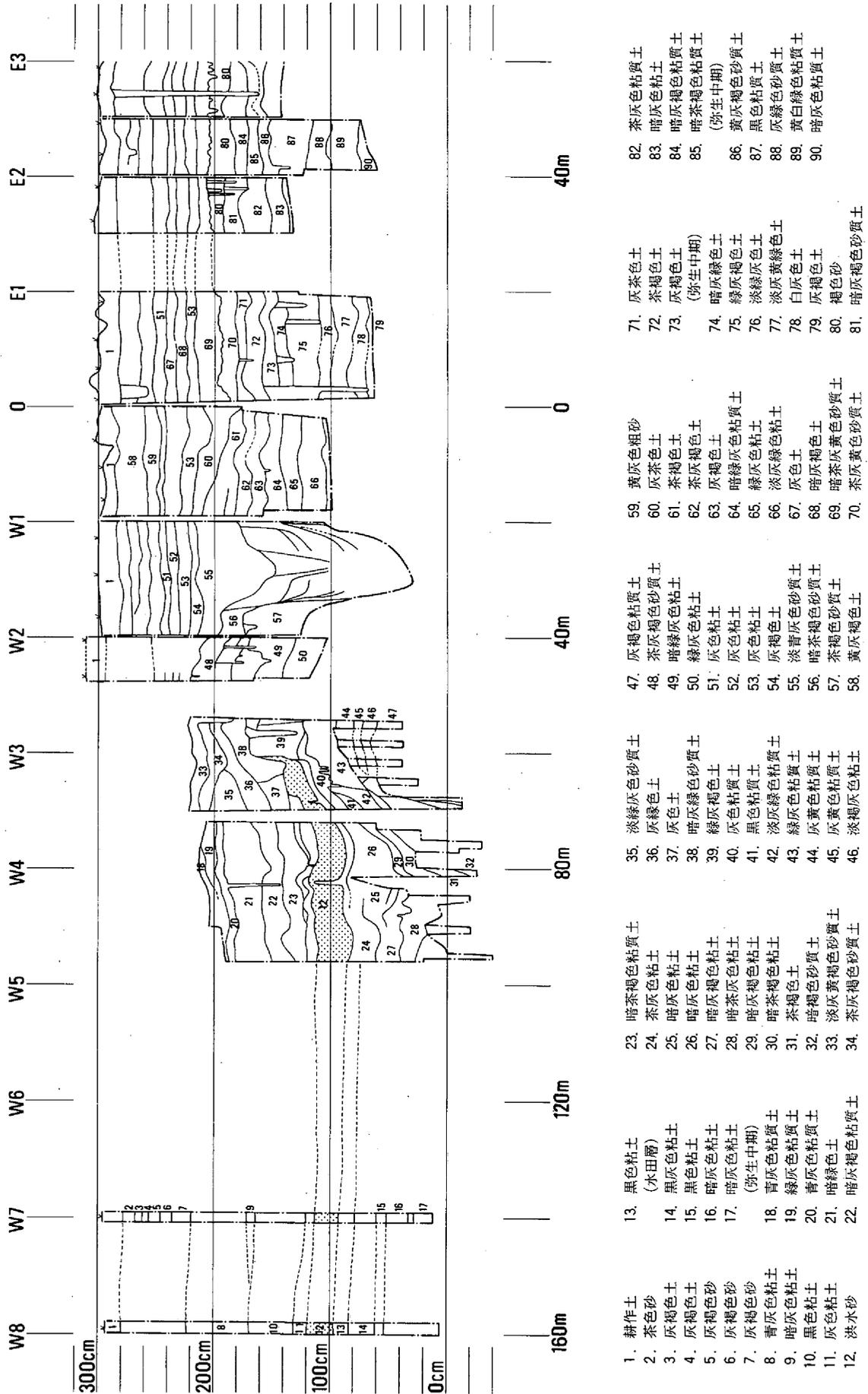
さて、百間川兼基遺跡（以下兼基遺跡と略す）はグリッドのEライン付近から東側が微高地となり、Qラインから少し東側を南北に流れる字境の用水を越えてさらに東までつづく。Eラインから西側は、第4図の左端を南北に流れる字境の用水まで低位部が広がる。

兼基遺跡の調査は、1978（昭和53）年度から中央の低水路を中心に行なわれた。この内1981（昭和56）年度までに行なわれた低水路、導入水路等の調査は、『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』51として纏められている。1979年度以降の調査については本報告書と、1996年度に刊行を予定している。

兼基遺跡は弥生時代から中世までの遺構・遺物が認められる。弥生時代の遺構・遺物は中期と後期が主体をなしており、微高地上には堅穴住居や土塼、そして溝などが発見されている。また、低位部には後期の水田が広がっている。古墳時代の遺構としては、微高地上に5世紀代の建物群が見られた。百間川遺跡群のなかではこの時期の遺構は少なく、兼基・今谷遺跡に集中している。（平井）



第4図 兼基遺跡の調査区 (S=1/4000)



第5図 黒中調査区の土層

第2節 黒中調査区

1. 調査区の概要

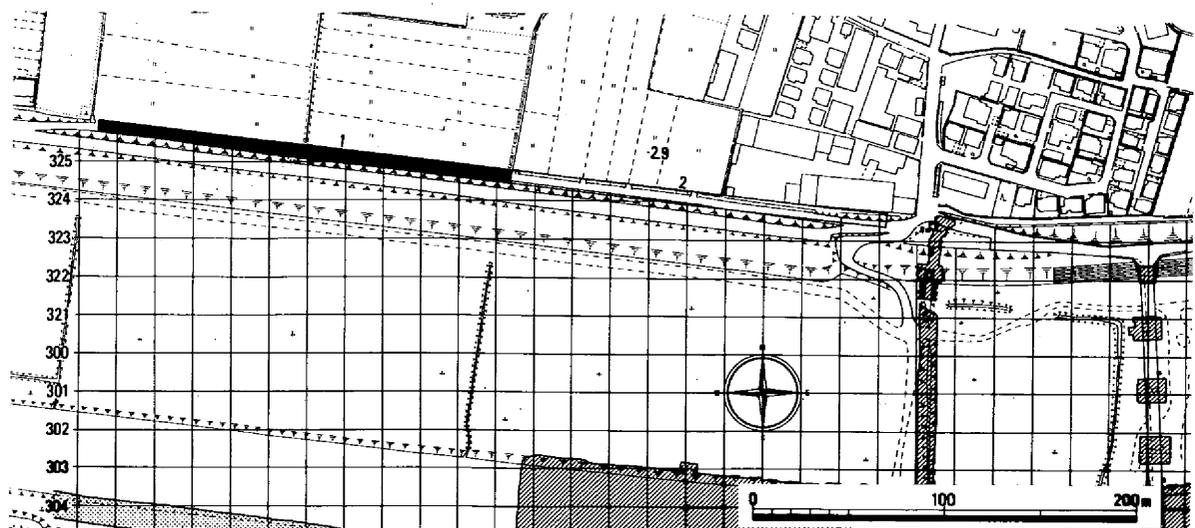
黒中調査区は堤防の外側に接して作られる用水路（左岸用水路）にかかる範囲のうち、西側の部分にあたる。調査範囲は用水路の工事計画にあわせて上幅7mであるが、遺構検出面が深いことから緩やかな法面を確保したため、下部での幅は3mあまりになった。この用水路の調査区は、堤防の外側に位置するため、河川敷に設定したグリッドを延長することを止め、任意に設定した0点から、調査範囲の長軸にそって西側へW1・W2、東側へE1・E2の基準杭を設定した。

黒中調査区はW3から西側が低位部、そして東側は微高地となる。現在の水田面は標高3mあまりであるが、低位部に広がる弥生時代後期の水田面は90cm前後を測る。この水田面の上は、厚さ30cm前後の洪水砂が覆っている。微高地上の層位はほぼ水平に整然としており、古墳時代の遺構面は2.2mあまりを測る。また、遺構の集中する弥生時代中期の遺構面は、2.2m前後を測る。

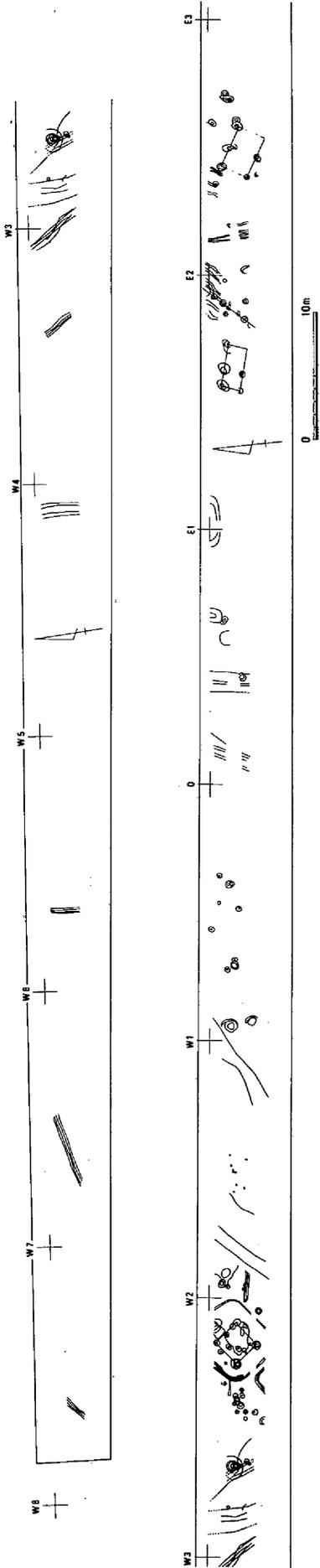
黒中調査区の遺構・遺物は弥生時代を中心に、古墳時代に属するものも見られる。弥生時代の遺構としては、W3から西側の低位部に広がる後期の水田がある。調査範囲が狭いため水田の形状は不明であるが、W4のラインの少し西側を南北に延びる大畦畔と、その西側にある小畦畔との間が30mもあることから、かなり大区画のものもあったものと思われる。

微高地上の遺構は主に中期に属するものである。竪穴住居はないが、E2・E3では建物が2軒見られる。溝はほぼ南北方向に流走しており、W3に2条、E1に2条、E3に3条確認されている。W2の幅の狭い溝は、唯一東西方向に流走するものである。後期の遺構としては土器棺がある。壺に鉢で蓋をした棺であるが、掘り方は明瞭ではなかった。

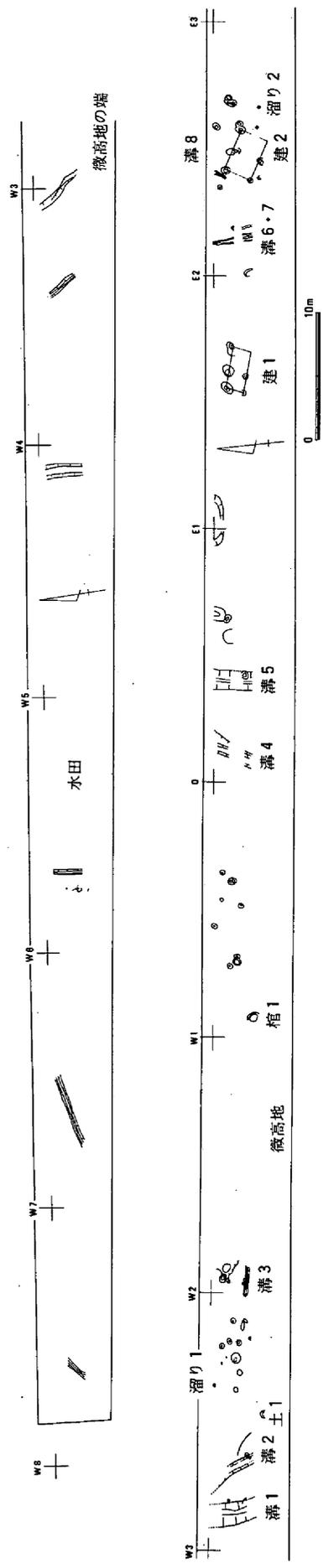
古墳時代の遺構としては竪穴住居や井戸が見られることから、居住区であったことがうかがえる。また、W2には底へ杭を打ち込んだ大溝が認められ、多くの土器が出土した。E1からE2にかけて溝が4条検出されているが、調査範囲が狭いため性格は不明である。 (平井)



第6図 黒中調査区の位置(S=1/4000)



第7図 黒中調査区の遺構全体図(S=1/500)

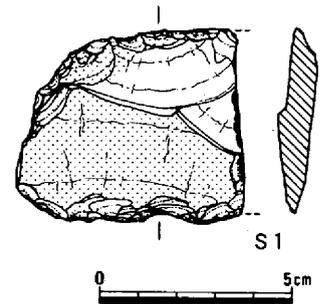


第8図 黒中調査区弥生時代の遺構(S=1/500)

2. 弥生時代の遺構と遺物

(1) 水田 (第9図、図版1)

W4区～8区で検出した水田は、百間川遺跡群全体を覆う洪水砂で埋もれた水田である。約10m間隔毎に下幅15cm、高さ5cm前後の小畦畔を4条と下幅50cm、高さ15cmの大畦畔1条を検出している。W4区の畦畔は微高地端部と並行している。W5区のものほぼ南北方向の大畦畔である。W6区は南北、W7・8区は北北東から南南西に伸びる小畦畔である。水田面の海拔高は90cmを測る。おそらく百間川遺跡群の中でこの時期では最も低い位置の水田跡になるであろう。石包丁が出土している。時期は百・後・Ⅳと考えたい。



第9図 水田層の遺物

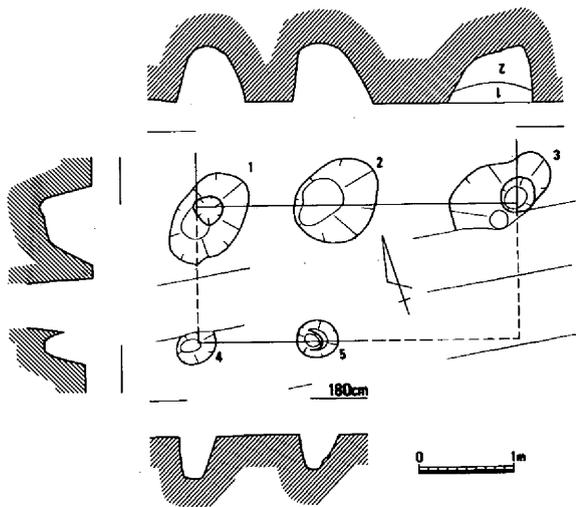
(2) 建物

建物1 (第10図、図版2)

E2区で検出された。大形柱穴が3個直線上に並び、その南で柱穴が2個確認された。さらに北に柱穴列の存在を推定し、南の柱穴は補助的と考えたい。北側柱穴の規模は、長径が98～120cm、深さが60～66cmであった。南側の柱穴は長径が44

cm、深さは44・37cmを測る。柱間は、北柱穴列で120cmと205cm、1・4間が145cm、4・5間が130cmであった。出土土器は百・中・Ⅱである。

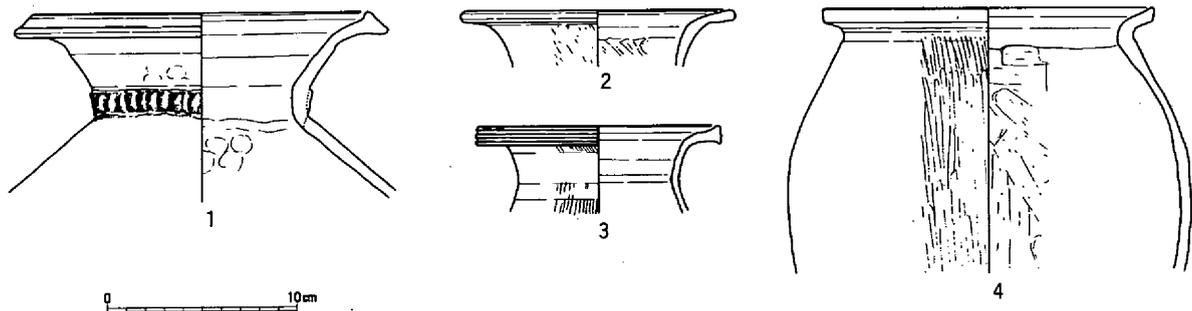
(岡本)



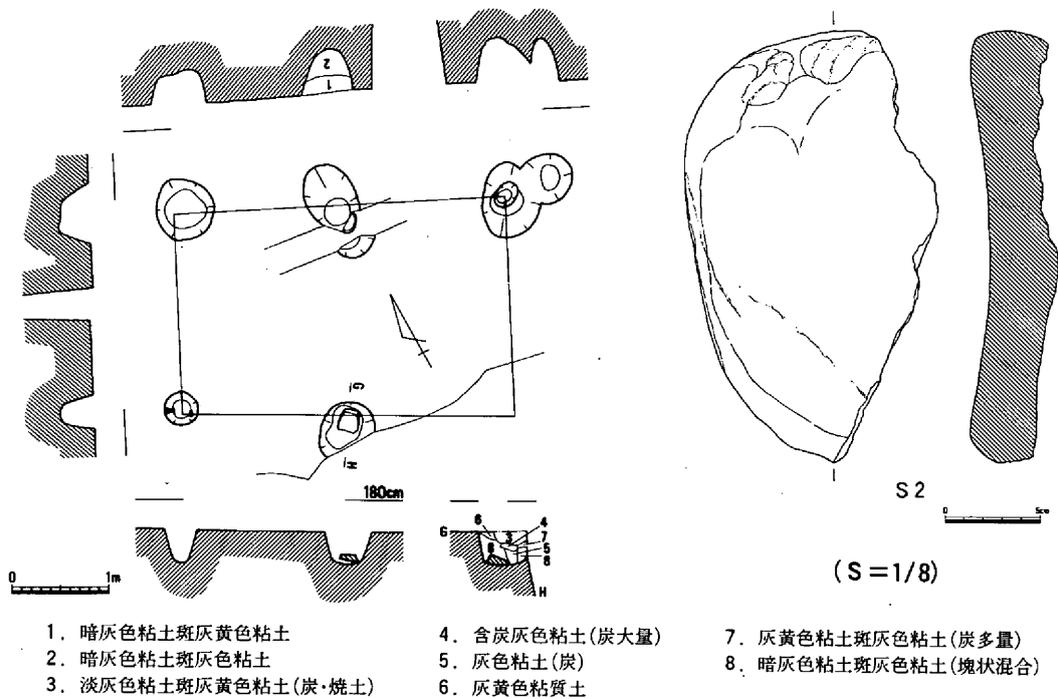
1. 灰黄色粘土斑淡青灰色粘土 2. 暗灰色粘土斑灰色粘土

建物2 (第11図、図版2)

E3区にあった。2間×1間の掘立柱建物である。北側柱穴はいずれも大形で、長径が66～105cm、深さは36～50cmを測る。柱間は170cmと155cmだった。南側柱穴は長径が36cmと66cm、深さは36cmと34cmを測る。梁間は210cm、南柱穴の柱間は175cmであった。南側・北側ともに、



第10図 建物1・出土遺物



第11図 建物2・出土遺物

中央の柱穴では底に礎石が据えられていた。図示した大形の砥石は、北側の中央柱穴の礎石として使用されていたものである。土器の出土はない。建物1と近接した時期か。(岡本)

(3) 土器棺

土器棺1 (第12・13図、図版3)

W1区の西半部で検出された土器棺で、掘り方は決して明瞭とはいえないが、長さ95cm、推定幅80cmの楕円形を呈し、北側に比べ南側が深くなっている。棺は壺を横にして置き、口縁部側を鉢で蓋している。時期は百・後・Ⅱと考えられる。(平井)

(4) 土 壙

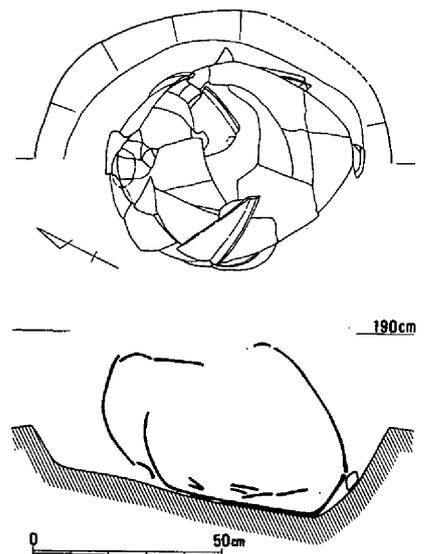
土壙1 (第14図)

W3区で検出された。長径53cm、深さは33cmを測る。検出面で百・中・Ⅱの壺底部が中央付近から出土した。(岡本)

(5) 溝

溝1～8 (第15～18図)

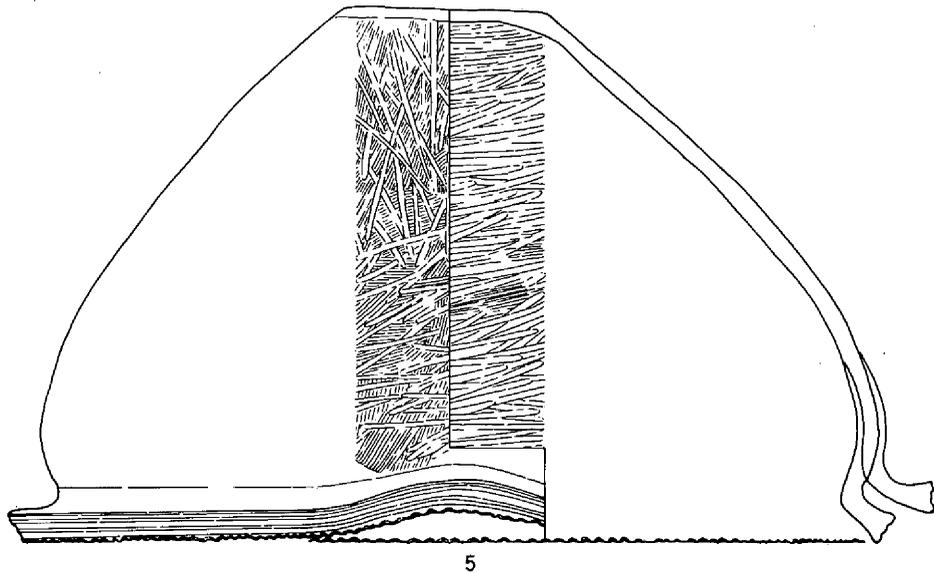
黒中調査区では、弥生時代と考えられる溝が8条検出されている。これらの溝の内、東西方向の溝3以外はすべて南北方向の溝であり、調査区の幅である3～4mのわずかな検出にすぎない。溝3についても浅くて、240cm分の検出に止まっている。このようなことから、個々の全容を明らかにするのは困難であ



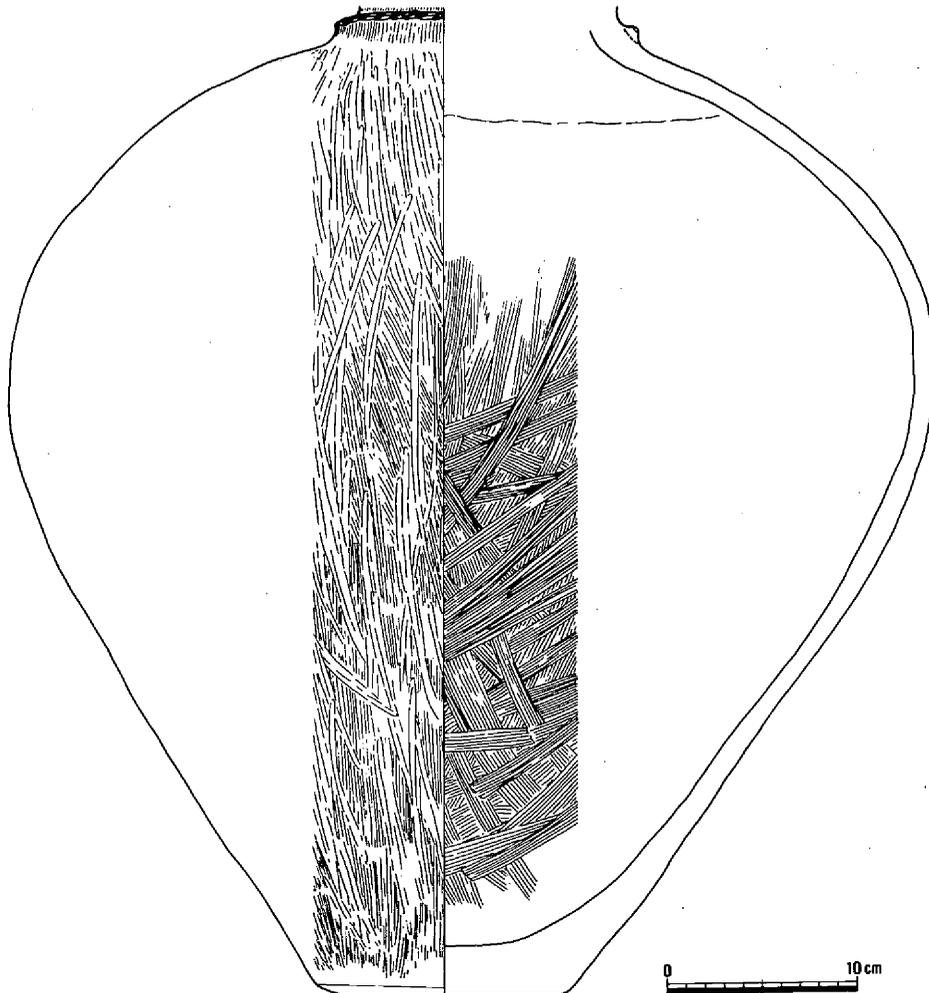
第12図 土器棺1 出土状態 (S=1/20)

るため、ここではそれぞれの規模を略述するだけにしておく。

溝1と2はW3区の西半にあり、1が幅180cm、深さ29cm、2は幅が80cm、深さ29cmを測る。溝3はW2区の西端で、幅30cm、深さ14cmであった。溝4と5はE1区の西半に位置し、4が幅120cm、深さ

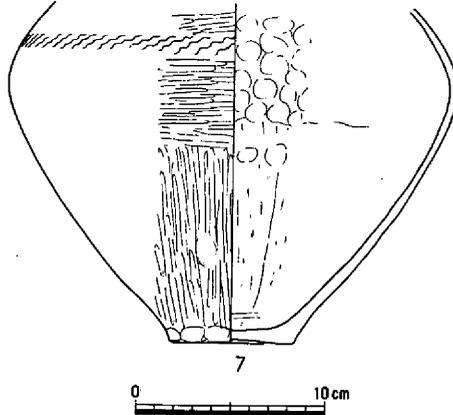
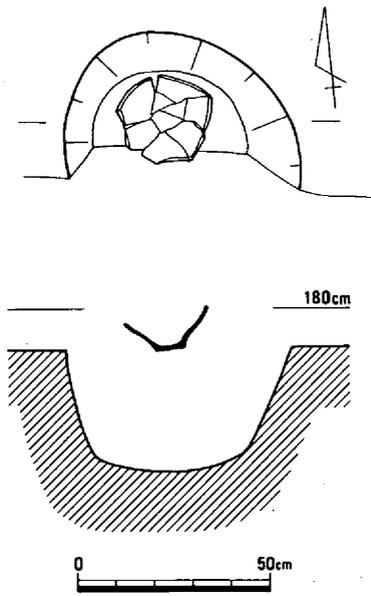


5



6

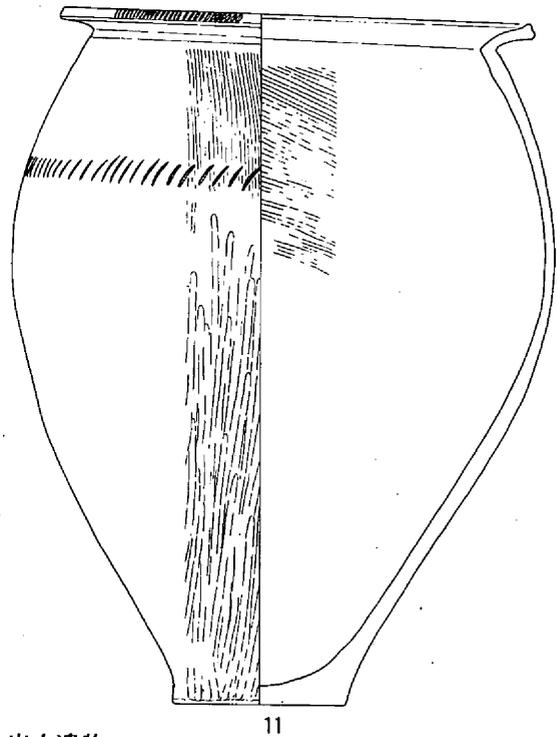
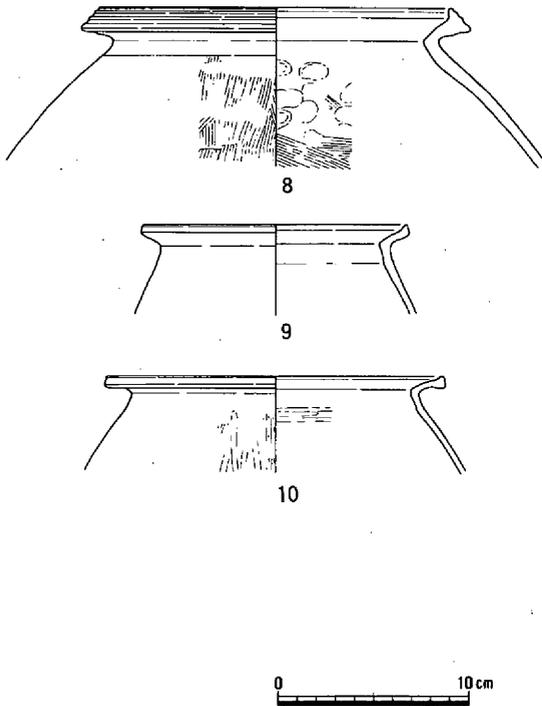
第13図 土器棺 1



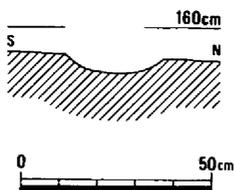
77cm、5は幅が150cm、深さは22cmを測る。溝6～8はE3区の西半で検出された。6は幅42cm、深さ4cm、7は幅75cm、深さ10cm、8は幅が38cm、深さは6cmであった。以上のような検出状況

から考えると、溝1・2・4・5については水流のあった溝と思われるが、他は疑問がある。ただ、溝6の底は北から南に下がっていた。時期については、溝1からは百・中・Ⅱの土器の出土があり、溝4・5も中期と考えられる。他の溝もおそらく同期のものであろう。(岡本)

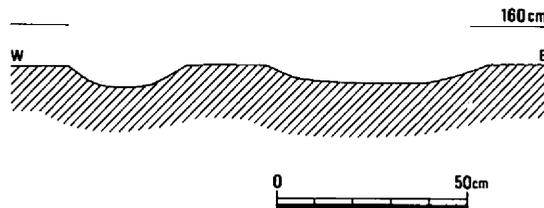
第14図 土壌1・出土遺物



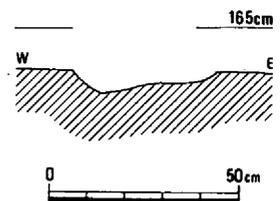
第15図 溝1出土遺物



第16図 溝3



第17図 溝6・7

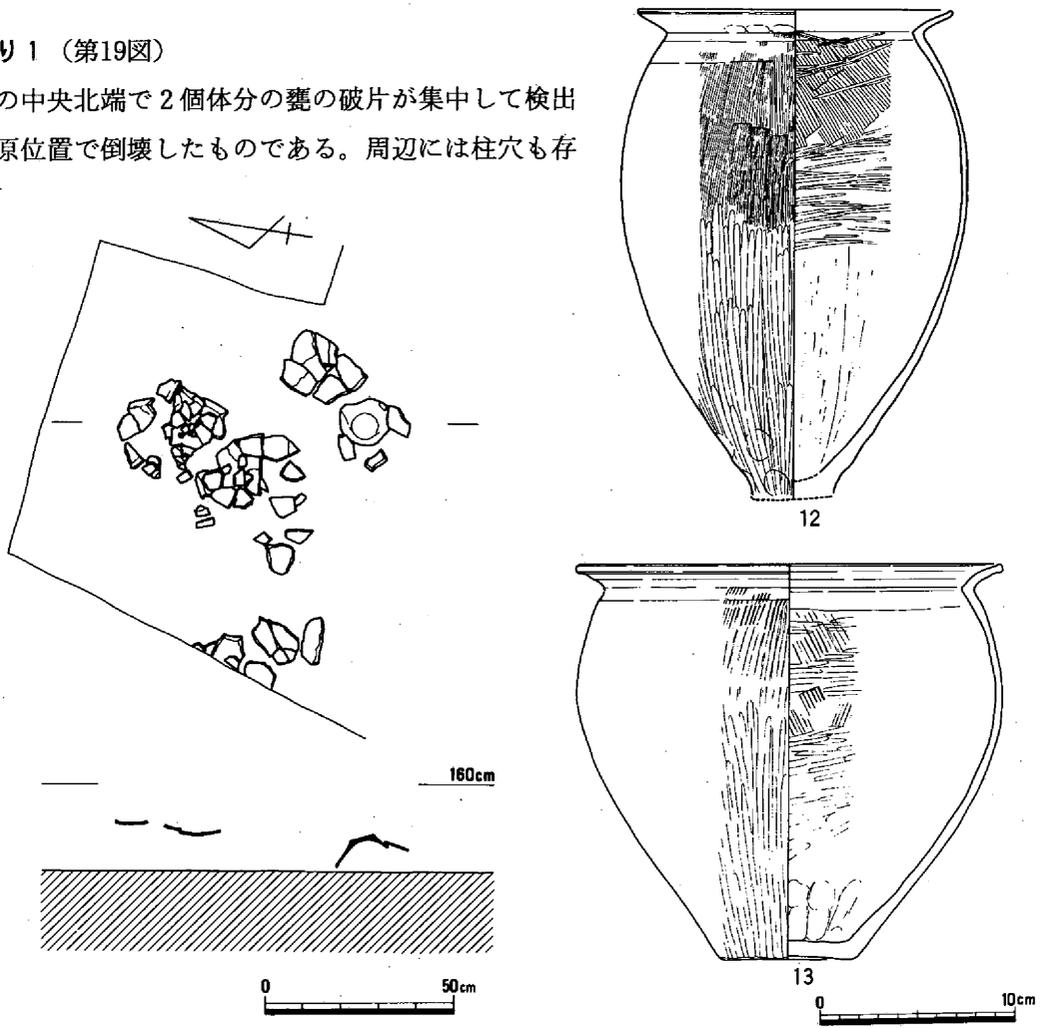


第18図 溝8

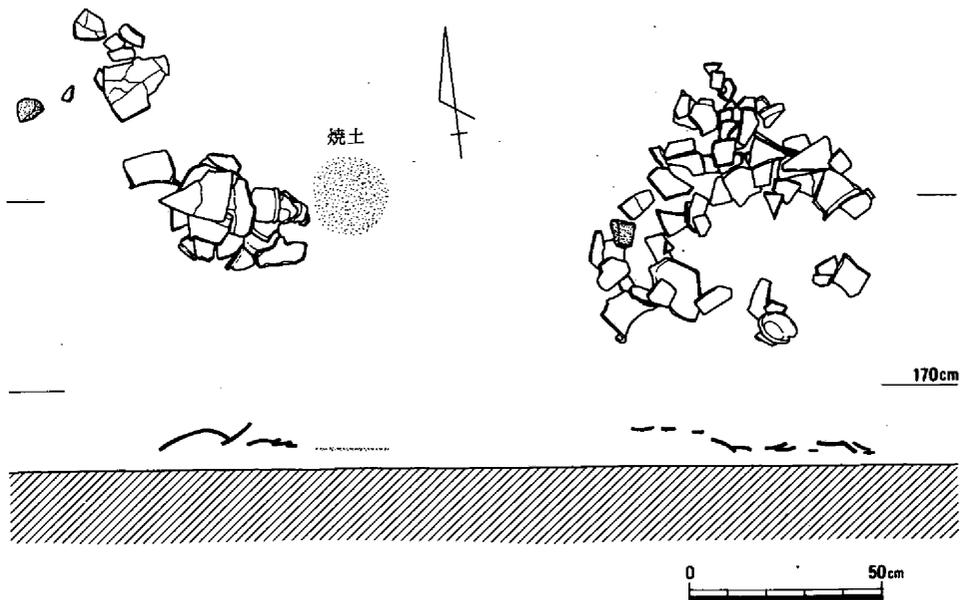
(6) 土器溜り

土器溜り1 (第19図)

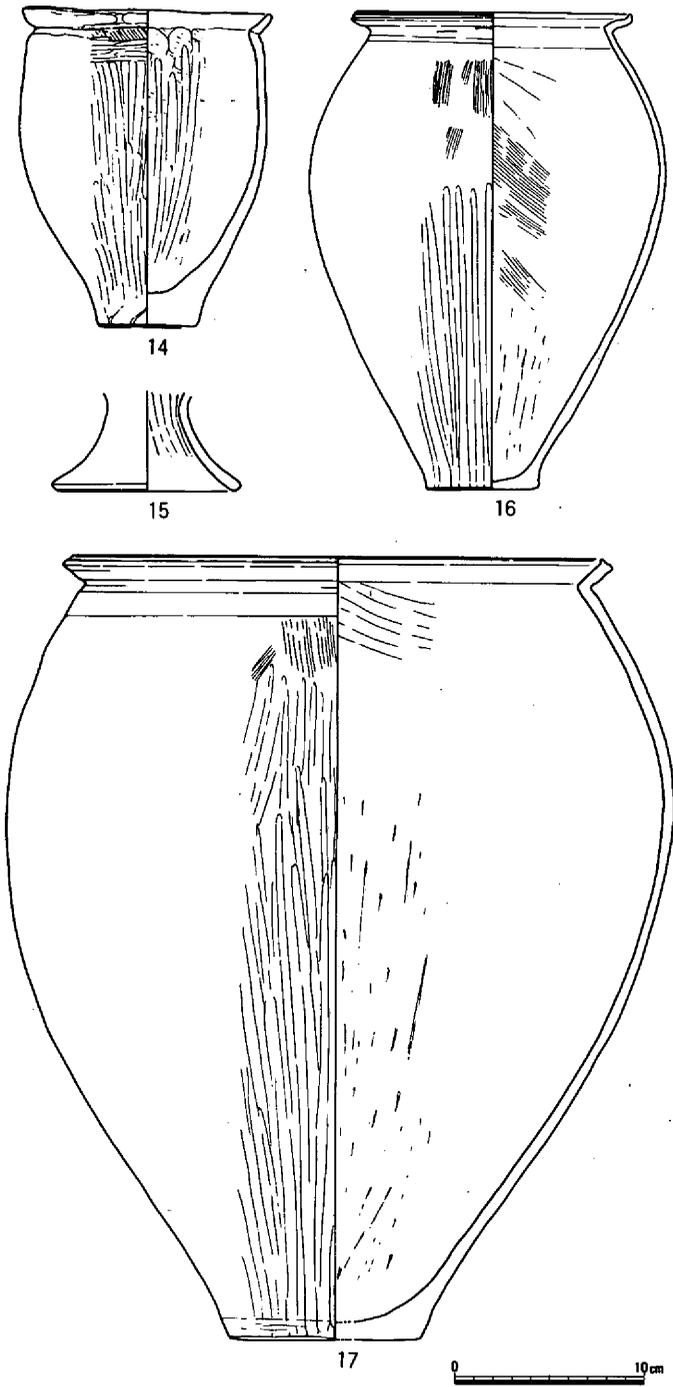
W3区の中央北端で2個体分の甕の破片が集中して検出された。原位置で倒壊したものである。周辺には柱穴も存



第19図 土器溜り1 出土状態・出土遺物



第20図 土器溜り2 出土状態

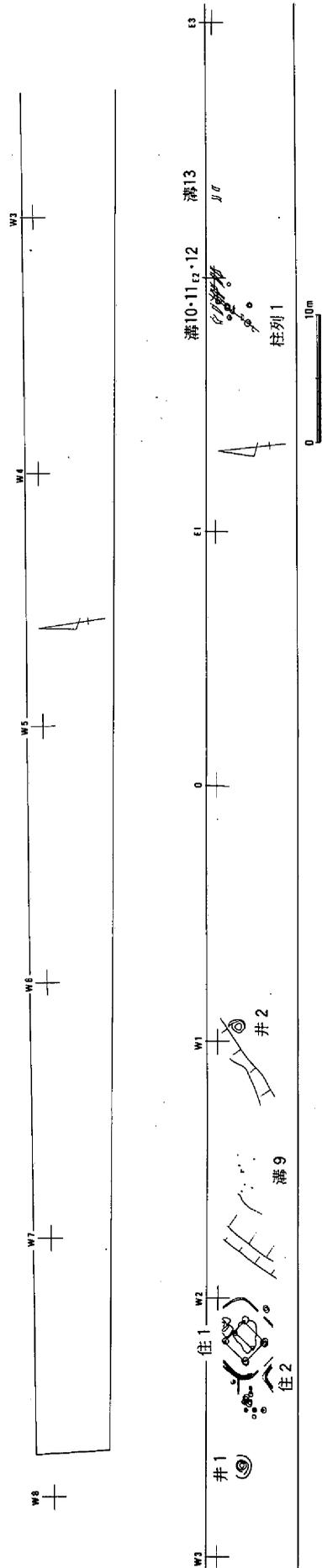


第21図 土器溜り2出土遺物

在したが、住居の肩は確認できなかった。土器は百・中・Ⅱと
考えられる。(岡本)

土器溜り2 (第20・21図、図版3)

E3区西半で土器片が2群に別れて密集していた。土器が倒
壊して生じたものと判断される。同じ高さで焼土面があり、住
居の存在した可能性も考えられるが、肩部の検出はできなかつ
た。百・中・Ⅱである。(岡本)



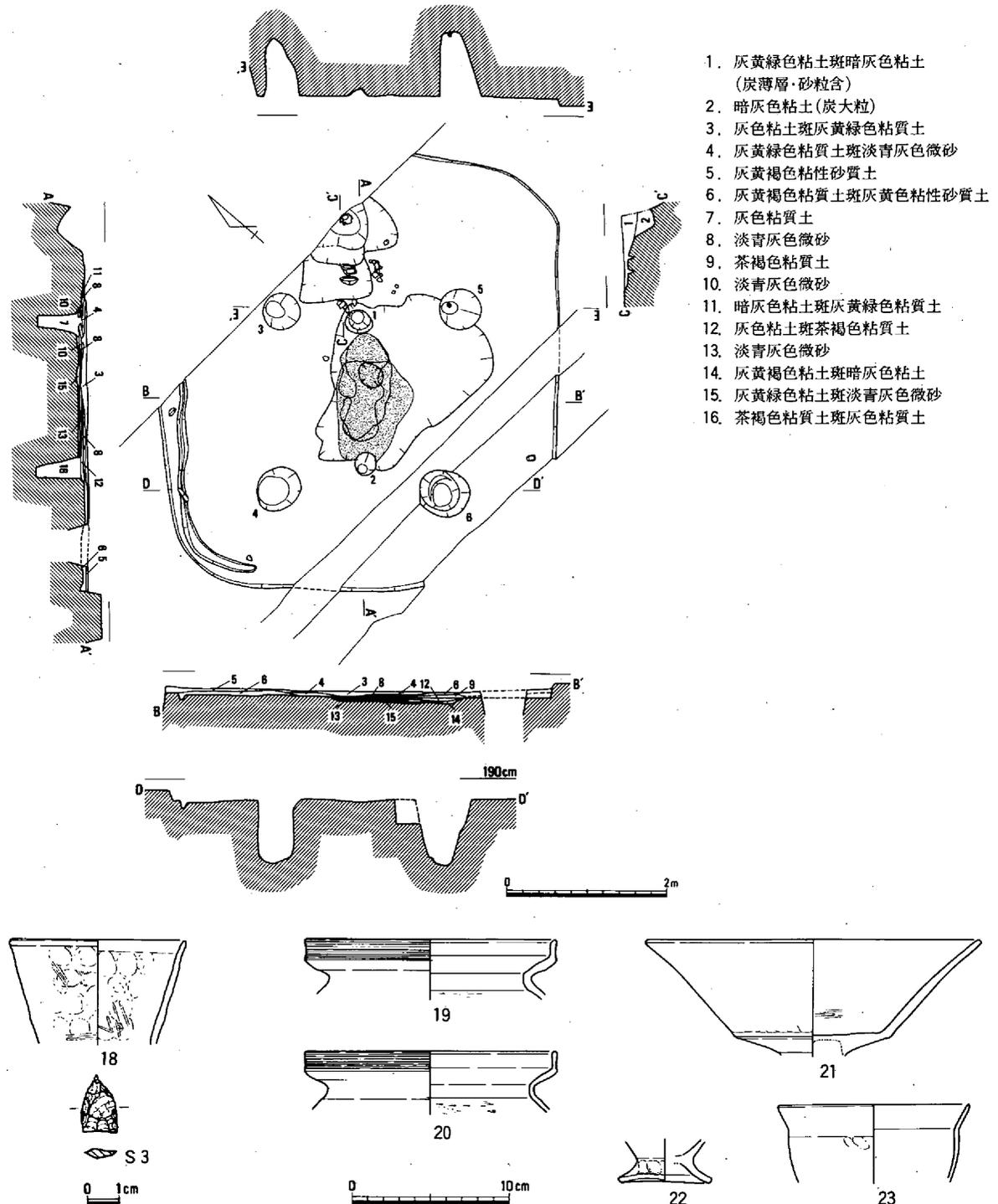
第22図 黒中調査区古墳時代の遺構 (S=1/500)

3. 古墳時代の遺構と遺物

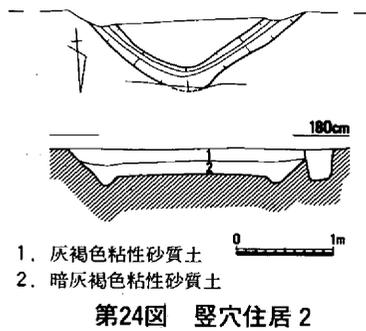
(1) 竪穴住居

竪穴住居1 (第23図、図版4)

W3区で検出された。隅丸方形を呈する竪穴住居である。埋土の断面観察などから、当初は支柱穴が2本(柱穴1・2)であったものが、4本(柱穴3~6)に拡張されていた。竪穴の規模は、長軸



第23図 竪穴住居1・出土遺物



第24図 竪穴住居 2

が550cm、短軸は520cmを測る。深さは床面まで20cmと浅い。住居の中央には長径260cm、短径187cm、深さ8cmの浅い窪みがあった。窪みの中には、薄い層が3～4枚堆積し、各層の底には炭が膜状になって認められた。北東壁の中央付近の内側には隅丸方形の土壇が設けられ、その中から高杯の杯部の大形片が出土した。土壇は一辺が推定で70cm程度、深さは30cmであった。壁体溝は北西壁際でのみ検出された。柱穴1・2は長径35・29cm、深さ56・57cmを測り、その距離は心々で191cmであった。柱穴3～6は長径が48～70cm、深さは73～85cmを測る。柱穴間の距離は柱穴3と4で230cm、柱穴3と5で220cmであった。出土遺物は少ないが、その年代は百・古・Iと考えられる。(岡本)

竪穴住居 2 (第24図、図版 4)

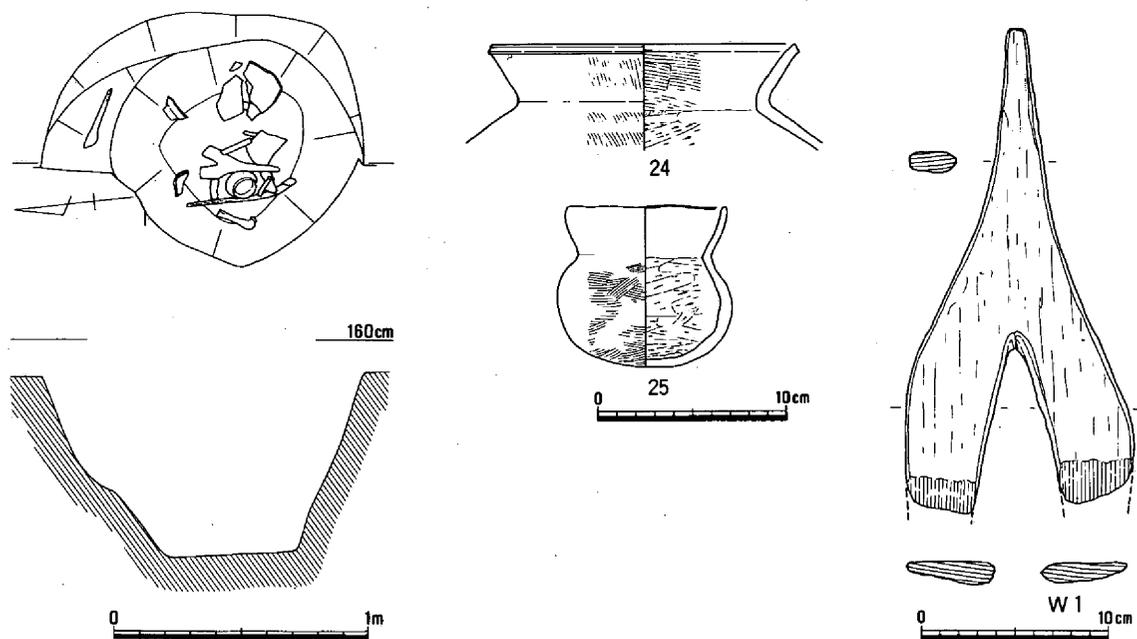
W 3区で北東角を認めたに過ぎない。北東壁と竪穴住居 1との間隔はわずか30cmであった。平面形は隅丸方形と推定される。壁体溝があり、深さは10cmを測る。埋土の下層には炭の大粒が含まれ、壁体溝の底では炭粒や焼土粒が多かった。時期は竪穴住居 1と近接しているか。遺物はない。(岡本)

(2) 井戸

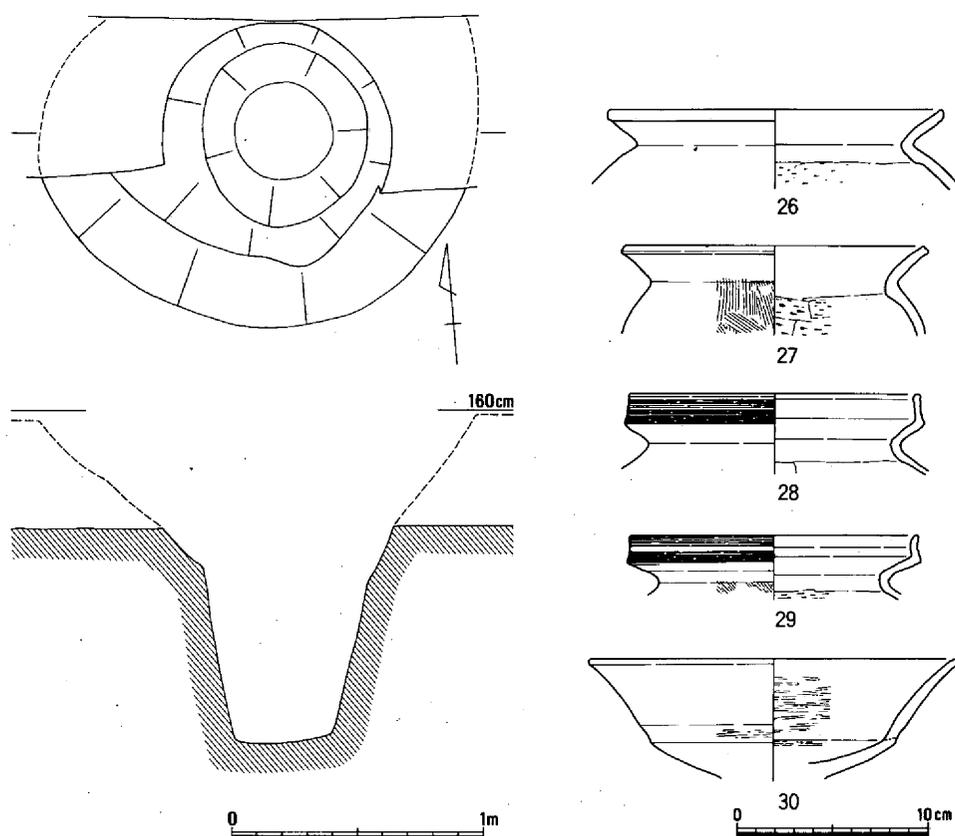
井戸 1 (第25図、図版 4)

W 2区で検出された井戸で、平面形は1.2m前後の円形になるものと考えられる。検出面からの深さは70cmで、底部は径50cmあまりの平坦部があり、壁はやや緩やかに立上る。

井戸内の遺物は比較的深い位置に集中するが、底部に接するものはない。土器は少なく、小形丸底埴の完形が1点以外は破片である。土器以外には二又鋤などの木器、さらに獣骨も出土した。このうち土器は2点図示できた。24は甕で、口縁端部を少しつまみ上げている。25は小形丸底埴で、胴部外面にはハケメが見られる。土器の時期は百・古・IIと考えられる。(平井)



第25図 井戸 1・出土遺物



第26図 井戸2・出土遺物

井戸2（第26図、図版5）

W1区の西半部で検出された井戸で、平面形は1.3m前後の円形になると推定される。検出面からの深さは1.3mを測る。底部は径40cmあまりの平坦部となり、壁は急傾斜で立上るものの、70cmあまり立上がった所から緩やかな傾斜になる。

遺物は土器のみであるが、完形品はなかった。時期は百・古・Ⅱと考えられる。（平井）

(3) 溝

溝9（第27～32図、図版5）

W2区のほぼ全体を占めている溝である。調査区の幅が狭いため、この溝の検出長は250cmしかない。溝の幅は検出面で6mもある。短い範囲なので走向は判定し難いが、北東から南西の主軸をもっている。どちらが上流か明らかではないが現在の用水の流れから判断して、南西側が上流ではあるまいか。断面図は調査区が狭いために主軸に直角に取ることができなかった。溝の検出面の海拔は200cmで、溝底のそれは30cmである。ただし溝の底部は全面を発掘したものではない。中央部を坪掘して確認したものである。したがって溝の深さは約170cmと言える。埋積土は6層に分層することができ、土器は最下層の第6層・溝東肩口・第2層から多量に出土している。第6層の土器は、壺・甕・高杯・鉢・器台・製塩土器・手づくね土器などがある。刀状の木製品・植物遺体も含まれる。溝東肩口の土器は第6層とほぼ同じ器種が揃っている。第2層の土器は、量的には少ないが、初期須恵器も出土している。また溝底から杭が9本打ち込まれたままの状態出土した。底部西側だけで検出出来た。

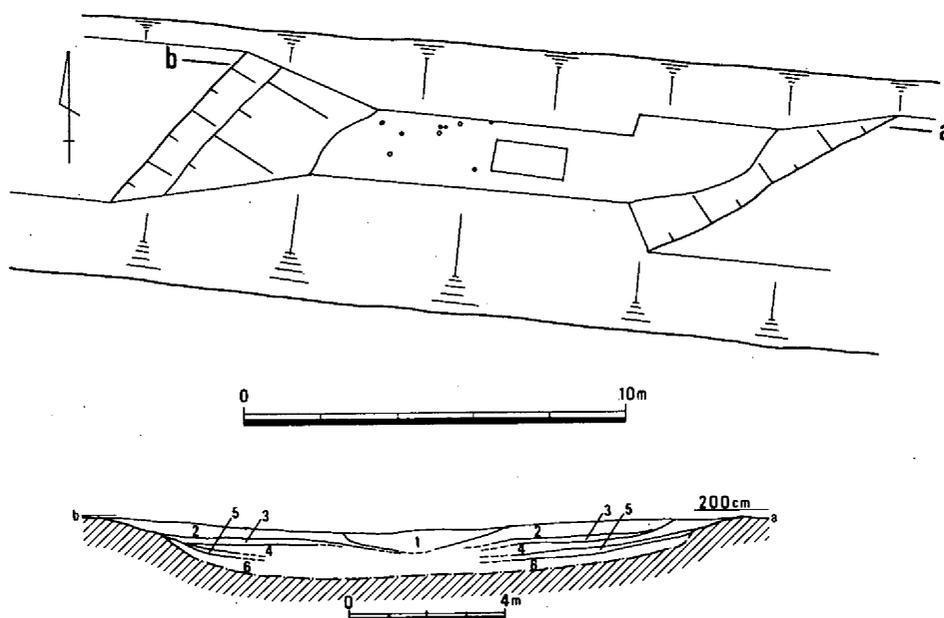
第28図は第2層出土遺物である。31はわずかに内屈折する口縁を持つ甕。32はわずかに内屈湾する口縁の甕。33もわずかに内屈折する口縁を持つ直口壺。34・35はユビナデする台付鉢の台部。36は初期須恵器の大甕である。口縁端直下に断面三角の突帯を持つ。

第29図は溝東肩口出土遺物である。37は二重口縁の壺で、器高40.2cmを測る。38~41は甕の口縁である。44~46は口縁外面に櫛描き沈線を施す丸底の吉備系土師器甕。42は小型丸底埴。49も小型丸底埴だが胎土が精製粘土である。50は手づくね土器。51~53は高杯である。

第30~32図は第6層出土遺物である。54~57・60・61は二重口縁の壺。58・63~65は甕。59は器高38.3cmの外反する口縁・丸底の壺。66~71は口縁外面に櫛描き沈線を施す丸底の吉備系土師器甕。73は精製粘土を使用した小型台付埴。75・76は小型器台。77~83は小型鉢。84~87は台付鉢。88~94は小型台付鉢で、製塩土器。95~97は手づくね土器。98~107は高杯。109は大型鉢。110は甌。

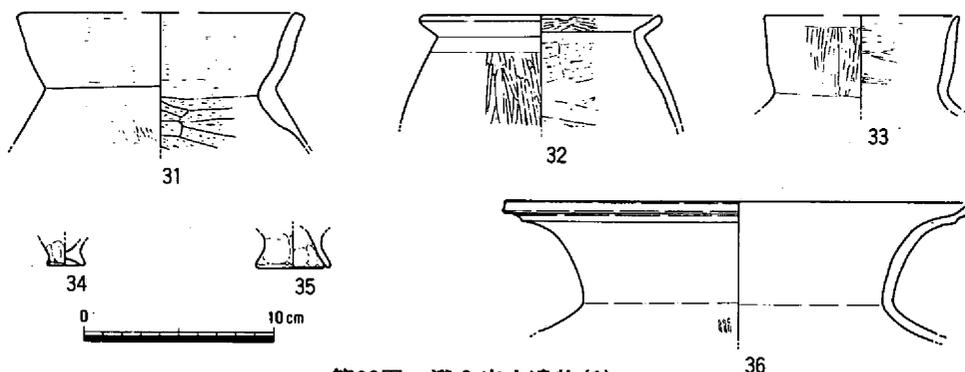
以上の土器からこの溝は百・古・Iから5世紀まで存続したと考えられる。

(浅倉)

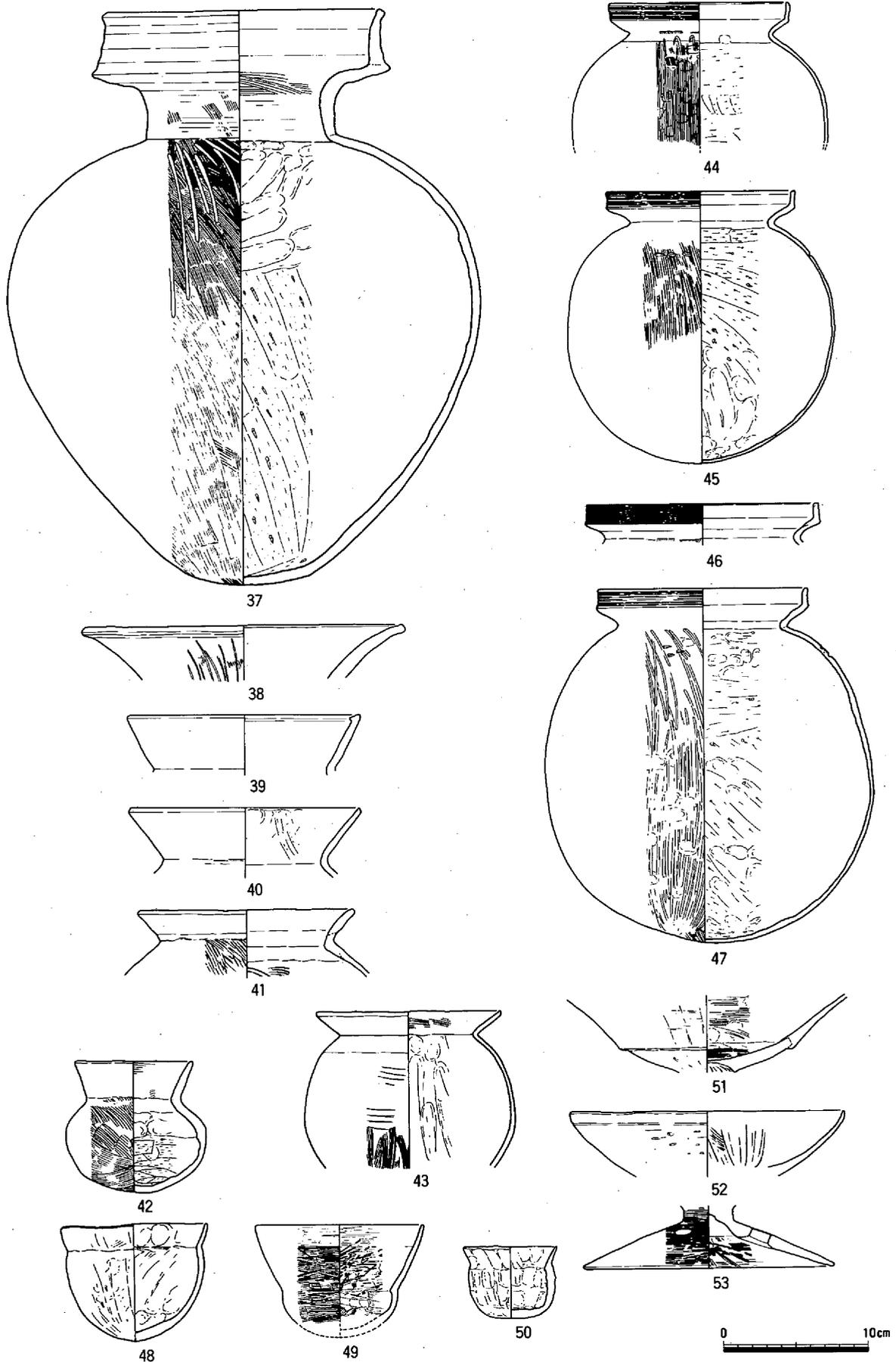


- | | | |
|-----------------|-----------|--------|
| 1. 黒褐色粘質土 | 3. 有機物 | 5. 有機物 |
| 2. 青灰色粘土(須恵器含む) | 4. 黒褐色粘質土 | 6. 砂礫層 |

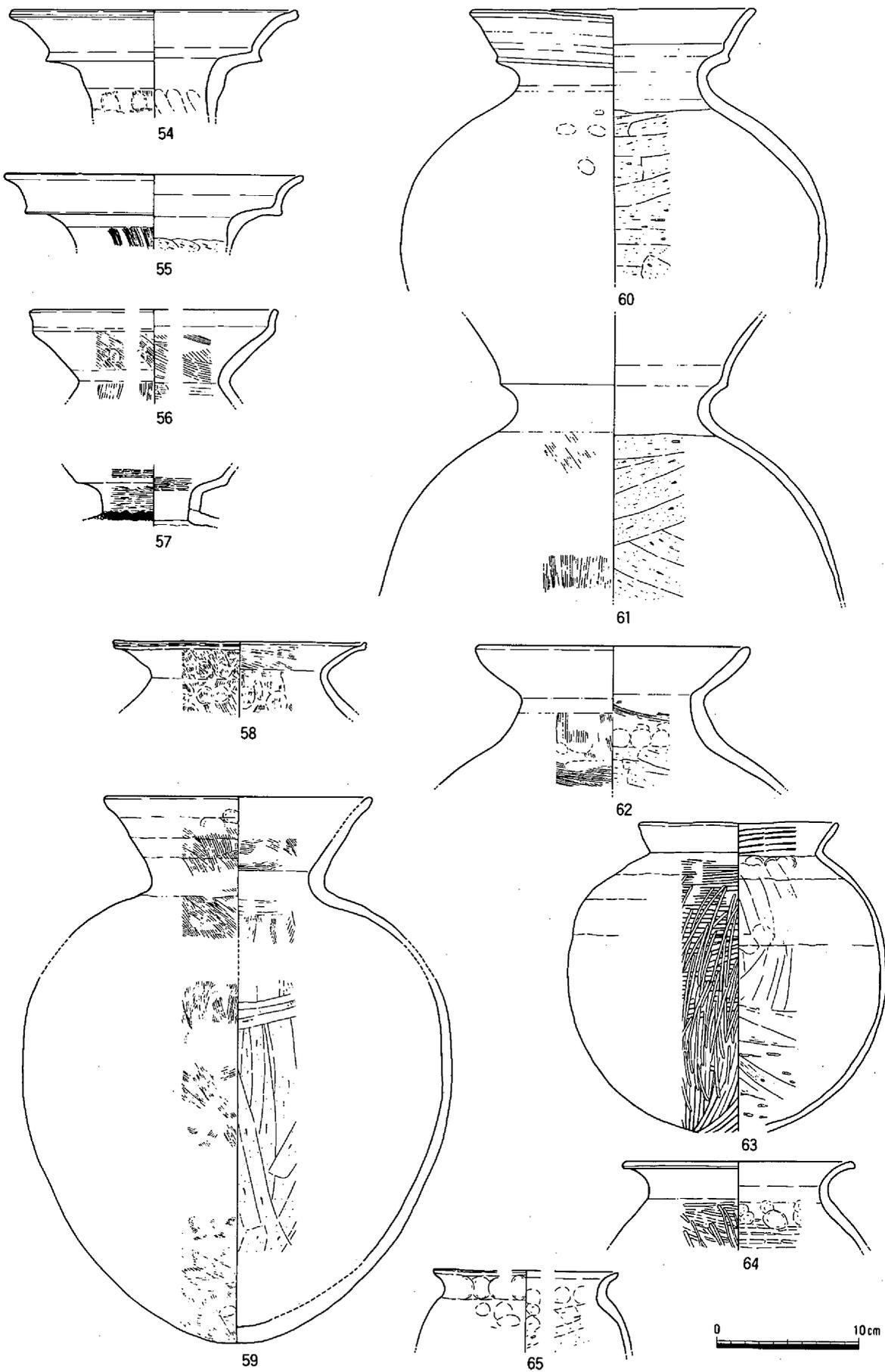
第27図 溝9 (S=1/200)



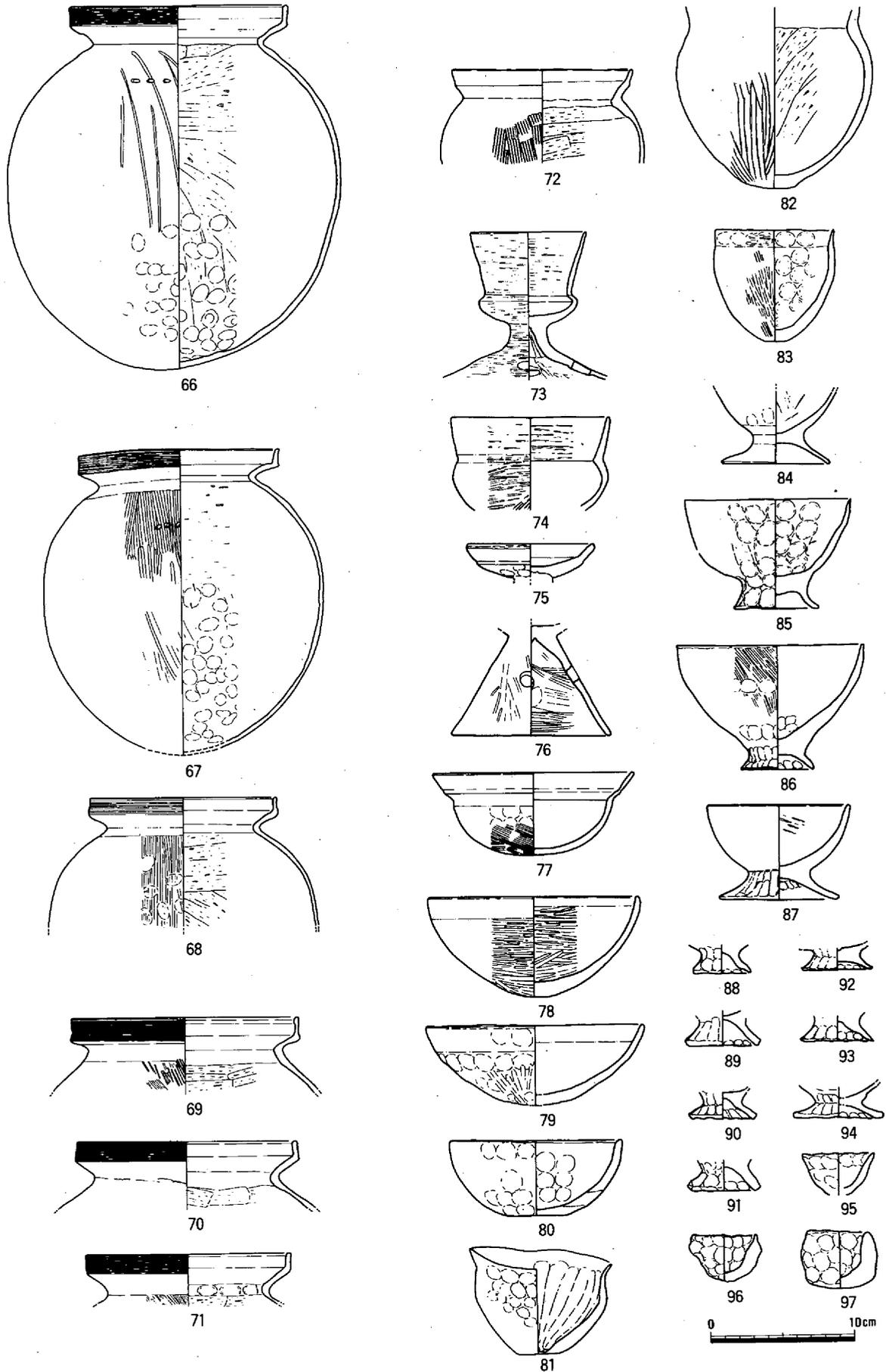
第28図 溝9出土遺物(1)



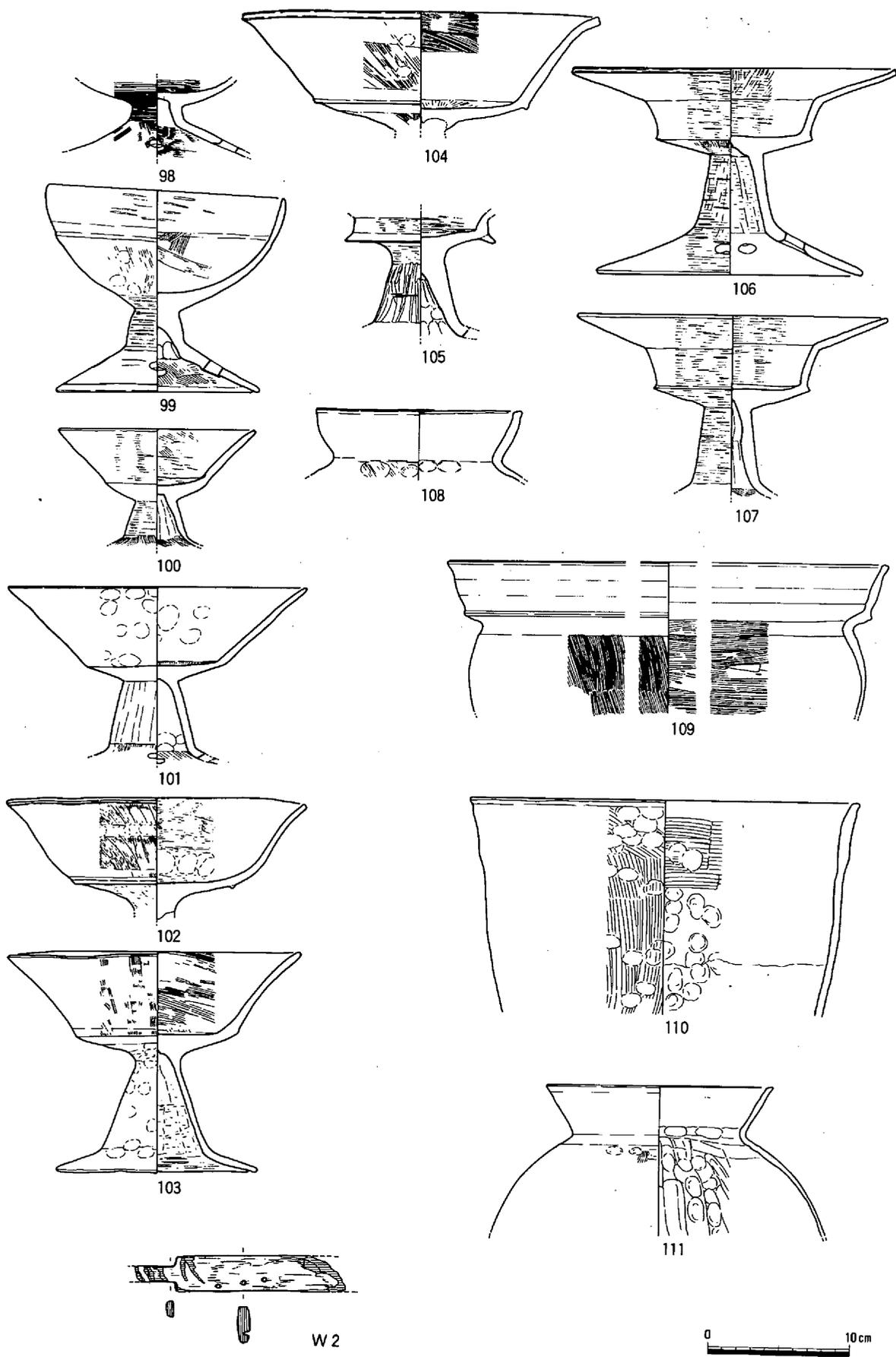
第29図 溝9 出土遺物(2)



第30図 溝9 出土遺物(3)



第31図 溝9出土遺物(4)



第32図 溝9出土遺物(5)

溝10 (第33図)

E 2 区の東端に位置していた。南西から北東の方向をもつ。溝の幅は一定せず、肩部には凹凸があった。溝の幅は90~95cm、深さが16cmを測る。断面形は皿形を呈し、埋土は暗茶灰色砂質土であった。古墳時代前半の溝かと思われる。(岡本)

溝11 (第34図)

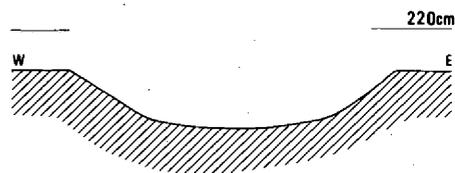
E 2 区の東端にあり、溝10の東70cmに平行していた。溝の幅は30~48cmと一定していなかった。深さは16cmを測る。埋土は暗茶灰色砂質土で、層位的には溝10や12と同時である。(岡本)

溝12 (第35図)

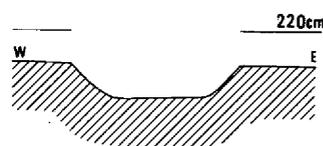
溝11の東50cmに平行していた。溝の幅は一定せず、幅が48~62cm、深さは15cmを測る。埋土は暗茶灰色砂質土であった。古墳時代前半の溝と考えられる。(岡本)

溝13 (第36図)

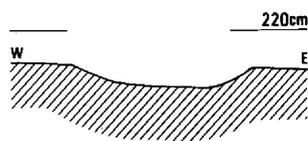
E 3 区で検出された。溝12の東5.5mにあり、平行していたようである。ゆるやかな屈曲をもち、幅は80~88cm、深さは18cmを測る。埋土は暗茶灰色砂質土で、古墳時代前半であろう。(岡本)



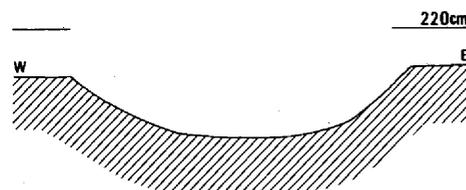
第33図 溝10



第34図 溝11



第35図 溝12

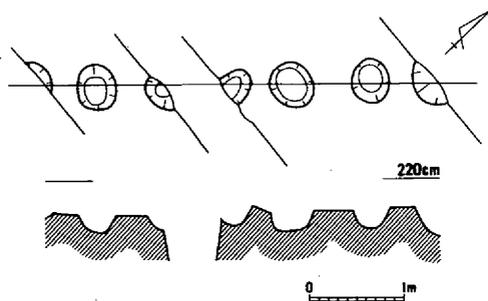


第36図 溝13

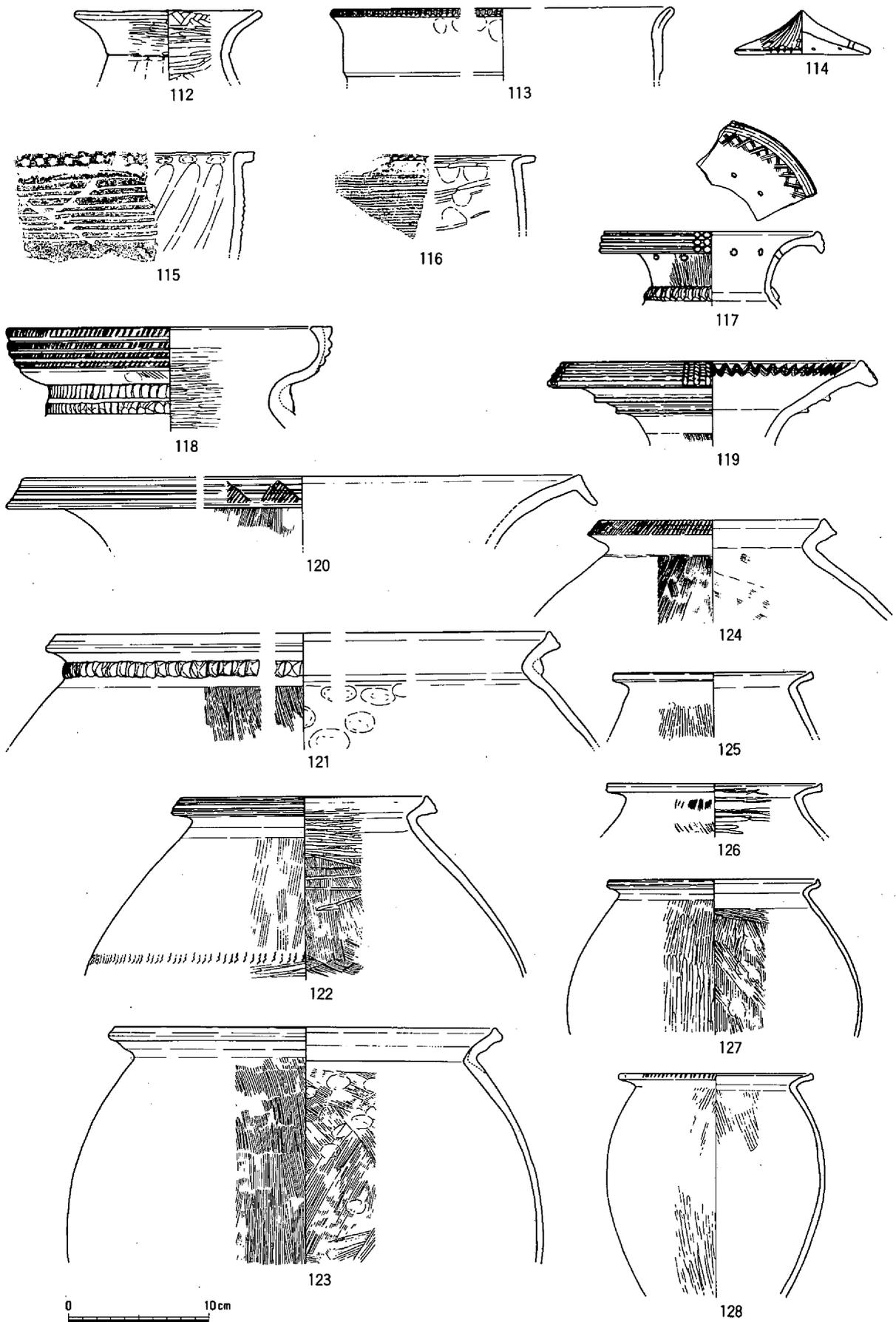
(4) 柱 穴 列

柱穴列1 (第37図、図版5)

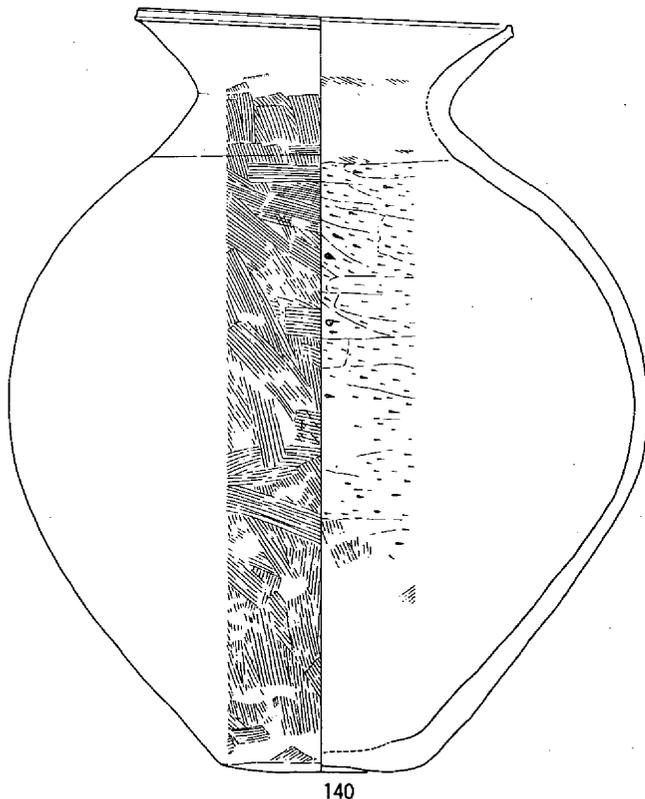
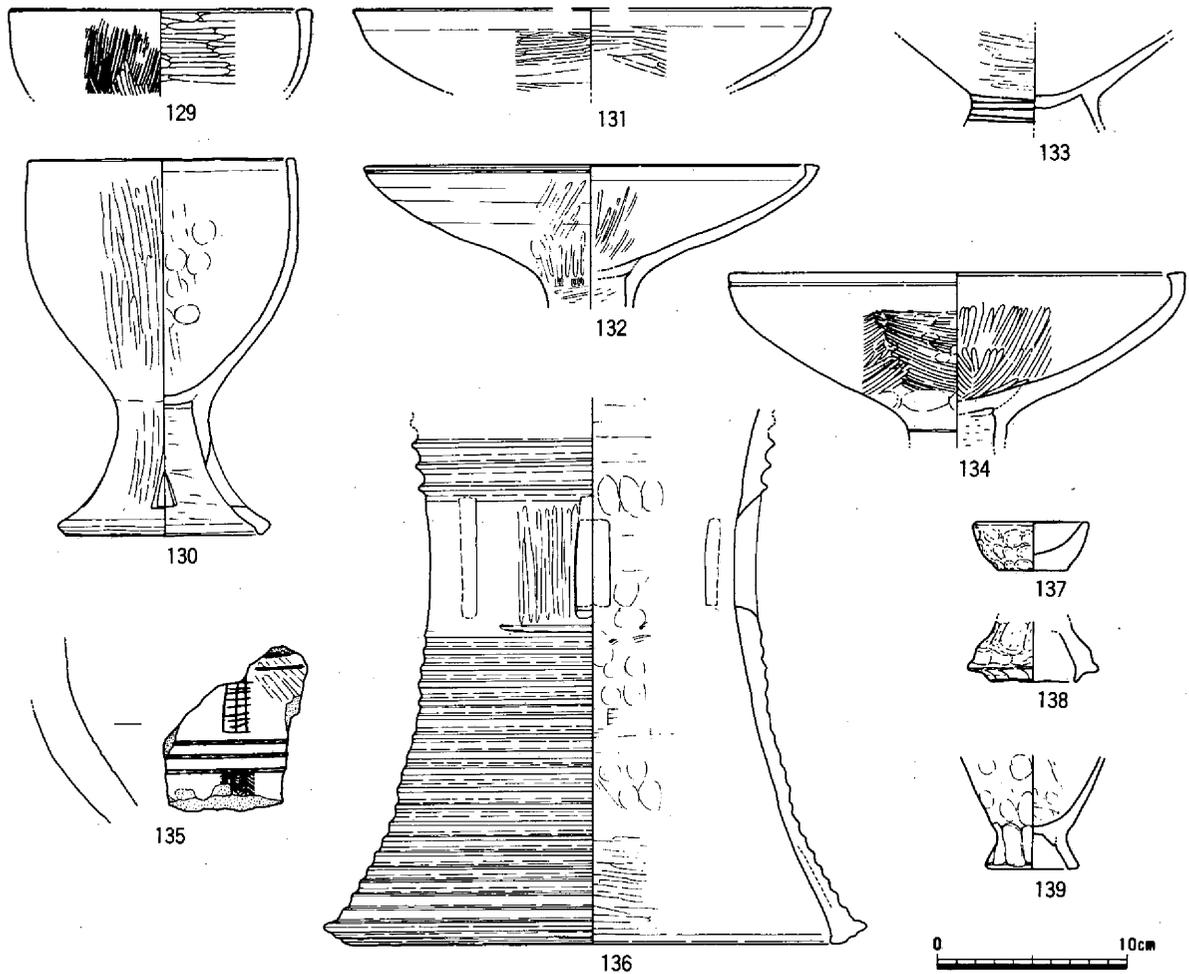
E 2 区の東端で検出された。柱穴は円形に近く、長径が47~57cm、深さは10~14cmを測る。柱穴間の距離はおおむね70cm程度であった。柱穴の埋土は灰色粘性砂質土で砂の塊をわずかに含んでいた。古墳時代後半期のものと考えられる。(岡本)



第37図 柱穴列1



第38図 包含層出土遺物(1)



第39図 包含層出土遺物(2)

4. 包含層の遺物

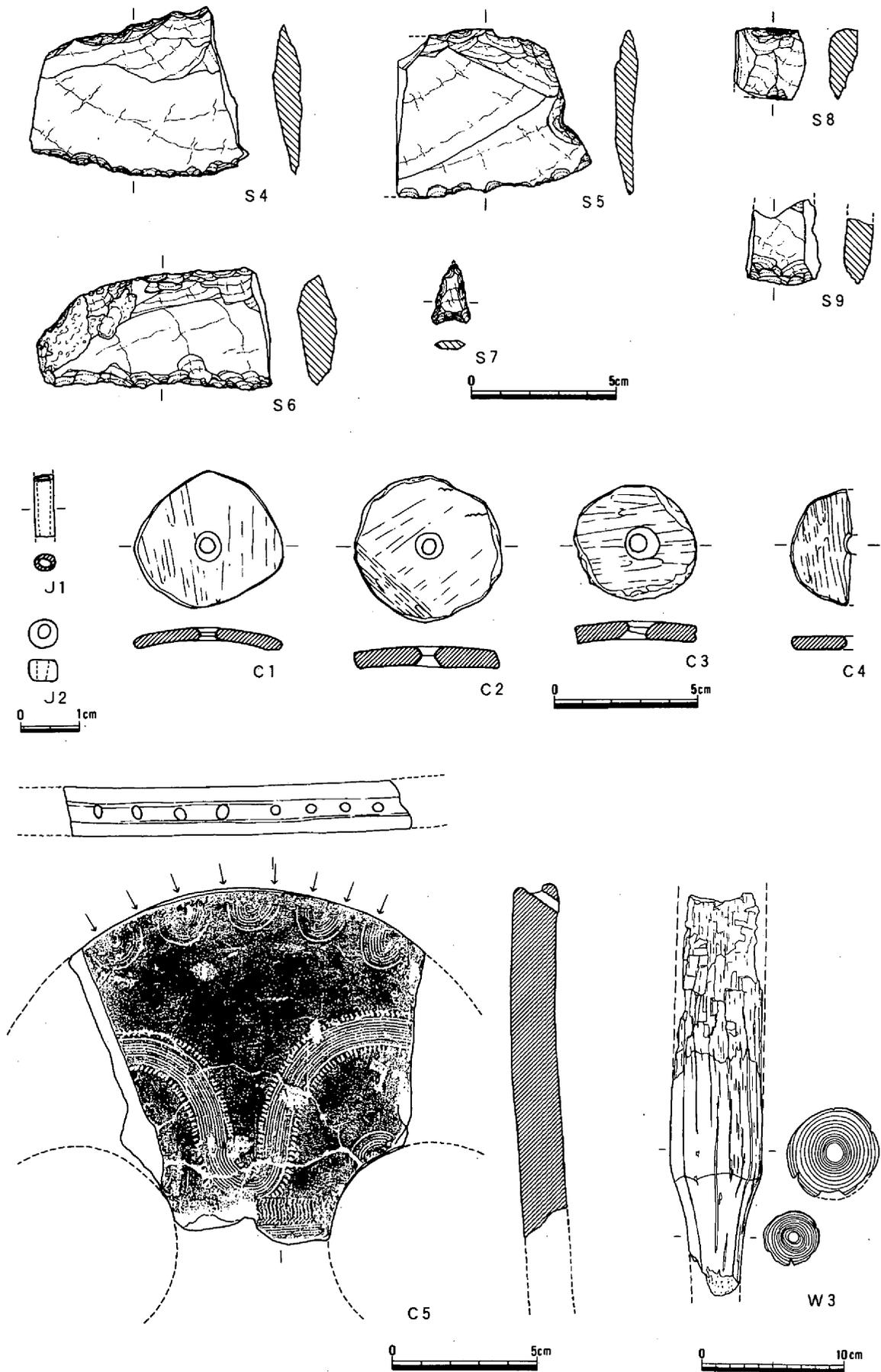
黒中調査区の包含層からは弥生時代前期から古墳時代の遺物が出土しているが、最も量が多いのは弥生時代中期に属す土器である。

土器は112から115までが前期、116は口縁部の下に櫛描沈線がめぐらされており、中期の初頭と考えられる。117から136までは中期に属するもの、137は手捏ね、138・139は製塩土器、140は古墳時代の土師器の壺である。

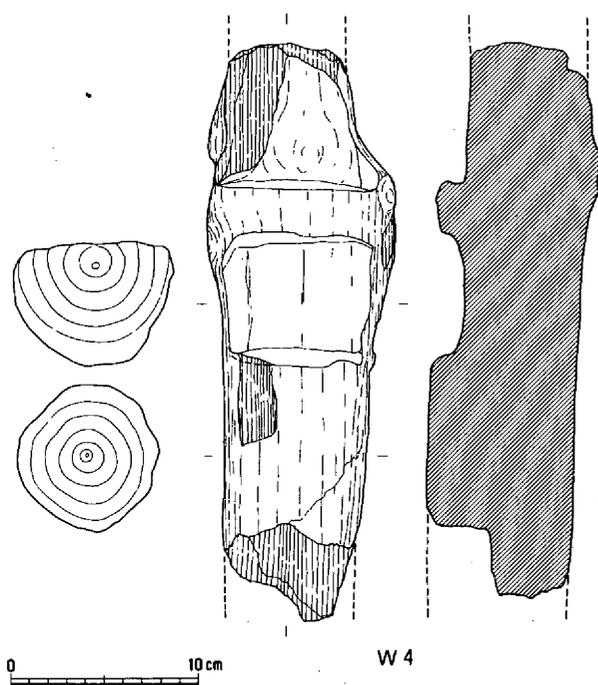
石器はS4が削器、S5とS6は石包丁、S8とS9は楔形石器、S7は石鏃である。

J1は碧玉製の管玉、J2はガラス製の小玉である。

第2節 黒中調査区



第40図 包含層出土遺物(3)



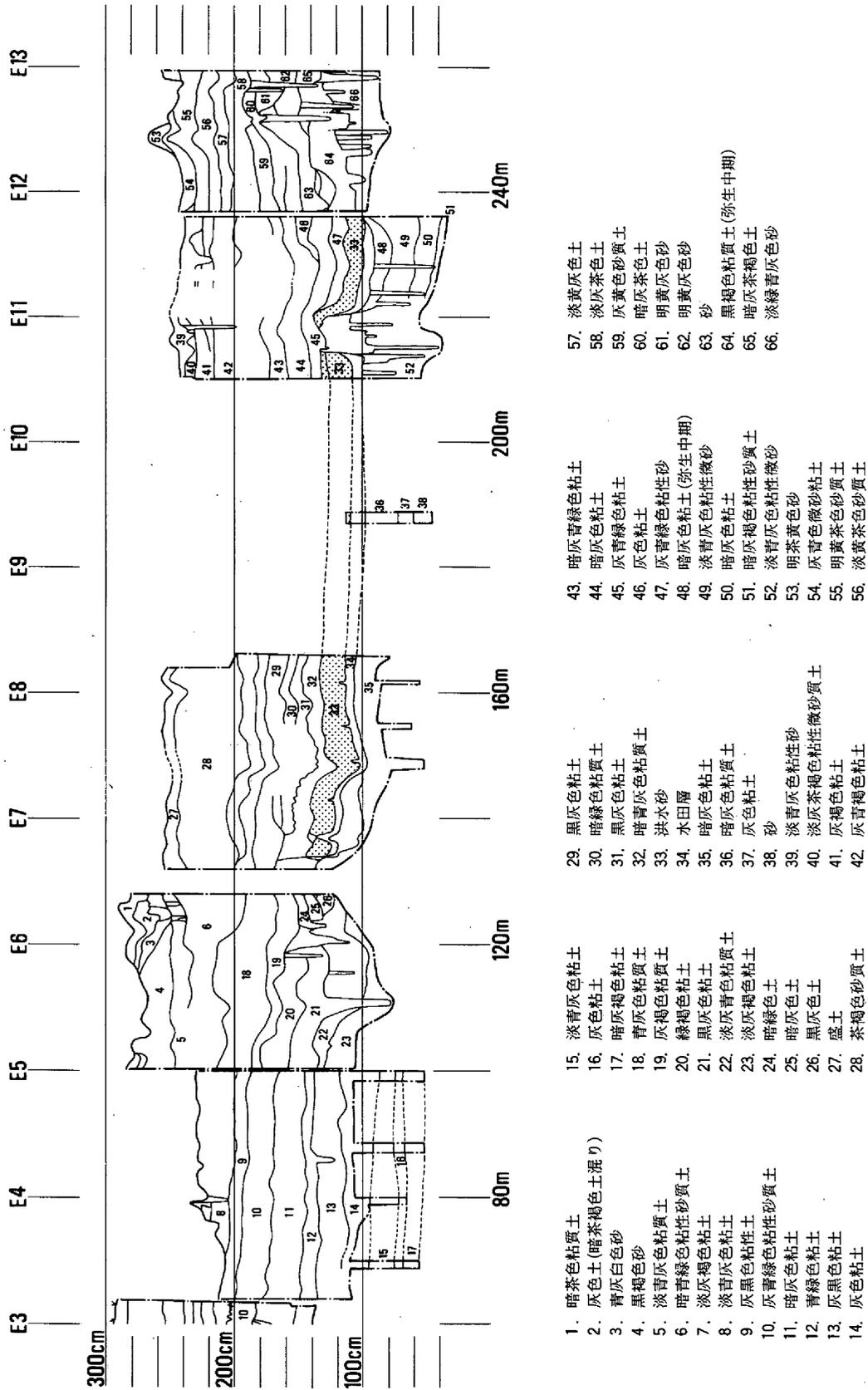
第41図 包含層出土遺物(4)

C1からC4は土製の紡錘車で、いずれも土器片を利用して仕上げたものである。なお穿孔はいずれも両側から施されている。

時期は用いられた土器片から弥生時代中期と推定される。

C5は大形の分銅形土製品である。頭部の上端面には沈線がめぐらされ、その沈線内から裏側に向けて円孔が穿たれている。頭部外周には櫛描きの半円をめぐらせ、目と鼻も櫛描文の両側に平行する刺突とによって表現されている。また頭部と体部の境界にも横位に刺突と櫛描きを施している。時期は中期の後半に属するものと考えられる。

木製品は杵(W3)と加工木(W4)が出土した。加工木は径8cmあまりの木に幅10cmほどを横位に削り取り、さらに幅2cmほどを土手状に残して削り取っている。用途は不明である。(平井)



第42図 和佐田調査区の土層

第3節 和佐田調査区

1. 調査区の概要

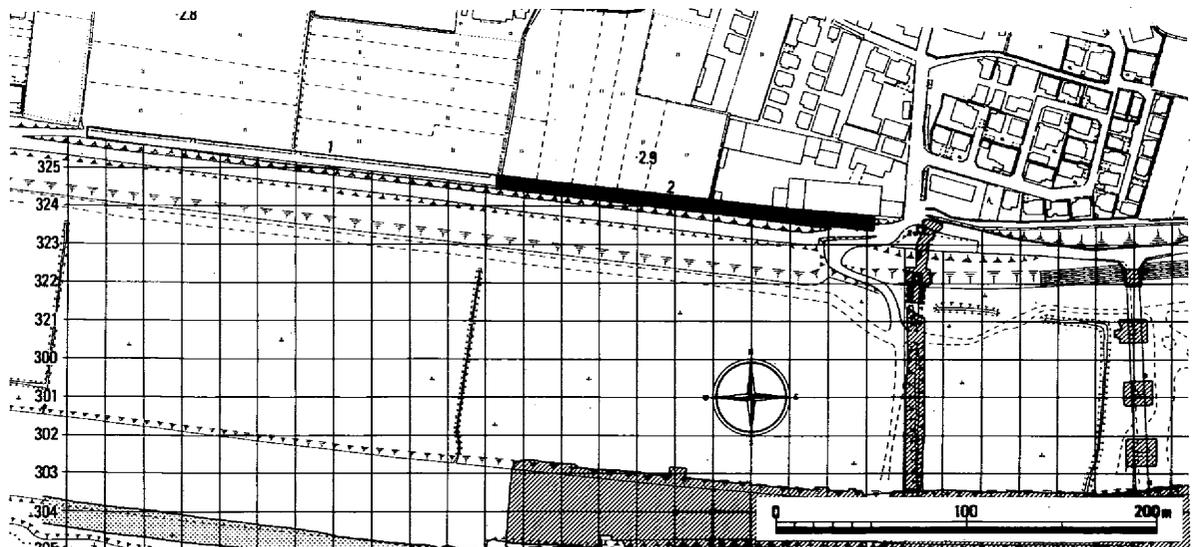
和佐田調査区は黒中調査区の東側に位置するが、その境界はE3のライン付近を南北に流れる用水である。和佐田調査区も黒中調査区同様の基準杭を設定した。その範囲はE3区からE13区である。

和佐田調査区はE4区からE7区までとE13区は微高地で、その間に底位部が広がる。層位を見ると、微高地上は海拔1.8m前後で弥生時代の遺構面になり、さらに中期は1.4m前後で検出される。低位部は1.1m前後に弥生時代後期の水田層が認められ、その上を厚さ20cmほどの洪水砂がおおう。E11・12区付近は水田層の下に中期の遺構が認められるが、E8区付近では水田層の下に遺構はない。

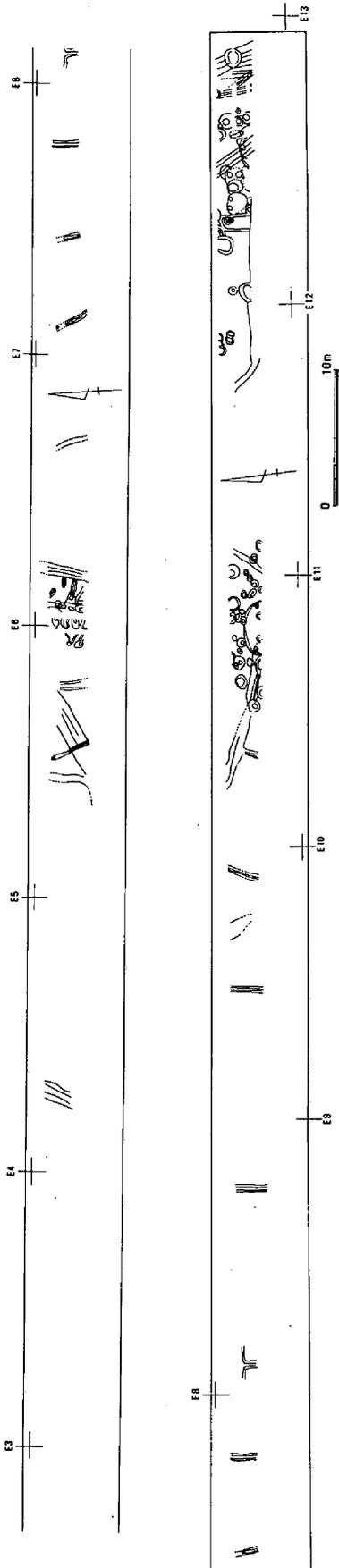
検出された遺構は弥生時代から古墳時代のものであるが、なかでも弥生時代中期が中心をなす。弥生時代の遺構は竪穴住居2軒とともに、多くの土塙やピットが検出されている。これらの遺構は特にE11区とE13区に集中する。溝は多くが南北方向に流走するものであるが、溝15は北東から南西方向に延びる。

弥生時代後期の水田は、E7区からE13区まで広がっている。西の端はE7区で微高地の端が確認され、ここから東側に小畦畔がほぼ南北に並ぶ。小畦畔の間隔から推定すると、水田区画は小さいものと考えられる。E11区の北側には微高地の端が張り出し、その東側では、一担北側へ大きく抉れたのち、また張り出している。

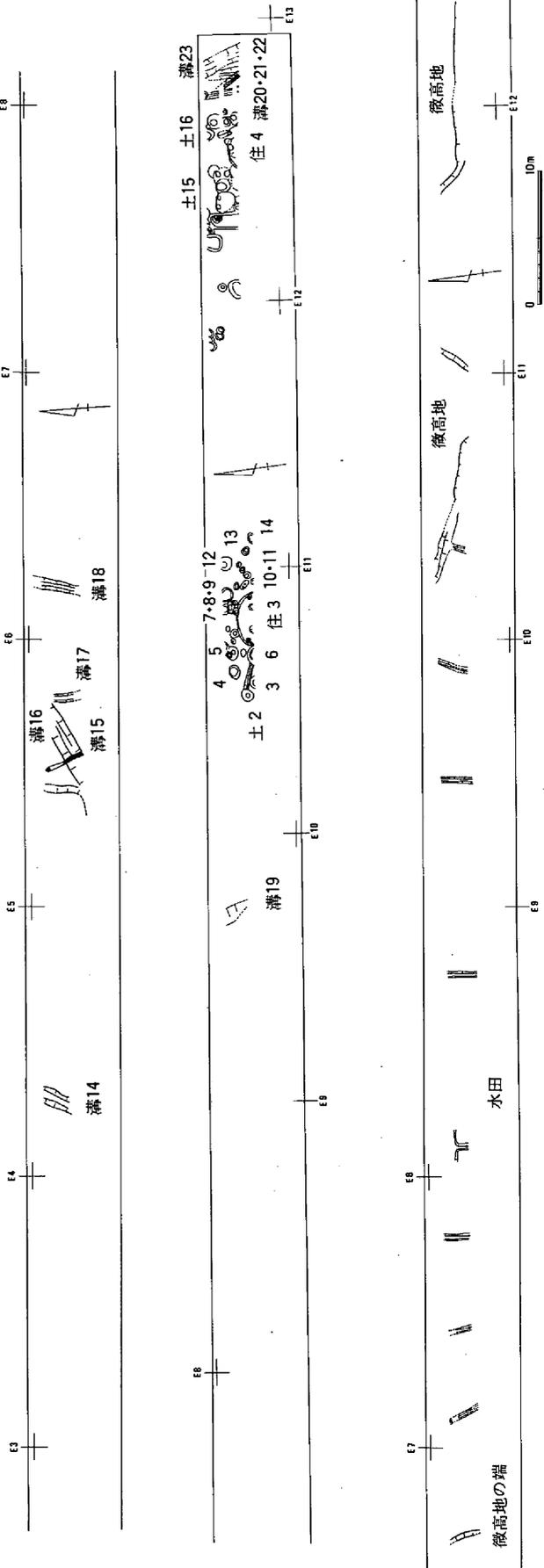
古墳時代の遺構は少なく、E6ライン付近で土塙列が検出された。土塙列は不定形な土塙が集中するが、長楕円形土塙が列をなす部分も見られる。調査範囲が狭いため明確でないが、柵列になるものと思われる。その他E13区で溝が検出されている。 (平井)



第43図 和佐田調査区の位置(S=1/4000)



第44図 和佐田調査区の遺構全体図 (S=1/500)

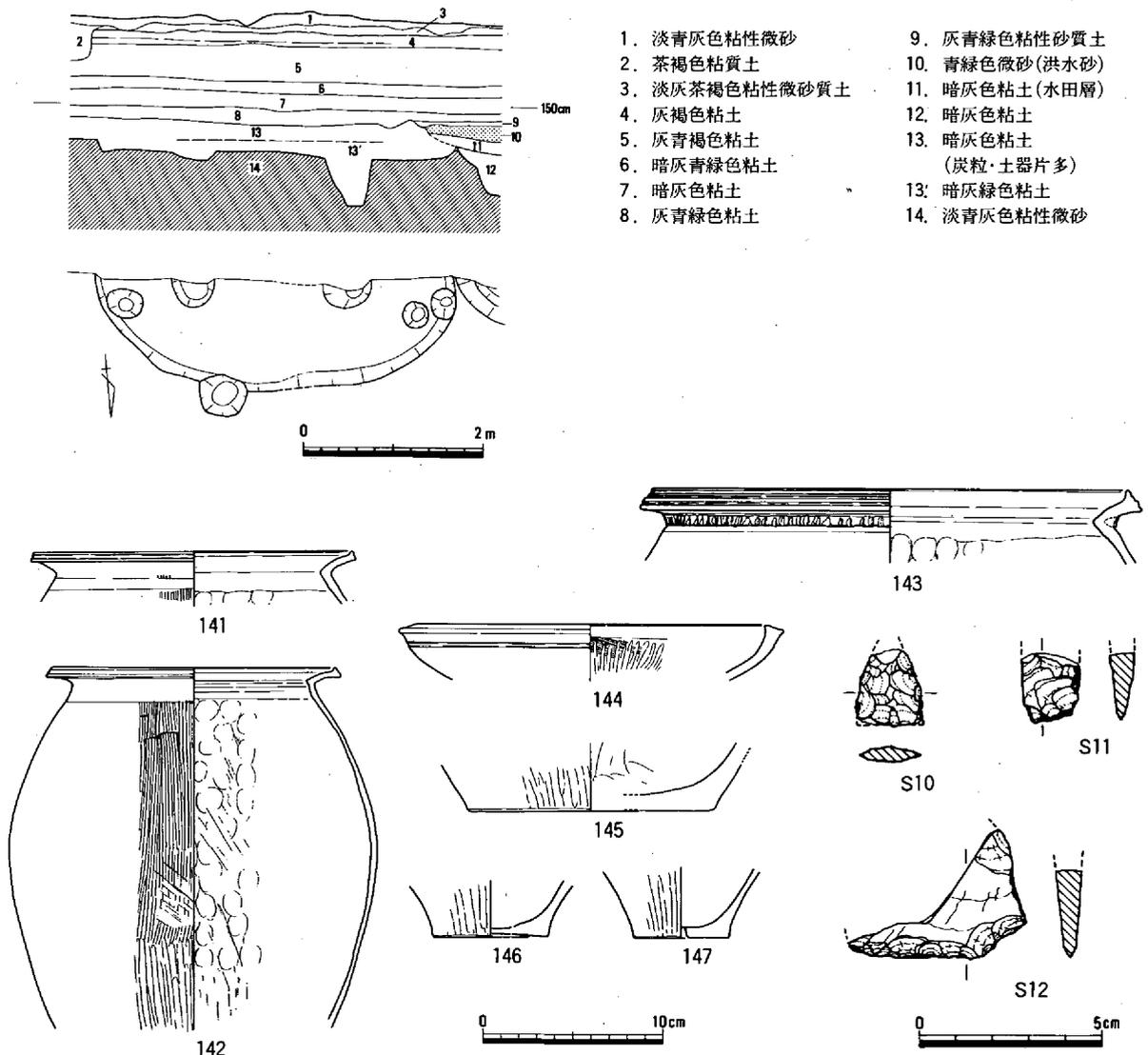


第45図 和佐田調査区弥生時代の遺構 (S=1/500)

2. 弥生時代の遺構と遺物

(1) 水田 (図版6)

E7区からE11区にかけて検出された。百間川遺跡群全体に堆積している洪水砂層に埋没している、弥生時代後期のものと判断される。E7区の東半で北北西から南南東方向の微高地の下がり方が確認され、E11区でも西北西から東南東の方向で微高地の下がりがあり、この間が水田となっていた。E7区の下がりの段差は40cm程度、E11区では30cm前後の差となっていた。水田内で検出された遺構の多くは小畦であったが、E9区の西端で「島状高まり」の一部らしいものが認められた。この高まりは水田面との比高が10cm以内と低かったが、調査区の北壁の断面では4.6mの幅があった。小畦の方向は、両側の微高地の下がり方が平行していなかったことから、西端では微高地の肩と平行していたものが、東端では微高地の肩に直行して取りつくというように、徐々に東へ振っていた。小畦の規模は、下底幅が35~40cm、高さは3cm前後と低かった。田面の海拔高度は105~115cmを測る。(岡本)



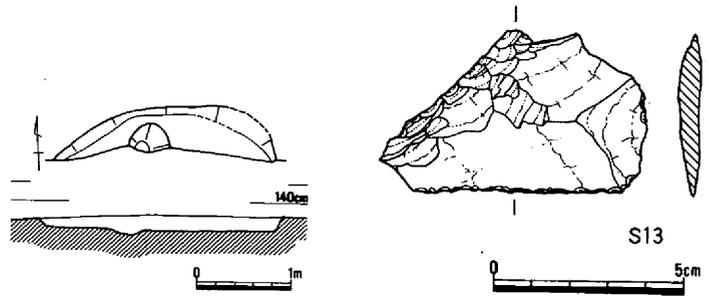
- | | |
|----------------|------------------------|
| 1. 淡青灰色粘性微砂 | 9. 灰青緑色粘性砂質土 |
| 2. 茶褐色粘質土 | 10. 青緑色微砂(洪水砂) |
| 3. 淡灰茶褐色粘性微砂質土 | 11. 暗灰色粘土(水田層) |
| 4. 灰褐色粘土 | 12. 暗灰色粘土 |
| 5. 灰青褐色粘土 | 13. 暗灰色粘土
(炭粒・土器片多) |
| 6. 暗灰青緑色粘土 | 13'. 暗灰緑色粘土 |
| 7. 暗灰色粘土 | 14. 淡青灰色粘性微砂 |
| 8. 灰青緑色粘土 | |

第46図 竪穴住居3・出土遺物

(2) 竪穴住居

竪穴住居 3 (第46図、図版6)

E11区の東端部、調査区の南端で一部を検出した。平面形は円形ないしは隅丸方形と推定され、残存部分の長径で402cmを測る。壁はやや丸味をもって立ち上がり、壁体溝は認められなかった。住居内では、調査区の南壁か



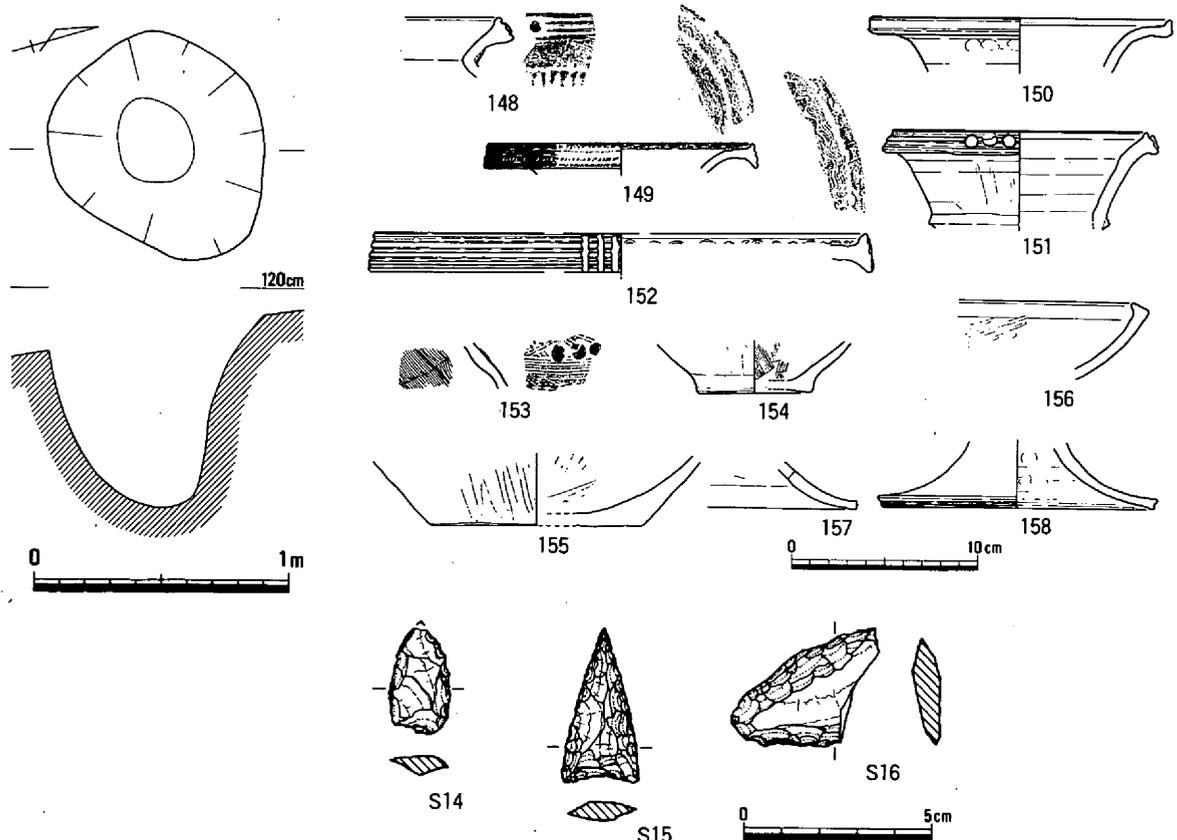
第47図 竪穴住居 4・出土遺物

ら2個の土壇が半分顔をのぞかせていたが、深さから考えて、西のものが住居の柱穴とみられる。主柱穴は4本と思われる。柱穴の規模は長径が55cm、深さは54cmを測る。柱痕は検出されなかった。住居の埋土は暗灰緑色粘質土であるが、上層の百・中・Ⅱの土器を含む包含層との分割は困難であった。

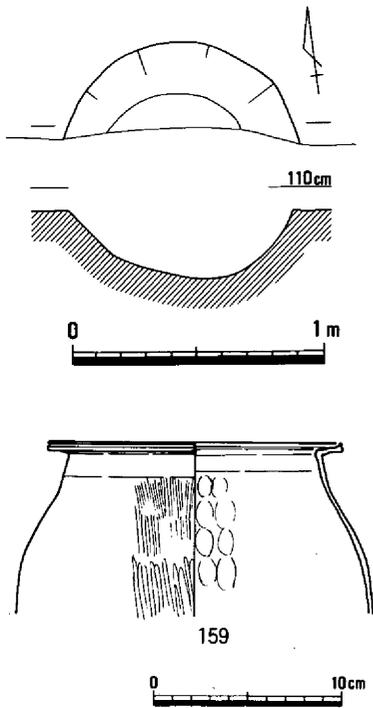
土器と石器がいくらか出土している。土器では甕と高杯がみられた。甕には大小があり、小型141・142は薄い口縁部の先端をわずかにつまみ上げるだけだが、大型143は口縁端部を上下に拡張して3条の凹線を施し、頸部には刻み目の付いた突帯を貼り付けている。百・中・Ⅱである。(岡本)

竪穴住居 4 (第47図)

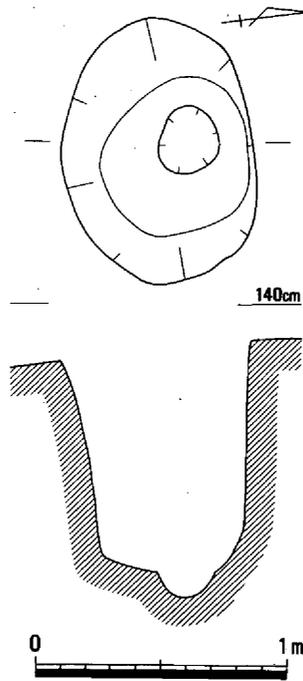
E13区で検出された住居であるが、調査区に係る部分がわずかであるため、確実に住居であるかどうかは不明である。おそらく径3mあまりの円形を呈すと思われ、検出面からの深さは20cmほどで、床面はほぼ平坦である。埋土中からは削器が出土した。住居の時期は中期と推定される。(平井)



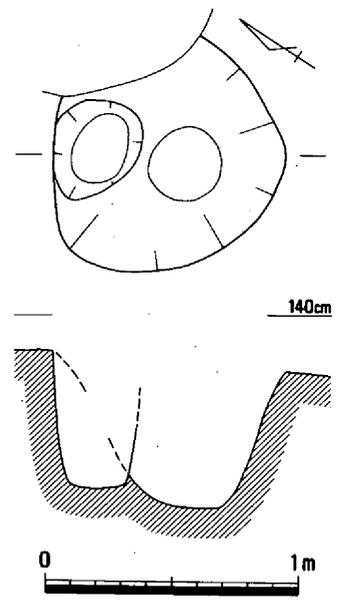
第48図 土壇 2・出土遺物



第49図 土壌3・出土遺物



第50図 土壌4



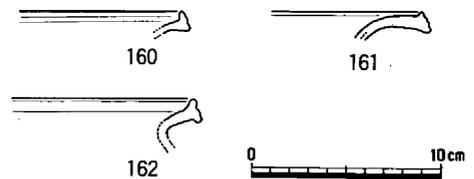
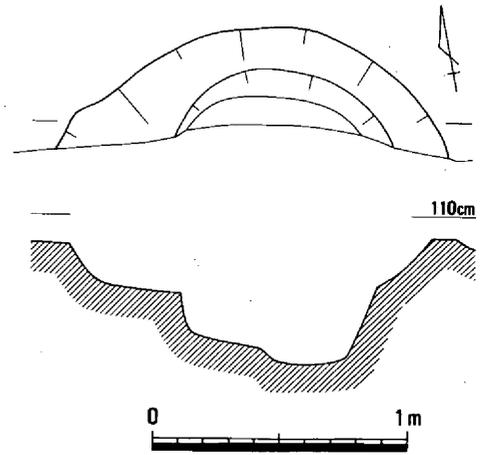
第51図 土壌5

(3) 土 壙

土壙2 (第48図)

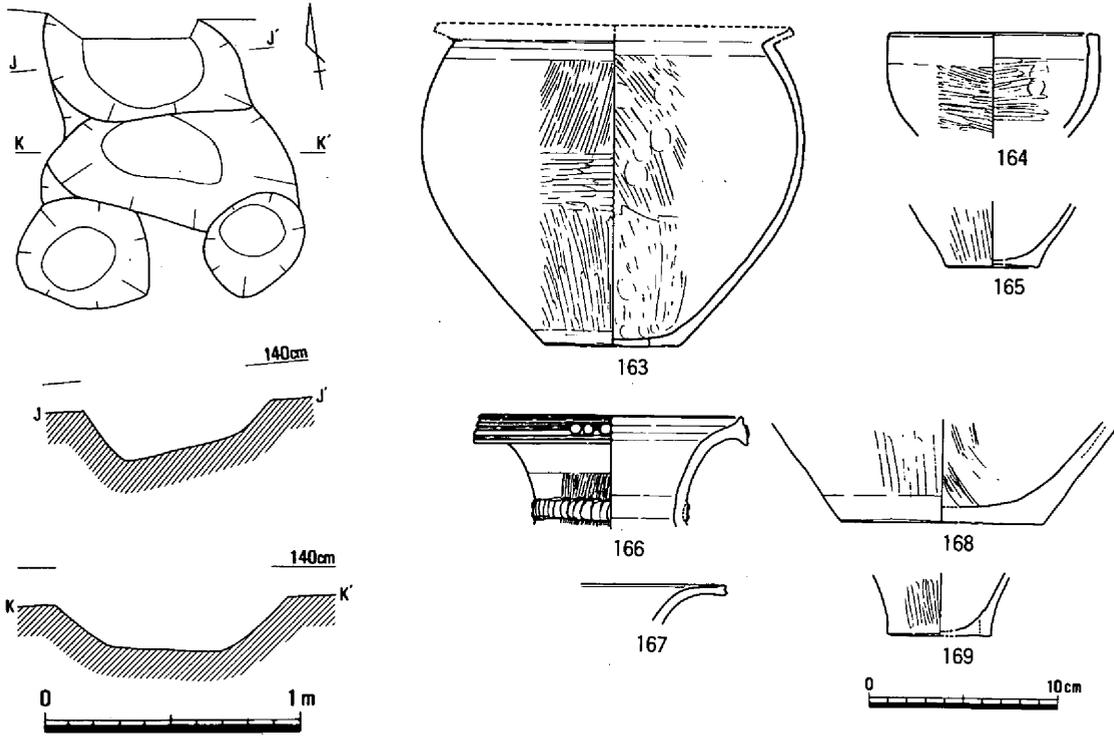
E11区の中央付近に位置する。平面形は不整な楕円形で、長径94cm、短径79cm、深さは76cmを測る。壙壁は下がるにつれて角度を増し、底面は凹面となっていた。形態から判断すると柱穴の可能性はある。埋土は暗灰色粘質土であった。

出土遺物には土器と石器があった。土器では甕・壺・高杯がみられた。148の甕口縁部は、端部を上下に拡張して端面に3条の凹線を施し、その上から円形浮文を間隔をあけて貼り付けている。149～153は壺である。口縁部の形態は一樣ではなく、大きく外反させるものと直口状のものがあり、前者ではさらに、口縁端部を上下に拡張するもの(149・152)と上方につまみ上げるもの(150)に分かれる。端部を拡張するものは端面に凹線を

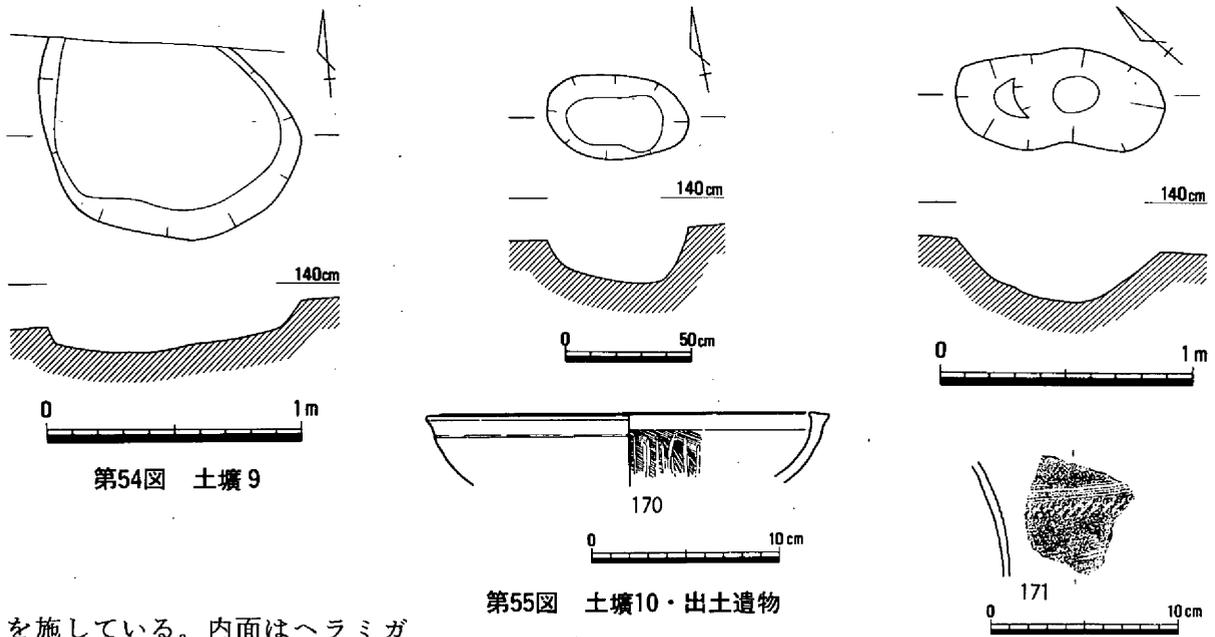


第52図 土壙6・出土遺物

施し、さらに3本1単位の棒状浮文を貼り付けたり、刻み目を巡らせている。ともに内面端部には櫛描きの波状文を飾っている。直口状のもの(151)は、頸部に貼り付け突帯を巡らせ、口縁部をわずかに外反させている。口縁端部は上下に拡張し、端面には2条の凹線を施し、3個1単位の円形浮文を貼り付けている。153は壺の肩部で、櫛描きの斜格子文・直線文・列点文の順に上から施し、3個1単位かと思われる円形の浮文を貼り付けている。156の高杯の杯部は、端部を内側に拡張させ、ヨコナデ



第53図 土壙7・8・出土遺物



第54図 土壙9

第55図 土壙10・出土遺物

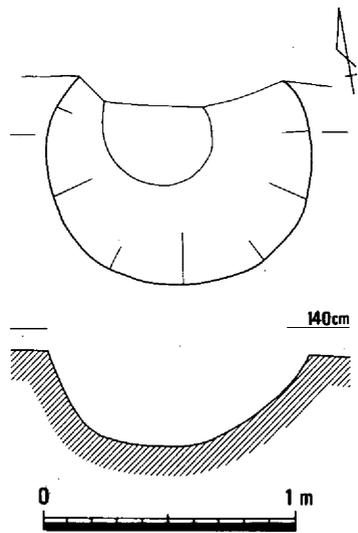
第56図 土壙11・出土遺物

を施している。内面はヘラミガキ、外面の上半は横方向の、下半は縦方向のヘラミガキを施している。157・158は高杯の脚部で、内面はヘラケズリの後に端部にヨコナデを施している。石器には鏝とスクレイパーがある。土器の年代は百・中・Ⅱと考えられる。

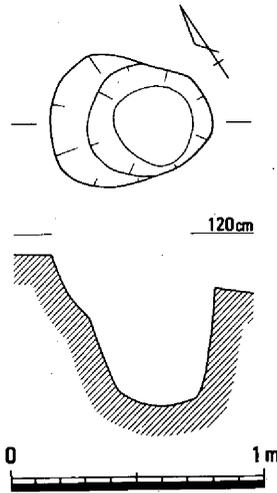
(岡本)

土壙3 (第49図)

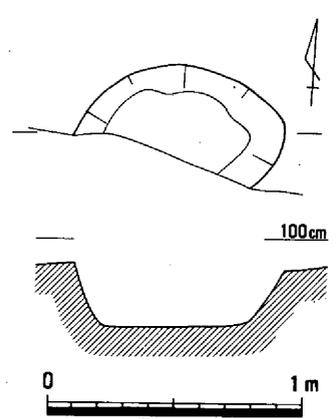
土壙2の30cm東にあり、一部を検出したのみである。円形の土壙であろうか。検出部の長径は94cm、深さは27cmであった。埋土は暗灰色粘質土で、炭粒を多く含んでいた。



第57図 土壇12



第58図 土壇13・出土遺物



第59図 土壇14・出土遺物

出土した土器は甕で、口縁端部をわずかに拡張させ、口頸部はヨコナデ、胴部外面は上半がハケで下半がヘラミガキ、胴部内面はナデているが指頭圧痕を残している。年代は百・中・Ⅱである。

(岡本)

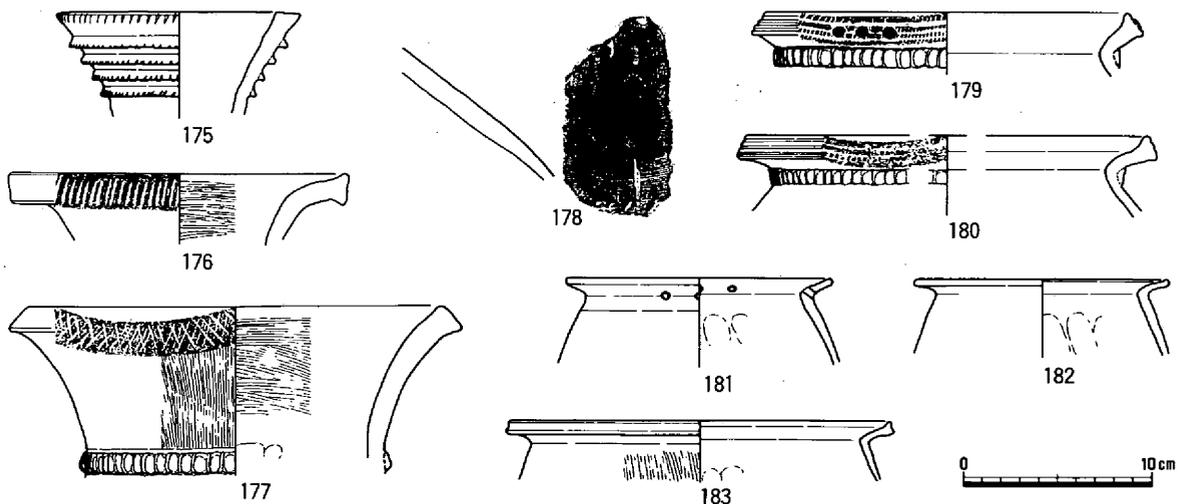
土壇 4 (第50図)

E11区の東半、土壇 2 の東 1 m で検出された。平面形は不整な楕円で、長径が 105cm、短径は 78cm、深さが 94cm を測る。壇壁の傾斜は中位で変化し、下半は垂直に近くなる。壇底は凹面となるが、中程に長径 27cm、深さ 10cm の小穴をもっていた。このことからすれば、この土壇は柱穴である可能性が高い。出土遺物はなかった。

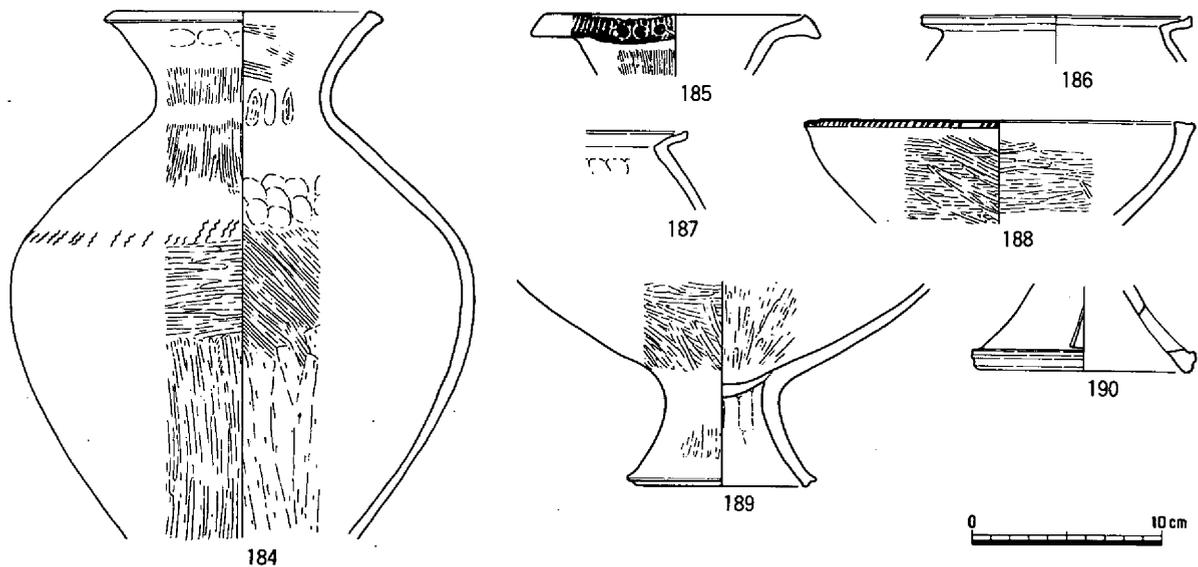
(岡本)

土壇 5 (第51図、図版 6)

土壇 2 の 40cm 東に位置していた。2 基の土壇が重複していて、北側の土壇が新しい。北土壇は長径



第60図 土壇15出土遺物



第61図 土壙16出土遺物

が43cm、深さが55cmあり、壙壁の傾斜は急で、柱穴ではないかと思われる。南土壙は長径が100cm、深さは62cmを測る。壙壁の傾斜は下るにしたがって急になっていた。これも柱穴の可能性はある。遺物はなかった。(岡本)

土壙6 (第52図、図版6)

E11区の東半の南端で一部を検出した。竪穴住居3と接していたが、先後関係は不明である。残存部分で長径154cm、深さ50cmを測る。壙壁は階段状を呈し、中位での長径は75cmと縮小する。底面は平坦に近いが、東半が落ち込む。埋土は暗灰色粘質土で、炭粒を多く含んでいた。百・中・Ⅱの土器片が出土した。161は壺、162は甕の口縁端部で拡張がみられ、端面に凹線が巡る。(岡本)

土壙7・8 (第53図、図版6)

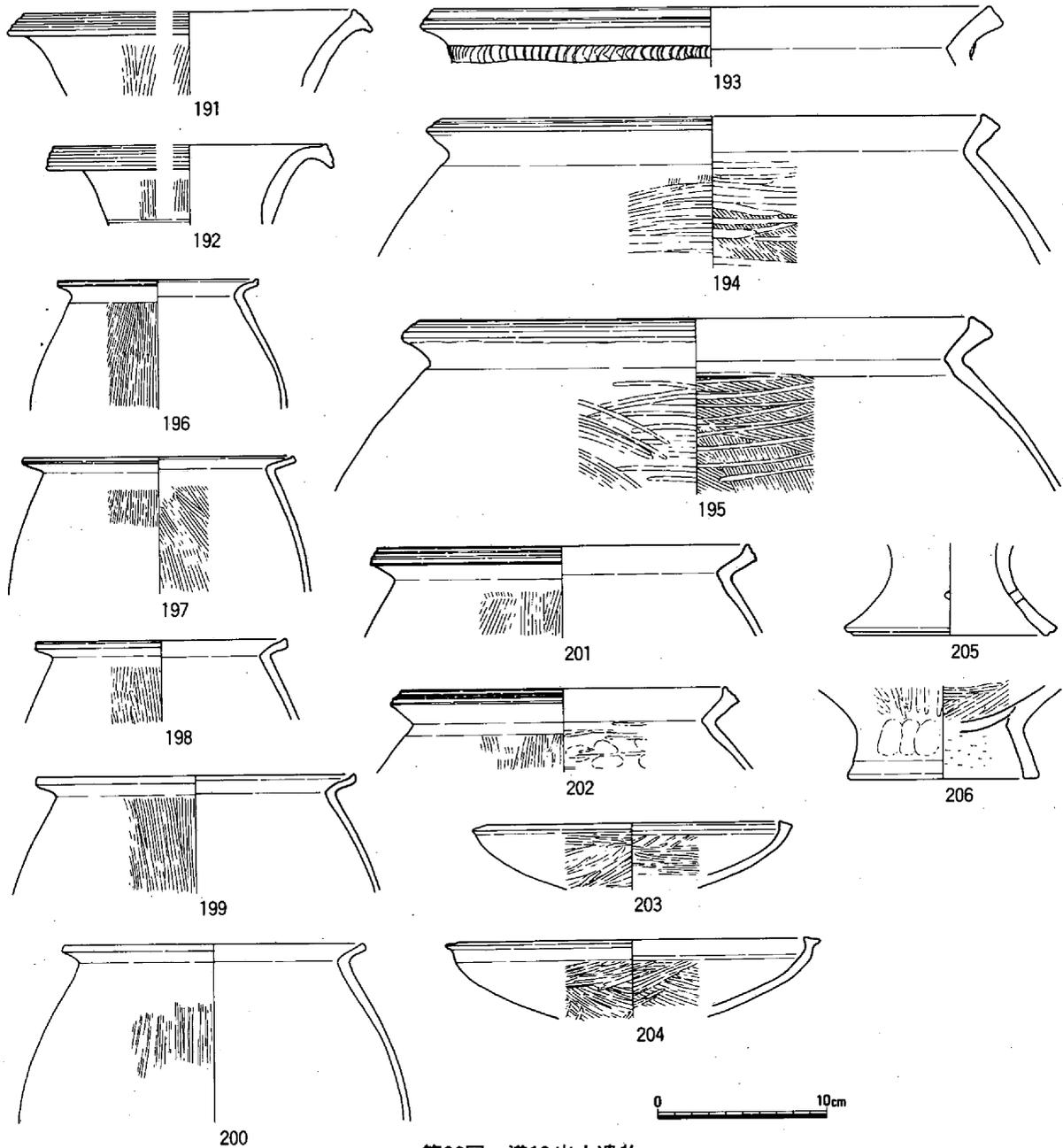
E11区の東半、竪穴住居3の北に近接していた。土壙7は一部の検出である。2基の土壙は重複関係にあったが、先後は不明である。土壙7は長径89cm、深さ21cm、土壙8は長径100cm、深さ31cmを測る。図示した土器のうち、163～165は土壙7出土、166～169は土壙8出土である。163は甕で、胴部の外面調整は上からハケ、横方向のヘラミガキ、縦方向のヘラミガキ、胴部内面は下半がヘラケズリで、上半は粗いハケである。164は高杯か、口縁部はヨコナデ、体部は横方向のヘラミガキである。166の壺は、口縁端部を上下に拡張し、端面に3条の凹線を巡らせ、3個1単位の円形浮文を貼り付けている。頸部の外面はハケで調整し、その上に連続指頭圧痕のある突帯を巡らせている。頸部内面から口縁部外面にかけてはヨコナデ調整である。167も壺の口縁端部で、わずかに拡張した端面に1条の凹線を施している。土器の年代はいずれも百・中・Ⅱの範疇に含まれる。(岡本)

土壙9 (第54図、図版6)

E11区の東端にあり、土壙8のすぐ東で検出された。一部は欠損していた。平面形は卵形に近い。長径が110cm、深さは21cmを測る。底面は少し凹凸した面となっていた。遺物はなかった。(岡本)

土壙10 (第55図、図版6)

E11区の東端、土壙9の25cm南東に位置していた。平面形は楕円で、長径が56cm、短径は35cm、深さが19cmを測る。底面は東側に傾斜していた。百・中・Ⅱの高杯片が出土している。(岡本)



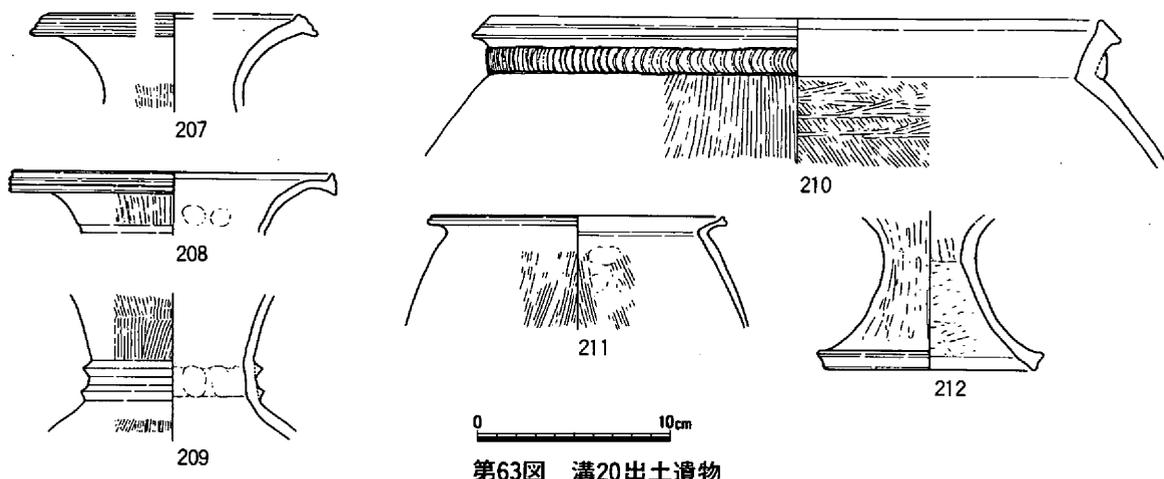
第62図 溝19出土遺物

土壌11 (第56図、図版6)

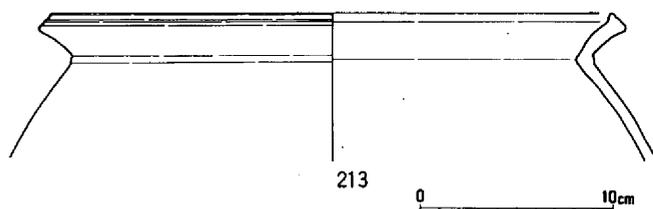
土壌10のすぐ南で検出された。不整な長楕円形を呈し、底部には浅い段が認められた。長径が85cm、短径は38cm、深さが16cmを測る。出土土器は少ないが、171は壺の肩部の破片である。目の整っていない櫛状工具によって、上から波状文、直線文、列点文が施されている。列点文より下は横方向のヘラミガキで調整している。この土器の時期は百・中・Ⅱと考えられる。(岡本)

土壌12 (第57図、図版6)

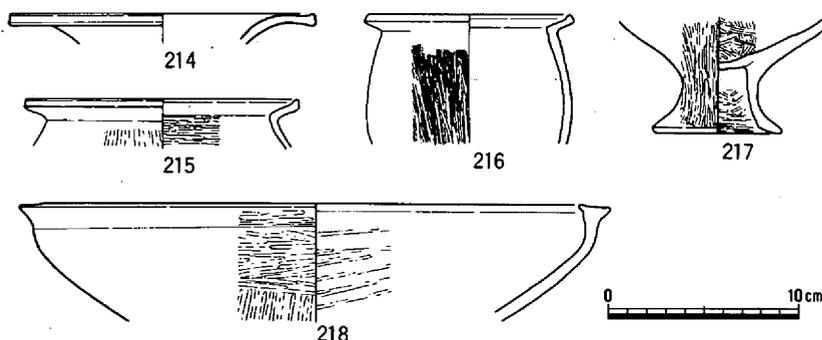
E11区とE12区の境界で検出された。一部は調査区外にある。平面形は円形に近く、長径が106cm、深さは38cmであった。壙壁は内湾し、底面も凹面のため、断面形は楕形をなす。底面は土壌の中心から北西にずれていた。埋土は暗灰色粘質土で炭粒を点々と含み、底部付近には厚く炭の堆積が認められた。遺物の出土はみられなかった。(岡本)



第63図 溝20出土遺物



第64図 溝21出土遺物



第65図 溝22出土遺物

土壌13 (第58図)

E12区の西端にあった。不整な楕円形だが、下半は円形に近くなる。長径が65cm、深さ61cmを測る。西側の墳壁には段があり、それから下は急傾斜となっていた。形態から柱穴の可能性が高い。百・中・Ⅱの甕の底部が出土した。(岡本)

土壌14 (第59図)

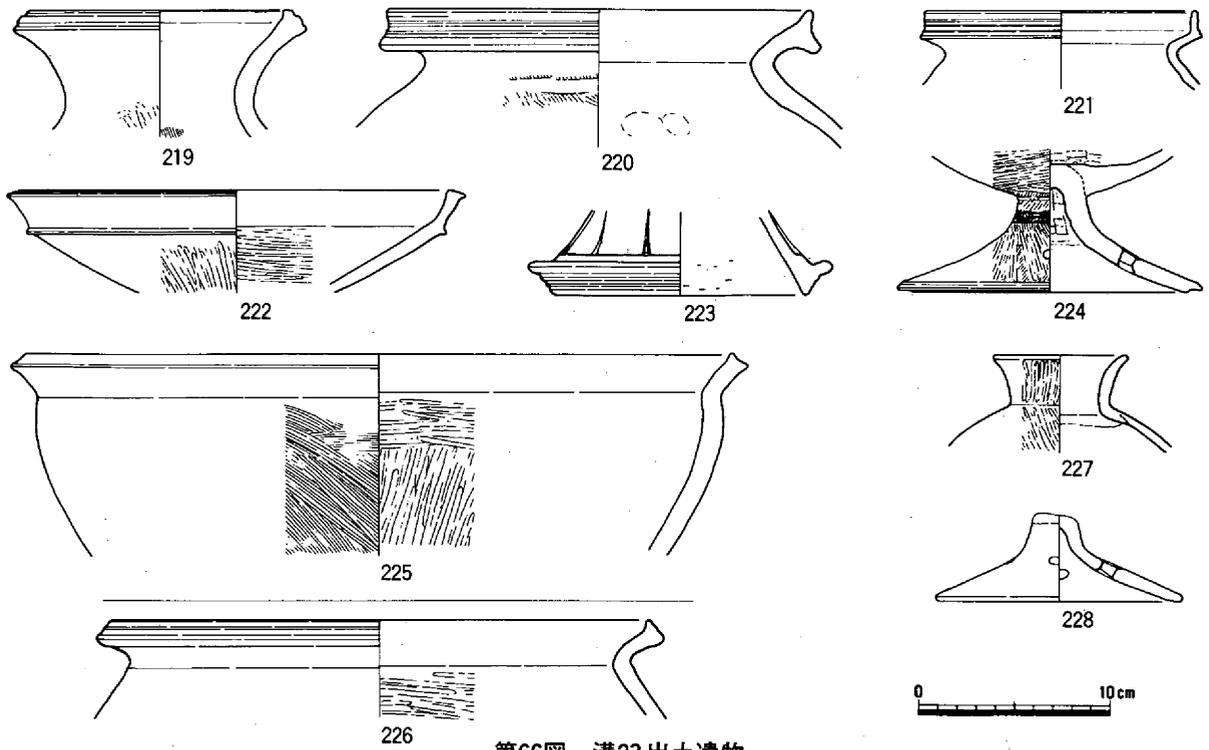
E12区の西端、土壌13の南東にあった。半分を検出した。残存長径が82cm、深さは27cmを測る。墳壁の傾斜は急で、底面は平坦に近い。埋土は暗灰色粘質土で、百・中・Ⅱの土器を少し含んでいた。(岡本)

土壌15 (第60図)

E13区で検出された土壌で、土器が多く出土した。175から178は壺である。175は口縁部に断面三角の刻目を施す貼付突帯を4条めぐらし、口縁端部には刻目を施す。177は口縁端面に斜格子を描き、頸部には貼付突帯をめぐらし、その上を指で押さえる。178は胴部で、櫛描きが施されている。179から183は甕である。179と180は口縁部と胴部の境に貼付の突帯をめぐらせ、その上を指で押さえる。これらの土器は百・中・Ⅲに属すると考えられる。(平井)

土壌16 (第61図)

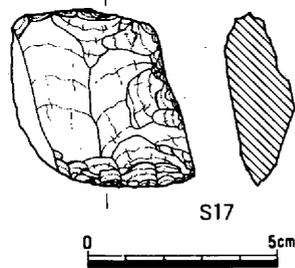
E13区で検出された土壌である。出土した土器は壺、甕、台付鉢、高杯がある。184の壺は胴部に櫛状工具による刺突がめぐり、胴部内面下半はヘラケズリで仕上げられる。185の壺は口縁端面に3個1組の円形浮文がみられる。188の高杯は口縁端部に刻目がめぐり、内外面はヘラミガキで丁寧に仕上げている。以上の土器は百・中・Ⅲに属すると考えられる。(平井)



第66図 溝23出土遺物

(4) 溝

溝19 (第62図)



第67図 溝23下層出土遺物

E10区で検出された浅い溝であるが、調査範囲が狭いため詳細は不明である。出土遺物はすべて土器で、壺、甕、高杯、台付鉢が認められる。191・192は壺である。口縁部は大きくラップ状に開き、拡張された端部には凹線がめぐる。193から195は大形の甕で、193の口縁部と胴部の境には貼付の突帯がめぐる。いずれも口縁端部には凹線が施され、胴部内外面はヘラミガキで丁寧に仕上げられる。196から202は甕であるが、く字状に外反する口縁部の端面に凹線文がめぐるもの(201・202)と、口縁端部をわずかにつまみあげただけのもの(196～200)とがある。調整はいずれも胴部外面はハケメが多用され、内面は指で押えた後で丁寧なナデないしミガキで仕上げるものが多い。これらの土器は百・中・Ⅲに属すると考えられる。(平井)

溝20 (第63図)

E13区で検出された溝で、ほぼ南北方向に流走する。溝の幅は45cm、深さ10cm前後を測る。

遺物はすべて土器で、壺、甕、高杯が見られる。207～209は壺である。207・208はラップ状に開いた口縁部の端面を上下に拡張し、その面に凹線文をめぐらす。208は頸部にも凹線が見られる。209は頸部下端に、2条の断面三角貼付突帯をめぐらしている。210は大形の甕で、口縁部と胴部の境界に貼付突帯をめぐらし、その上を指で押えている。調整は胴部外面をハケメ、内面はハケメの上を粗いヘラミガキで仕上げている。211は甕で、口縁端部をわずかに拡張し、そこに1条の凹線をめぐらす。土器の時期は百・中・Ⅲと思われる。(平井)

溝21 (第64図)

E13区で検出された溝で、ほぼ南北方向に流走するものと思われる。検出面での規模は幅50cm、深さ10cm前後を測る。

遺物は土器がわずかに出土した。213は大形の甕で、口縁端部は上方へわずかに拡張し、そこに凹線をめぐらす。土器の時期は百・中・Ⅲと思われる。(平井)

溝22 (第65図)

E13区で検出された溝で、ほぼ南北方向に流走する。検出面での規模は幅80cm、深さ30cm前後を測る。

遺物はすべて土器で、壺、甕、台付鉢、高杯が見られる。214は壺で、ラップ状に大きく開く口縁部をもつ。215・216は甕で、くの字状に外反する口縁部をもち、口縁端部は上方へわずかにつまみ上げられる。218は高杯の杯部で、口縁部は直立ぎみに立上り、端部は内外に拡張される。調整は内外面ともに丁寧なヘラミガキで仕上げられる。これらの土器の時期は百・中・Ⅲと考えられる。

(平井)

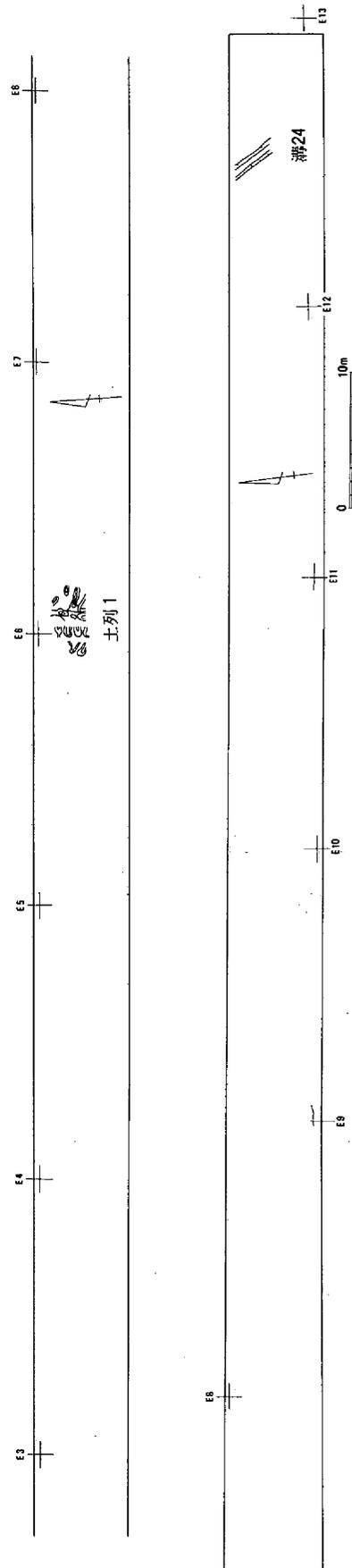
溝23 (第66・67図)

E13区で検出された溝で、ほぼ南北方向に流走する。検出面での規模は幅1.1m前後、深さ40cm前後を測る。

遺物は溝内に堆積した土器から上下に分けられるが、多少新旧のものが混在している。219から225は上層から出土した土器であり、多くは後期に属するものである。このうち最も新しい時期を示すものは221で、上方に長く立上った外端面には篋描の沈線がめぐる。時期は百・後・Ⅳと考えられることから、溝の最終の堆積に伴うものとも考えられる。

226から228と楔形石器(S17)は下層から出土した。228のような少し新しいものも見られるが、多くは後期の前半に属するものである。溝が機能していた時期は、これらの土器が土とともに堆積する以前、中期末から後期の初め頃ではないかと推定される。(平井)

(平井)



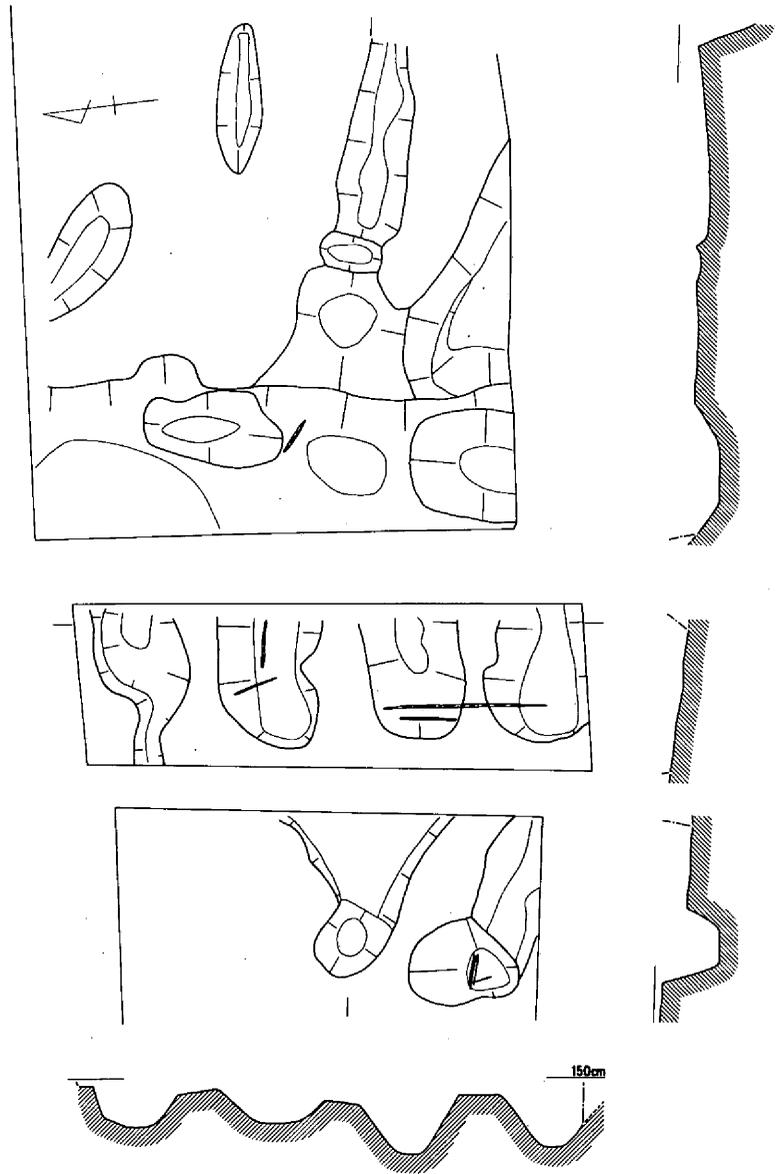
第68図 和佐田調査区古墳時代の遺構 (S=1/500)

3. 古墳時代の遺構と遺物

(1) 土 壙 列

土壙列1 (第69図)

E 6 ライン付近で検出されたもので、不定形な土壙が集中している。調査範囲が狭いため全体の様子は不明であるが、細長い土壙が列をなしている部分もある。土壙のいくつかは細い木が不規則に入っているが、その木に加工された痕跡は見られない。中央部の列をなす土壙の両側には浅い溝状の土壙が広がっている。これらの土壙の性格については、柵のような施設と推定される。なお、詳細な時期は不明である。 (平井)

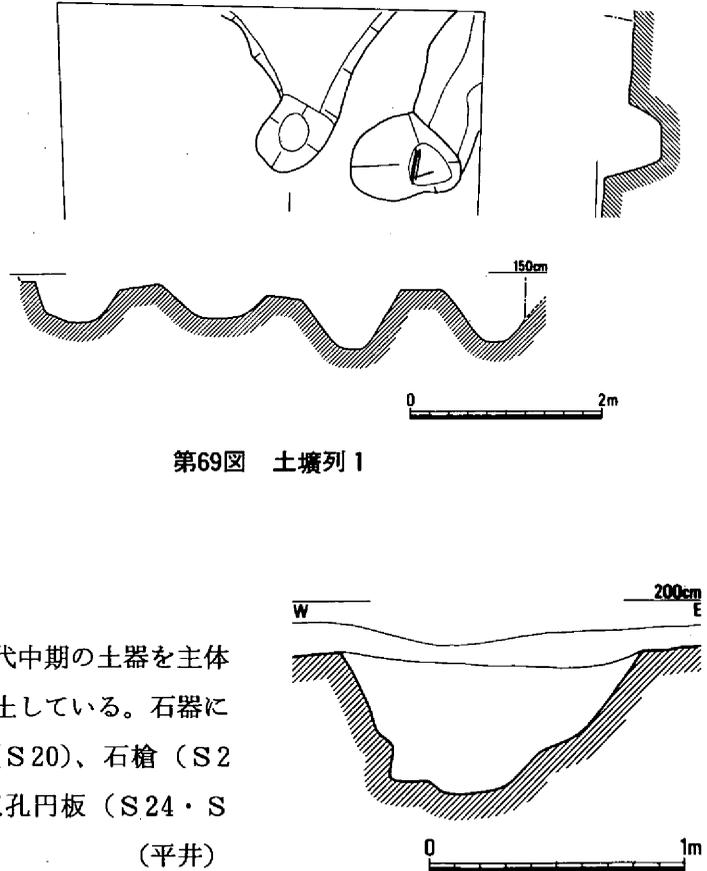


第69図 土壙列1

(2) 溝

溝24 (第70図)

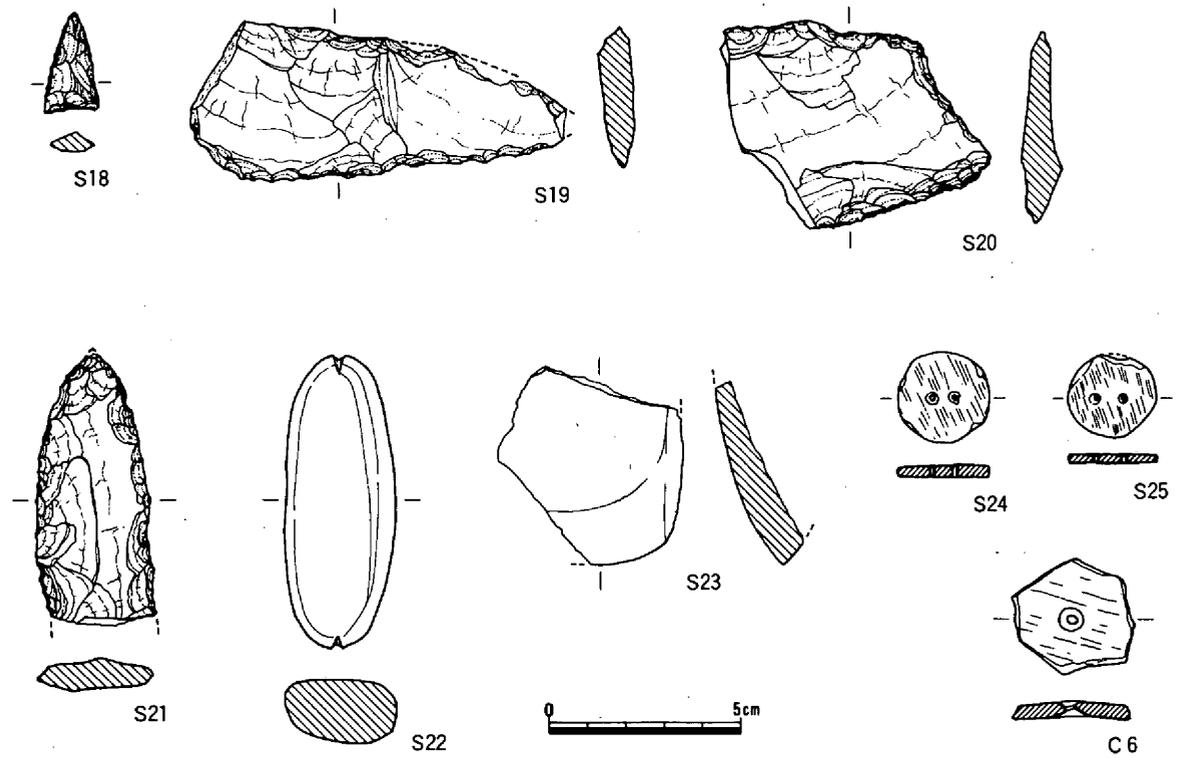
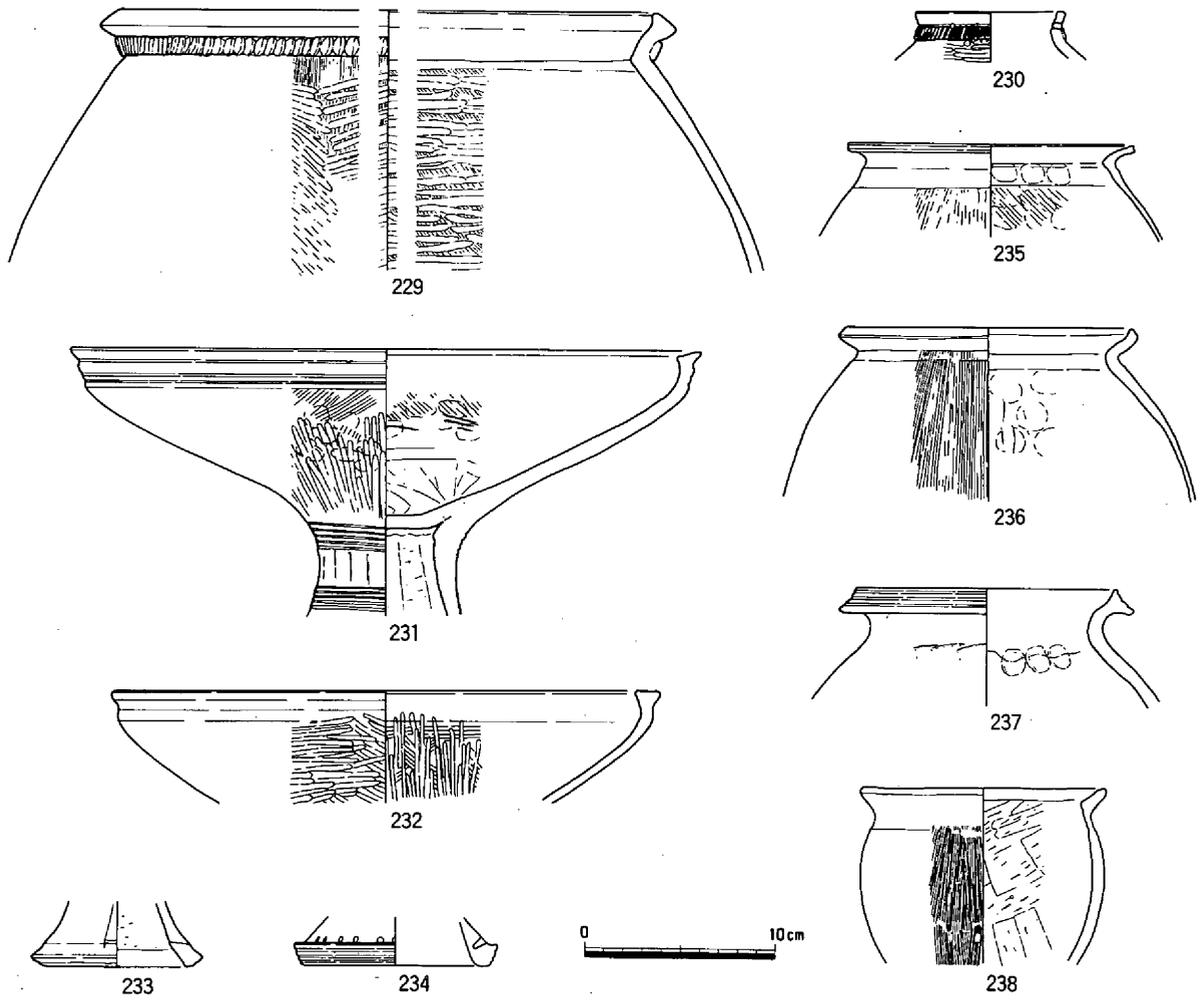
E 13区で検出された溝で、北西から南東方向に流走する。規模は検出面で幅1.2m前後、深さ50cm前後を測る。溝の底はほぼ平坦で、壁は途中に段をもちながらやや緩やかに立上る。遺物は古墳時代初頭頃と考えられる土器を少量含む。 (平井)



第70図 溝24

4. 包含層の遺物

包含層出土の遺物 (第71図) は弥生時代中期の土器を主体に、古墳時代の土師器や須恵器も少量出土している。石器には石鏃 (S18)、石包丁 (S19)、削器 (S20)、石槍 (S21)、石錘 (S22)、磨製石斧 (S23)、双孔円板 (S24・S25) がある。 (平井)

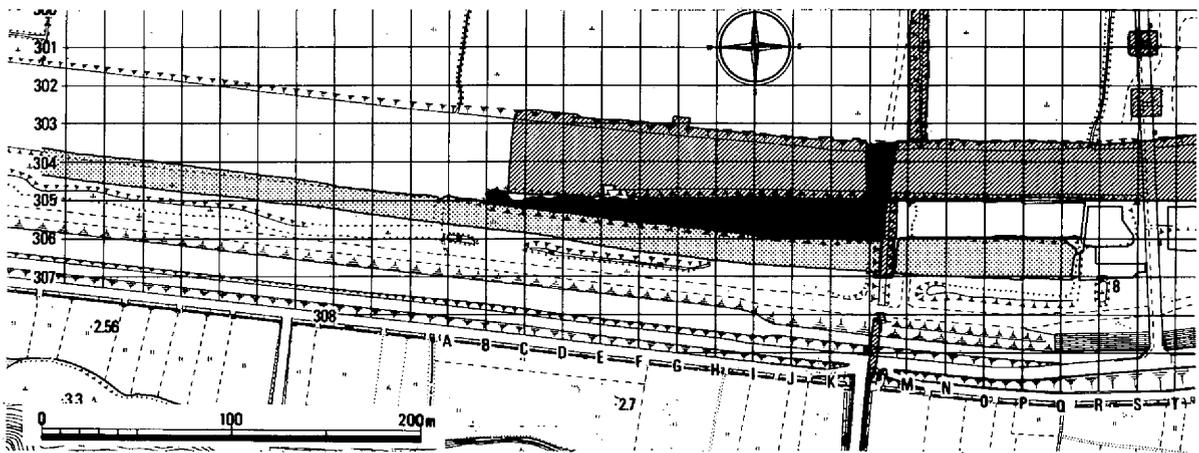


第71図 包含層出土遺物

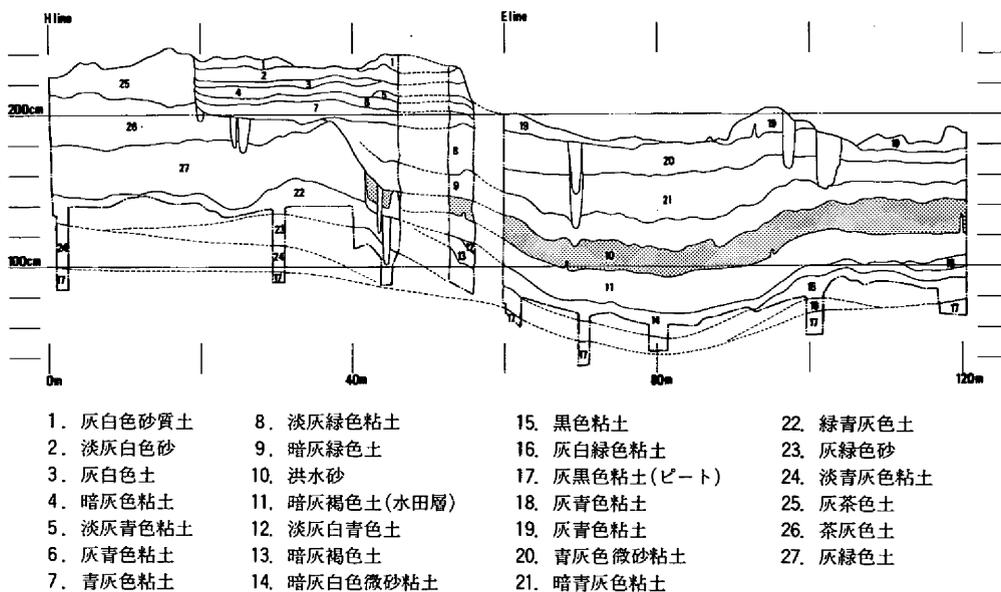
第4節 大上田調査区

1. 調査区の概要

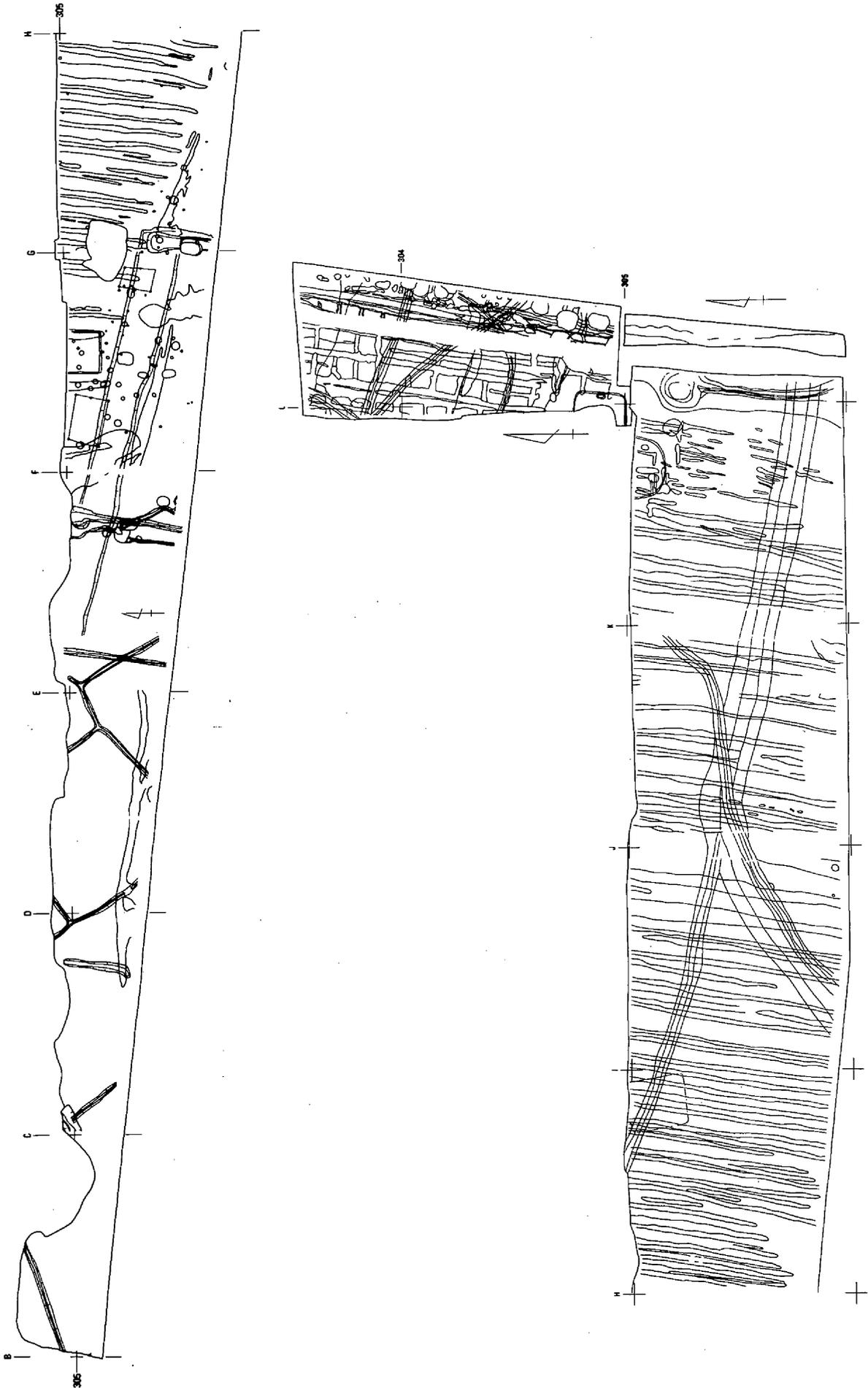
この調査区は、低水路のほぼ中心部の調査済み調査区（「百間川兼基遺跡1」第3章第1節所収）の南側の、延長約200m、幅最大約20mと東側の約12×30mの範囲が対象となった。遺跡の状況は、基本的には前調査区と変わらず、微高地（居住区）と低位部（水田域）が確認されている。第73図の断面で顕著なように、Fライン近くで微高地から水田部へ約50cmの比高差をもって落ち込む。百・後・N期に周辺一帯を襲った洪水による堆積砂は、水田域は言うに及ばず、用水路を含み周辺の微高地上にも及んでいた。全体では、弥生時代中期後半から中世までの遺構が確認されているが、各時期ともに密度は低い。遺物量もI～K区の弥生時代後期の土器溜りを除いて、比較的少ない。（柳瀬）



第72図 大上田調査区の位置 (S=1/4000)



第73図 大上田調査区の土層

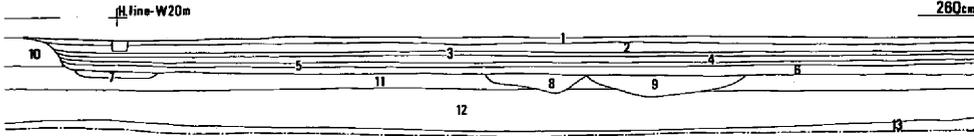


第74図 大上田調査区の遺構全体図(S=1/500)



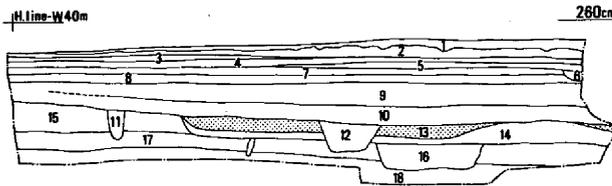
- | | | | |
|----------|-----------|-----------|-----------|
| 1. 淡灰色土 | 4. 灰黄色砂質土 | 7. 暗灰褐色粘土 | 10. 淡灰茶色土 |
| 2. 明黄灰色土 | 5. 灰黄色粘質土 | 8. 淡灰黄色土 | 11. 明灰色土 |
| 3. 褐色砂 | 6. 暗灰色粘土 | 9. 淡灰色粘土 | 12. 茶褐色土 |

Fライン東壁



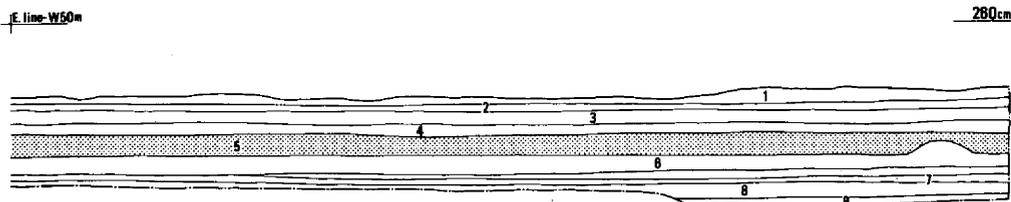
- | | | | | |
|-----------|----------|---------|----------|------------|
| 1. 灰白色砂質土 | 4. 暗灰色粘土 | 7. 灰色粘土 | 10. 灰茶色土 | 13. 灰綠色砂質土 |
| 2. 淡灰白色砂 | 5. 灰青色粘土 | 8. 灰青色土 | 11. 青灰色土 | |
| 3. 灰白色土 | 6. 青灰色粘土 | 9. 灰青色土 | 12. 灰綠色土 | |

305 F · G区南壁



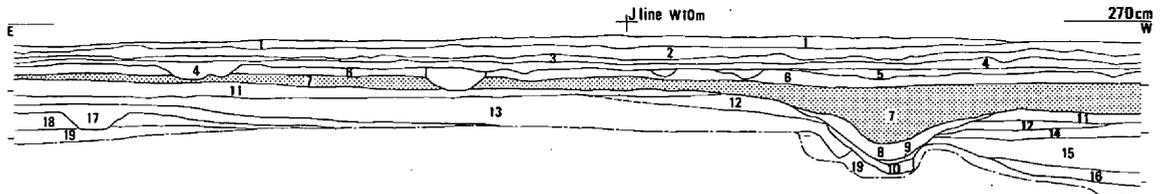
- | | | | |
|-----------|----------------|-----------|--------------|
| 1. 淡灰白黄色砂 | 6. 灰褐色土 | | |
| 2. 灰色土 | 7. 灰青色粘土 | | |
| 3. 灰色粘土 | 8. 青灰色粘土 | | |
| 4. 暗灰色粘土 | 9. 淡灰綠色土 | | |
| 5. 淡灰青色粘土 | 10. 暗灰綠色土 | | |
| 11. 青灰色土 | 13. 洪水砂 | 15. 青灰綠色土 | 17. 青灰黄綠色砂質土 |
| 12. 灰黑色土 | 14. 暗灰褐色土(水田層) | 16. 暗灰褐色土 | 18. 灰青色砂 |

305 E区南壁



- | | | | | |
|-----------|------------|------------|-----------|----------|
| 1. 灰青色粘土 | 3. 青灰色微砂粘土 | 5. 洪水砂 | 7. 暗灰白色粘土 | 9. 灰綠色粘土 |
| 2. 淡灰茶色粘土 | 4. 暗青灰色粘土 | 6. 暗灰褐色粘質土 | 8. 淡灰綠色粘土 | |

305 B区南壁

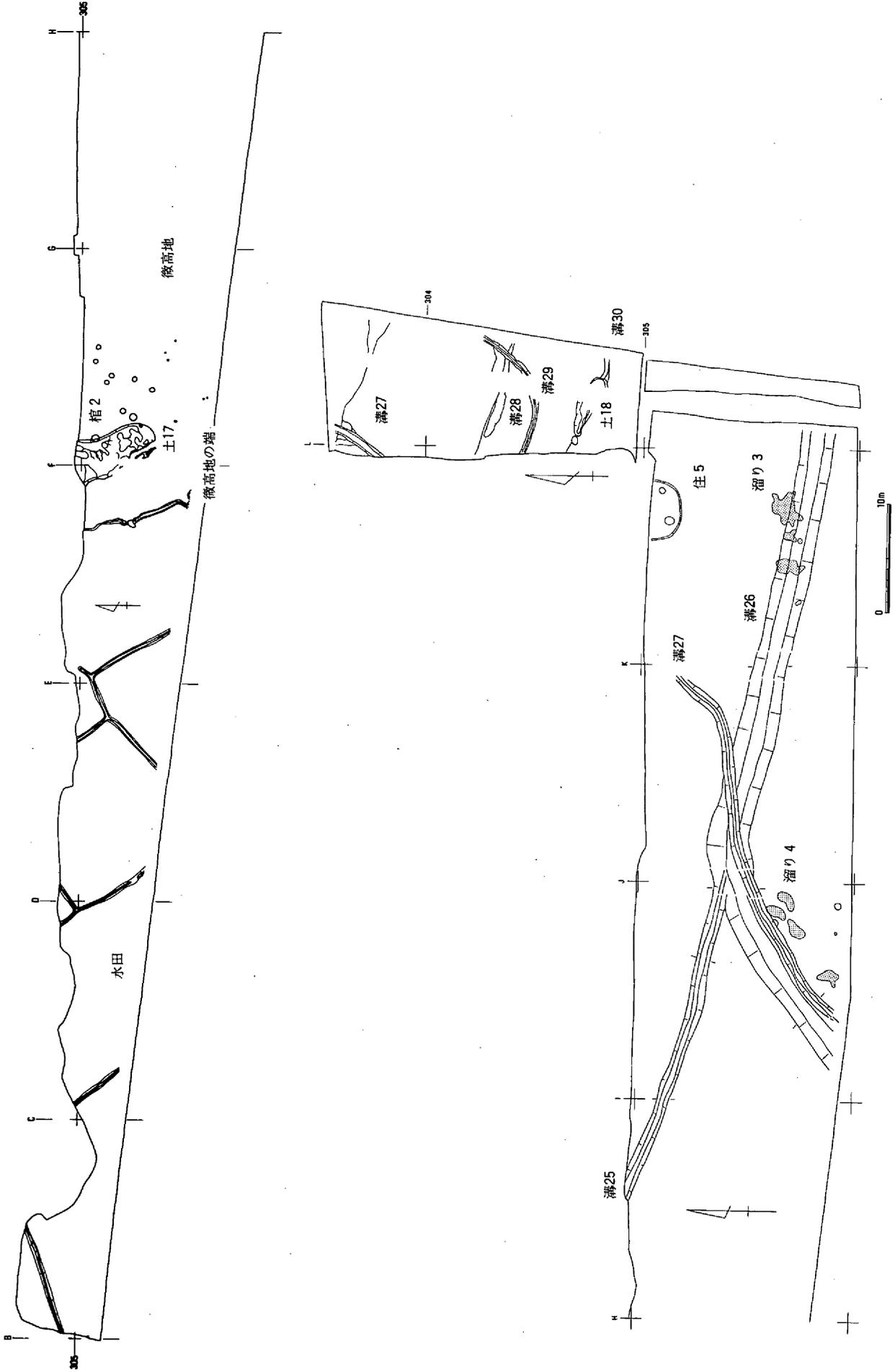


- | | | | |
|-----------------|----------------|-----------------|-------------|
| 1. 明灰色砂質土 | 6. 暗青灰色粘質土(炭含) | 11. 淡青灰色粘質土 | 16. 淡青灰色粘質土 |
| 2. 淡灰色粘質土 | 7. 淡青灰色粘質土(炭含) | 12. 暗青灰色粘質土 | 17. 淡青灰色砂質土 |
| 3. 灰色粘質土 | 8. 淡青灰色粘質土 | 13. 淡青灰色粘質土(砂含) | |
| 4. 淡茶色粘質土 | 9. 淡茶褐色粘質土 | 14. 黒灰色粘質土 | |
| 5. 淡茶褐色砂質土(洪水砂) | 10. 淡青灰色粘質土 | 15. 黒灰色粘質土(炭含) | |

Jライン付近 溝24・25・26



第75図 大上田調査区の土層 (S=1/80)



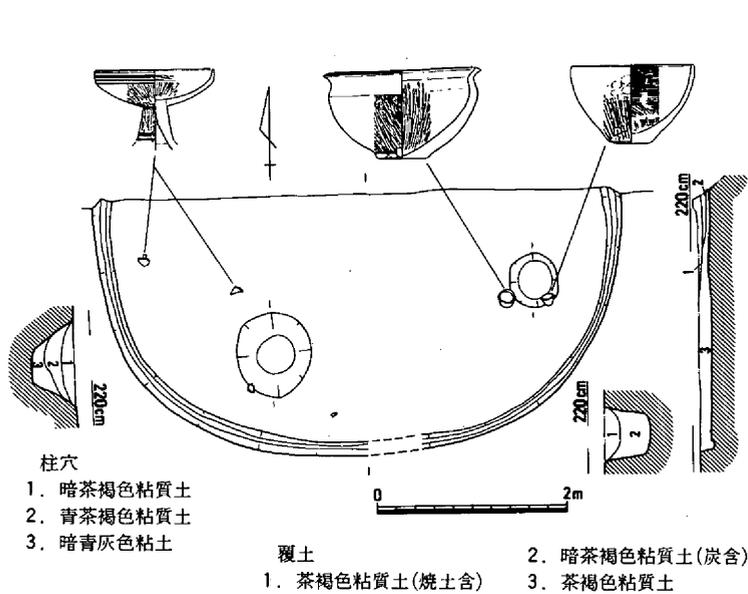
第76図 大上田調査区弥生時代の遺構 (S=1/500)

2. 弥生時代の遺構と遺物

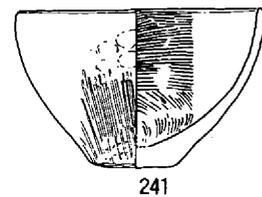
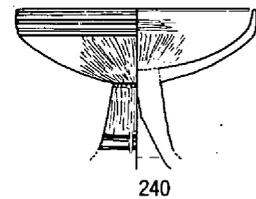
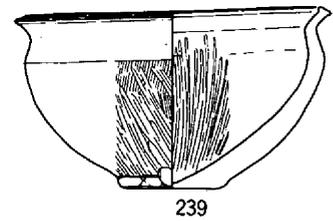
(1) 竪穴住居

竪穴住居 5 (第77図、図版 8)

305K区の北東寄りに検出された、隅丸方形に近い平面形態を呈する竪穴住居である。北側の約半分を削平され、深さも15cmほどしかない。規模は長径で約5.6mの中形を呈し、検出された2本の柱穴の位置関係からすれば5本柱の可能性もある。壁体溝は辛うじて検出されたが、この時期に特有の中



第77図 竪穴住居 5・出土遺物



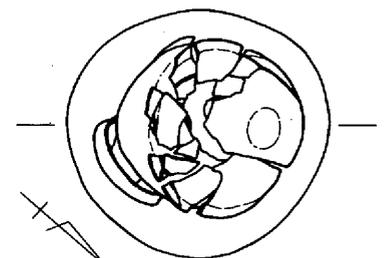
央穴や貼土などは、調査区内では確認されていない。

遺物はいずれも床面に接した状態で、図の位置から3個体が出土している。高杯240のほかは、ほぼ完形であった。ほかには、土器片が数片のみ覆土から出土しているに過ぎない。高杯は杯部端を上部に拡張させ、脚柱部を杯部にはめ込むタイプのもので、胎土に水漉し粘土が使われている。出土土器の特徴から、百・後・Ⅲの古段階の時期を与えることができよう。(柳瀬)

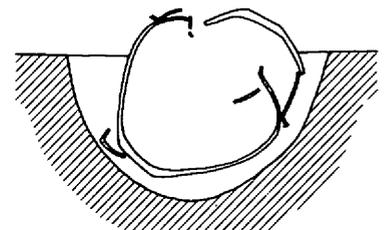
(2) 土器棺

土器棺 2 (第78・79図、図版 9)

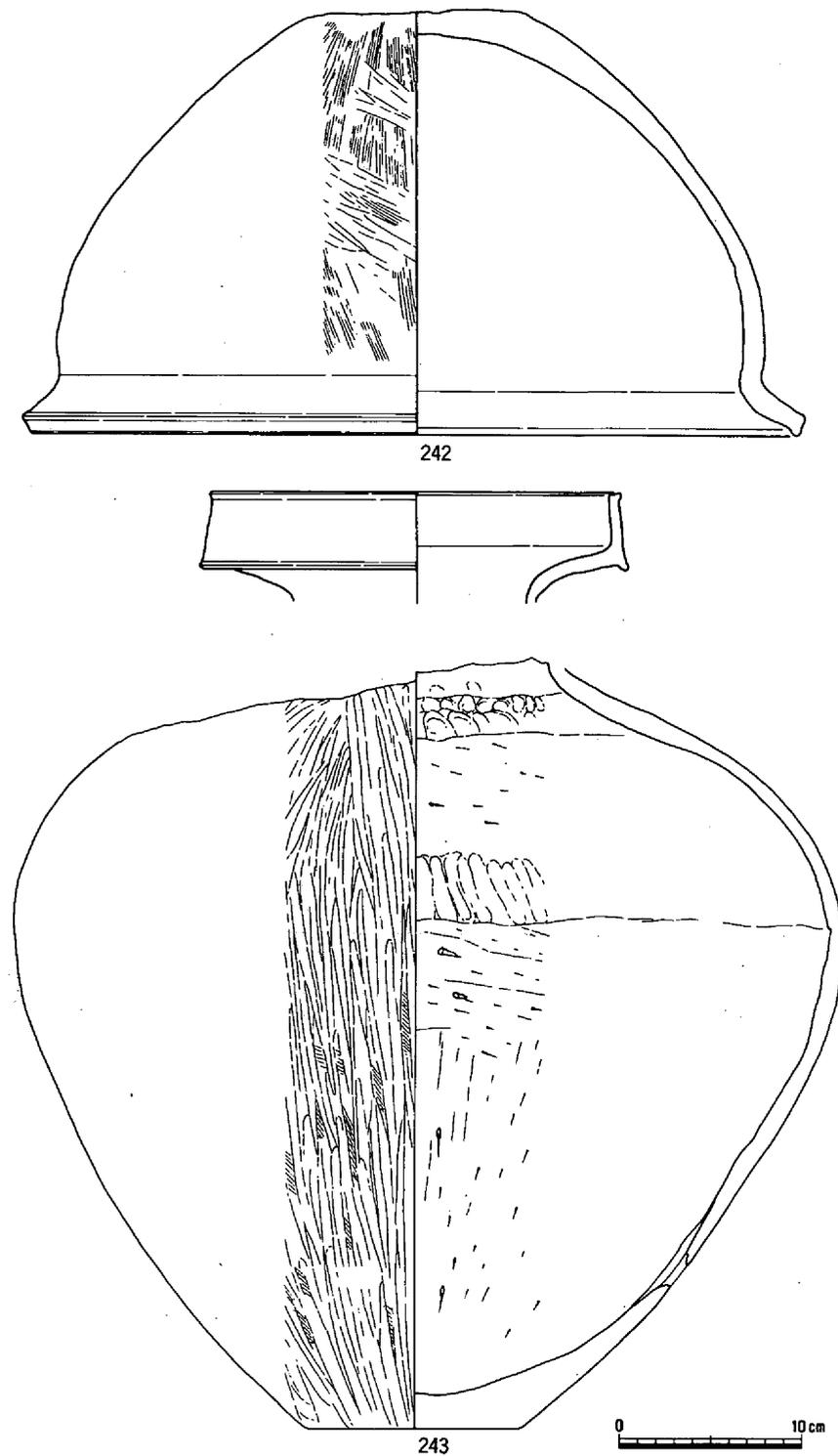
305F区で検出された土器棺である。棺の掘り方は楕円形で、棺より少し大きめに掘られている。規模は検出面で長さ70cm、幅65cm、深さ35cmを測る。棺は掘り方の中に斜位に置かれ、棺の底部側には打ち欠いた口縁部を掘り方の壁と棺底部との間に差し込んでいる。棺の蓋は鉢で、上部側はかなり細かく割れていた。



210cm



第78図 土器棺 2 出土状態



第79図 土器棺 2

棺は身と蓋からなる。身は高さ42cmで、口縁部を打ち欠いた壺を用いている。壺は掘り方内に置かれた口縁部から推定すると、頸部がやや長くなる壺で、胴部外面はハケメ後ヘラミガキ、内面はヘラケズリで仕上げられている。蓋は大形の鉢が用いられている。鉢は口縁部をくの字状に外反させ、端部をわずかに上方へ拡張する。調整は外面をハケメ後ヘラミガキし、内面は丁寧なナデで仕上げている。棺の時期は百・後・Ⅲと考えられる。(平井)

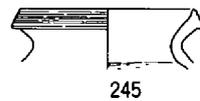
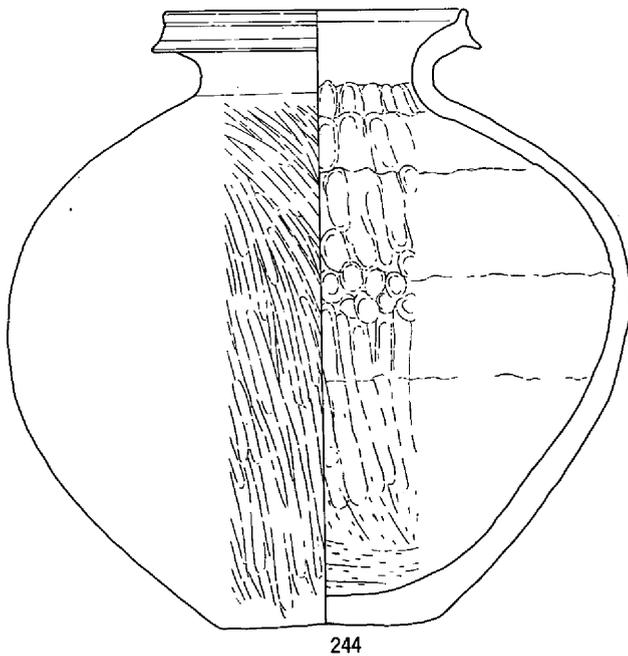
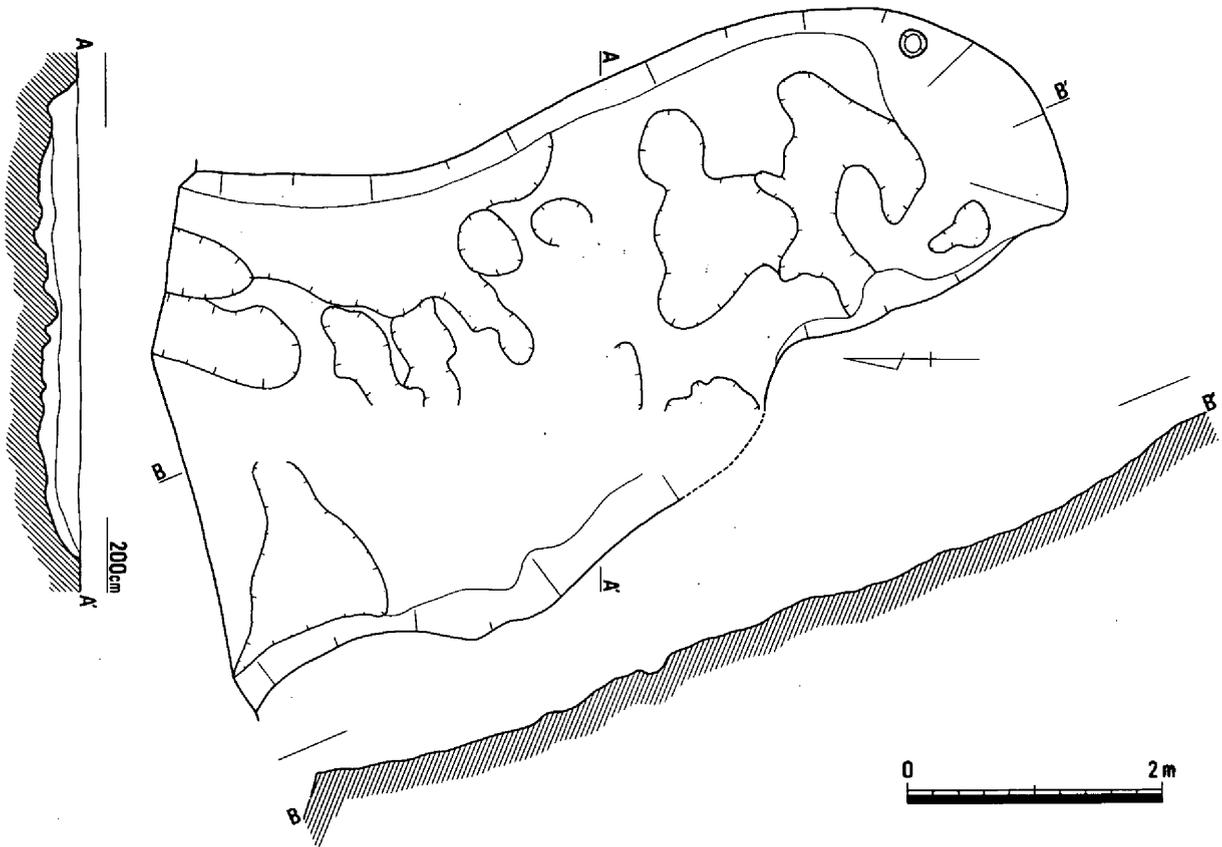
(3) 土 壙

土壙17 (第80図、図版9)

305 E・F区で検出された土壙で、北側は削平されているが、南北に長い不定形を呈する。現存する部分での規模は、長さ7 m、幅4.2 mを測るが、深さは30 cm前後と浅い。土壙の底部は凹凸が著しく、壁の立上りは緩やかである。埋土は上下

の2層に分かれ、上層は青緑灰色粘質土、下層は暗青灰色粘土である。

遺物は土器が少量出土した。244は壺で、肩の張る胴部にわずかに立上る頸部から強く外反する口縁部をもつ。口縁端部は上下に拡張され、横ナデによる凹部が2条めぐる。器壁は厚く、調整は胴部外面をヘラミガキ、内面は底部をヘラケズリするものの、それより上はナデ上げないし指オサエで仕上げている。245・246は甕である。246はくの字状に外反する口縁部の端部をわずかに拡張している。



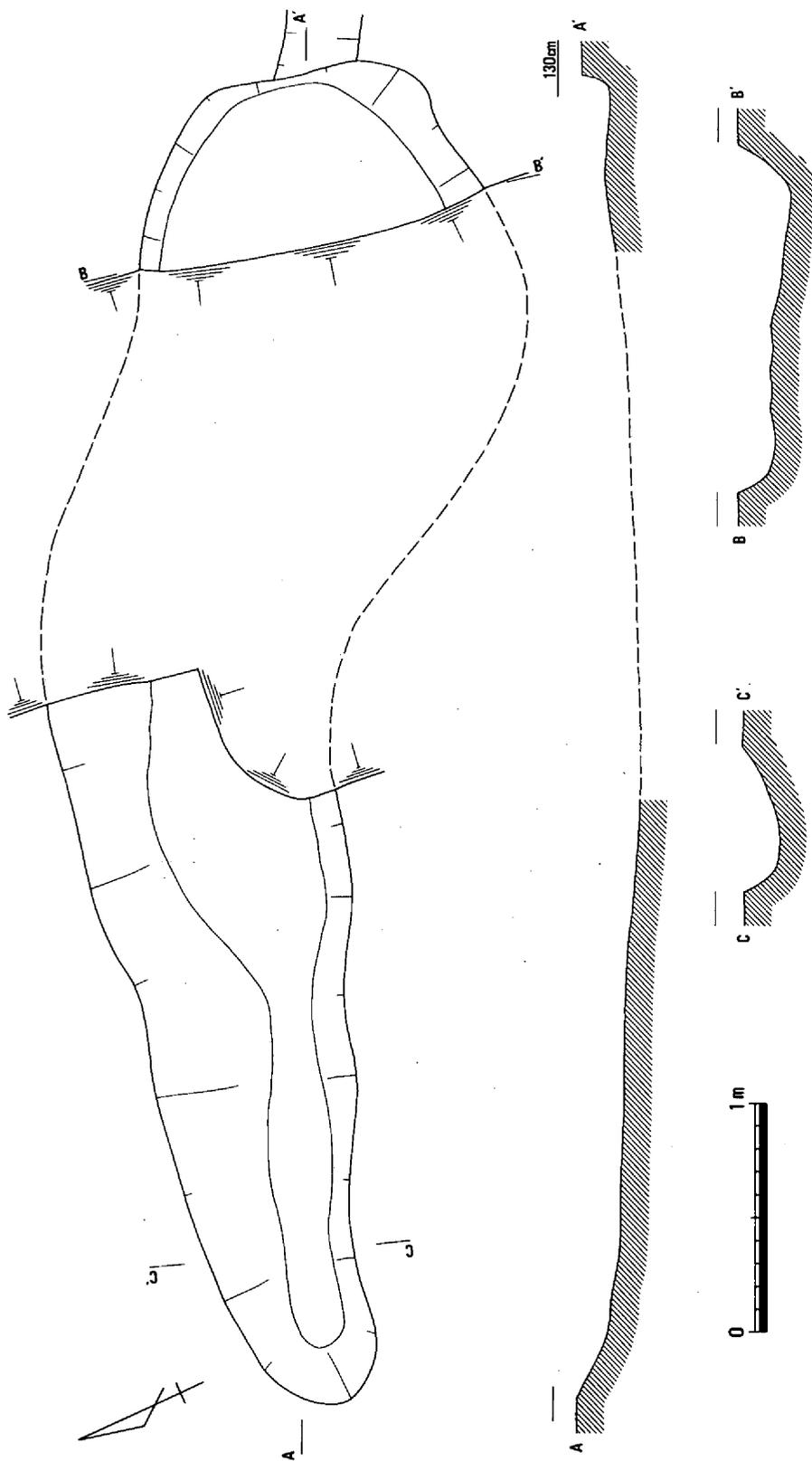
第80図 土壙17・出土遺物

土器の時期は百・後・Ⅲと考えられる。

(平井)

土壙18 (第81~83図、図版13)

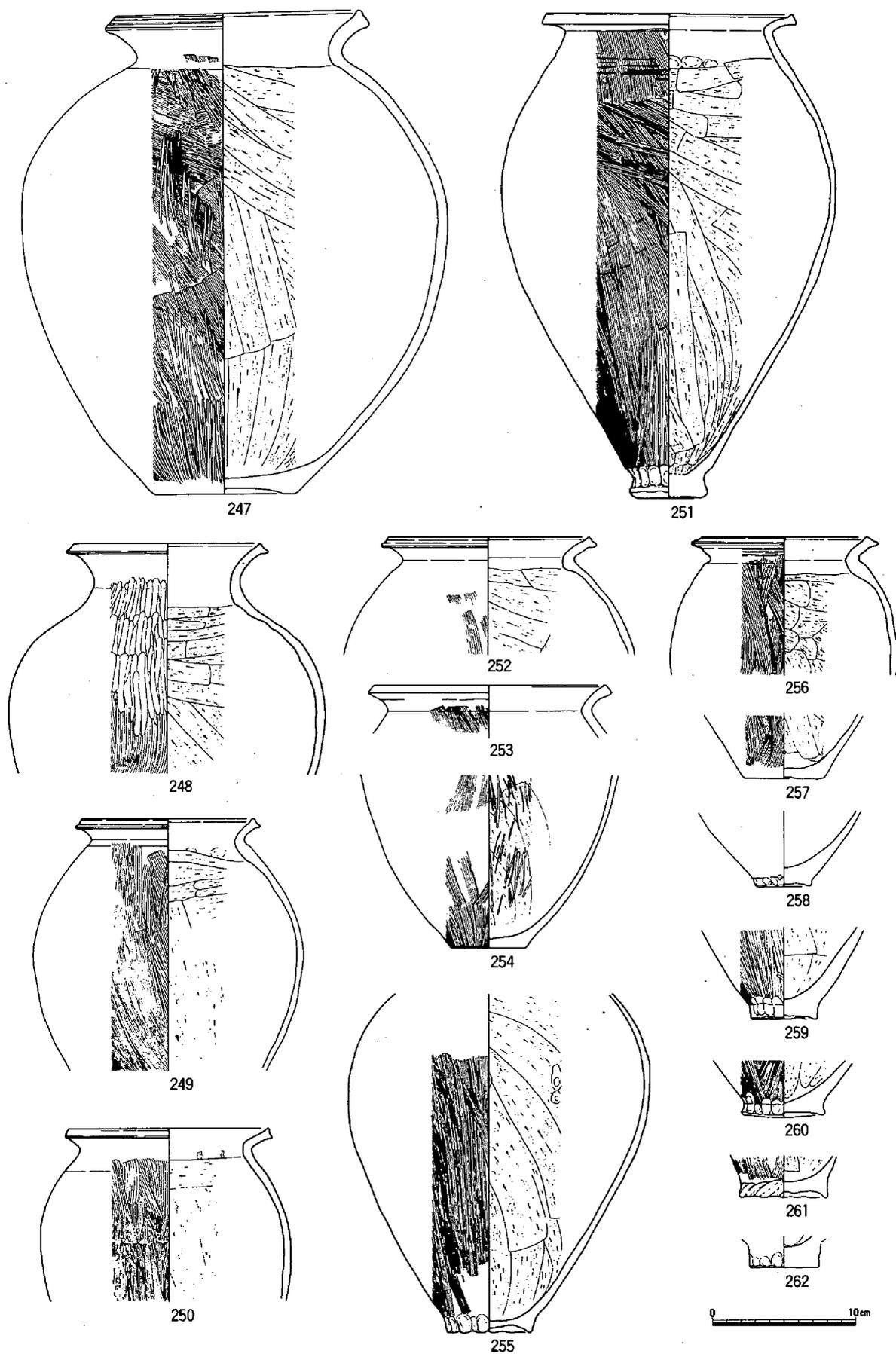
304L区の南半で検出された。土壙と表記しているが、長径が588cm、短径は154cmと規模が大きく、土壙の上方で土器片の集積が認められたことなどから、広い凹地の底部である可能性が高い。土壙の深さは32cmであった。土器片は土壙の検出面よりも上に位置し、その時期が百・後・Ⅱである



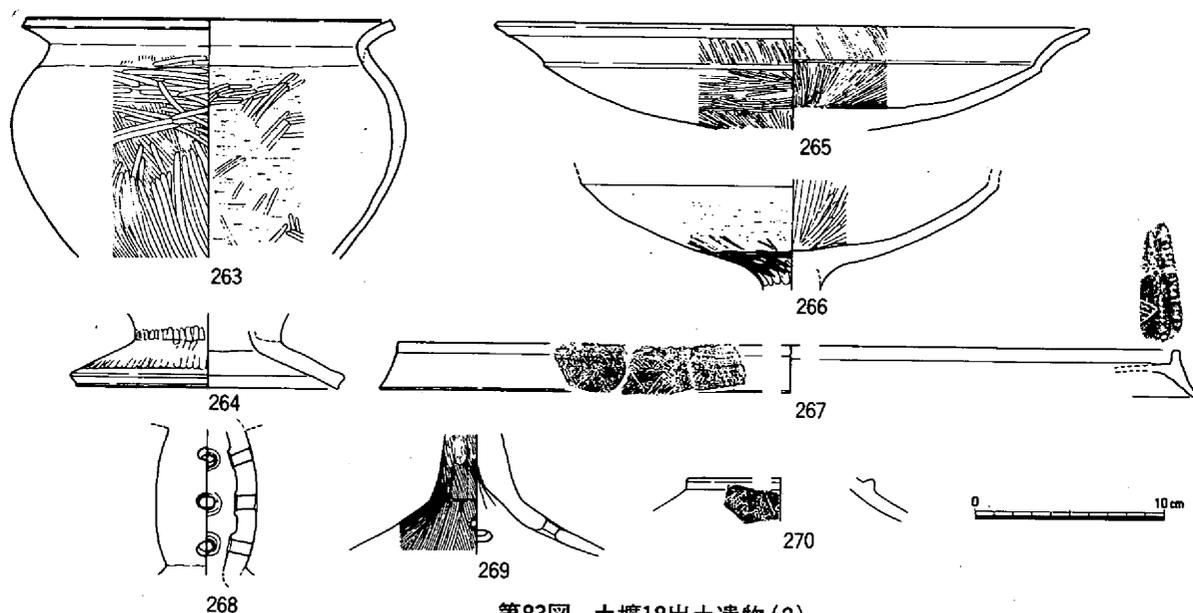
第81図 土壙18

ことから、「百間川兼基遺跡1・百間川今谷遺跡1」の大上田調査区土器溜りDの続きであろう。出土した土器の器種は多様であるが、甕が多くを占めている。

247・248は壺である。ともに短い頸部と外反する口縁をもち、胴部は球形に近いものの、わずかに肩が張っている。口縁端部はいくらか肥厚させ、247では端面に沈線を2条巡らせている。胴部の調整は外面は細かいハケの後にヘラミガキを施している。247のヘラミガキはやや粗雑である。249～262は甕である。251は形態的に他と異なり、やや古い様相を示していると思われる。251の口縁部は強く外反し、端部を上方につまみ上げているが、他のものは口縁部が直線的で、端部は上下に拡張されている。また、251の胴部は細長く、頸部付近では内反り



第82図 土壙18出土遺物(1)



第83図 土壙18出土遺物(2)

く可能性が高い。263の胴部内面はヘラケズリの後に粗いヘラミガキがなされている。265～270は高杯である。267は大形の装飾高杯で、268のような柱状部が付くと思われる。垂下する口縁端面には複線鋸歯文を飾り、上端面には列点文、杯内面にも複線鋸歯文を施している。(岡本)

(4) 溝

溝25・26 (第84図、図版10)

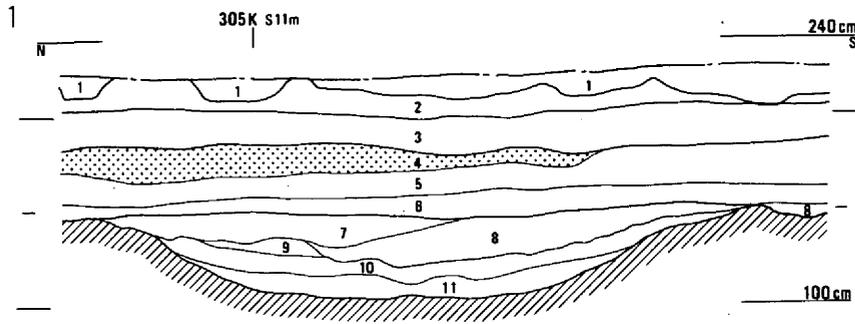
溝25は305H・I区、溝26は305I～L区に検出されている。両溝はJラインの辺りで合流し、後者はさらに東苗代調査区側に続いている。溝25は幅1.1～1.2m、深さ約50cmを測り、「百間川兼基遺跡1」の溝と繋がる。そして、溝底のレベルが本調査区内での両端部でそれぞれ標高約120cmと105cmを測ることから、約15cmの比高差をもって東流していたことがわかる。また、断面では中央に低いレンズ状に、細かく何層にも堆積している土層の状況が看取され、それらが3～4層に大別されることから少なくとも2～3度の改修が行われたことがわかる。

溝26は幅約3.5m、深さ50～60cmを測る大形の溝で、調査区内での溝底のレベルは全体に標高95～100cm前後と大差はない。堆積土層の状況では、大幅な改修があったとは認められない。両溝の切り合い関係のわかるJラインの南北断面(第84図-3)では、一部第12層が支障になるものの、第13・15・17層が共通しており、掘削の開始期の前後関係はわからないが、廃絶期の同時性つまりある期間に同時に機能していたことが看取される。

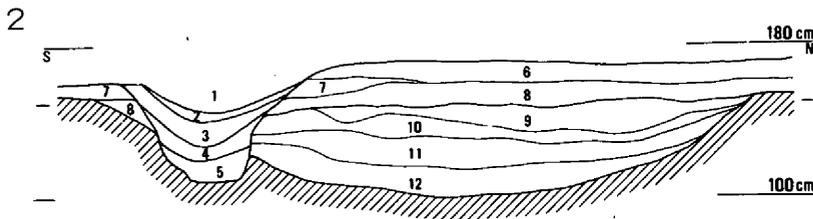
両溝ともに数片の土器片しか出土しておらず、時期の確定はむずかしいが、同断面の第9層が後述する土器溜り3・4を含む包含層に当たるため、中期の後半位と思われる。(柳瀬)

溝27 (第84～86図、図版10・11)

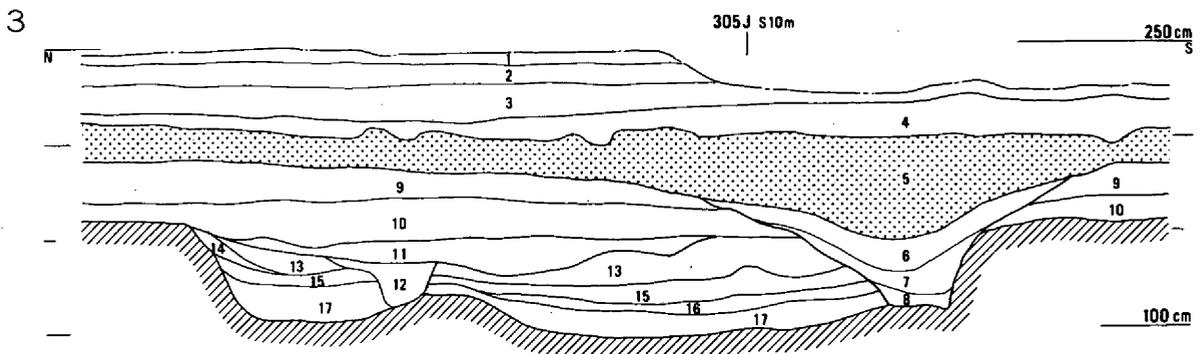
この溝は、305I区の南西隅から同K区の北西隅にかけて、わずかに蛇行して検出され、その北側では「百間川兼基遺跡1」の溝8に繋がり、さらに市道下調査地区の本溝に繋がる。溝は上面が洪水砂で覆われているため、溝の肩部も当時のままのプライマリーな状態で捉えることができた。幅約90cm、深さ50～60cmを測り、I～K区では溝底のレベルは標高110cm前後ととくに変化はないが、市道調



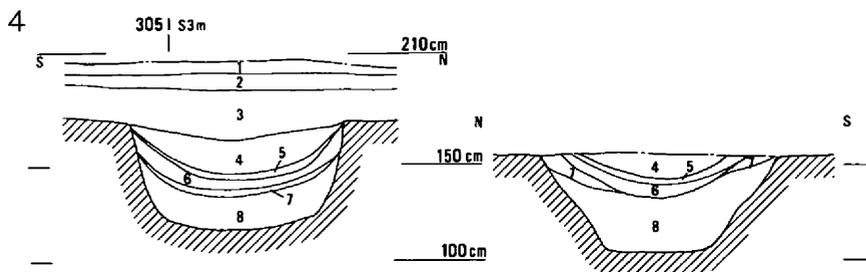
- | | | | |
|-----------------|------------------|--------------------|---------------------|
| 1. 淡褐色微砂質土 | 4. 明黄褐色砂質土(洪水砂) | 7. (淡黄)黒褐色粘質土(白色塊) | 10. (淡黄)黒褐色粘質土(白色塊) |
| 2. 淡褐色微砂質土(粘性強) | 5. 暗緑褐色粘質土(グライ化) | 8. 黒褐色粘質土 | 11. 黒褐色粘性砂質土 |
| 3. 淡黄褐色微砂質土 | 6. 暗緑黒褐色粘質土 | 9. (淡黄)黒褐色粘質土 | |



- | | | | |
|-----------------|---------------|-------------------|-----------------------------|
| 1. 明黄褐色砂質土(洪水砂) | 4. 暗灰色粘土 | 7. 暗灰色粘土(淡灰緑色粘土斑) | 10. 暗灰色粘土(淡灰緑色粘土斑) |
| 2. 褐灰色粘質土 | 5. 暗灰色粘土(少し淡) | 8. 暗灰緑色粘土 | 11. 淡灰色粘土(暗緑色粘土斑) |
| 3. 灰黒色粘土(炭含) | 6. 暗灰色粘土 | 9. 灰緑色粘性砂質土 | 12. 灰色粘性砂質土
(淡灰緑色粘土斑+炭粒) |



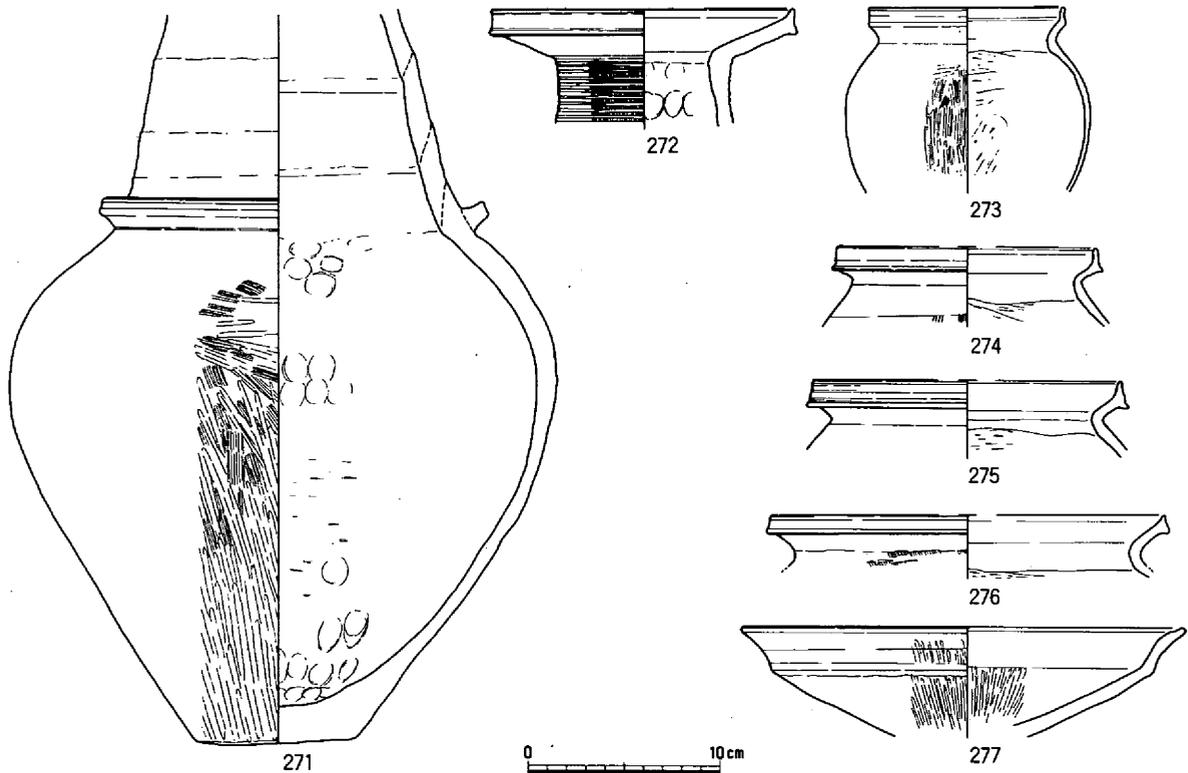
- | | | | |
|-----------------|----------------|-----------------|-------------|
| 1. 明灰色砂質土 | 6. 暗青灰色粘質土(炭含) | 11. 淡青灰色粘質土 | 16. 淡青灰色粘質土 |
| 2. 淡灰色粘質土 | 7. 淡青灰色粘質土(炭含) | 12. 暗青灰色粘質土 | 17. 淡青灰色砂質土 |
| 3. 灰色粘質土 | 8. 淡青灰色粘質土 | 13. 淡青灰色粘質土(砂含) | |
| 4. 淡茶色粘質土 | 9. 淡茶褐色粘質土 | 14. 黒灰色粘質土 | |
| 5. 淡茶褐色砂質土(洪水砂) | 10. 淡青灰色粘質土 | 15. 黒灰色粘質土(炭含) | |



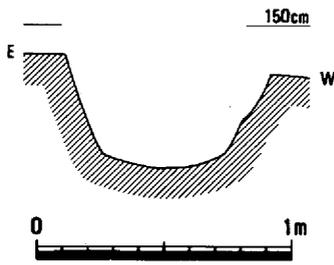
- | |
|-------------|
| 1. 茶灰褐色粘質土 |
| 2. 茶褐色粘質土 |
| 3. 黄灰褐色粘質土 |
| 4. 暗黄青灰色粘質土 |
| 5. 淡黄灰色粘質土 |
| 6. 淡青灰色粘質土 |
| 7. 暗灰色粘土 |
| 8. 暗青灰色粘土 |



第84図 溝25・26・27の土層



第85図 溝26出土遺物

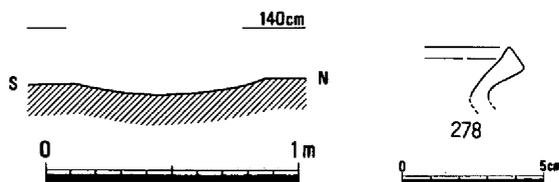


第86図 溝27

査地区では同約95cmで、北東方向にわずかに流下していることがわかる。溝内の堆積土は3～4層にわかれるが、徐々に埋没した自然堆積を思わせる。また、洪水砂層下の地形は百・後・Ⅳ期のある時期の景観を表し、この溝が洪水に遭うごく近い時期に廃絶したことは土層関係から明らかであり、当時この溝は用水路としての機能はなく、自然流路であった可能性が高い。

遺物は百・後・Ⅱ期を含み、20数点の破片のみ出土しているが、第85図には比較的新しい土器を抽出して掲載した。それらのうち、271は長頸壺と思われるが、長頸部が内灣して立ち上がり、かつ頸部下に突帯を繞らせる例はほとんどない。土器は271・272・274・275が百・後・Ⅲ期、273が百・後・Ⅳ期に属す。以上のことから、溝の機能していた時期は、百・後・Ⅲのある時期から洪水過に遭う数年前までと考えてよい。(柳瀬)

溝28 (第87図)
304L区で検出された浅い溝状の窪みである。検出部分では中央部の底がもっとも低くて、両端へ上がっていき、西端では溝が消えてしまっていた。最大幅は88cm、深さが8cmであった。埋土は暗灰色粘質土で炭粒を含んでいた。溝29との先後関係は明瞭ではなく、埋土も類似していた。

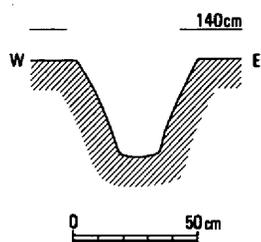


第87図 溝28・出土遺物

遺物は土器の口縁部の小片が出土しているが、時期ははっきりしない。(岡本)

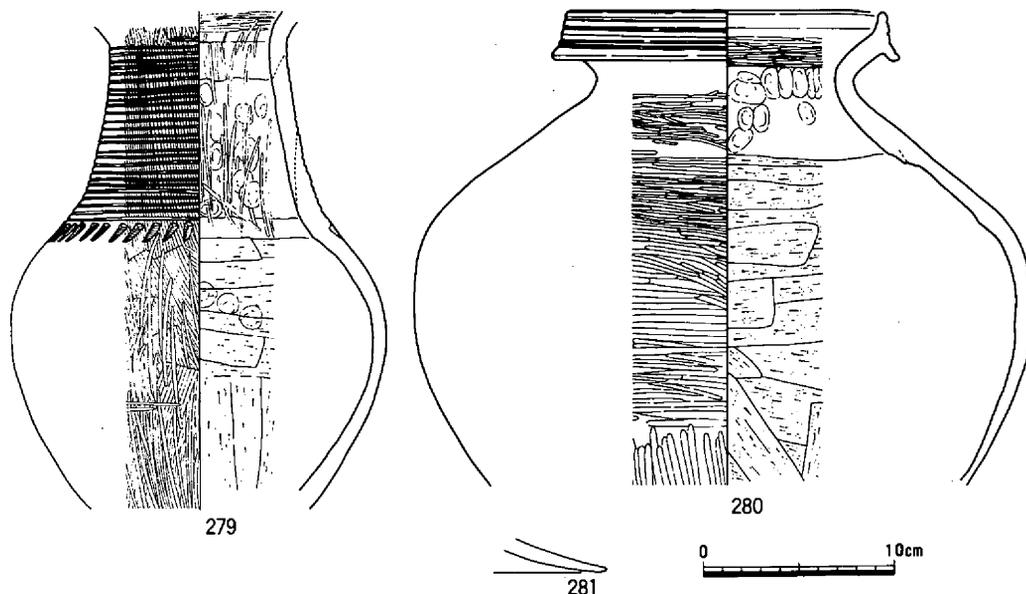
溝29 (第88図、図版13)

304L区のほぼ中央部に弧状に検出されて

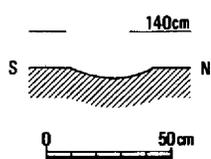


いる。この溝の存在によって、「百間川兼基遺跡1・百間川今谷遺跡1」の溝9と溝41が確実に繋がることとなった。幅が42~82cm、深さは39cmを測り、側壁の傾斜はきつい。埋土は暗灰色粘質土で、炭粒を点々と含んでいた。水は東から西へ流れていたとみられる。

調査区東端では百・後・Ⅲ期の大形土器片が溝の上部に散乱して包含



第88図 溝29・出土遺物



第89図 溝30

されていたことから、ほぼ同時期の存在が想定される。(岡本)

溝30 (第89図、図版13)

304L区の南半にあり、溝28と類似した形態を示す。そして、その大半を土塊18によって破壊され、残存部も幅が30~54cm、深さは9cmと、わずかに痕跡を留める程度であった。埋土は暗灰色粘質土、炭粒を点々と包含しているのみで、遺物はないに等しい。(岡本)

(5) 水田 (図版12)

304・305B~E区で検出された水田である。水田の西端は調査範囲外のため不明であるが、東端はE区で確認された。微高地との境は、比交差50cmあまりの段をもち、その立上りはほぼ垂直に近いが、水田面より10cmほど上が小さく抉られている。この抉り込みは、ほぼ同じ高さで微高地端部に見られることから、水を張った時の水位を示すものと考えられる。

水田は幅20~30cm、高さ5cmあまりの小畦畔で区画されているが、その区画はすでに公表されている「百間川兼基遺跡1・百間川今谷遺跡1」の成果と合わせて考えると、田の字状に整然としているとはいえない。また一区画の規模も一辺が10m以上もあり、百間川遺跡群の中では大きい部類に属する。

水田は弥生時代後期末と推定される洪水によって運ばれてきた砂で埋まっており、その厚さは20cmを測る。百間川原尾島遺跡などに比較すると砂の厚さはやや薄くなっている。(平井)

(6) 土器溜り

この調査区の土器溜りは、305 I～K区の溝27の南西側から溝26の上部にかけ、点々と6～7箇所
に土器群が形成されていたもので、土層的には第84図—1断面では洪水砂層下の第5層中、同図—3
断面では第9層中に包含されていた。土器が比較的まとまって検出された部分については第76図に範
囲を図示した。J区については土器群としては示していないものの、土器は散在した状態で多く出土
している。これらの土器溜りのうち、特徴的な2箇所について以下に概要を記す。

なお、第91～95図の遺物は、土器溜りを含む一連の包含層中の遺物全体を対象にして抽出したもの
である。

土器溜り3・4（第90～95図、図版14・15・39・40）

土器溜り3は、305 K区の中央東寄りに形成され、土器溜り群のなかでは最も東に位置する。土器溜
りは大きく3ブロックにわかれ、第90図には東側の2ブロックを図示したが、土器片はおもに約2.5
×5 mの範囲に散布し、全体的に折り重なるほどの密度でもない。ただ、土器溜りのなかでは量が一
番多い一群である。土器の下面のレベルは、北端で標高約170cm、南端で約155cmを測る。つまり、こ
の地点では北から南にかけて緩やかに下る地形に土器溜りが形成されていて、これは、この土器溜り
が溝26の北側（左岸側）肩の上部に位置していることから、溝26の中心にむかって下る地形が、溝が
埋まった後の土器溜り形成の時期もわずかに残っていた結果だと思われる。

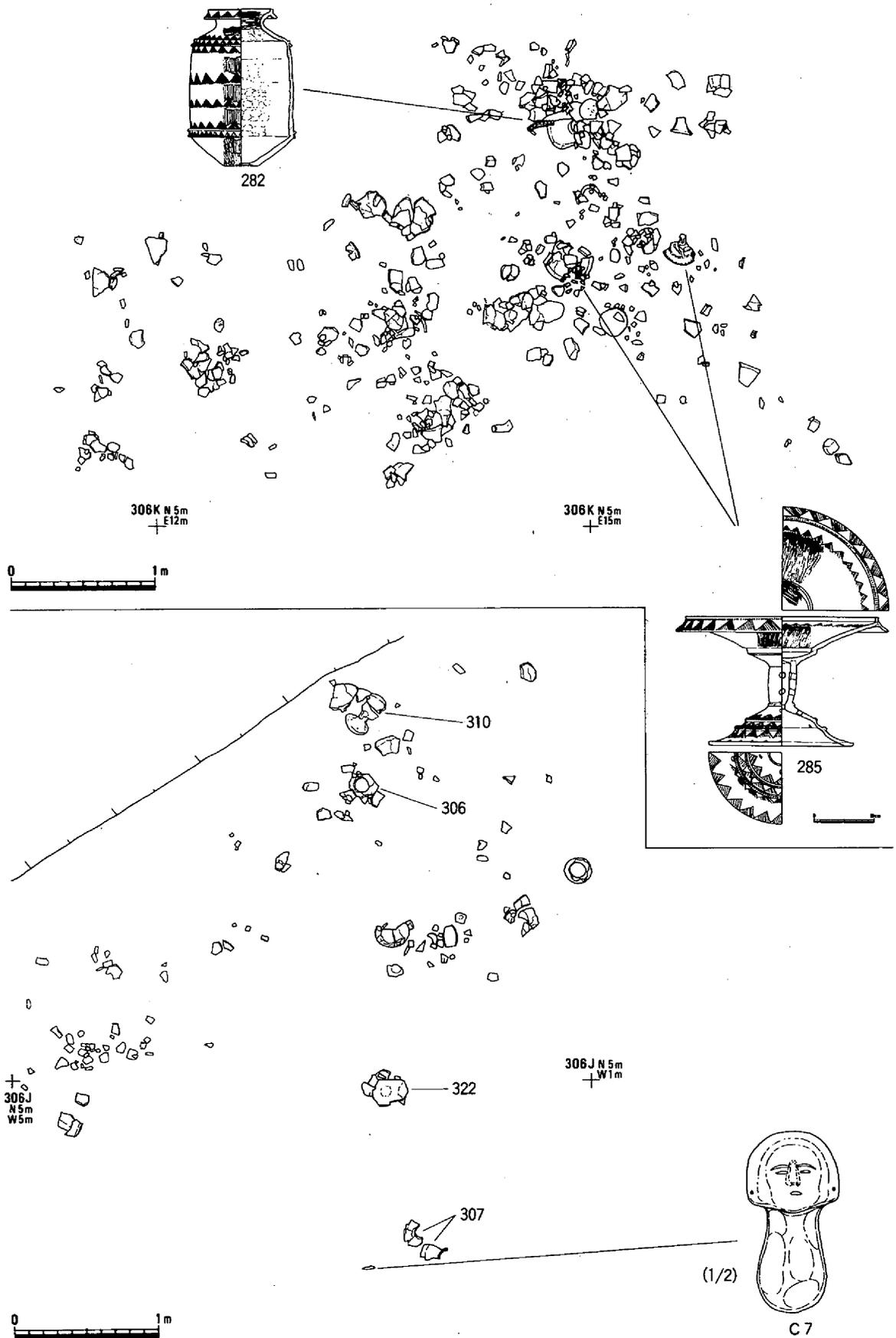
土器溜り3の遺物は、壺・甕・高杯・鉢等のいわゆる日常土器の器種のほか、装飾樽形壺282や装
飾高杯285等の特殊遺物を含んでいて、両者は第90図に示す位置からそれぞれ出土している。全体的
な土器の分布からは、完形に近い土器がその位置でさらに潰れて細片化した状況が所々に看取される
が、全体的には破片が散乱している状況を示す。

土器溜り4は、同3から約35m西に離れた305 I区の南東寄りに形成されており、大きく4ブロッ
クにわかれて存在する。第90図には近接する3ブロックを図示したが、土器溜り3に比べるとブロッ
クごとの土器の量は極端に少ない。出土土器の下面レベルは、南東端で標高約172cm、北西端で約154
cmを測り、約4 m間で約18cmの比高差をもって分布している。この土器溜りは溝26の右岸側の肩部近
くに形成されており、土器溜りの北側は一部溝27によって削平されているが、向きの差はあれ土器溜
り3とほぼ同様の地形の中に存在していたと思われる。

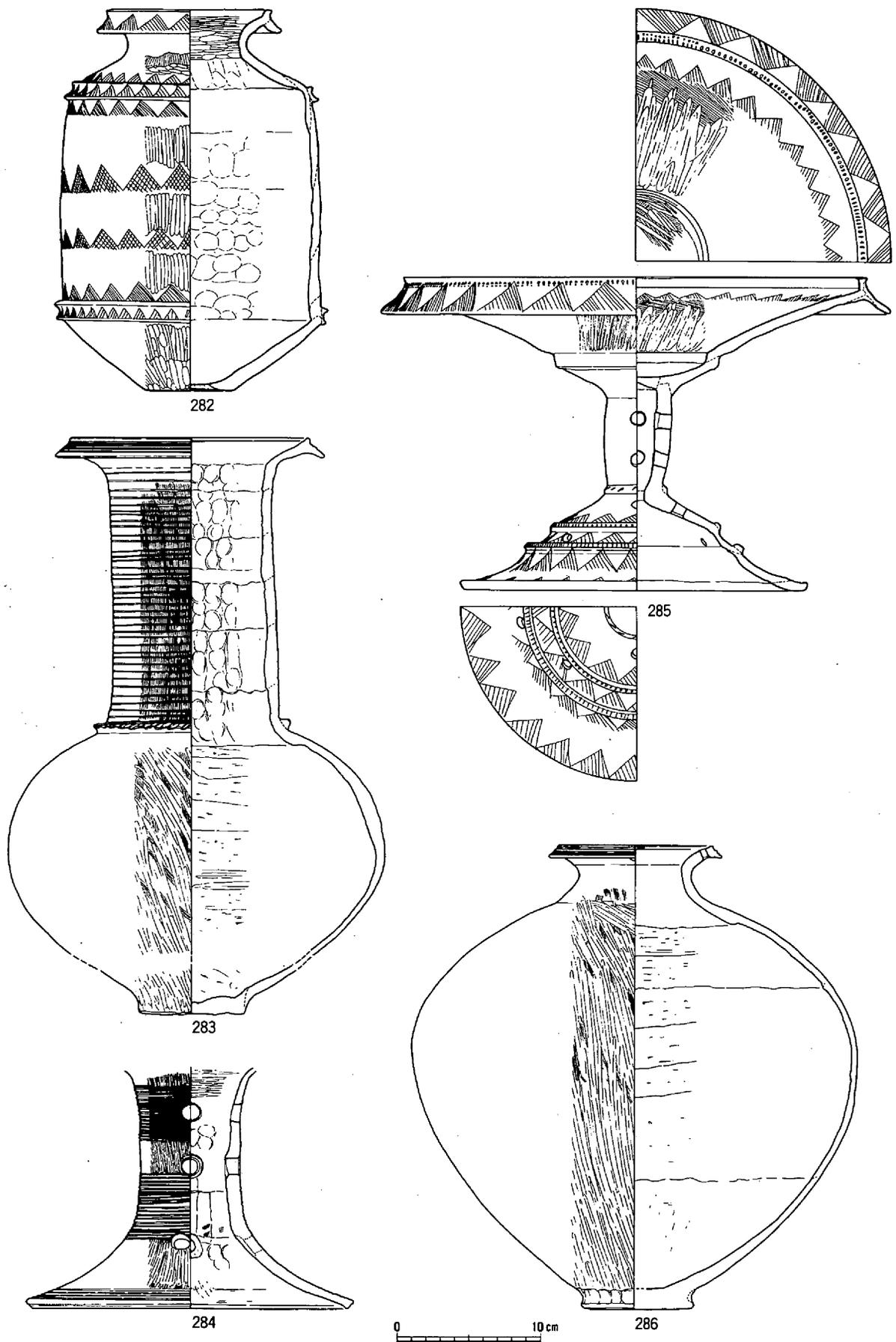
土器溜り4は、全体的に完形に復元できる土器が少ない。図示した中では、292・304・307・310・
311・320・322などがこの土器溜りに属す。また、第90図下の南端の位置から、C7の人形土製品が顔
面の右額部を下にしてわずかに斜めになった形で出土している。人形の出土レベルは、下部で165.2
cm、上部で166cmを測る。参考までに周辺の土器をあげると、東側に隣接して307の台付壺、北側約1
mの地点に322の大形鉢の底部、さらに北に約3.3mと3.8m離れた地点から292の長頸壺と310の高杯
がそれぞれ出土しており、土器溜り3よりも一型式古い時期を示している。

305 J区の包含層中の土器は、やはり溝26の上部からその南側にかけて、散在した状態で比較的
多く見つかっており、図示した中では287～289・293の長頸壺、300・305・308の甕、318の台付直口壺、
323の製塩土器などがある。ちなみに、これらと土器溜り4以外の図示した土器は、土器溜り3に属
す。

さて、ここで各土器溜り出土の個々の遺物の特徴について概略する。

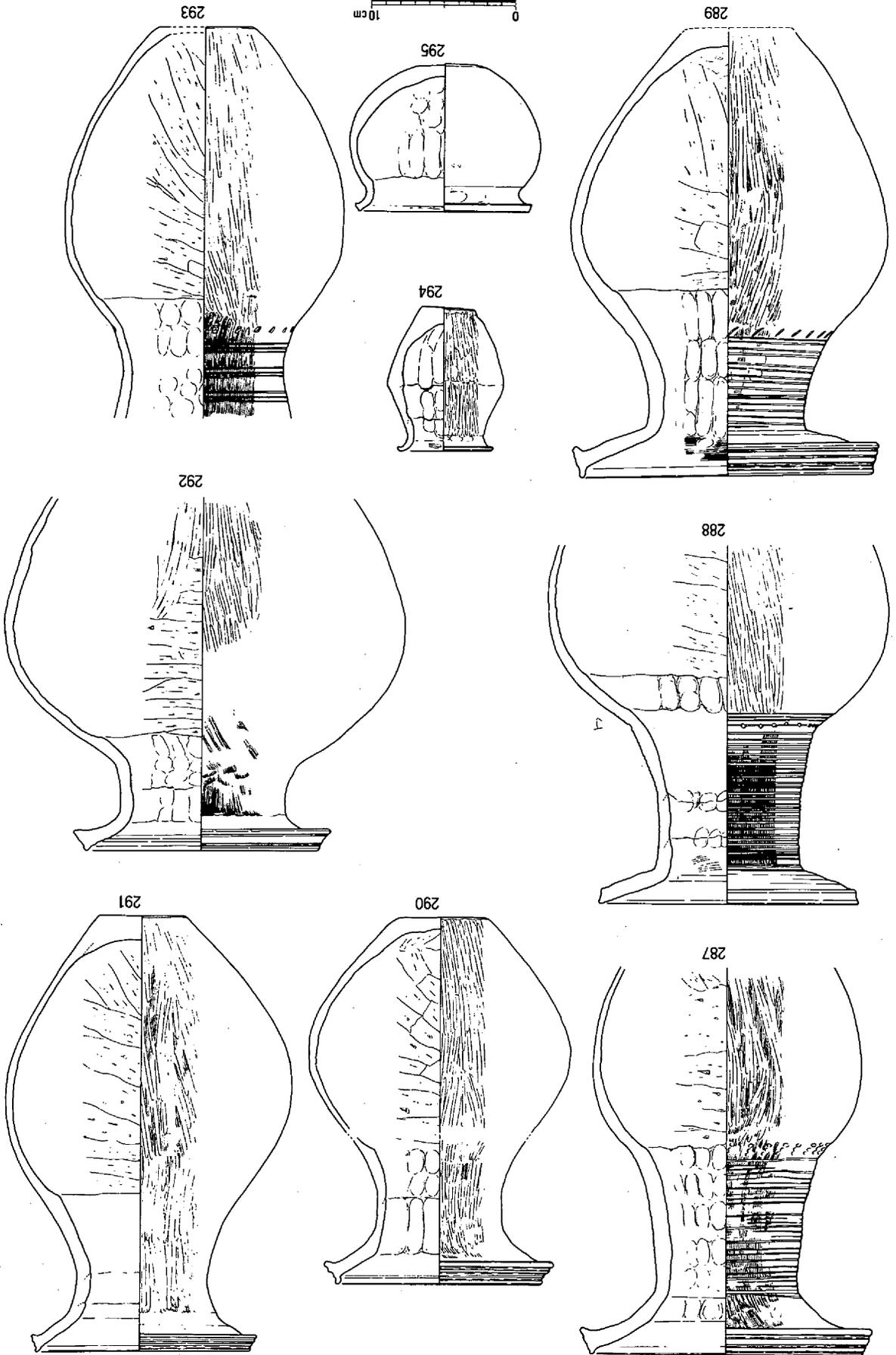


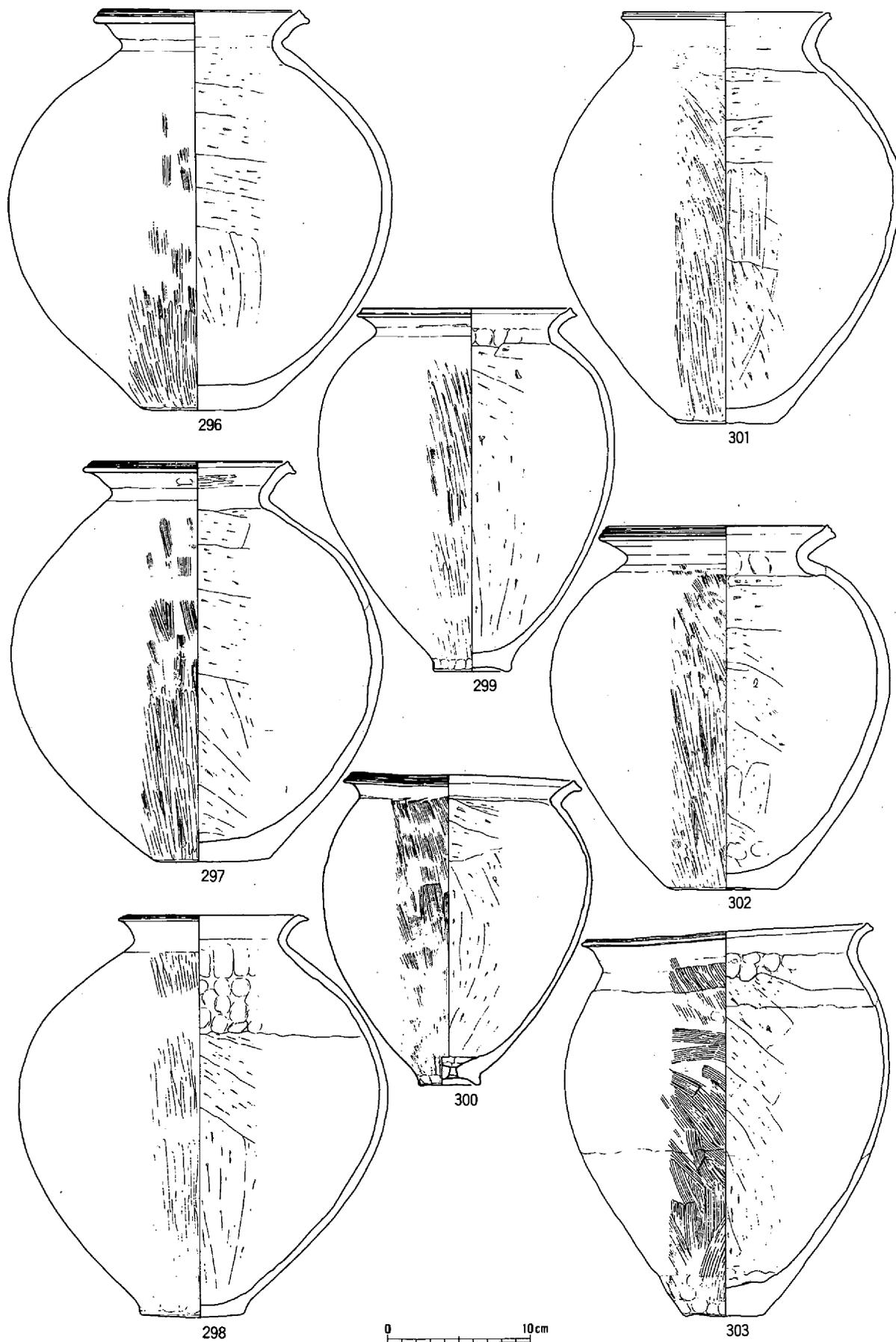
第90図 土器溜り3(上)・4(下)・出土状態



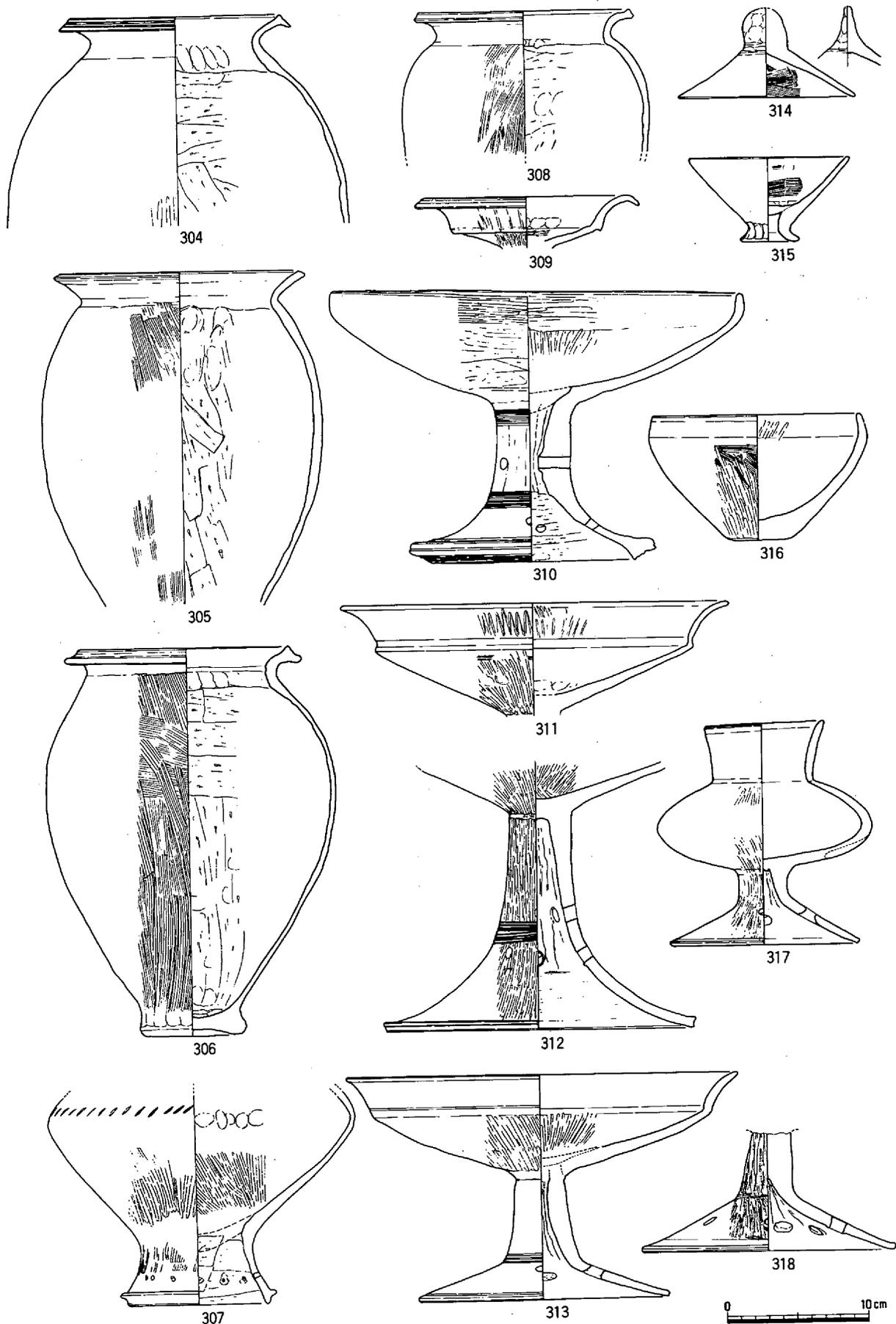
第91図 土器溜り3・4出土遺物(1)

第92圖 土器澗 3・4 出土遺物 (2)

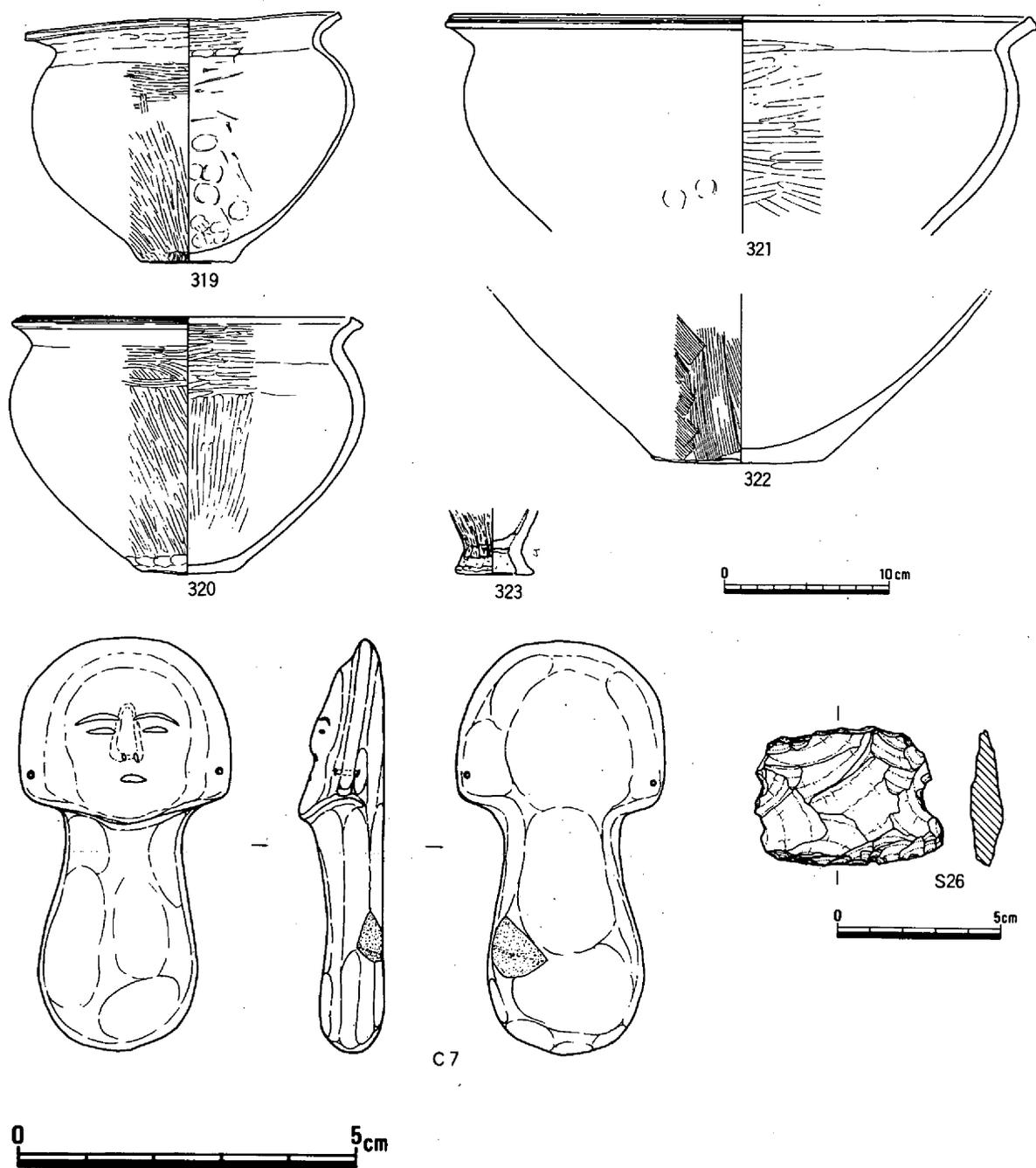




第93図 土器溜り3・4出土遺物(3)



第94図 土器溜り3・4出土遺物(4)



第95図 土器溜り3・4出土遺物(5)

装飾壺(282)は辛うじて樽形の完形に復元されたもので、現在までに類を見ない形態である。破片の約1/3は消失していた。大きさは、口径10.6cm、高さ27cm、最大幅(下部突帯)19cmを測る。土器は、底部・胴部・肩から口縁部の3ブロックをつなぎあわせて製作されているが、形態的にはほかの壺との最大の相違は胴部が筒形を呈する点であり、肩部と胴部下に突帯を繞らせあるいは口縁端部を下方に大きく拡張させる特徴や底部の焼成前穿孔は、いわゆる弥生墳丘墓から出土する特殊壺の形態的特徴と大差はない。口縁部端面、肩部下端、突帯の中央凹部にそれぞれ1条の、胴部に4条の線刻鋸歯文を繞らせ、特異な形態とあいまって装飾効果をあげている。鋸歯部分には3~10本単位で右または左下がりの斜線刻が施され、さらに胴部中央の2条には斜格子状に線刻が加えられている。器表面

の調整は、外面と口縁部内面はおもに太めのヘラミガキ、胴部内面は指頭押圧、そのほかはナデによっている。胎土にかなり精選された0.5mm以下の石英・長石が含まれるが、角閃石は見られない。

装飾高杯(285)は脚柱部と杯部が約1m離れて出土していたが、約4/5個体分の破片で完形に復元された。杯部口径32.3cm、脚部径23.8cm、高さ22.2cm、最大幅(口縁拡張端部)35.7cmを測る。杯部と脚柱との接続は、差し込み方式によっている。杯部はわずかに窪ませた底部を段によって造り出しそこから大きく外反して開き口縁部に至る。口縁部は、端部を上方向に約1cmと斜め下外方に約2cmにわたって拡張させ、さらに上端部は内外にわずかに肥厚させて下端部は丸くおさめている。文様装飾は、口縁の上部端面と外側の端面上部に2個1組の半裁竹管状の刺突文を繞らせ、さらに口縁部外面と内面の口縁端近くにはそれぞれ鋸歯文を施している。脚柱部はやや胴張りの円筒形を呈し、上下に2個一対の円形透かし孔がほぼ等間隔で4箇所に配されている。脚部は2段に外反して開く裾部をもち、屈曲部の2箇所と脚柱部境に突帯を繞らせている。3条の突帯上には上段から順に、斜め楕円状・半裁竹管(半円)状・半裁竹管状の2個1組の刺突文が施されている。また、3条の突帯間と最下段突帯の直下の3部分には、それぞれ円形透かし孔を4箇所に配し、さらに脚部突帯の上部に各1条、および最下段と脚端部の間に2条の鋸歯文で飾られている。胎土は282と変わらない。この高杯は、器形の特殊性や装飾性および胎土などから282とセット関係にあるとみられる。

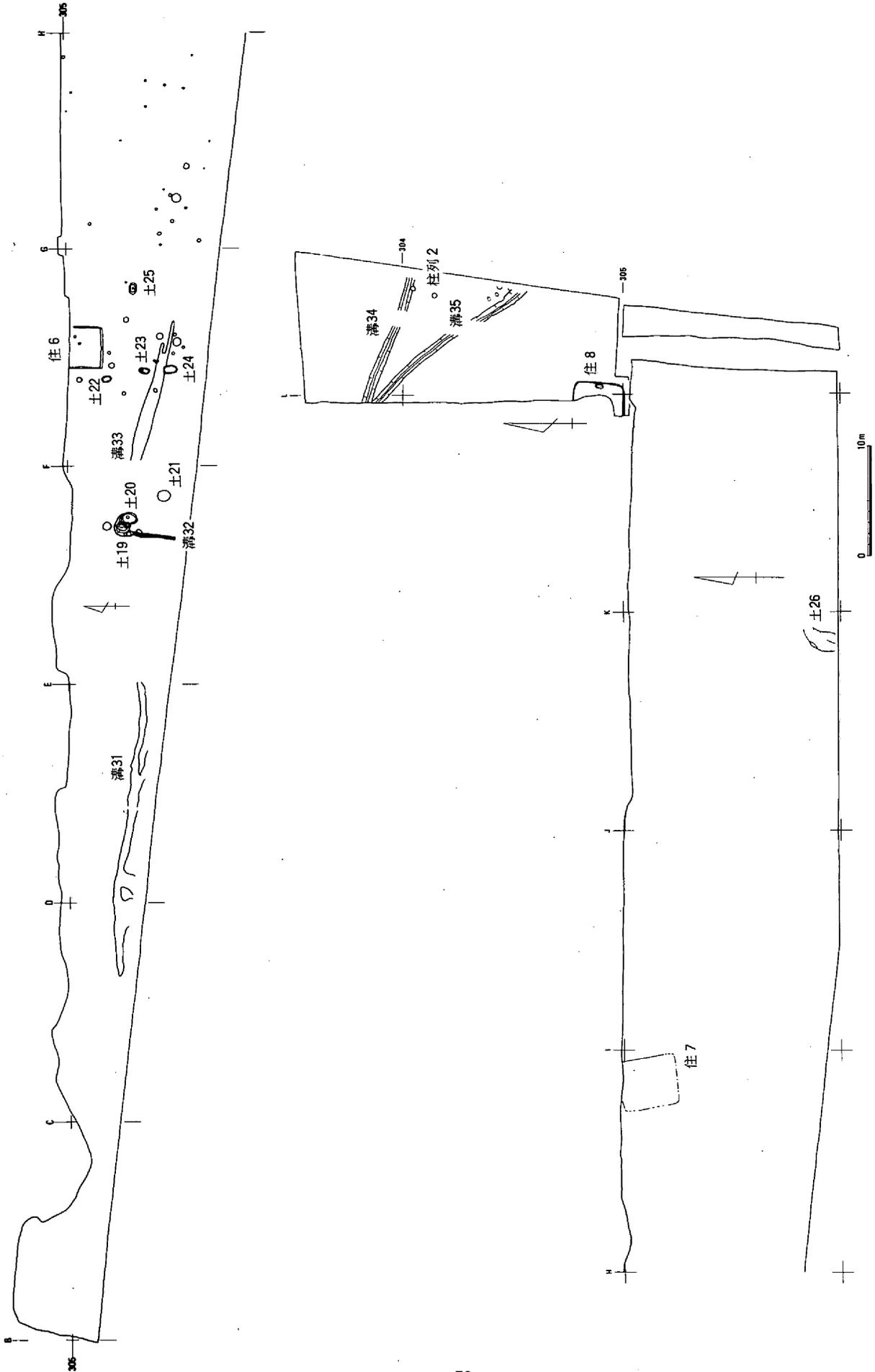
土器溜り3の出土の日常土器のうち、長頸壺283・壺286・高杯312は、整形・調整ともに非常に丁寧であることに加え、よく精選された胎土をもち焼成も堅緻である点などに共通性があり、他と区別される。長頸壺は口縁端部の肥厚あるいは拡張度、頸部の長さや傾きおよび胴部の形状により、およそ3時期にわかれる。287~289・293は百・後・(Ⅱ)~Ⅲ、290・291は百・後・Ⅱ、292は百・後・Ⅰの特徴をもつ。壺296~300のうち、口縁端部を斜め上下にわずかに肥厚させ端面に2条の退化した凹線をもつ296・297・300は百・後・Ⅱ、わずかに外反して短く立ち上がる口縁部をもち内面ヘラケズリが頸部直下に至っていない298・299は百・後・Ⅰとみられる。また、甕は304・306をのぞき百・後・Ⅱ、高杯は310をのぞき百・後・Ⅱ、鉢は322をのぞき百・後・Ⅱの範疇とみてよい。

人形土製品(C7)は、顔部(頭部)と首から下が棒状の体部からなり、検出時のわずかな傷をのぞいて完形である。全長6.25cm、最大幅3.2cm、最大厚1.3cmを測る。顔面は下顎を突出しわずかに上向きやしぐさを造り出し、顔の側面から頭頂部の周囲をつまみあげることによって頭髪が表現されるとともに、顔面にさらに立体感を与えている。また、顔面中央をわずかに盛り上げて鼻を表現し、眉・目・鼻孔・口は鋭利なヘラ状工具で刻み、両耳の位置には小孔を貫通させている。器表には鉄分が部分的に付着しているが、色調は乳白色、胎土には精製(水漉)粘土が使用されている。

同様に顔面を表現した類似品に分銅形土製品があり、それが平面的であるのに対し、この人形土製品はわずかながらも立体的であり、それだけに素朴さのなかにも写実性がうかがえる。なお、人形土製品の性格等については、先に考察が加えられている(註1)のでとくにここではふれない。

以上の概要から、土器溜り3は百・後・Ⅱ、土器溜り4は百・後・Ⅰ、その間の305J区包含層は百・後・Ⅲをそれぞれ中心とする時期が捉えられ、当初装飾土器と人形土製品が出土地点は離れているものの一連の土器溜りに伴っていると思われていたが、両者の間に時期差がある可能性が強いことが判明した。ただ、両者は時期こそ違え、それぞれが日常遺物とは異なることに違いはなく、それぞれの土器溜りは、この微高地上の同一集団による伝統的な何らかの祭祀行為の後の産物とみられる。

(柳瀬)



第96図 和佐田調査区古墳時代の遺構 (S=1/500)

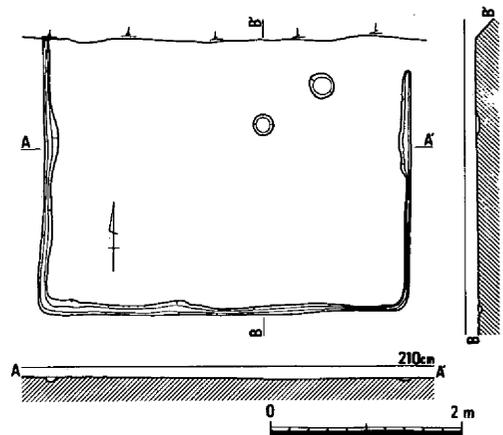
3. 古墳時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居

竪穴住居6 (第97図、図版16)

305F区で検出された竪穴住居で、平面形は方形を呈する。北側が削平されているため、南北方向の規模は不明である。東西方向は3.8mを測る。検出面ではおそらく床面も削平されていると思われ、壁に接してめぐる壁体溝がわずかに残存する。柱穴は壁体溝に囲まれた内側に2本が認められるが、この住居に伴うものではないようである。

遺物は床面まで削平されているため出土していないが、検出面および住居の平面形などから住居の時期は古墳時代と考えられる。(平井)



第97図 竪穴住居6

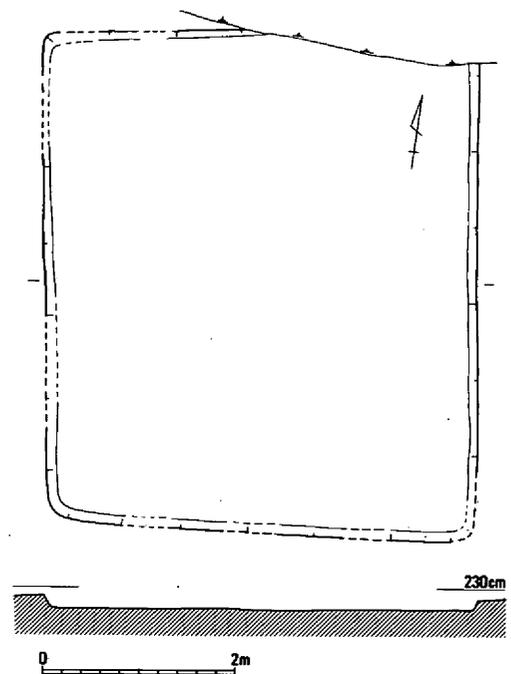
竪穴住居7 (第98・99図、図版16・41・47)

305H区の北東隅に検出された、方形というよりわずかに台形を呈する竪穴住居である。中世の耕土層直下で検出されたが、その面には多数の溝状の畝状遺構があり、それらのうち6条による削平が住居の肩部および一部床面まで及んでいた。大きさは中央で約6.3×4.5m、深さは6～7cmを測る。北東辺の一部を削平されているが、現有部分には竈は確認されていない。また、壁体溝と柱穴も見つかっていない。

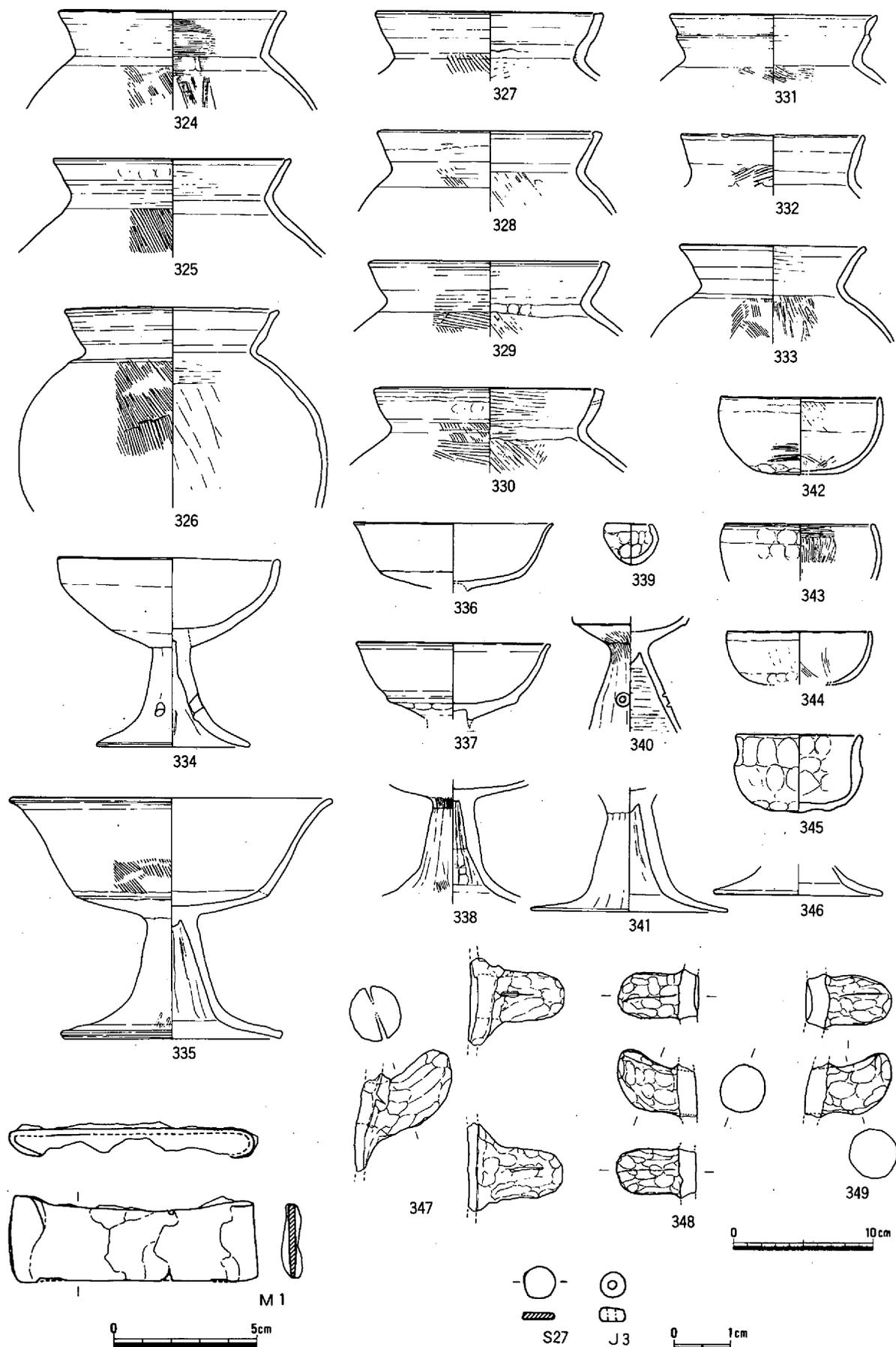
覆土は鉄分の多い灰茶褐色の粘質土で、周辺の基盤層とほとんど見分けがつかないほど酷似していた。

遺物はほぼ中央床面を中心にして、おもに土器片が多く出土しているが、完形のものはいくつか少ない。鉄製鎌先(鋤先)もほぼ中央部の床面から出土している。

土器は甕・高杯・碗(小鉢)・手捏ね・甌等が出土している。324～333は口縁部から肩部までの破片が多くを占め、壺と甕の区別が付きにくい。器壁の厚さ等から壺でなく甕とした。甕は二重口縁ぎみの331をのぞいては、いずれも斜め外方に内灣または外反ぎみに立ち上がる「く」の字口縁をもち、口縁端部は前者は内側をわずかに肥厚させ、後者は丸くおさめる。両者の比率は半々くらいであろうか。高杯は杯部が碗状もの(334)、底部からと口縁部に立ち上がる接合部にわずかな突帯あるいは段状痕跡を残しやや急激に立ち上がる大ぶりの335と小ぶりの336・337など、3～4種類にわかれ、脚部の形態や製作技法にとくに違いはないが、透かし穴をもつ例は少ない。碗(小鉢)342～344は比較的小ぶりながら口径の割りには深さがある。外面をヘラ



第98図 竪穴住居7



第99図 竪穴住居7出土遺物

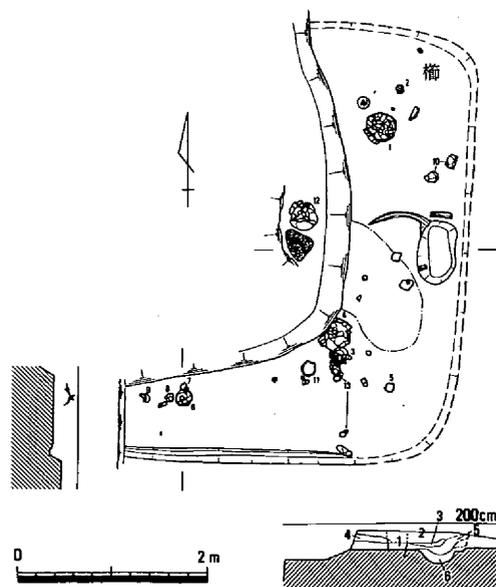
ケズリと押圧で調整されている。これは、同様の調整手法による前時期の皿が変化したものと考えられ、この時期には皿はみられない。甑は把手が3個出土している。そのうち348・349は、大きさや形態から一對とみられる。いずれも把手の上・下面に線状の切り込みまたは線刻が認められ、韓式形土器の影響とみられる。

鉄器はM1のほか不明の鉄片がある。M1は幅8.6cm、最大長約3cmを測り、両端を約1cm内側に折り込んだ装着部をもつ。やや小ぶりであるので摘み鎌の可能性もある。この種の鉄製品は、百間川遺跡群全体では3例ほどが知られているが、この遺跡では初見である。S27の円板、J3の小玉はともに滑石製である。S27は最大長27mm、最大厚10mm、重さ0.63gをはかる。J3は最大幅4mm、最大厚2mm、重さ0.01gをはかる。

これらの遺物は、出土状態から住居廃絶時あるいは廃絶後短期間のうちに廃棄された一括遺物として捉えられ、百・古・Ⅲの時期を当てることができる。(柳瀬)

竪穴住居8 (第100~102図、図版17)

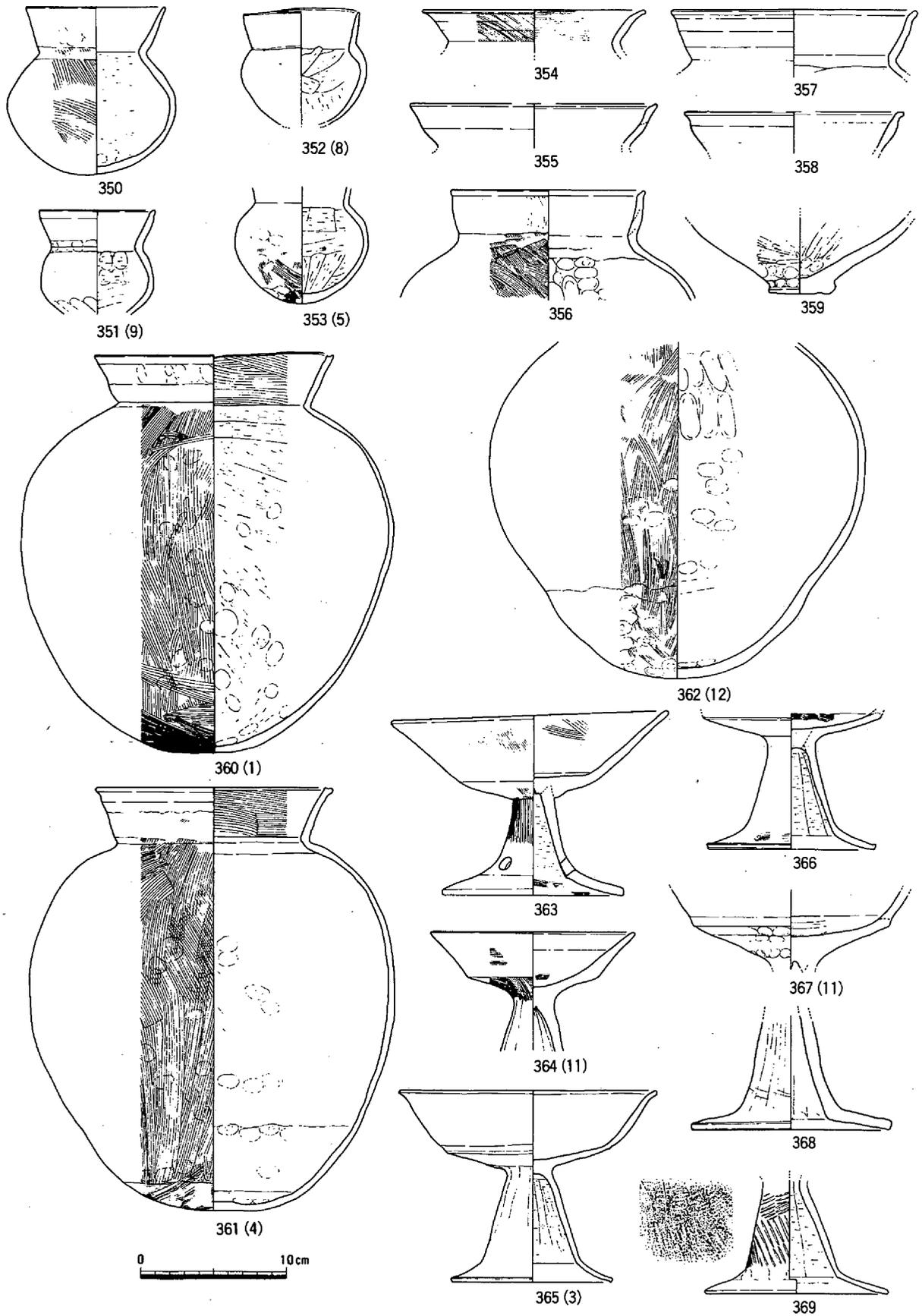
304K区と304L区の境界南端で検出された。調査区の西端に東半分が残存していたに過ぎず、全容は明瞭ではない。検出された中央部分は、隣接する調査区の掘削の影響で、落盤を起こしていた。大形の土器片の集中が認められたことから竪穴住居の存在に気づいたが、その検出は困難で、東辺や北辺は確定できなかった。東辺の中央と思われる位置に土壌が検出され、これによって竪穴を復元している。平面形は方形で、残存長は南辺が推定で370cmを測る。深さは20cmであった。主柱穴は検出されなかったが、南辺にそって深さ3cmの壁体溝が残存していた。東辺中央の土壌は、平面形が長楕円形で、長径67cm、短径41cm、深さは16cmを測る。壙内埋土の暗茶灰色土には炭粒が多く含まれていた。この土壌の北西角からごく浅い溝が西に短く延びていた。床面を観察すると、中央部付近の土器12の南に炭の塊が認められ、また、東辺中央土壌の西の破線内では、砂と炭粒と白色粘土粒が散らばっていた。竪穴住居の埋土は大きくは上下2層からなり、中間に炭粒や灰・焼土を含む層が挟まれていた。



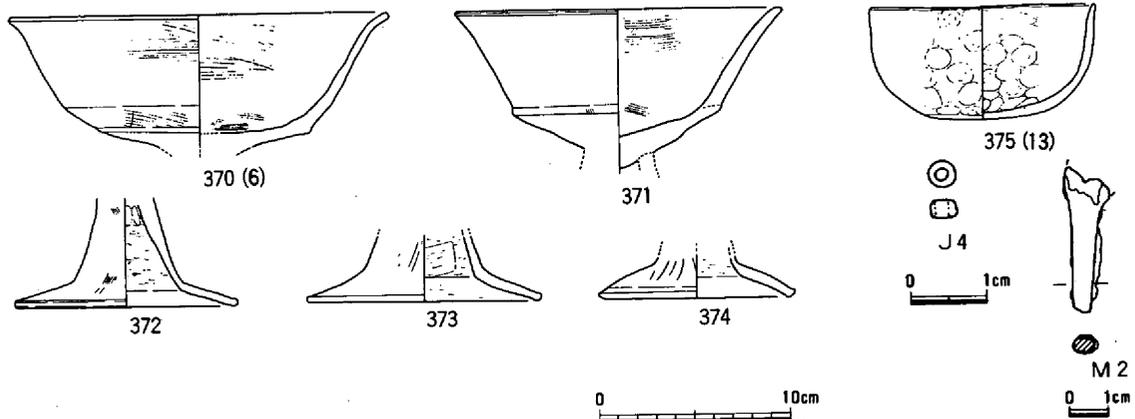
1. 茶灰色土
2. 黄茶灰色土
3. 含焼土茶褐色土
4. 暗茶褐色土
5. 黄茶灰色土
6. 暗茶灰色土(炭多)

第100図 竪穴住居8

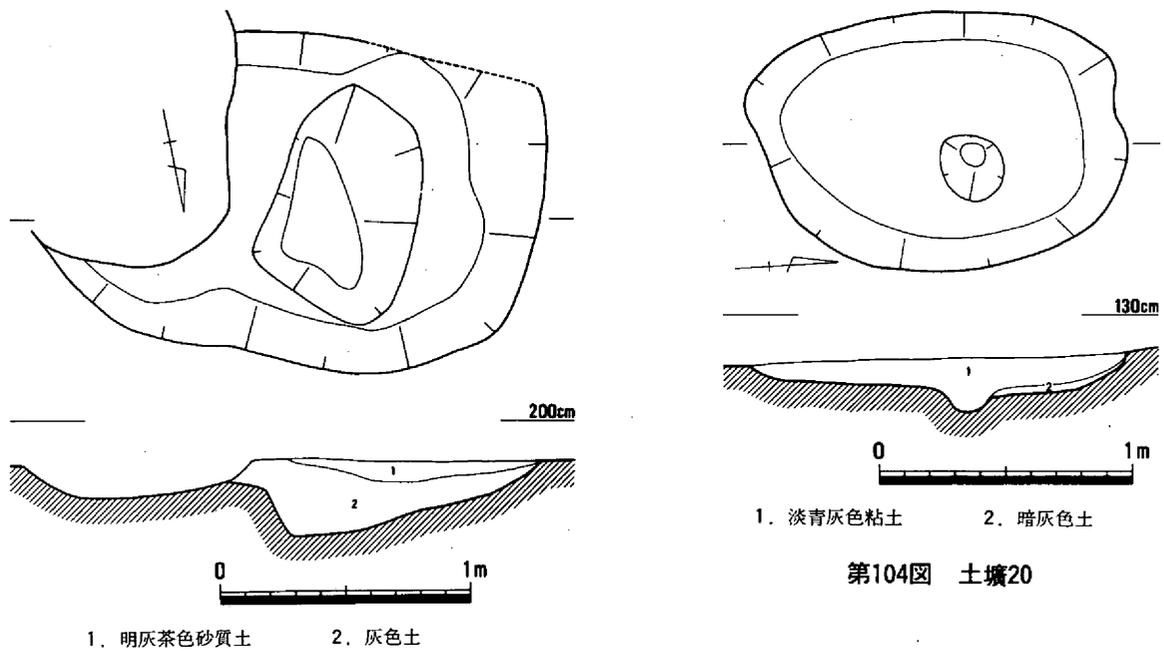
竪穴住居内からはかなりの遺物の出土があった。なかでも、完形に近い大形土器片の353・360~362・364・365・375などはほぼ床面に接した状態で検出された。土器の器種としては、罎・壺・甕・高杯・鉢がある。罎(350~353)は口径より腹径が大きい形態で、胴部内面はヘラケズリ調整される。壺(360~362)の口縁部は直口で、口縁端面は水平に整えられ、肩の張った球形の胴部をしている。甕(354~358)の口縁部は弓状の屈曲をもっている。高杯(363~374)の脚部内面はヘラケズリで調整されている。櫛が床面近くで出土し、南西隅では鉄器が床面から浮いた状態で見つかり、また、ガラス製小玉も床面から検出された。東辺中央土壌の北辺に平行して幅7cmの木片も出土した。出土した土器の中には須恵器は認められず、その年代は5世紀の前半とみられる。(岡本)



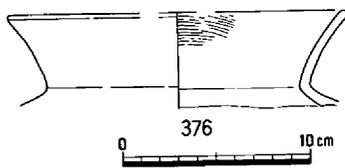
第101図 竪穴住居 8 出土遺物 (1)



第102図 竪穴住居 8 出土遺物(2)



第104図 土壇20



第103図 土壇19・出土遺物

(2) 土壇

土壇19 (第103図、図版19)

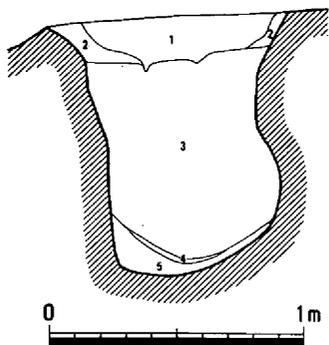
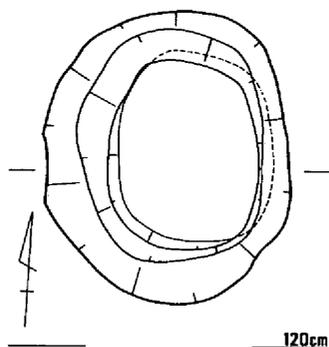
305E区で検出された土壇で、東側は土壇20に切られている。平面形は東西に長い長方形形状を呈するが、中央部の底部はさらに一段深くなる。規模は現存長1.3m、幅1.3m、深さ30cmを測る。(平井)

土壇20 (第104図、図版19)

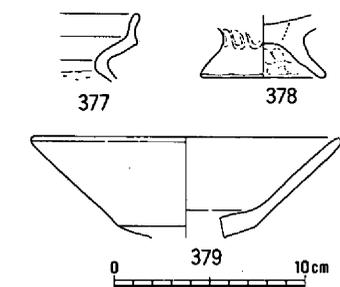
305E区で検出された土壇で、平面形は長楕円形を呈する。規模は長さ1.5m、幅1m、深さ20cmを測る。底部はほぼ平坦であるが、中央付近に浅い穴が穿たれている。遺物は出土しなかったが、検出面から古墳時代に属すると考えられる。(平井)

土壇21 (第105図、図版19)

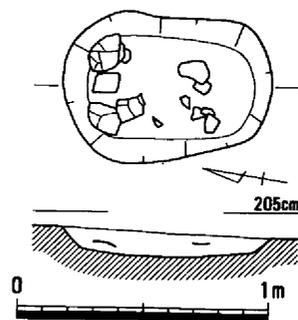
305E区で検出された土壇で、平面形は楕円形を呈する。規模は長さ1.15m、幅95cm、深さ1mを測



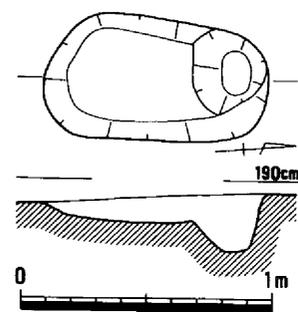
第105図 土壌21・出土遺物



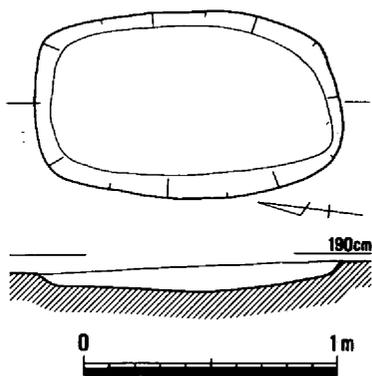
1. 灰褐色砂質土(炭・焼土含む)
2. 淡緑灰色砂質土
3. 淡灰色微砂質粘土
4. 炭化物
5. 灰褐色粘質土



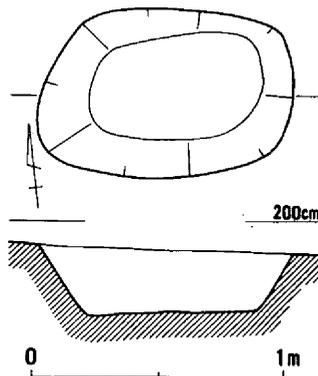
第106図 土壌22



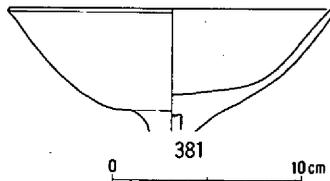
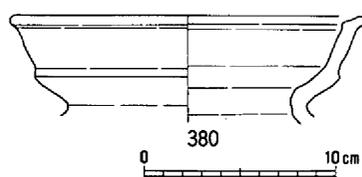
第107図 土壌23



第108図 土壌24・出土遺物



第109図 土壌25・出土遺物



る。土壌の底部は東側に向かって高くなるように傾斜し、壁はほぼ垂直に立上るが、北から東側は底部より広く抉れている。埋土は底部近くに炭化物の層が薄く見られ、その上に淡灰色微砂粘質土が厚く堆積している。

遺物は土器をわずかに含むが、自然遺物としてヒョウタンが出土した。土壌の時期は出土した土器から百・古・Ⅱと考えられる。(平井)

土壌22 (第106図、図版19)

305F区で検出された土壌で、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長さ80cm、幅60cm、深さ10cmを測る。土壌底部はほぼ平坦で、壁は緩やかに立上る。土壌内には土器片が認められ、埋土は炭を含む暗茶褐色土である。土壌の時期は古墳時代の前半期と考えられる。(平井)

土壌23 (第107図)

305F区で検出された土壌で、平面形は長楕円形を呈する。規模は長さ90cm、幅50cm、深さ25cmを測る。土壌の底部は少し北に向かって深くなり、北端には円形のピットが穿たれる。埋土は炭を多く含む

茶褐色土である。土壌の時期は土器片と検出面から古墳時代の前半期と考えられる。(平井)

土壌24 (第108図)

305F区で検出された土壌で、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長さ1.2m、幅75cm、深さ10cm前後を測る。底は中央部がやや深くなるが、ほぼ平坦で、壁は急傾斜で立上る。

遺物は土器片がわずかに出土した。280は壺の口縁部で、くの字状に外反後さらに外反ぎみに長く立上る。端部はわずかに外方へつまみだしている。時期は百・古・Ⅱと考えられる。(平井)

土壌25 (第109図)

305F区で検出された土壌で、平面形は長楕円形を呈する。規模は長さ1m、幅68cm、深さ25cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁は急傾斜で立上る。

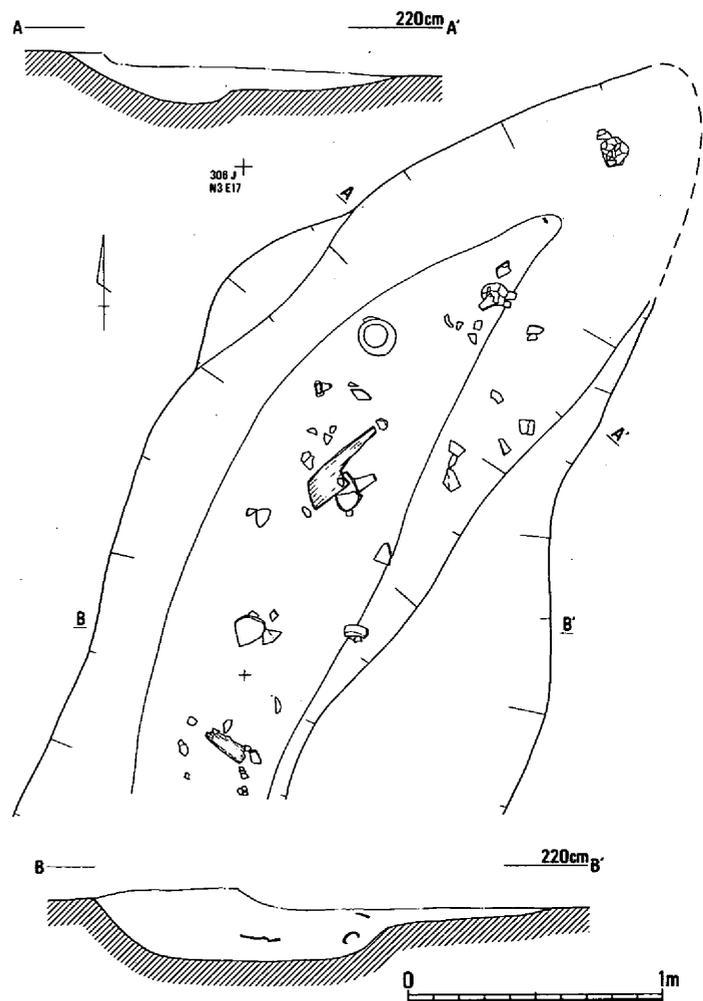
遺物は土器がわずかに出土した。381は高杯の杯部で、狭い杯底部から外方へ長く立上る。端部は丸く収めている。時期は百・古・Ⅲと考えられる。(平井)

土壌26 (第110・111図)

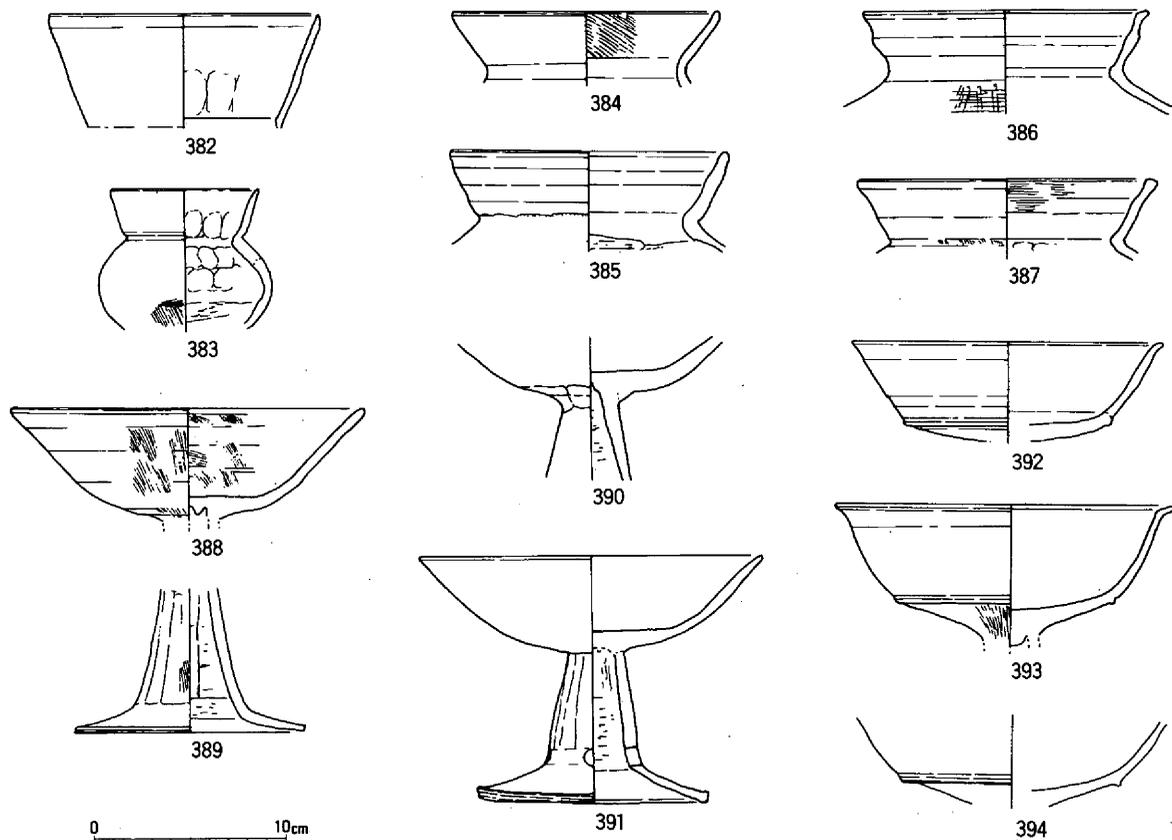
305J区の南東隅に検出された、溝状の比較的大ぶりの土壌である。土壌の南側は未調査区に延びているため全容はつかめないが、現状での最大長は3.5m、最大幅は1.8m、深さは25cm前後を測る。底の最深部は北西側に寄っており、やはり溝状に細長い。埋土は、炭と焼土を含む単一の灰褐色粘質土であり、おもに底からやや浮いた形で中程から多くの土器の出土をみている。また、底近くの二箇所に木質が検出されたが、ほとんど朽ちており、木器であるかどうかの判定はつかなかった。

土器の量は比較的少なく、小破片が大勢を占める。完形に近いのは高杯391のみであった。382は口縁のみであるが、壺と思われる。甕は「く」の字口縁とそれに近い二重口縁の二者があり、竪穴住居7出土の甕と類似する。384の小形壺は、前時代の埴からの系譜がたどれる器種で、この土器に限れば、屈曲部にやや窪みをもつ。高杯は、杯底部から口縁部が緩やかに立ち上がる388・391と、変換部に接続部の突帯様痕跡をわずかに残す392～394の二形態がある。

遺構の性格は今一つつかみにくいが、ゴミ穴の類ではなかろうか。土器の形態的特徴から、百・古・Ⅲの時期に比定される。(柳瀬)



第110図 土壌26

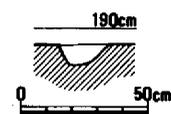


第111図 土壙26出土遺物

(3) 溝

溝31・32・33

(第112図)



第112図 溝32

溝31は305C・D区

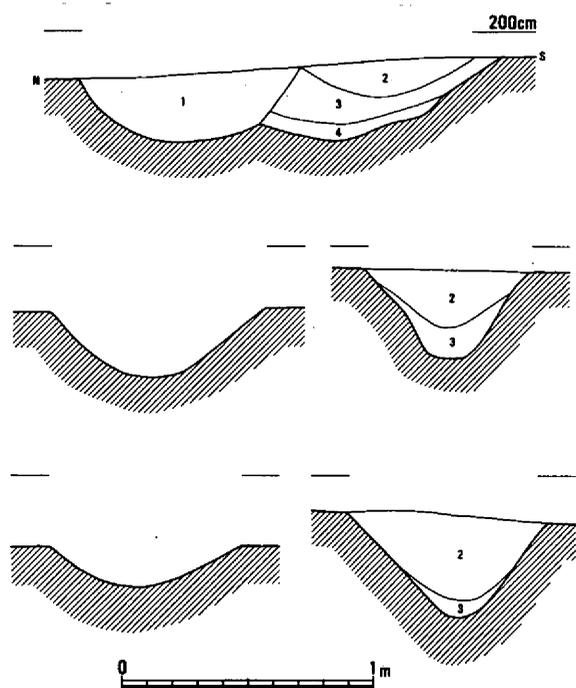
で検出され、東西方向に流走する。溝33は305F区で検出され、溝31と同じく東西方向に流走する。溝32(第112図)は305E区で検出され、南北方向に流走する。このうち溝31と33は深さが10cm未満と浅く、幅も一定しない。埋土は茶灰褐色土である。溝32は幅20cm、深さ10cmあまりの細い溝である。埋土は灰白色粘土である。時期は検出面からいずれも古墳時代と考えられる。(平井)

溝34・35(第113図、図版18)

303L区から304L区にかけて検出された。

2条の溝は切合関係にあり、溝34が新しい。

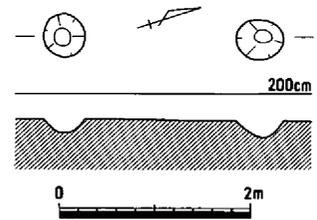
溝34は溝底の海拔高度が東端で153cm、西



- 1. 灰褐色粘質土
 - 2. 灰茶褐色～青灰色粘性砂質土(炭粒多)
 - 3. 暗灰色～淡青灰色粘性砂質土(炭粒多)
 - 4. 暗青灰色粘性砂質土
- (3との境砂薄層)

第113図 溝34(左)・35(右)

端では156cmを測り、流水の方向はわからない。幅が65~90cm、深さは30cmを測る。溝壁の傾斜は緩やかで、底部も凹面をなし、断面形は椀状を呈する。埋土は灰褐色粘質土1層であった。検出が困難であったが、調査区の西端で溝35と重複していたことから確認できた。柱穴列2は埋没後に建った。



第114図 柱穴列2

溝35は北西から南東へ流れ、「百間川兼基遺跡1・百間川今谷遺跡1」の溝45に続く。既報告部分では東肩部に柱穴列を伴っていたが、今回の報告部分では、南東端で長径が推定で40cm前後、深さ9~12cmのごく浅い柱穴を2個検出したにすぎない。北西から南東へ下る溝底の傾斜に対応して、柱穴の底も高くなっていくからであろうか。もっとも、北西端の溝底の海拔高度は153cm、南東端のそれは148cmとそれほどの差はなく、検出全長からすれば、流水の方向を問えるほどではない。溝35の規模は幅が65~110cm、深さは41cmを測る。溝壁の傾斜は溝34に比べてかなり急で、断面の形はV字形に近くなっていた。埋土は3層で、溝として機能していた時の堆積かと考えられる第2・3層には炭粒が多く含まれていた。また、砂の小塊もみられた。溝35の時期は遺物が出土しなかったため明確ではないが、「百間川兼基遺跡1・百間川今谷遺跡1」では、溝45の時期を出土遺物から百・古・Ⅲと考えている。(岡本)

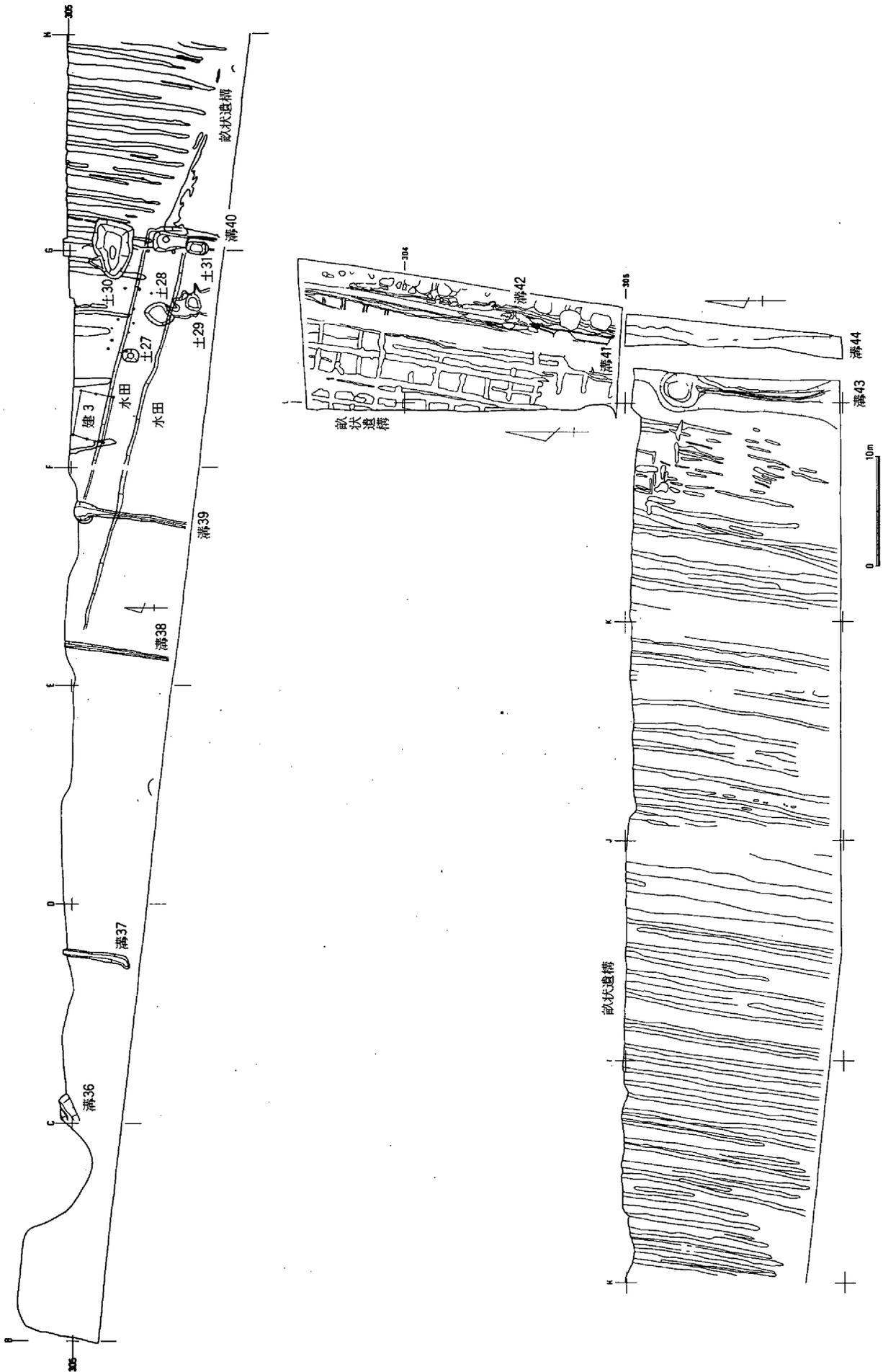
(4) 柱 穴 列

柱穴列2 (第114図)

304L区の中央北端で検出された。同規模の2基の柱穴が210cmの距離で対置していた。北柱穴は長径が50cm、深さは18cm、南柱穴は長径が46cm、深さが15cmを測る。埋土はいずれも明褐色粘質土であった。周辺には他に柱穴は認められず、その配置と規模から住居の柱穴の可能性がある。(岡本)

註

註1 平井泰男「百間川兼基遺跡出土人形土製品」『月刊考古学ジャーナル』No.238 ニュー・サイエンス社
1984年



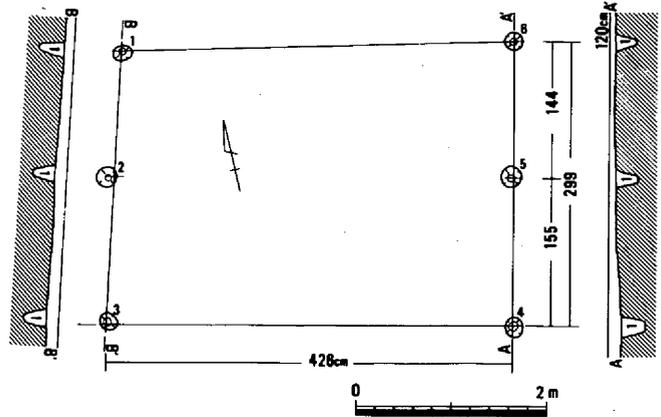
第115図 大上田調査区中世以降の遺構 (S=1/500)

4. 中世の遺構と遺物

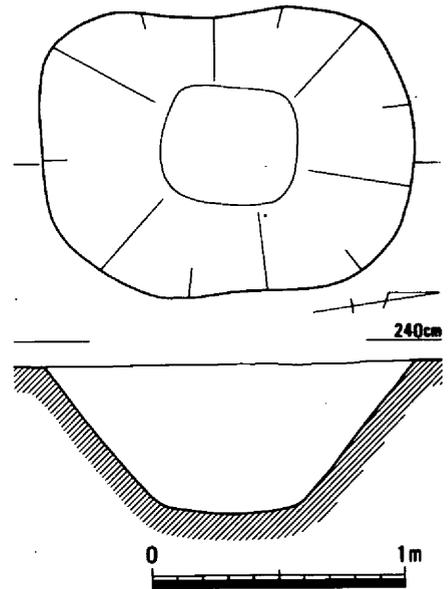
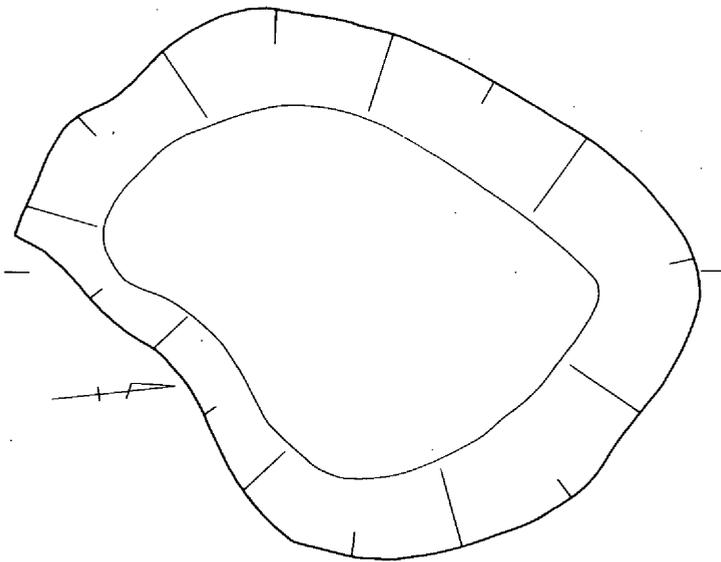
(1) 水田 (図版20)

305 E~G区で検出された、水田と考えられる段である。南側と北側の田面の比高差は5 cm前後を測る。南側の水田は、検出面から10cmあまり低い位置に田面が認められた。田面の上には灰黄色土が堆積しており、水田層は茶褐色土である。田面はGライン付近で直角に折れ曲るが、水田層の確認できる西端までの37m間には畦畔などの区画は見られない。

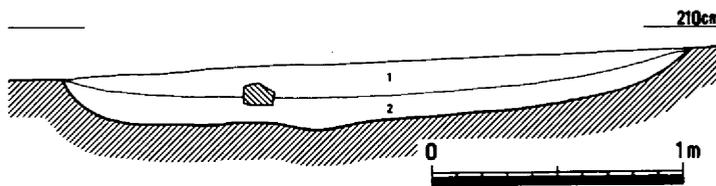
北側の水田は東端を南側の水田と共有するが、北側へ3 mあまり拡張されている。黄灰色土の検出面から水田面までの比高差は10cmあまりを測る。南側の水田同様、水田層の上には灰黄色土の堆積が認められた。また畦畔などは検出されていない。時期はおそらく中世と考えられる。



第116図 建物3

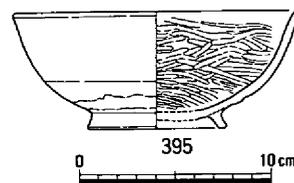


第117図 土壌27



1. 淡茶褐色土 2. 茶黄灰色土

第118図 土壌28・出土遺物



(2) 建 物

建物3 (第116図、図版20)

305F区で検出された、1間×2間の建物である。桁行の長さは4.26m、梁行の幅は2.99mを測る。柱間間隔は一定せず、全体的にややいびつになっている。

柱穴は径20cm前後の円形で、深さも25cm前後に一定している。埋土は灰黄色土で、遺物は出土しなかった。時期は検出面および柱穴の埋土から中世と推定される。(平井)

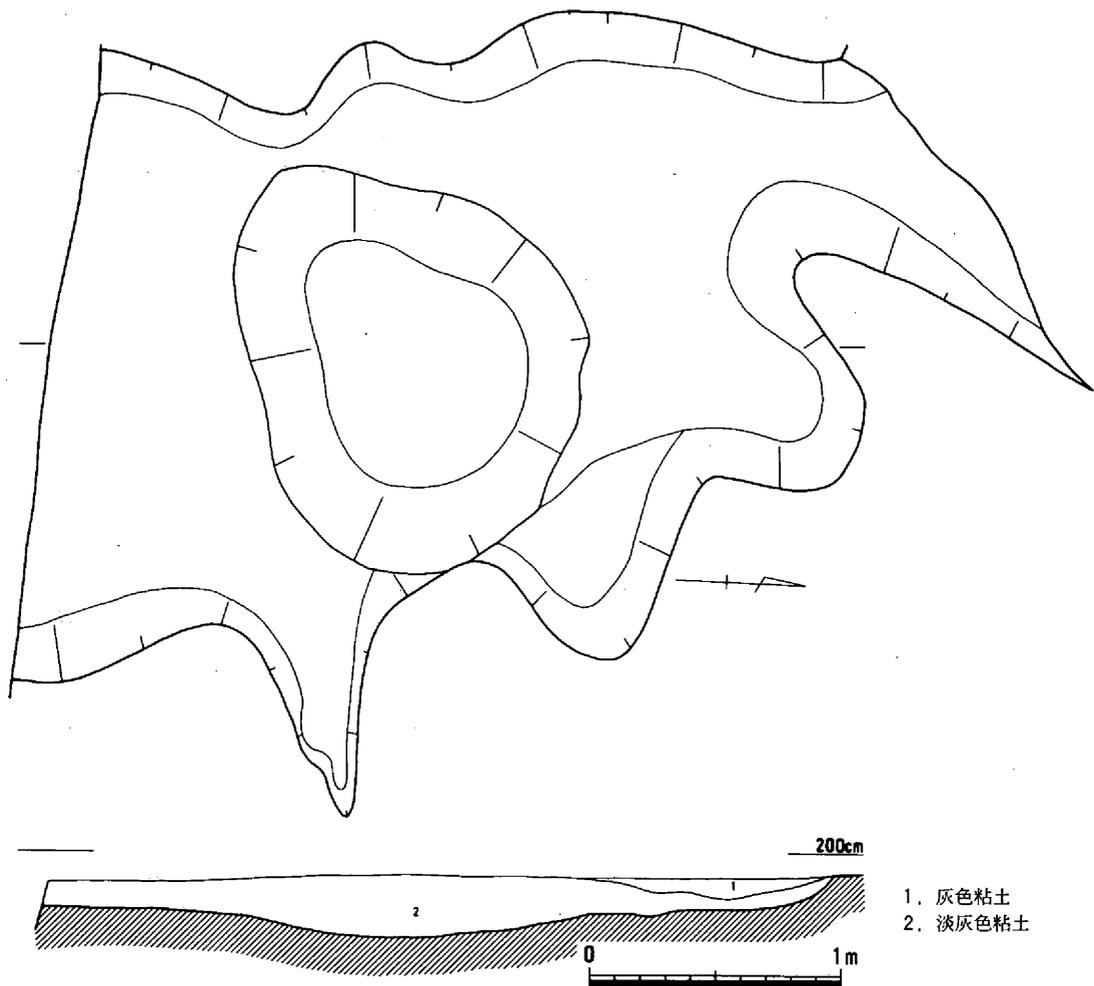
(3) 土 壙

土壙27 (第117図、図版21)

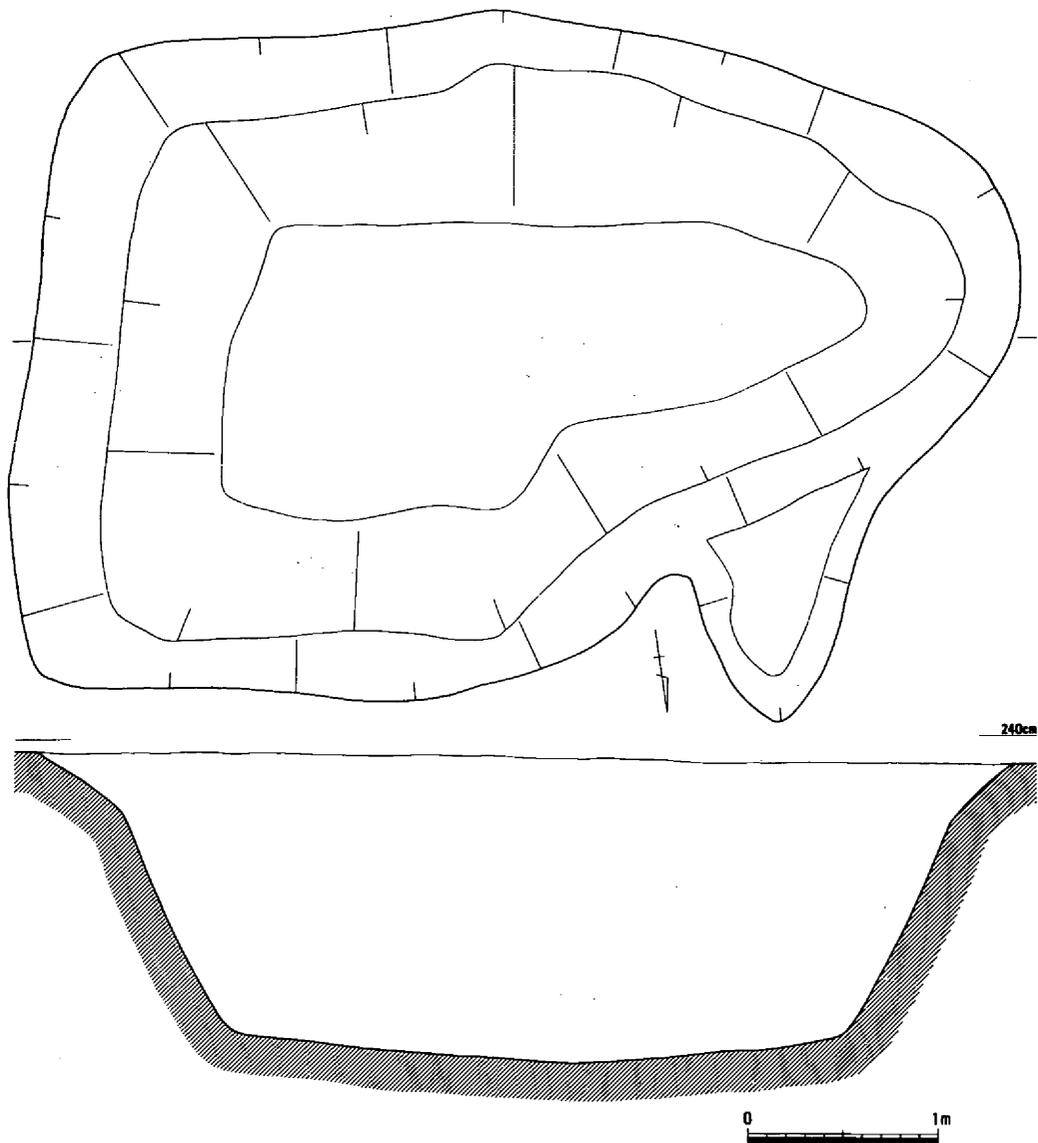
305F区で検出された土壙で、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長さ1.45m、幅1.1m、深さ58cmを測る。底部は平坦で壁は急傾斜で立上る。埋土は淡灰色砂質土と茶褐色土が混在しており、人為的に埋め戻した様子がうかがえる。時期は検出面から中世と考えられる。(平井)

土壙28 (第118図)

305F区で検出された土壙で、平面形はやや歪んだ楕円形を呈する。南側にある土壙29とは切り合う関係になるが、その前後の関係は確認できなかった。規模は最大長2.5m、幅1.95m、深さ25cmを測



第119図 土壙29



第120図 土坑30

る。時期は出土した土器から鎌倉時代と考えられる。

(平井)

土坑29 (第119図)

305F区で検出された土坑で、平面形は不定形を呈する。底面の中央部には浅い凹みがみられるが、それ以外はほぼ平坦である。埋土は大きく2層に分けられるが、いずれも灰色を基調にした粘土である。遺物は出土しなかった。時期は検出面および埋土から中世と考えられる。

(平井)

土坑30 (第120図、図版21)

305F・G区で検出された土坑である。平面形は、東側が直線的で方形状を呈するのに対し、西半部は西端が尖りぎみになるように急激に幅を減じてゆく。規模は長さ3.8m、幅2.7m、深さ1.2mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は急傾斜に立上るが、上端近くで緩やかな傾斜になる。

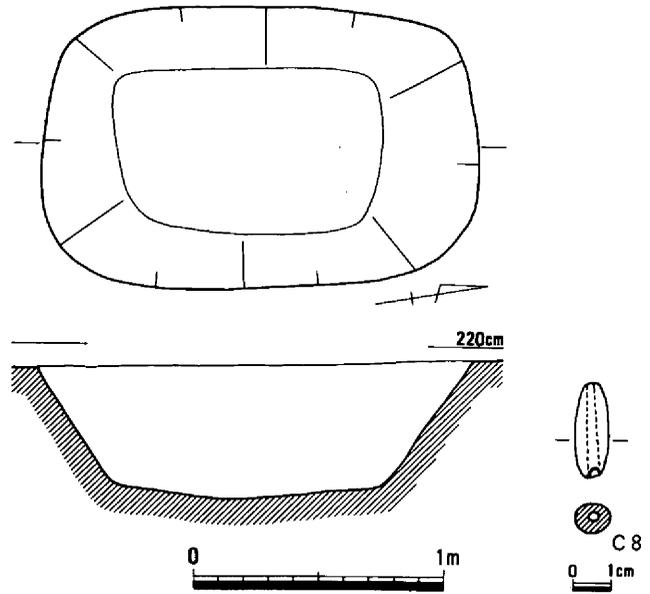
埋土は茶灰色砂と灰色砂がブロック状に混在しており、人為的に埋め戻されたような状況が見られる。時期については遺物がないため明確でないが、検出面と埋土から中世と考えられる。

(平井)

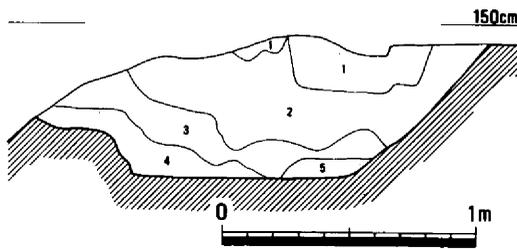
土壇31 (第121図、図版21)

305F・G区で検出された土壇で、溝40が埋まった後に掘られている。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長さ1.74m、幅1.1m、深さ50cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は急傾斜で立上る。

埋土は灰色土と茶黄灰色土のブロックが混在することから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。なお、床面には薄い炭の層が認められた。遺物は土錘が1点出土したが、土器がないため詳細な時期については不明である。検出面および埋土から中世と推定される。(平井)

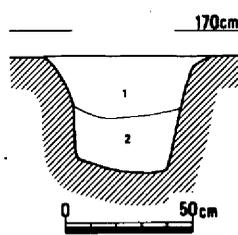


第121図 土壇31・出土遺物

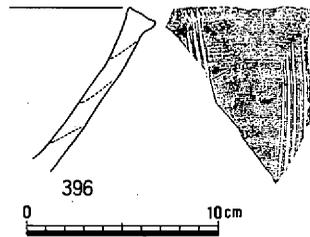


- 1. 暗灰褐色土
- 2. 灰黄色砂質土
- 3. 茶褐色土
- 4. 灰黄色土
- 5. 灰青色砂

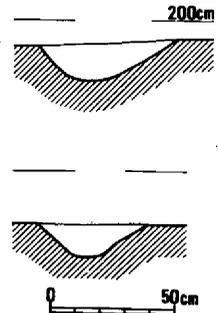
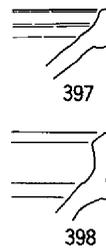
第122図 溝36



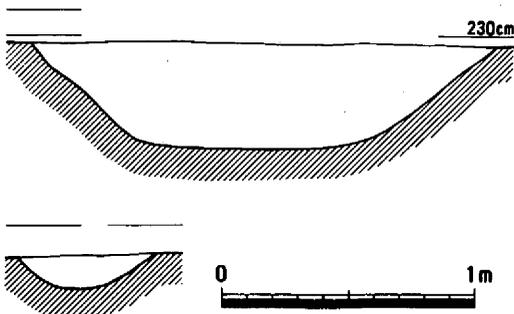
- 1. 淡青灰色土
- 2. 灰褐色土



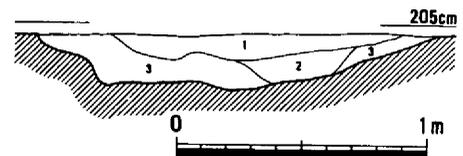
第123図 溝37・出土遺物



第124図 溝38



第125図 溝39



- 1. 暗灰色粘質土
- 2. 灰色粘土
- 3. 淡灰色粘土

第126図 溝40

(4) 溝

溝36 (第122図)

304・305C区で検出された溝で、北東から南西方向に流走するものと思われるが、一部を検出したのみであることから詳細は不明である。規模は幅が1.7m以上、深さ55cm以上あったものと考えられる。底面は平坦で、南側の壁はやや急傾斜に立上るが、北側の壁は少し立上った後平坦部を形成する。埋土は1・2層と2～5層に大別できる。

時期は検出面および埋土などから中世から近世と考えられる。(平井)

溝37 (第123図)

305C区で検出された溝で、ほぼ南北方向に流走するが、南端はわずかに西へ向って折れ曲って途切れる。規模は幅60cm前後、深さ45cmを測る。底はほぼ平坦で、壁は垂直に近い傾斜で立上るものの、上端近くではやや緩やかになる。埋土は上下2層に分かれる。

遺物は土器が少量出土した。図示した土器はすべて備前焼の挿鉢である。口縁端部があまり拡張されないものから、上方への立上りが顕著なものまで認められる。(平井)

溝38 (第124図)

305E区で検出された溝で、南北方向に流走するが、南に行くほど幅が細くなる。規模は北側で幅55cm、南側で45cm、深さは10cm前後を測る。底は曲線を描き、壁は緩やかに立上る。

遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、検出面および埋土などから中世と推定される。(平井)

溝39 (第125図)

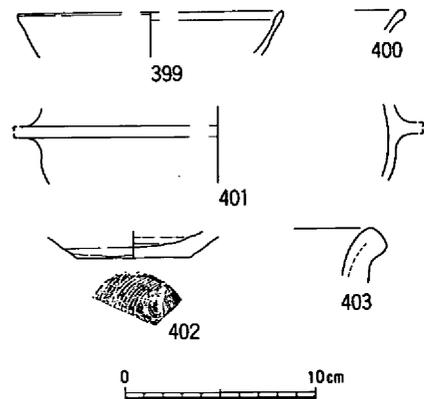
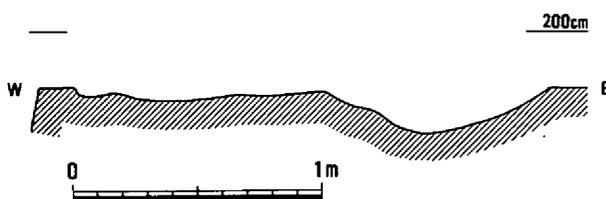
305E区で検出された溝で、ほぼ南北方向に流走するが、北端に楕円形状の拡張部が認められる。規模は拡張部で幅1.8m、深さ40cmを測るが、それ以外では幅50cm、深さ10cm前後である。中世の水田層を切っており、埋土は灰黄色粘質土である。

遺物は備前焼の細片が出土しているが、詳細な時期については不明である。検出面および埋土などから中世と考えられる。(平井)

溝40 (第126図)

305F・G区で検出された溝で、中世水田の東端を南北方向に流走する。中世水田との関係は明確でないが、溝の始まりは水田の北端付近になる。溝の北端はやや幅が広く1.9mを測るが、南側は幅90cmあまりになる。底部はやや凹凸があり、壁は緩やかに立上る。

遺物がないため詳細な時期は不明であるが、検出面および埋土などから中世と推定される。(平井)

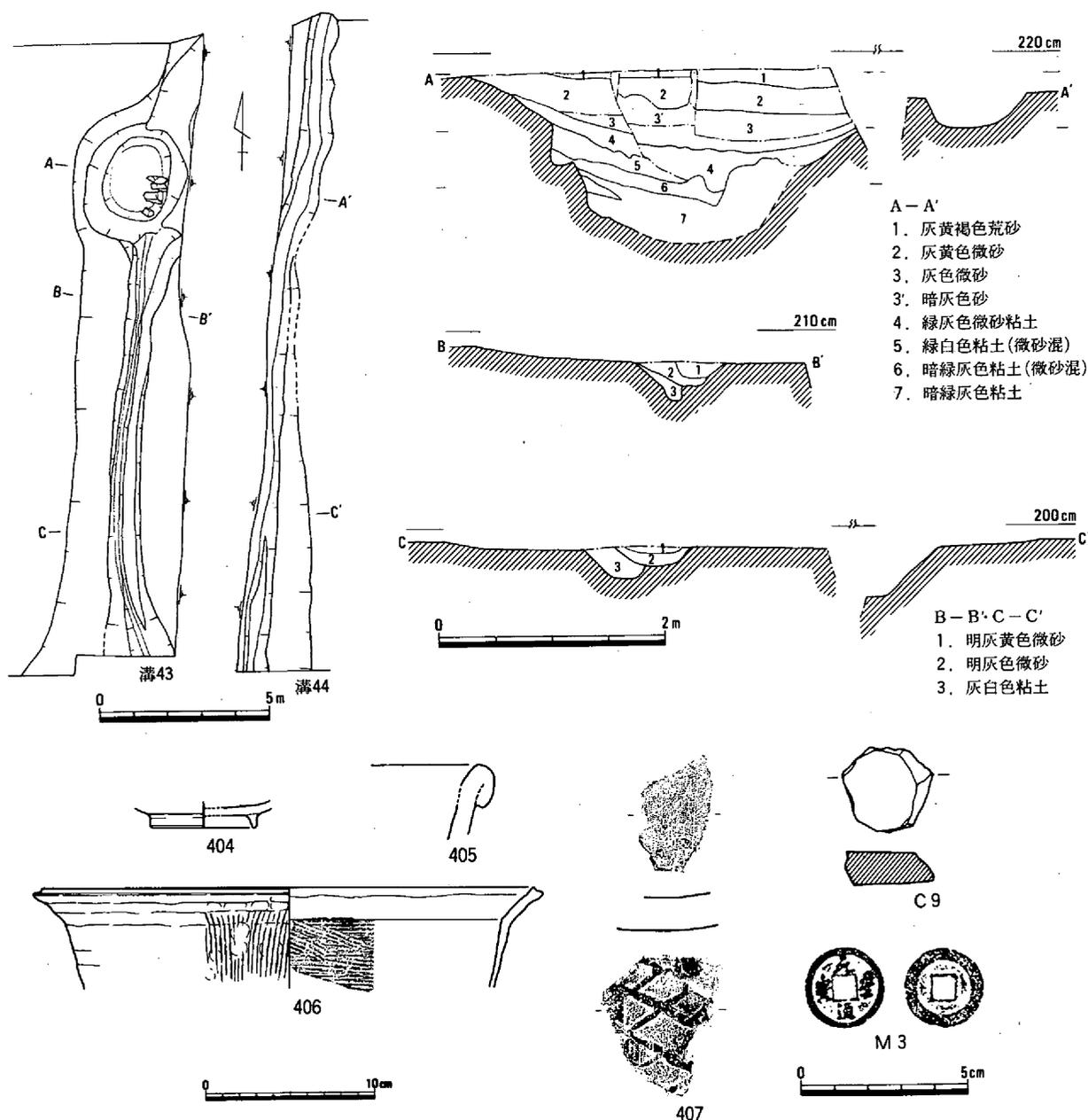


第127図 溝41・42・出土遺物

溝41・42 (第127図、図版22)

304L区の中央を南北に走る2条の溝である。肩部が接する程に接近しつつ平行していた。埋土はともに淡灰黄色粘性砂質土であった。溝底はいずれも北から南に傾斜していたため、溝42では調査区の北端でごく浅く、溝41は調査区の南部で7.5mばかりを検出したにすぎない。溝の規模は、調査区の南端で計測すると、溝41は幅が80cm、深さは7cm、溝42が幅は86cm、深さが22cmであった。この2条の溝は、その西方に展開する畝状遺構と平行するようにもみられ、あるいはその東限を画するものかもしれない。なお、溝42は後述する溝44と繋がる可能性が強いが、その間に近世以降の遺構との重複が激しいため、別に記した。

出土土器のうち399・400は土師器碗の口縁、401は土師器羽釜、402は須恵器杯、403は備前焼壺の口縁端部である。399~402は溝42、403は溝41出土である。鎌倉時代のものか。(岡本)



第128図 溝43・44・出土遺物

溝43・44 (第128図、図版22)

305K～L区にかけて隣接して検出された、ほぼ南北方向の溝である。両溝の間には、2～2.5m幅にわたって工事による掘削が南北に延び、それによってとくに溝44の約半分が削られている。

溝43は2条の溝がほぼ重複しており、改修の手が加わっている。上位の溝は幅70～80cm、深さ20cm前後、下位の溝はほぼ同じ幅と深さ30～35cmを測る。それらは、北端近くで池状に落ち込む溜りと接続しているが、溝底のレベルは南―北端間で約10cmの比高差をもって北に低いことから、溜りは灌漑用の水溜め遺構とみられる。この遺構の東端も一部削平の影響を受けているが、ほぼ円形を呈す。推定径約4m、推定深さ

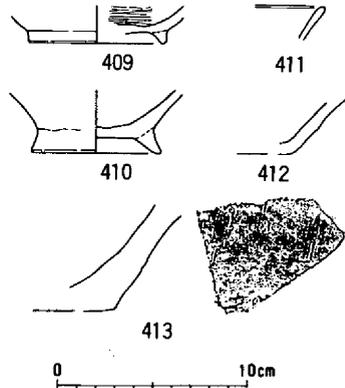
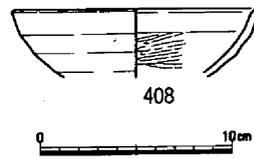
約1.5mを測る。溝44は幅約90cm、深さ25～40cmを測り、埋土は灰褐色粘質土を呈す。溝底のレベルは、南―北端間で20cm近くの比高差で南に低く、溝43と逆方向に流下する。なおこの溝は、北側の調査区の溝42に対応する。

遺物は、C9の備前焼円板・M3の「元豊通寶」(1078年)が溝43上位、405の備前焼壺片・407の瓦片が同下位、404・406が溝44から出土している。これらの遺物のうち407とM3は平安時代に遡るが、両溝は鎌倉時代後期から室町時代初めにかけて機能していたとみられる。また、位置関係や埋土の状況から、後述する畝状遺構との関連性が予測される。(柳瀬)

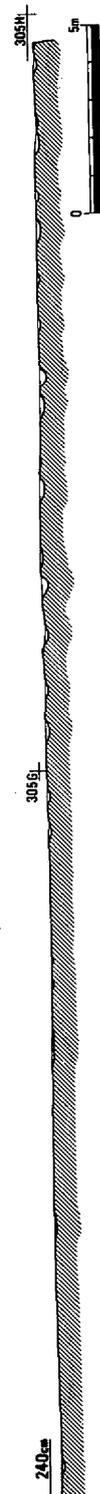
(5) 畝状遺構 (第129・130図、図版22・23)

305F～K区では、基本的に灰黄色あるいは灰褐色の粘質土で埋まった南北方向を基調にした溝痕跡が多数検出されている。溝は幅20～70cm、深さ2～12cmと場所の削平頻度によって、その残存状況はまちまちであり、重複しているところもある。また、305K区の中央から東部分は、南北方向の溝がほとんど底部の痕跡しか残していないが、部分的に東西方向の痕跡も認められる。両方向の溝は後述する303・304L区に顕著であるが、既調査区(「百間川兼基遺跡1」所収)の状況からすれば部分的なものであろう。溝と溝に挟まれた部分がいわゆる畑の畝と解釈されるが、その幅は1.5m前後と思われる。遺物はほとんど出土していないが、408や東側に隣接する溝43・44との関係からほぼ同時期とみてよい。(柳瀬)

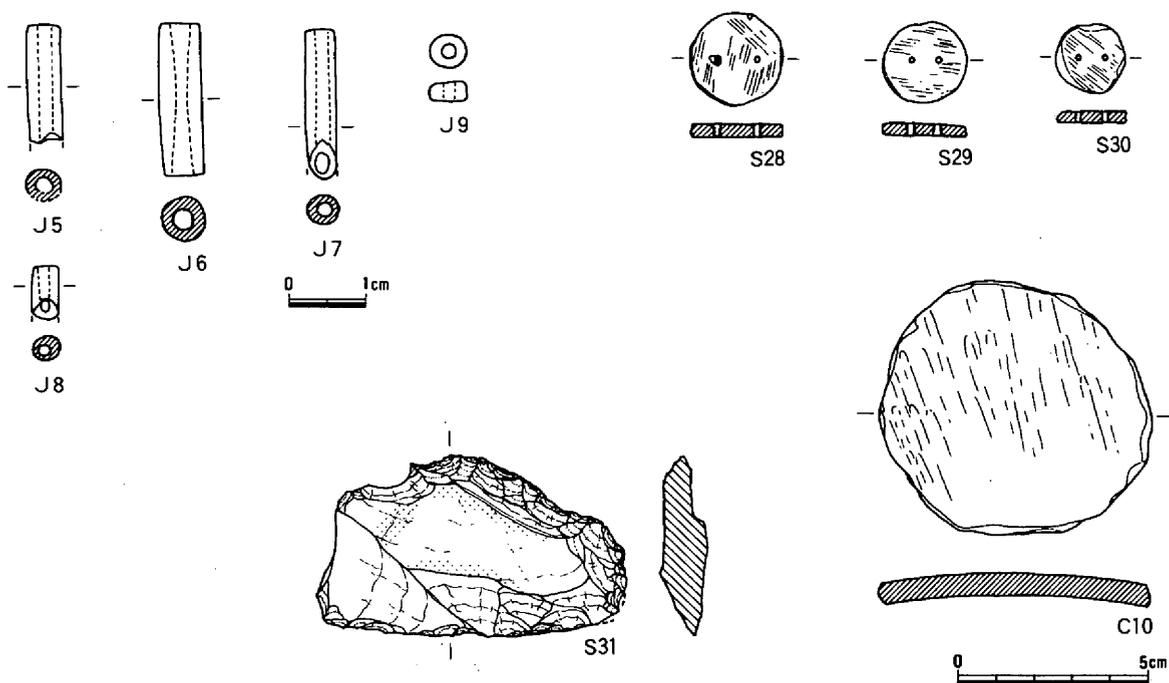
303・304L区のはほぼ全域では格子状の溝が検出された。しかし、溝の深さは10cm前後と遺存状態が悪く、規格性を十分には把握できなかった。全体的には、南北溝が東西溝よりも深く、304Lポイントのすぐ東にある2条の南北溝で重複関係が認められることから、複数時期の溝が重なっていると思わ



第129図 畝状遺構出土遺物



第130図 畝状遺構断面 (S=1/200)



第131図 包含層出土遺物

れる。東西溝の在り様も考慮に入れると、重複関係にある東側の溝を境界として、以東を一つの区画とみることができる。この区画内の東西溝は、幅が30~60cmであり、その間隔は中心間で測ると、調査区北部で1.8m、中・南部で2.3mであった。南北溝はやや複雑で、溝の深さでは境界の溝から東へ順番に深・浅・深・浅と並び、浅い溝は部分的な残存であった。深い方の溝を同時の遺構と考えると、その間隔は2.3mを測る。溝の幅は55~75cmであった。なお、浅い方の溝の間隔も2.3mと等しい。これらの溝は農耕にかかわる遺構、すなわち、畑の畝の間の溝と考えたい。格子状を呈していることについては、畝の方向が変えられたために生じたものと思われる。出土土器のうち413は備前焼の壺の底部で、外面は褐色を呈している。 (岡本)

5. 包含層の遺物

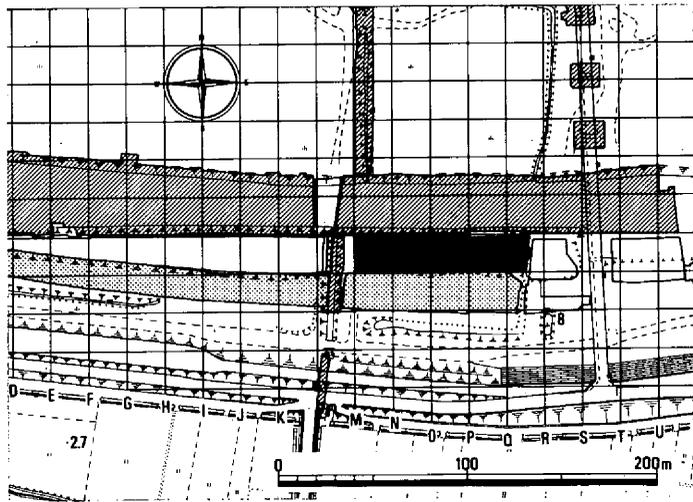
大上田調査区の包含層からは弥生時代から中世にかけての遺物が出土しているが、主体をなすのは弥生時代と古墳時代の土器である。ここでは土器以外の遺物(第131図)を図示した。

J5からJ8は碧玉製の管玉で、J6は二方向から穿孔が施されているが、それ以外は一方向からと思われる。J9はガラス小玉である。S28からS30は滑石製の双孔円板である。S31は削器、C10は土器片を加工した土製円板で、中央に穴を穿ち紡錘車に仕上げられる前に廃棄されたものであろうか。 (平井)

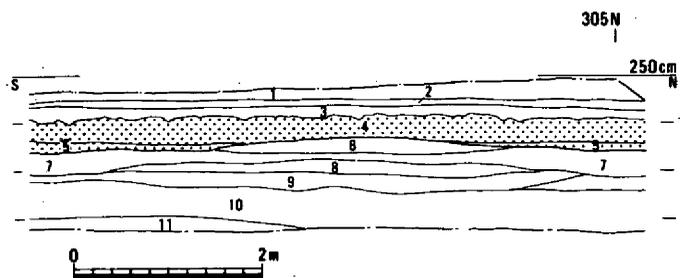
第5節 東苗代調査区

1. 調査区の概要

この調査区は前節大上田調査区の東側に当たり、調査報告済みの調査区（「百間川兼基遺跡1」第3章第2節所収）の南側の305M～O区が対象である。基本土層は、第133図断面に示すように、第1・2層は中世の水田または畑が予想され、第3層は百・古・Ⅲの土器をわずかに伴う包含層で、遺構はこの層下面で検出されている。また、第4・5層は百・後・Ⅳの洪水砂で、この層を除去した地形が後述する「高まり」などの起伏として観察される。第5層の下面が弥生時代後期の遺構検出面に当たる。第6・7層は地点によっては「高まり」の形成層に対応するが、部分的に中期後半～後期の土器を伴う包含層の可能性はある。

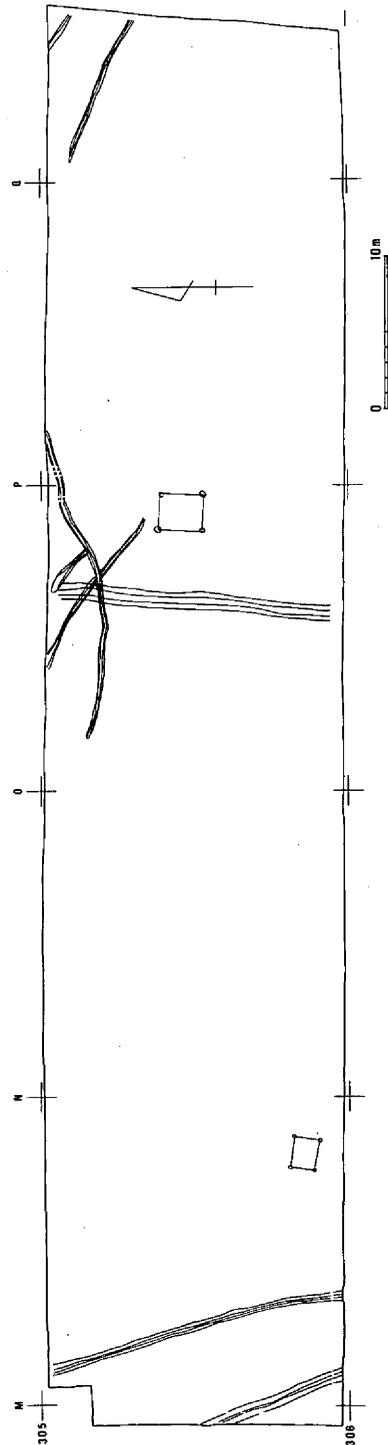


第132図 東苗代調査区的位置 (S=1/4000)



- | | | |
|-----------------|----------------|-------------|
| 1. 淡褐色粘質土 | 5. 淡褐色砂質土(洪水砂) | 9. 暗青灰色粘質土 |
| 2. 明灰色粘質土 | 6. 淡茶灰色粘質土 | 10. 淡青灰色粘質土 |
| 3. 暗褐色粘質土 | 7. 灰色微砂粘土 | 11. 淡青灰色砂質土 |
| 4. 淡茶褐色砂質土(洪水砂) | 8. 黒灰色粘土 | |

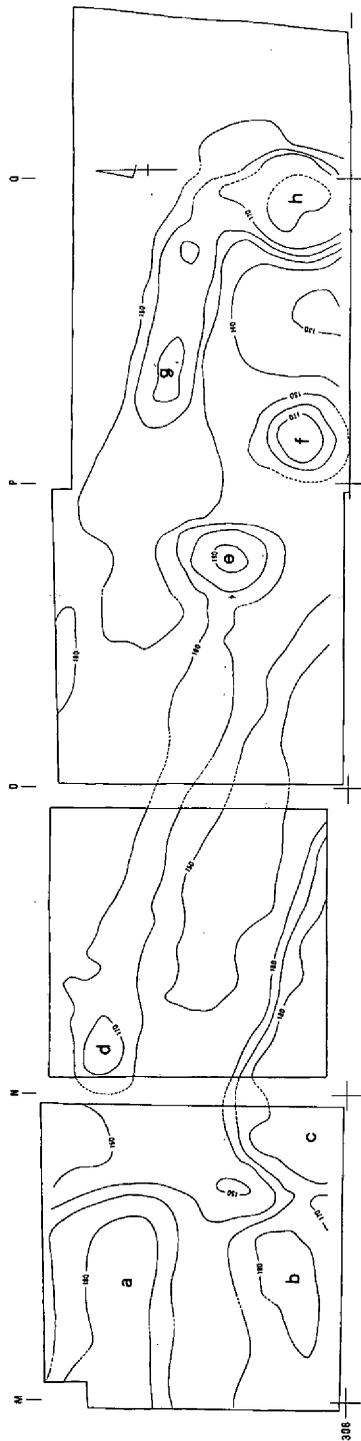
第133図 東苗代調査区の土層断面(S=1/80)



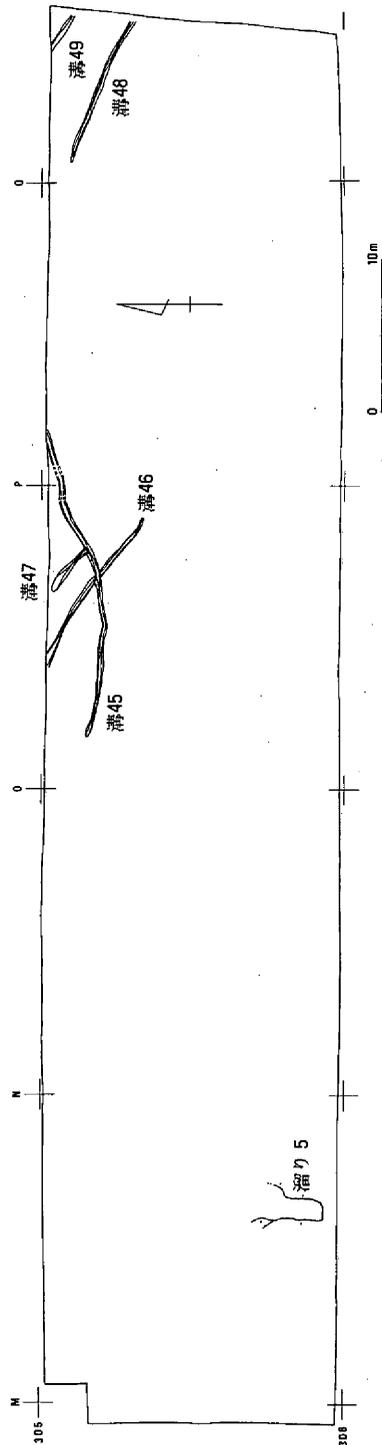
第134図 東苗代調査区の遺構全体図 (S=1/500)

そして、それ以下は無遺物層であった。

遺構密度は全体に粗で、弥生時代後期では溝5条と土器溜り数箇所、古墳時代前期の建物2棟と溝3条ほどしかない。この調査区は、各時期を通じて地点的には集落のはずれに属していたと思われる、少なくとも弥生時代後期末の洪水の前夜までは、居住には向かないそして水田化がまだ及ばない開墾前の草原が広がる状況が想定される。洪水の後になると微高地が拡大された形となり、この周辺が百・古・Ⅲの時期になってようやく集落の一部に組み込まれるに至ったと思われる。 (江見)



第135図 洪水砂除去後の自然地形 (S=1/500)



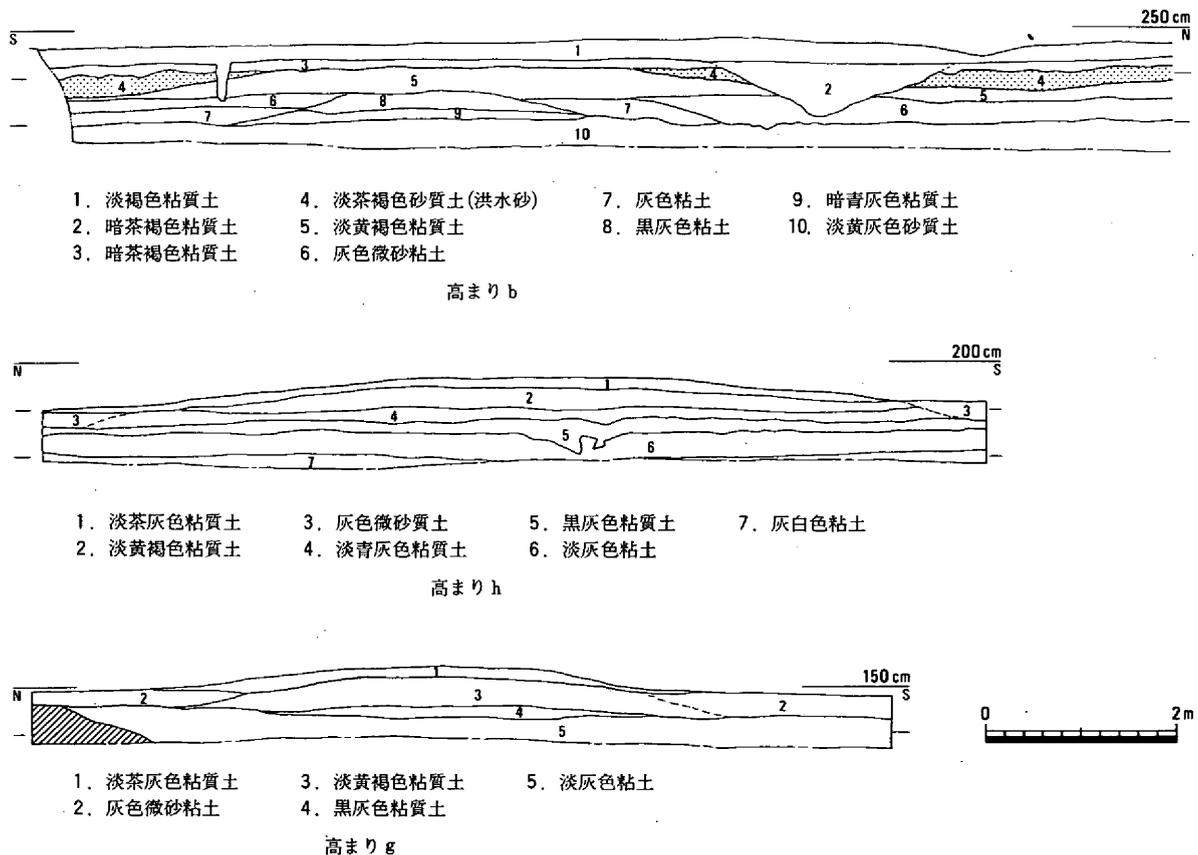
第136図 東苗代調査区弥生時代の遺構 (S=1/500)

2. 弥生時代の遺構と遺物

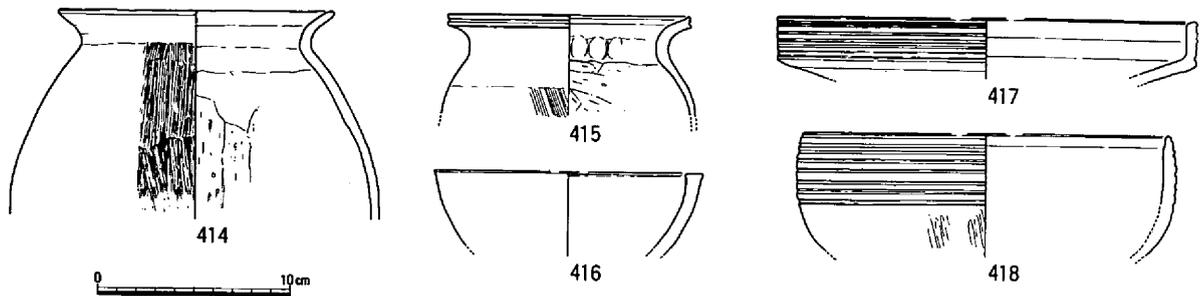
(1) 洪水砂除去後の自然地形 (第137・138図、図版24)

この調査区では、百・後・Ⅳの時期にこの周辺全域を覆った大洪水のため、微高地上にまで泥水を被ったことが砂の堆積によってうかがい知れる。淡茶(黄)褐色の洪水砂をていねいに除去すると第135図の10cmコンタの等高線で示すような自然地形が現われた。通常の調査では、当時のままの生活面は後世のなんらかの削平を受けていることが多く、住居址の床面や今回のように砂等に覆われたのち後世の開墾等が及ばなかったという条件が必要であり、限定された時期ながらこのように広い範囲で当時の状況が捉えられたのは非常に稀である。この自然地形が水田化されていないだけで、よく似た状況は、やはり同じ洪水砂で埋まった百間川原尾島遺跡や百間川沢田遺跡で検出されていた後期末の水田域の一部にもみられることを調査中から注目し、その概要については調査年度の年報でも少しふれている(註1)が、以下にやや詳しく説明を加えたい。

等高線で示された起伏は、径6~8mで20数cm~約40cmのほぼ円形の高まりや、それに繋がって帯状に長く伸びるわずかな高まりなどの「a~h」が混在して構成されている。高まりの最高所は調査区西端の「高まりa」で海拔2m前後、東端の「高まりh」で1.8m強を測るが、全体としては東に向かって徐々に低くなる。また、調査区の東になるほど微高地から遠ざかり、高まりが単独に存在する傾向がうかがえる。それらのうち、第133・137図に載せた「高まりd・b・g・h」の断面で土層堆積の状況を見ると、例えば「高まりd」の第6層、「高まりb」の第8層、「高まりg」の第4層など



第137図 自然地形高まりの土層(S=1/80)



第138図 自然地形高まりの出土遺物

に高まりの核と思われる凸レンズ状の堆積がみられ、長い年月の間の沖積作用によって微高地の背後（三角州でいうところの底辺近く）に自然の起伏が生じたと解釈される。

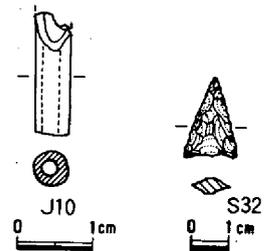
これと同じような状況は、前にふれた二つの遺跡では百間川兼基遺跡のような自然地形の場所に、後期の後半になって水田開発の手が加わり、そしてその方法が全体を削平するのではなく、高まりの間を可能なかぎり平らにし、土量の多い高まりの中心部分にまではあえて労働力を割かず、農道や大畦畔あるいは現代のグロのように逆に利用した蓋然性が高い。

遺物は洪水砂層下の茶灰色粘質土からの出土が大勢を占め、とくに「高まりb・c」の間の斜面には土器溜り5が認められ、この層が弥生時代後期後半に堆積したことは間違いない。また、その下層の淡黄褐色粘質土からは、415～418の土器片が出土していて、弥生時代中期末から後期前半にかけてこの層が核を中心に堆積したと思われる。なお、414の甕は「高まりb」の断面でいえば、高まり頂部が接する第3層の暗茶褐色粘質土からの出土で、百・古・Ⅲの時期である。（江見・柳瀬）

(2) 溝

溝45・46・47（第139図、図版25）

305O区の北寄りからP区の北西隅にかけて検出された溝群である。いずれも洪水砂除去後海拔125～130cmの面に検出されている。溝45は幅約30cm、深さ6cm前後を測り、弧状にはぼ東西方向に存在するが、底のレベルにほとんど差はなく、どちらに流下していたのか見当がつかない。溝46は幅約30cm（一部20cm、40cm）、深さ約4cmを測り、北北西から南南東方向に存在し、ほぼ中央で溝45と交差している。この溝の底のレベルも前者ととくに差はない。溝47は幅25～50cm、深さ3cm前後を測り、溝45に繋がる。方向は溝46とほぼ平行である。底のレベルは前二者よりもわずかに高い。



第139図 溝44～47出土遺物

いずれも埋土は茶褐色粘質土で、土器の出土はないが土層関係からすれば弥生時代後期後半の可能性が高い。（江見）

溝48・49

305Q区の調査区北東隅に検出された2条の溝である。O区の溝と同様に、洪水砂除去後の海拔125cm前後の面で見ついている。溝48は幅約30cm、深さ10cm前後を測り、溝46とほぼ同じ方向を示すが、位置的には溝45と繋がる可能性がある。底のレベルは海拔120cm前後を測り、溝45とほとんど変わらない。溝49は幅30～40cm、深さは北側で5cm、南側で1～2cmを測り、わずかな段差をもつ。どちらも埋土は茶褐色粘質土で、遺物は含まない。

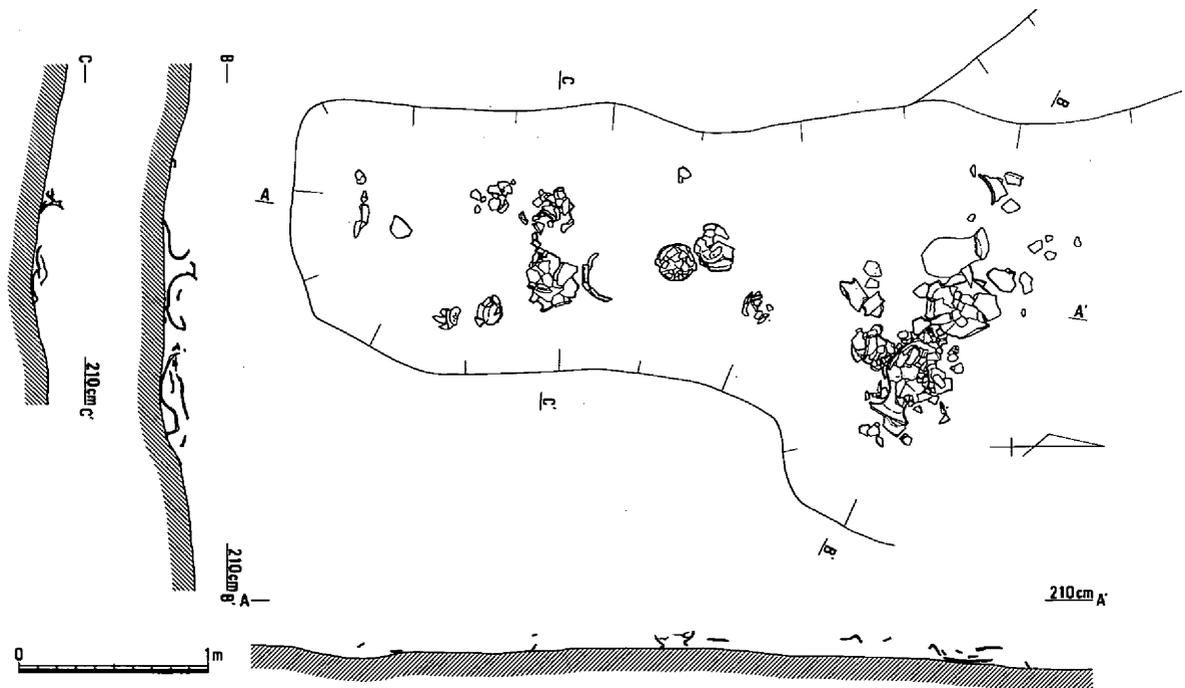
北側の調査区に該当する溝は認められず、時期の判定はむづかしいが、O区の溝と大差はないと思われる (江見)

(3) 土器溜り

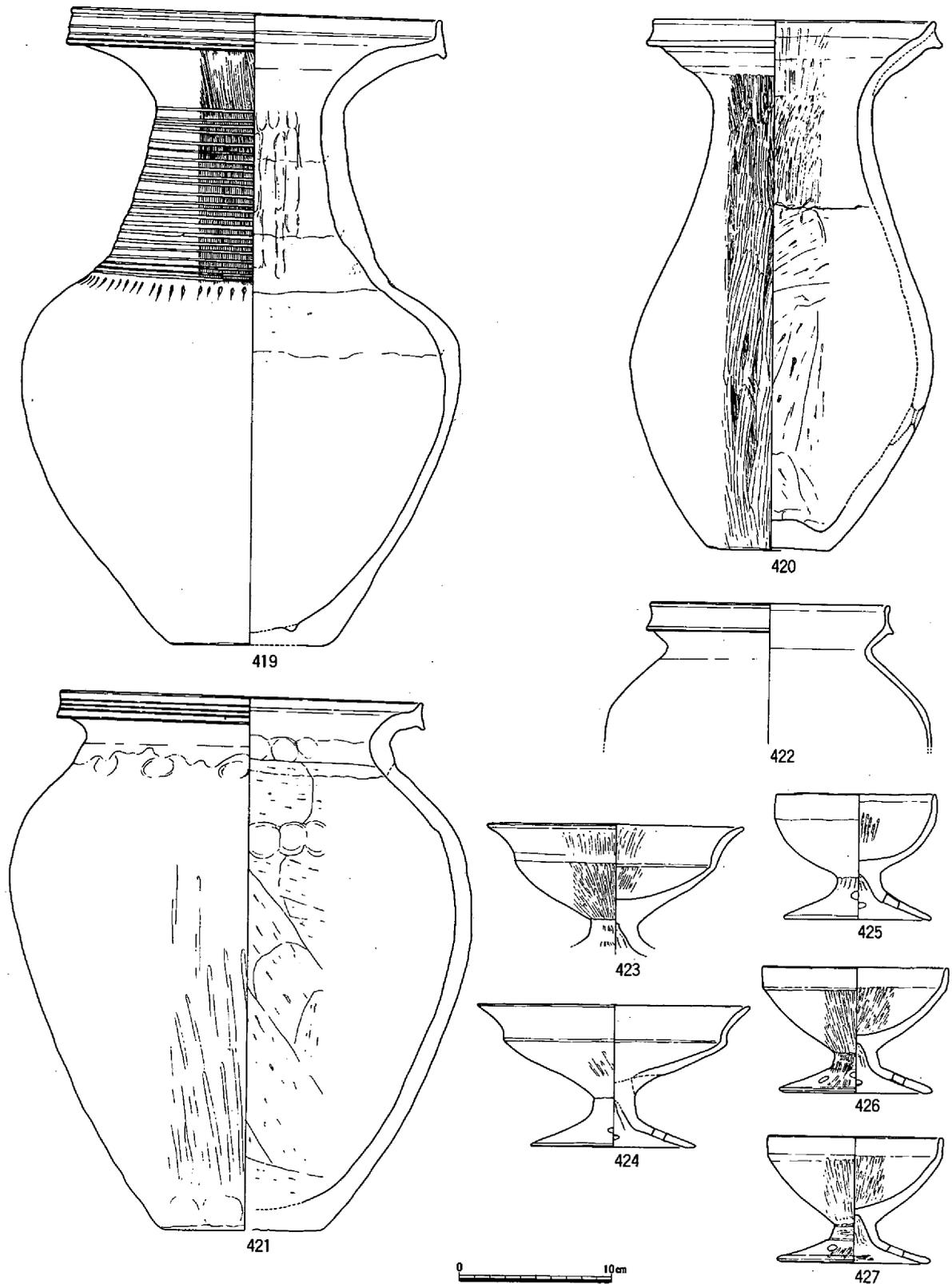
土器溜り5 (第140~143図、図版25・41)

この土器溜りは、305M区の南東寄りの、「高まりb」と「高まりc」の間の約 1.5×4 mの範囲に検出されている。層的には弥生時代後期末に堆積した洪水砂の下部に当たるが、直接洪水砂に覆われて検出されたのではなく、高まり裾部の包含層中からの出土である。ただ、洪水砂除去の時点では土器の上部がわずかに露出している部分もみられた。

個々の土器の散布の状況は、ほぼ完形に近い土器がその位置で潰れた状態のものが多く、第141図および第142図の428~434の土器が伴っていた。長頸壺419は、「ハ」の字形の長頸部から外方に大きく開く口縁部をもち、口縁端部をおもに上方に拡張させ、端面には3条の沈線の痕跡を残す。長頸部にはハケ調整ののち22本の細い沈線、頸部下には1条の刺突文を繞らせる。同420は胴部上半と頸部がなだらかに繋がる、いわゆる撫で肩の長頸壺で、口縁部の立ち上がりの外反角度も比較的急である。口縁端部は上下にわずかに拡張させ、端面に凹部をもつ。頸部から胴部外面はハケメののちヘラミガキが施され、沈線等はない。胴部最大幅の底からの位置は低く、器高の長さの約 $1/3$ しかなく、この形態は長頸壺での新相の特徴の一つである。胴下部の一ヶ所に穿孔をもつ。壺421は器形が甕に似るが、器壁が厚く短頸の壺とみてよい。口縁端部の特徴は420と大差なく、端面の凹部に3条の沈線の痕跡をもつくらいである。433も同様の壺であろう。甕は、器壁が極端に薄く口縁端部を上方に長く拡張させた422・430、口縁端部を斜め上方にわずかに肥厚させた428・431・432の両者に大きく分かれる。429は口縁部の形態は前者に似るが、器形的には鉢に近い。高杯はいずれも短脚であり、全体の器形も小ぶりである。杯部の形態により、口縁部が外反して立ち上がる二重口縁の423・424、碗形の425、小

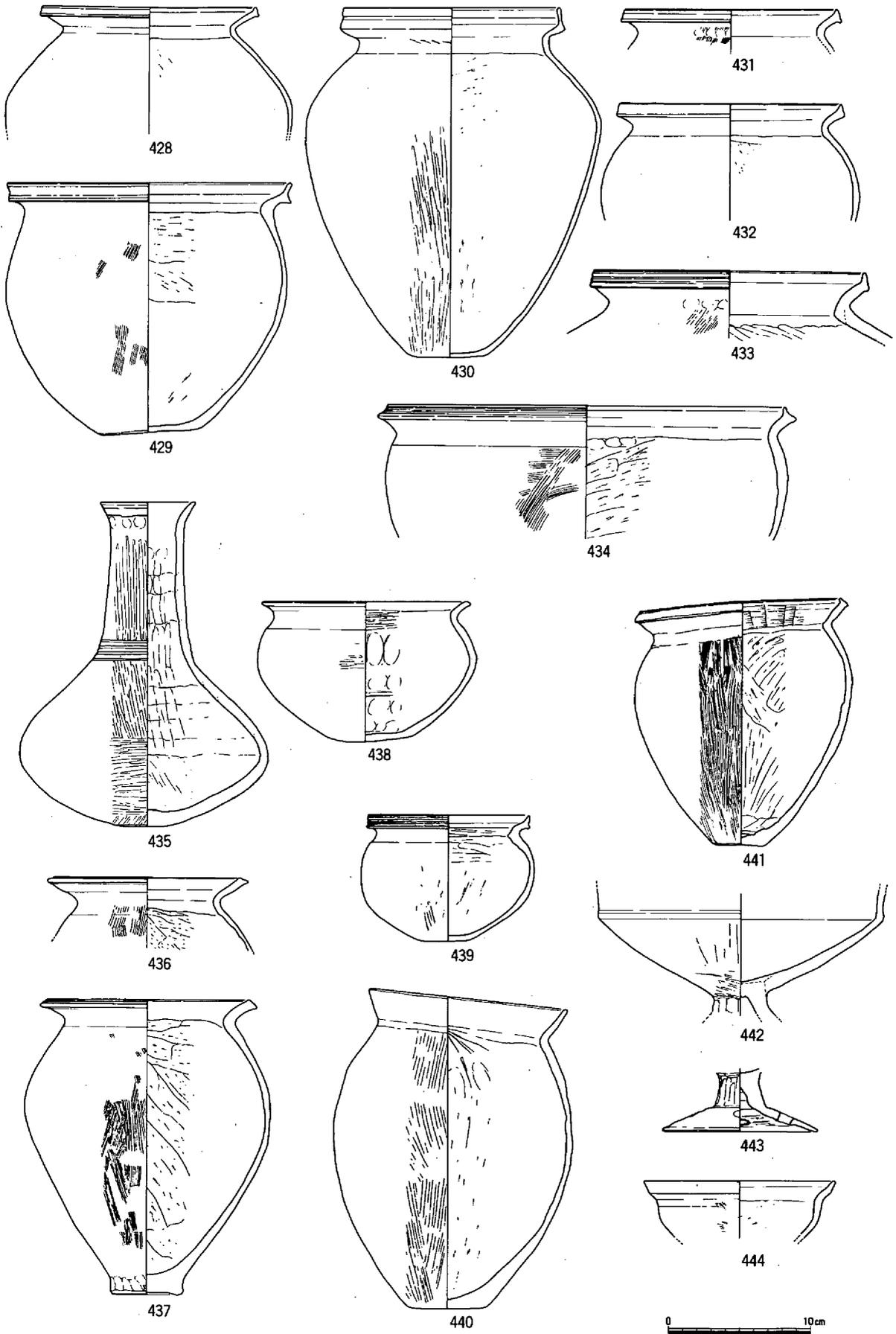


第140図 土器溜り5 出土状態 (S=1/40)

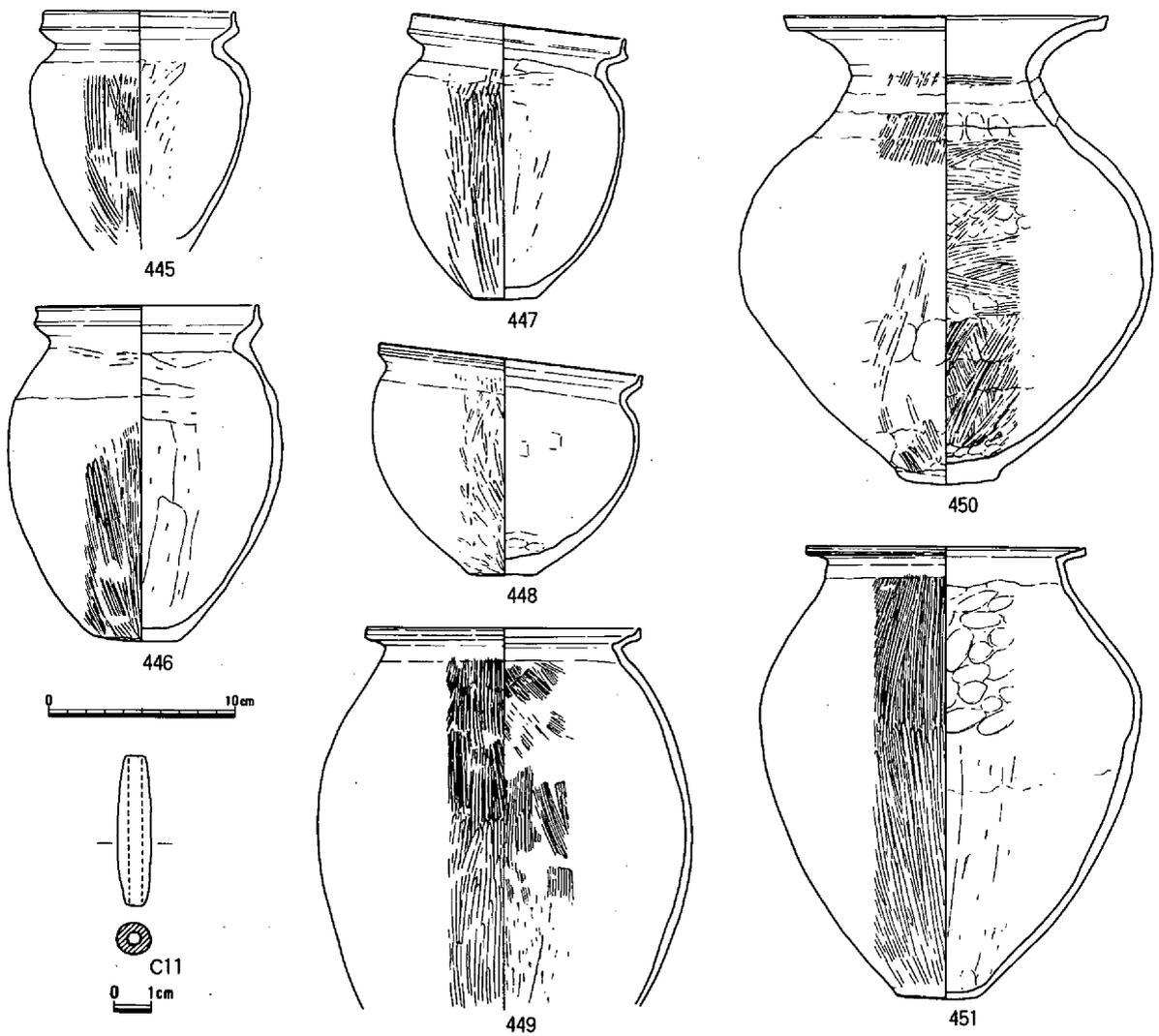


第141図 土器溜り5出土遺物(1)

鉢形の426・427に分けられるが、形式的な違いはない。鉢434は口縁端部をやはり上部にわずかに拡張させている。これらの土器の特徴は、同器種間にわずかな形態的な違いがあるものの、全体的に百・後・Ⅲの時期の範疇に納まる。



第142図 土器溜り5出土遺物(2)



第143図 土器溜り5出土遺物(3)

これらの土器は、全体的に使用頻度が高かったためか、完形に近いながらも器表が荒れているものが多い。また、これらの中に装飾的な土器を含む祭祀的な遺物などは確認されていない。以上の出土状況と土器の型式からいえば、同時期に使用されていた日常土器の一括廃棄であると考えられ、図示した土器以外には甕の胴部および底部の破片しかない。つまり、長頸壺2・壺2・甕6 + α・高杯5・鉢1が廃棄されていたわけで、これらの一括土器が当時の一家族が一時期に所有した一単位に近いと解釈できる。

一方、土器の小規模な分布は、他にもこの調査区(M~Q)の高まりの間の数ヶ所にみられた。これらの出土層位は土器溜り5と差はなく、集落から少し離れた野原が部分的なゴミ捨て場になっていたと思われる。これらの土器のうち、特徴的なものについて第142・143図に載せた。435~438はM区の「高まりa」と「高まりb」の中間付近、440~442・444はM区の北東部、439・443・445~448はP区、449~451はO区からそれぞれ出土している。そのうち、435~438は百・後・Iの時期の一括投棄であろう。また、P区の土器類は百・後・III、O区の449は弥生時代中期である。450の壺と451の甕は百・後・IIIの時期と思われるが、後者は讃岐系、前者は吉備ではない移入土器であろう。(江見)

3. 古墳時代の遺構と遺物

(1) 建 物

建物4 (第145図、図版26)

305M区の南東隅に検出された1間×1間の建物である。位置的には、「高まりc」の上部にあたる。平面形はわずかに歪みながら、周辺に柱穴の該当はなく、柱穴も比較的深くそろっているため、

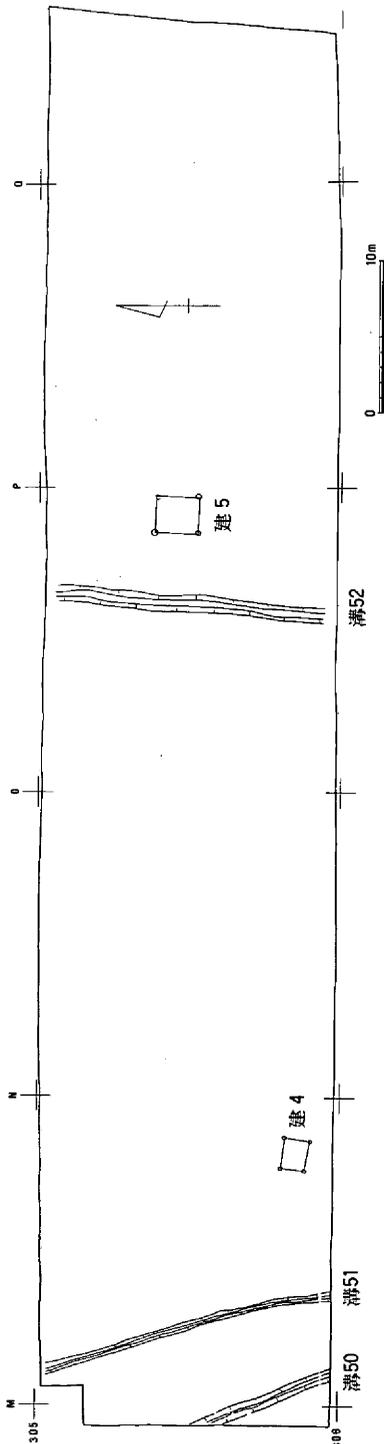
建物とした。柱穴の径は23~25cm、深さは53~72cmを測る。柱穴掘り方内の埋土は淡茶灰色~茶灰色の粘質土で、断面観察ではいずれも径13cm前後の柱痕跡(暗灰色粘土)が認められた。柱間の長さは、長辺約200cm、短辺約150cmと170cmを測る。

遺物がないので時期の確定がむずかしいが、検出レベル・埋土から百・古・Ⅲであろう。(江見)

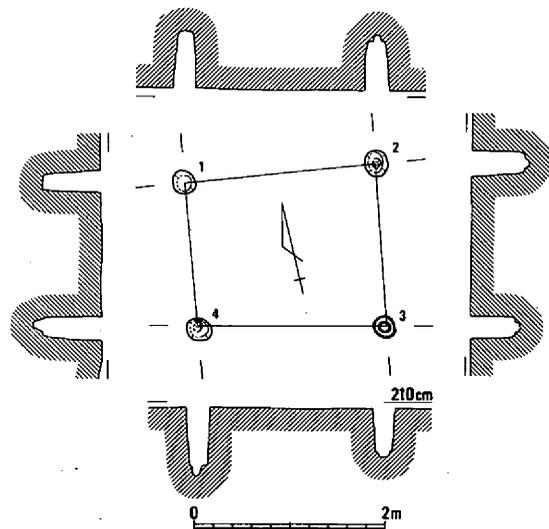
建物5 (第146図、図版26)

305O区の東端に検出された1間×1間の掘立柱建物である。柱穴2・3は西半分を調査時の側溝で削平したものの、柱穴1・4との位置関係・規模等から建物と断定した。建物の中軸は、ほぼ北向きに揃う。柱穴の底は、茶褐色粘質土の弥生時代後期の包含層下約10cmほどまで至っていた。柱穴径は1・2・4が約25cm、3が推定40cm、深さ20~35cmを測る。柱穴1・3・4に柱痕跡が認められた。柱間の長さは、長辺約270cm、短辺225~235cmを測る。

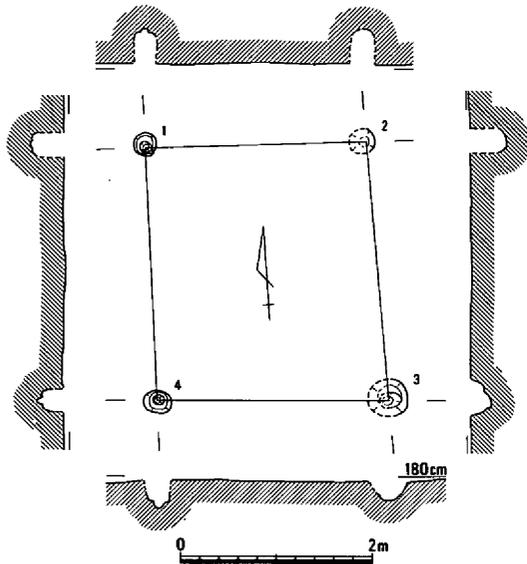
この建物も建物4と同様、遺物の出土を見ていないが、百・古・Ⅲの時期とみて大差はない。(江見)



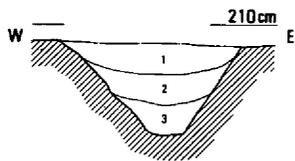
第144図 大上田調査区古墳時代の遺構(S=1/500)



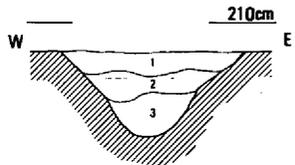
第145図 建物4



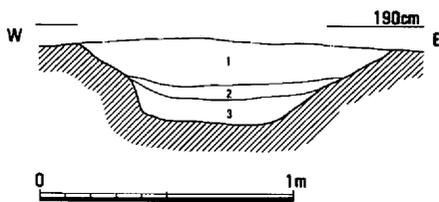
第146図 建物5



1. 暗茶褐色粘質土
2. 淡茶灰色粘質土
3. 灰色粘質土(炭混)

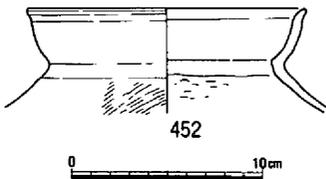


1. 暗茶褐色粘質土
2. 茶灰色粘質土
3. 灰色粘質土



1. 暗茶褐色粘質土
2. 暗茶灰色粘質土
3. 淡茶褐色砂質土

第147図 溝50(上)・51(中)・52(下)



第148図 溝52出土遺物

(2) 溝

溝50 (第147図、図版24)

305L~Mの調査区南西隅に、約10mにわたって検出されている。幅約70cm、深さ35cm前後を測り、断面形はV字形を呈する。埋土は3層に大別され、土器片は第2層に少量含まれていた。この溝は、北側の前調査区の「溝45」に繋がるものと思われる。

土器片しか出土していないが、百・古・Ⅲの時期とみられる。(江見)

溝51 (第147図、図版24)

305M区の西寄りに、調査区をほぼ南北に横切る形で検出されている。幅40~70cm、深さ約33cm位を測り、断面形はU字形に近い。埋土は3層に大別され、それらはほぼ水平堆積を示す。この溝は、北側の前調査区の「溝44」に繋がる。

遺物を含まないため、時期は明確ではないが、溝50の時期の範疇で機能していたと思われる。(江見)

溝52 (第147・148図)

305O区のほぼ中央を、調査区の南北方向に横切る形で検出をみている。溝は上半部が比較的なだらかに落ち込み、途中から急激に底部に至る二段の掘り方をもつ。上端部幅約120cm、底幅約50cm、深さ30cm強を測る。

この溝は、北側の前調査区の「溝46・47」に対応するが、2条の上下に重複する溝として理解されている。この調査区

でも、断面でいえば第2層の下部が溝の底であった可能性が強く、同位置での改修が行われた蓋然性が高い。

遺物は、第1層上部の2箇所わずかな土器溜りを形成して出土したが、図示できるものは少ない。453の甕は、「く」の字にわずかに内灣して立ち上がる口縁部をもち、端部を丸くおさめるタイプの典型的な形態であり、百・古・Ⅲの時期とみてよい。

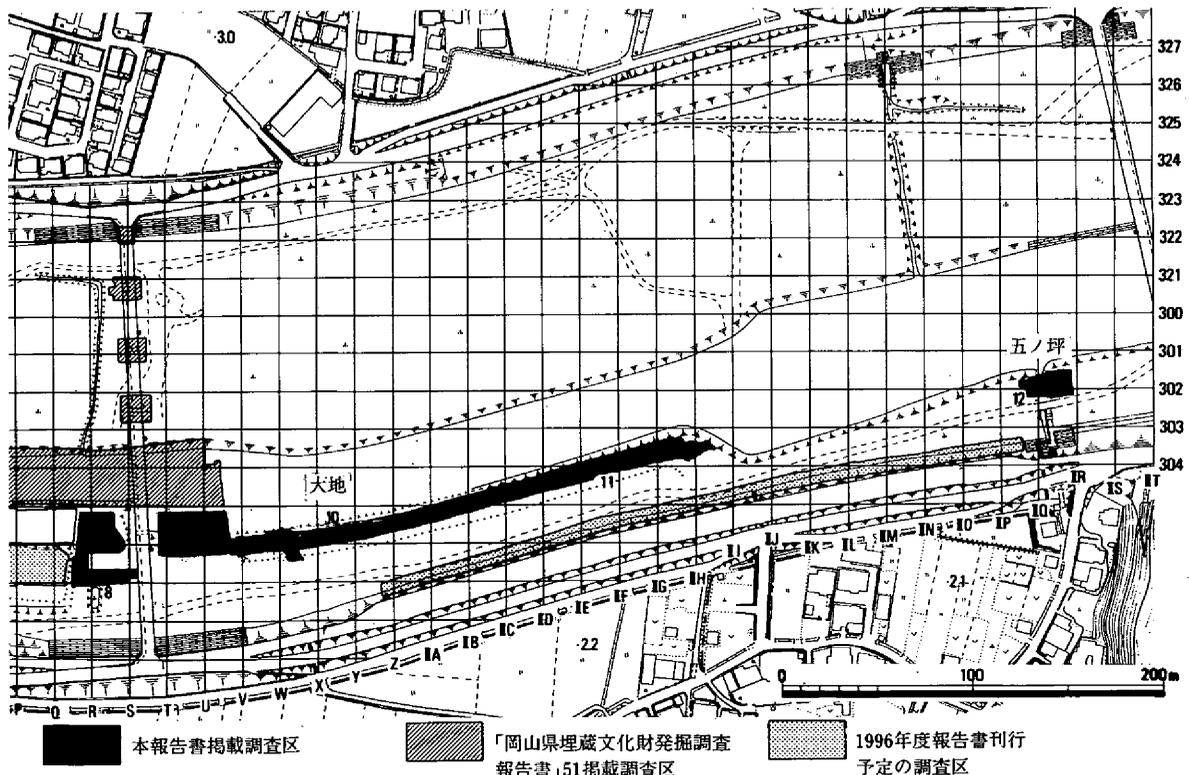
この溝の性格は、比較的規模が大きいことから当時の幹線水路の一つとみられる。(江見)

第4章 百間川今谷遺跡

第1節 遺跡の概要と調査区

百間川今谷遺跡は、岡山市今谷の百間川河川敷内に広がる遺跡について、大字名である今谷の前に百間川を付し、呼称している。遺跡の拡がりからいえば、西側に隣接する百間川兼基遺跡と微高地およびその周辺の低位部の水田址などを共有する大遺跡の一部分である。この遺跡の拡がり全体を呼称する場合には、百間川兼基・今谷遺跡と総称することが多い。両遺跡にまたがる微高地の東端部は、一次調査によってVラインから東については遺跡が拡がらないとの認識のもとに、低水路の工事掘削がすすめられた。その後の両遺跡の調査結果（「百間川兼基遺跡1・百間川今谷遺跡1」所収）から遺跡が拡がることや今谷地区の工事掘削断面から弥生時代後期末の水田層や畦畔、鎌倉時代の貝塚などの遺構が周知されるに至り、協議の結果、それらの部分については調査対象となっている。百間川今谷遺跡の範囲は、現在のところ神下橋辺りが東限と考えられているが、拡がる可能性もある。

百間川今谷遺跡のなかで、とくに遺構密度が高いのは弥生時代中期であり、その中心は前調査区を含む北側であることが調査報告書からもうかがえる。今回の調査対象となった地点は、下図の黒く塗り潰した部分であり、調査区は小字境のⅡJ付近から西を大地調査区、東を五ノ坪調査区の二つに分けて報告する。前者は稲株痕跡のある弥生水田、後者は中世貝塚が注目される。（柳瀬）

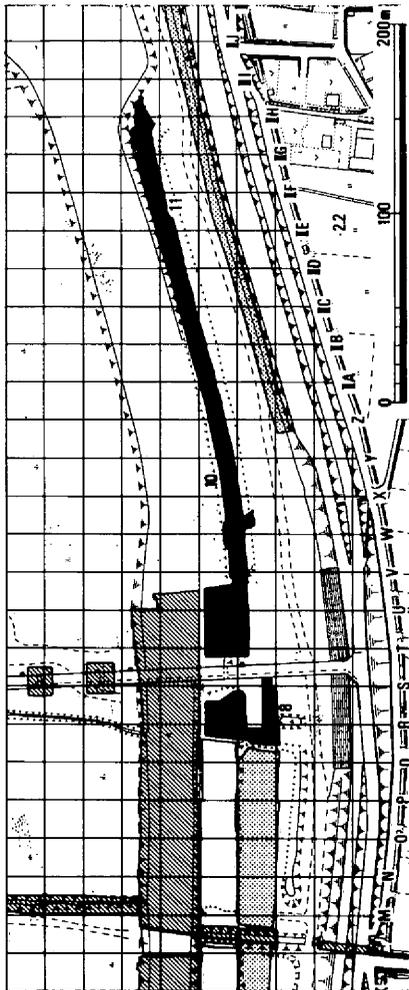


第149図 今谷遺跡の調査区(S=1/4000)

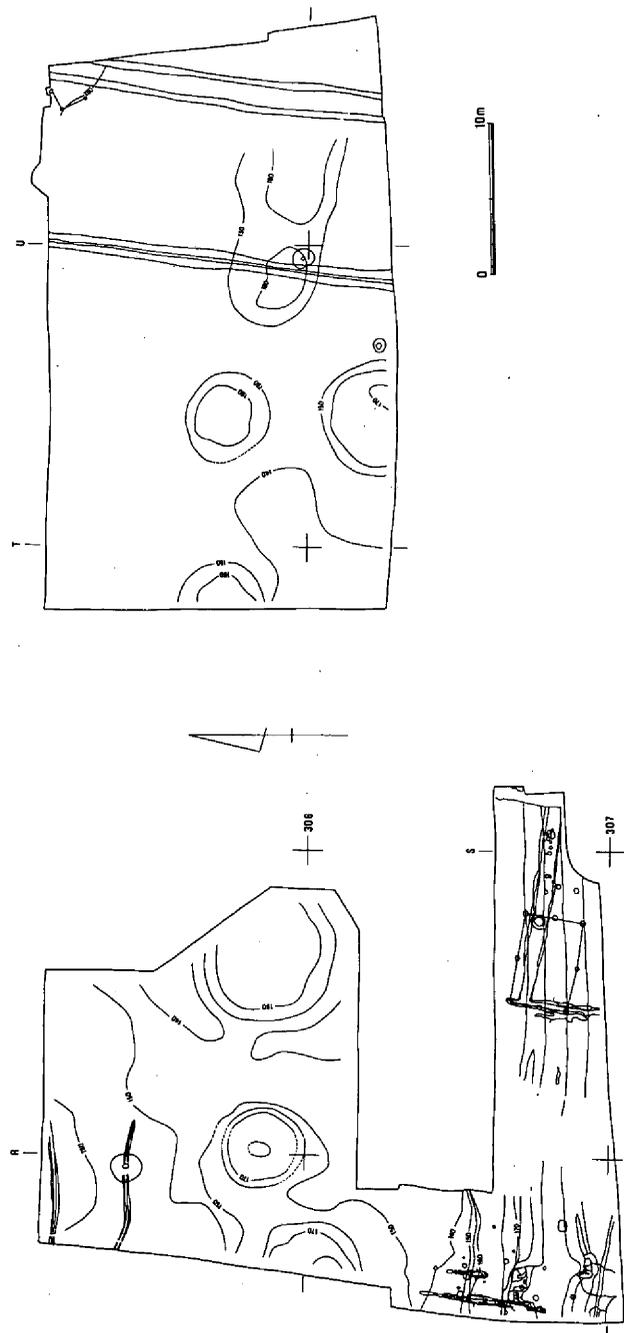
第2節 大地調査区

1. 調査区の概要

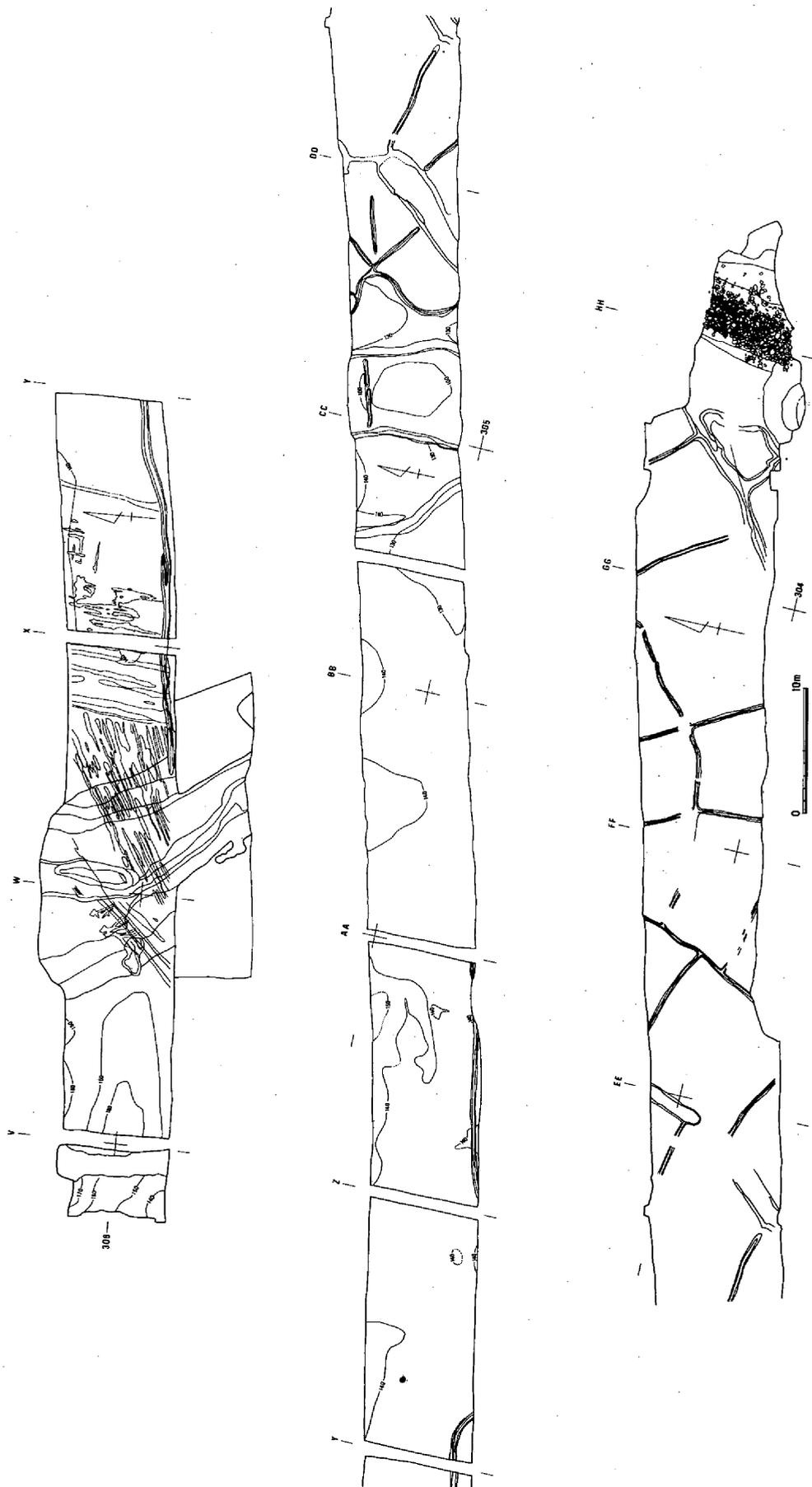
この調査区は、工事掘削および調査終了部分と低水路右岸側の計画法面との間の幅20~40m、延長340mであるが、実際には法面に沿って上幅約10mの排水路による削平が東端まで及んでいて、最小幅約10m・最大幅約40mの範囲が対象となった。この調査区では、百間川兼基遺跡の大上田調査区から続く弥生時代中期の溝や、洪水砂に覆われた起伏のある自然地形とその自然地形の「高まり」の間



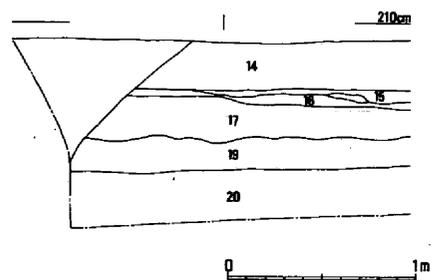
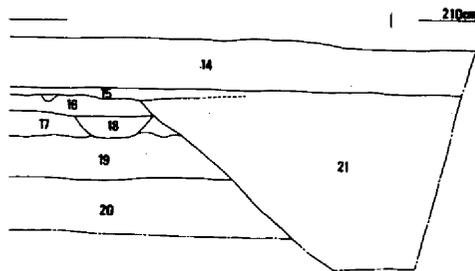
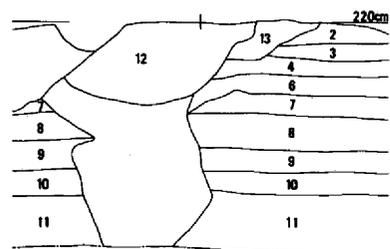
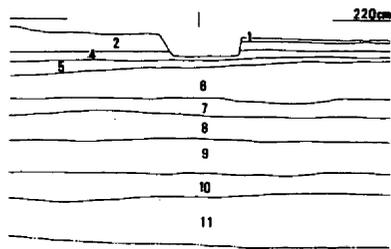
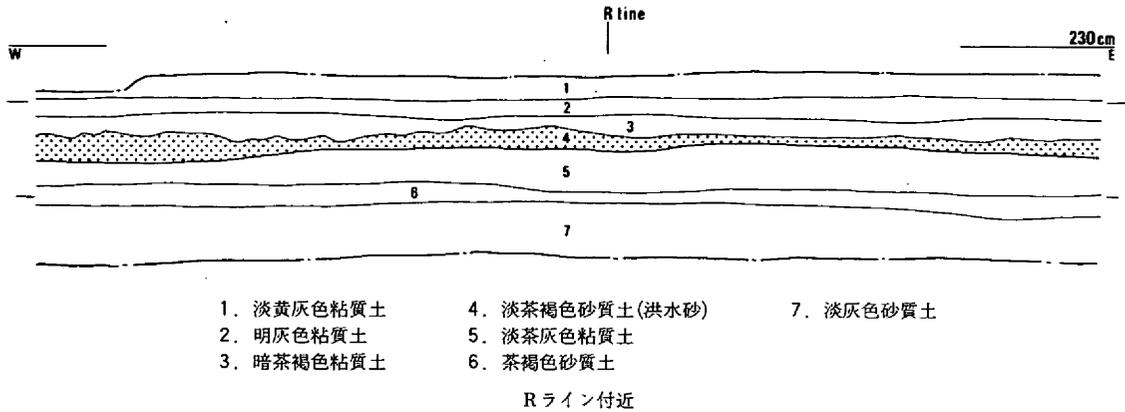
第150図 大地調査区の位置 (S=1/4,000)



第151図 大地調査区遺構全体図<1>(S=1/500)



第152図 大地調査区遺構全体区<2>(S=1/500)

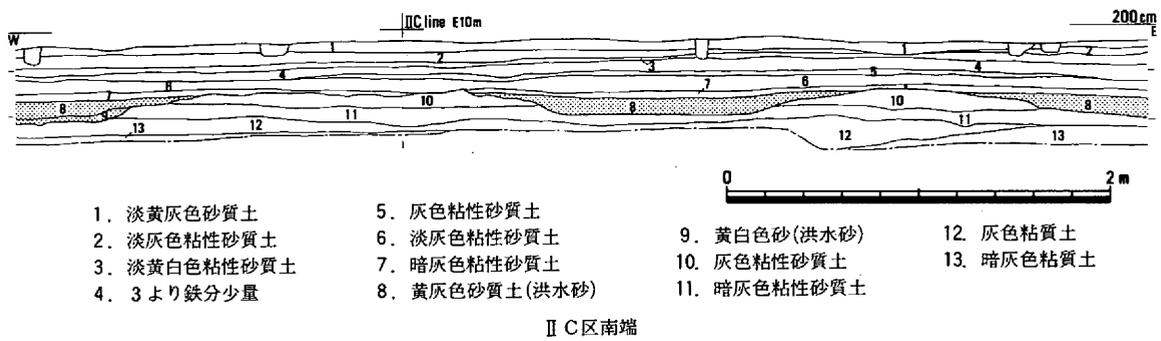
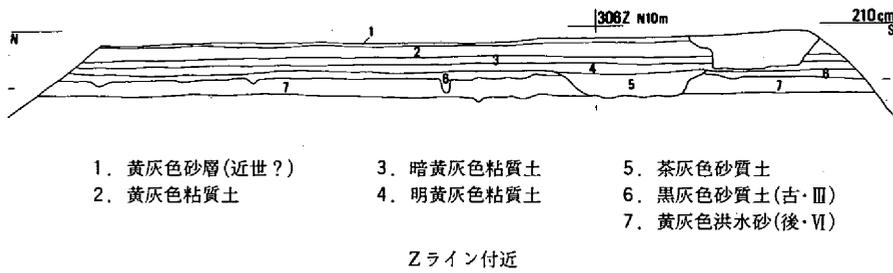
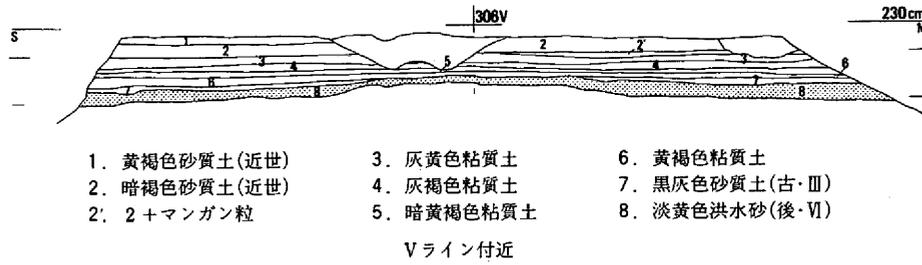


- | | | | |
|-------------|--------------|------------|-----------------|
| 1. 淡黄灰色粘質微砂 | 7. 黄灰茶褐色粘質微砂 | 12. 暗灰色微砂 | 17. 茶灰褐色土(弥生後期) |
| 2. 淡黄灰色粘質微砂 | 8. 暗灰茶褐色粘質微砂 | 13. 灰黄色微砂 | 18. 淡灰色粘土 |
| 3. 淡黄灰色粘質土 | 9. 暗灰褐色粘質微砂 | 14. 灰茶黄色砂 | 19. 淡灰黄茶色粘質土 |
| 4. 淡黄灰色粘土 | 10. 黄灰茶色砂 | 15. 灰褐色粘土 | 20. 黄灰色砂質土 |
| 5. 淡灰色粘土 | 11. 黄灰色微砂 | 16. 淡灰黄色粘土 | 21. 灰色砂質土 |
| 6. 灰色粘土 | | | |

第153図 大地調査区の土層(1)(S=1/40)

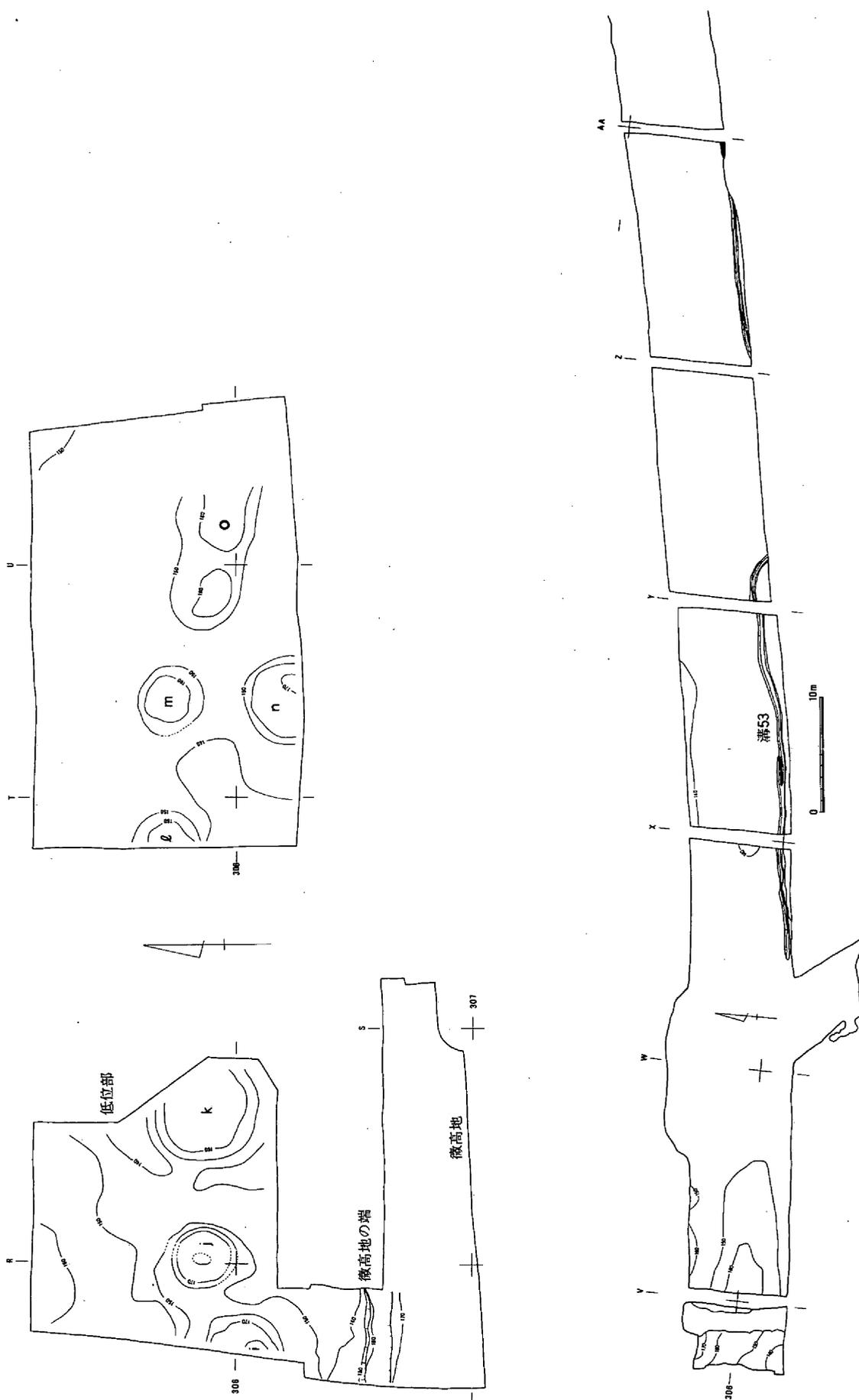
が水田に開墾された弥生時代後期末の景観、運河とも思える古墳時代前期の大溝、この遺跡では遺構としては初めての奈良時代の大溝、多数の溝痕跡が二種類の方向性を示す中世の畝状遺跡の存在などが明らかになり、調査幅の関係から断片的ながら、時代ごとの遺構ならびに景観が捉えられている。

地形的には306Q・R区の南寄り中央付近から南側は微高地が広がるようで、第153図の南壁断面には洪水砂は認められず、弥生時代中期溝や古墳時代前期建物などの遺構が存在している。基本層位のレベルは、調査区の西端に近いRライン付近では中世層の下端(第2層下部)で海拔約200cm、古墳



第154図 大地調査区の土層(2) (S=1/40)

時代前期(第3層)で同190cm、弥生時代後期包含層(第5層)または後期末の基盤層上面で同170~175cmを測る。調査区の東寄りのII C区付近では中世層の下端(第6層下部)で海拔約140cm、古墳時代前期(第7層)で同130cm前後、弥生時代後期末水田層(第9層)上面で同100~110cmを測り、調査区全体でいえば、東あるいは東北東方向に緩やかに下がる地形を示す。(柳瀬)

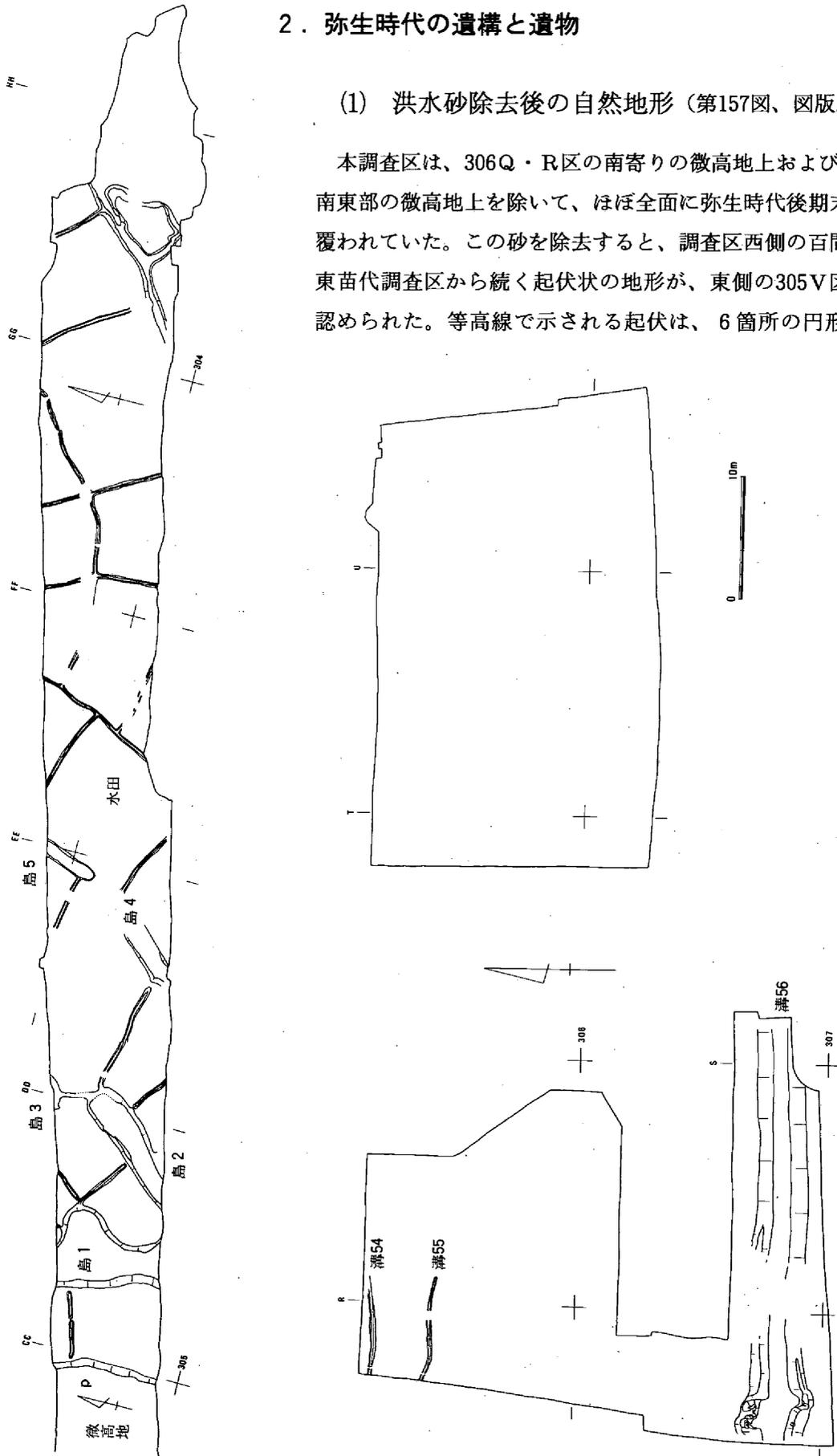


第155図 大地調査区洪水砂除去後の自然地形と弥生時代の遺構<1>(S=1/500)

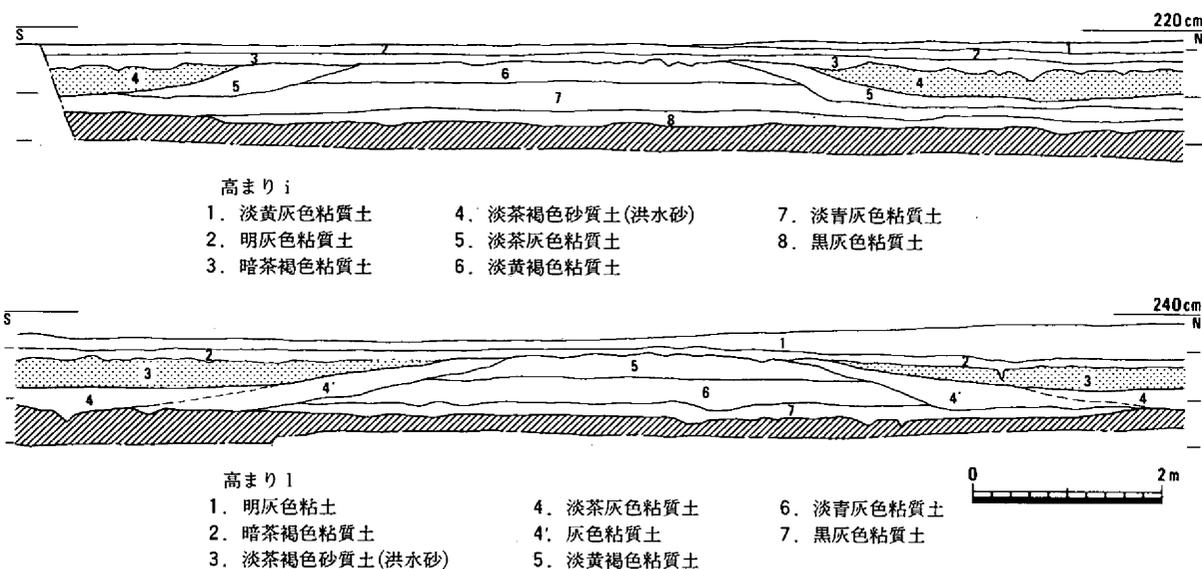
2. 弥生時代の遺構と遺物

(1) 洪水砂除去後の自然地形 (第157図、図版27)

本調査区は、306Q・R区の南寄りの微高地上および303ⅡG区の南東部の微高地上を除いて、ほぼ全面に弥生時代後期末の洪水砂に覆われていた。この砂を除去すると、調査区西側の百間川兼基遺跡東苗代調査区から続く起伏状の地形が、東側の305V区の辺りまで認められた。等高線で示される起伏は、6箇所の円形高まり(徑



第156図 大地調査区洪水砂除去後の自然地形と弥生時代の遺構<2>(S=1/500)



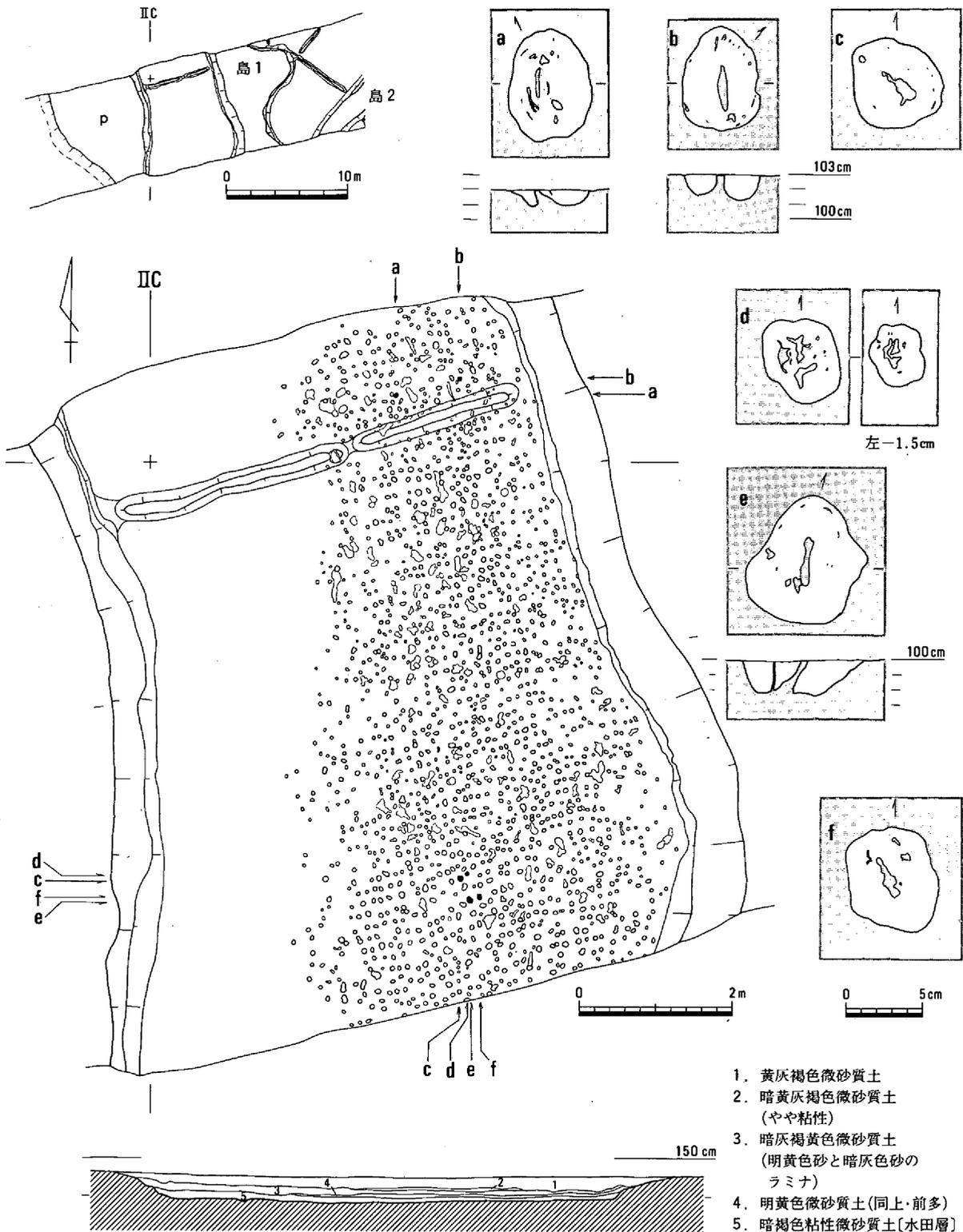
第157図 自然地形高まりの土層 (S=1/80)

6～9 m、高さ20～30cm)と1箇所の帯状高まり(長さ約37m、幅約6 m、高さ約20cm)の「i～o」で構成される。それらは単独で存在しており、高まりの比高差は東へ行くほど少なくなる傾向がうかがえる。それらの高まりのうち、第157図の「高まり i・1」の断面で土層堆積の状況を観察すると、高まりを構成する「i」の第6・7層、「1」の第5・6層の核の肩部に、それぞれ第5層・第4層の堆積があり、弥生時代後期末の大洪水以前の堆積過程で、ある時は削られある時は核を中心として堆積している状況が認められる。

また、ⅡB区の東寄りには不整円形の「高まり p」が検出され、「高まり o」までの約120m間はほとんど起伏のない平坦な地形を呈していた。「高まり p」が他の高まりと違う点は、その東側の裾を水田化のために人工的に削られていることであり、このことはⅡC区からⅡD区にかけて水田に挟まれて存在する「島状高まり 1～3」が、水田化される以前には「高まり p」と同様の自然地形のなかでの高まりであった蓋然性が高いことを示唆する。また、この両者が隣接して同時に存在することは同じ洪水砂に覆われている点で明らかであり、これらのことから同条件下で検出されている百間川原尾島遺跡や百間川沢田遺跡の島状高まり遺構についても、その存在過程は百間川今谷遺跡と同様であったと断定される。(江見・柳瀬)

(2) 水田 (第158・159図、巻頭図版1、図版28～30)

前項でもふれたように、この調査区では微高地や高まりを除く縁辺は、弥生時代後期末とみられている大洪水に伴い20～30cmの厚さの砂の堆積があり、それを除去すると、調査区東寄りのⅡB区の東端からⅡG区までの、東西約100m間に水田の拡がりを検出することができた。北および南側はすでに工事により掘削されていて、南北方向は幅9～11mしか明らかになっていない。ただ、南側に約5 m離れた用水路の工事掘削断面には水田層はなく、また、北側の低水路を隔てた左岸側の掘削断面では、同じ条件下の水田層の存在が確認されていることから、調査地点のすぐ南側の右岸河川敷には微高地が拡がり、北および北東方向の左岸側の河川敷を含む広い範囲には水田が拡がっているものと思



第158図 稻株痕跡検出状態

われる。

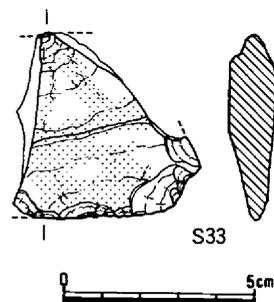
水田は微高地と4つの島状高まりに挟まれて存在し、小畦畔等で仕切られた区画は約20を数える。しかし、一区画全体が調査区の中で正確に捉えられたのは、東端の微高地と大畦畔に挟まれた1面だけで、他は南北どちら側かの工事掘削を受けている。一区画の面積は、最小が東端の約12㎡、最大は

推定ながらⅡF～G区の約130㎡を測る。微高地あるいは島状高まりの上部はいくらか削平を受けているが、それらと水田面との比高差は20cm前後であった。また、水田面のレベルは、西端近くでは海拔100～105cm、東端近くで75cm前後を測り、東または東北東方向に低く展開していることがわかる。大畦畔は、調査区東端近くのⅡG区で検出されている。微高地に接して西北西方向に延びる、幅1.1m前後、高さ約15cm、長さ約13mの部分と、それに直交して南南東方向に延びて微高地に取り付く、幅60～80cm、高さ推定10cm程（上部を削平されているため）、長さ約3.5mの部分がある。小畦畔はいずれも幅30～35cm、高さ3～4cmで、土質は水田層とほとんど区別がつかない。島状高まりは、前項でもふれたように、自然地形の起伏の高まりの裾部分が開墾時に多少整形されて残存したものと思われる、この調査区ではⅡC区からⅡE区の一部にかけて存在する。水口はとくに小畦畔が島状高まりにほぼ直交して接する部分に多くみられ、ⅡD区では「島4」と「島5」の間にも認められた。

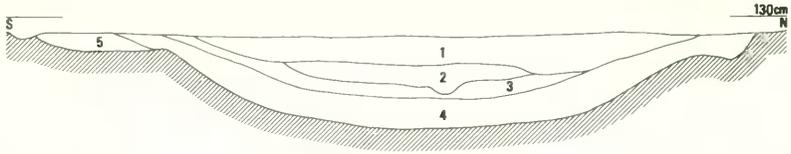
上記の水田の特徴のほかにとくに注目されるのは、稲株痕跡の存在である。痕跡はおもにⅡC区の水田区画に認められたが、「高まりp」と「島1」に挟まれた2区画にとくに顕著であり、「島1」以東は東へ行くほど痕跡が薄く、さらに少なくなる傾向が捉えられている。痕跡が顕著な2区画の水田面には、第158図のように、水田区画の東側約2/3の範囲に残存していた。水田面を覆った洪水砂は約25cmの深さに堆積していたが、断面では痕跡のみられない範囲で2層、みられる範囲で4層に分層された。水田面に接する部分の第3層と第4層を比べてみると、色調では暗灰褐黄色と明黄色、質ではどちらも微砂質ながら後者に粘性が全然ない点に相違が認められ、痕跡の有無の範囲と合致している。

さて、痕跡はその形状において、楕円形に近いものとそれより少し大ぶりの瓢箪形に近いものの2種類が看取される。前者は最大で径約8cm、最小で径4cm前後、深さ2～3cmを測り、第4層と同じ砂で埋まっていた。さらに、第158図に示した特徴的な痕跡の拡大図(a～f)で説明を加えると、検出面では砂の中に第5層の水田層と同じ土が散見され、とくにb・c・e・fに共通するような、長軸方向に長いアメーバー状の痕跡をほぼ中央に残す例が、ほかにも数多くみられる。また、dではほぼ中央に3つのアメーバー状の痕跡、さらに1.5cm下面では右図のように繋がった痕跡がそれぞれ観察される。そして、a・b・eの断面では、それぞれ底部から水田層の一部が細く立ち上がって、あるいは部分的に残存して形成されている様子が看取される。これらの特徴から、楕円形に近いそして砂で埋まった痕跡は稲株痕跡、またところどころに残る土は稲の分蘖時に茎の根元に挟まった土であり、稲株が腐ったのちにあるいは腐る過程で上面の砂が入りこみ、検出時の状況で残存したと解釈される。稲株の分布は1㎡当たり55～60株（一坪換算で約200株）を数え、百間川原尾島遺跡例（註1）が一坪当たりの株数が約400株であるのに比べ、約半分にとどまる。分布の形状は、前例のように全体に規則的な状況は見いだせないものの、部分的には1m前後の幅で直線またはわずかに弧状を描き並んでいるように見える場所もあり、田植えが行われていた蓋然性が高い。

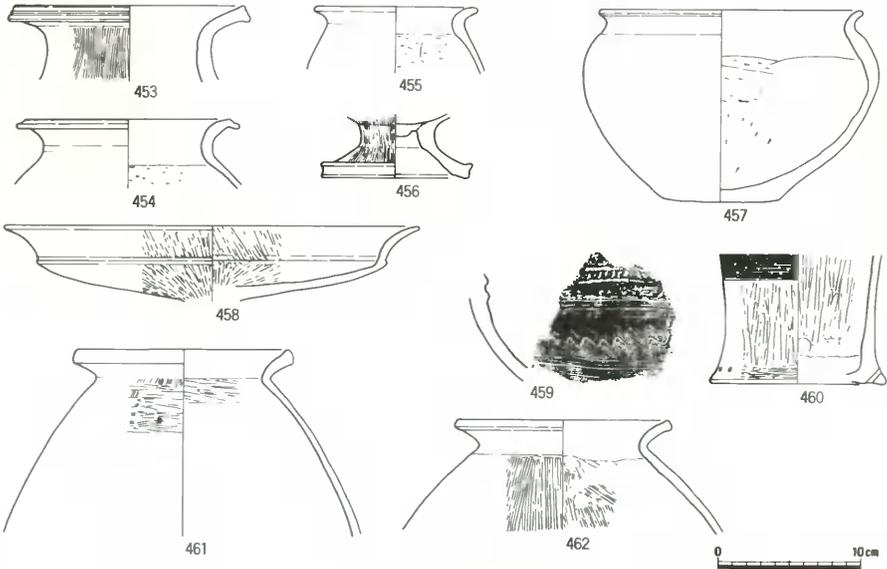
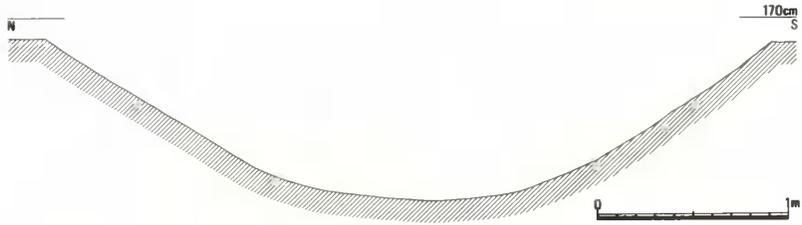
なお、2種類の痕跡のうち、後者の埋砂は白っぽい色調をしていて、稲株の明黄色系とは区別される。この種の痕跡は、稲株分布範囲のほぼ中央に集中しており、田面に約30ヶ所、小畦畔に2ヶ所を認めた。形状はもとより位置関係や間隔、方向性などから、足跡の可能性が高い。（柳瀬）



第159図 水田層出土遺物



1. 灰褐色土 2. 黄色砂 3. 淡灰褐色粘質土 4. 灰褐色粘質土 5. 灰黄色微砂粘質土



第160図 溝56・出土遺物

(3) 溝

溝53

305・306W区から305Y区、そして新たに305Z区に検出された、調査区の南端に沿う東西方向の溝である。幅40～70cm、深さ10～15cmを測るU字溝で、洪水砂除去面で確認され、埋土も洪水砂と同じ

暗黄色～黄灰色の微砂質土であった。底のレベルは東端で海拔約130cmを測り、西端より約5cmほど低いと東流していたと考えられ、ⅡA区から東には確認されていないため何とも言えないが、位置的には、ⅡC区から東に広がる水田の水路として機能していた可能性がある。(柳瀬)

溝54・55

どちらも305Q・R区に検出され、ほぼ東西方向に並走している。西側は百間川兼基遺跡東苗代調査区にあたり、位置的にはそれぞれ溝49・48と繋がる。埋土はいずれも茶褐色粘質土を呈している。

溝54は幅約40cm、深さ約3cmを測り、調査区の北端に沿いながら前調査区の304T区の「溝14」と繋がる位置にある。浅くて遺物もみられないが、「溝14」と同じだとすれば百・中・Ⅲの新相であろう。ちなみに、この溝の底のレベルは海拔132cmを測り、東流するものと思われる。

溝55は幅約25～30cm、深さ5cm前後を測り、約8mの長さにわたって延びるが、R区から東には該当する溝は検出されていない。時期は不明であるが、溝48との関係でいえば弥生時代後期後半かも知れない。(江見)

溝56 (第160図)

306Q～S区で検出された溝で、ほぼ東西方向に流走する。規模は幅3.8m、深さ50～90cm前後を測るが、調査区の西端付近では両岸がコブ状に拡張され、また深さも深くなっている。ここに水量を調節するような施設があったことも想定される。

埋土は大きく1～3層と4層に分かれ、上層には弥生時代後期の、下層には弥生時代中期の土器が含まれていた。453から458は上層出土の土器である。器種としては長頸壺、甕、台付鉢、鉢、高杯が見られる。これらの土器は百・後・Ⅱを中心とするものである。459から462は下層出土の土器である。459は壺で、頸部には突帯がめぐり胴部には櫛描文が施される。460は鉢で、櫛描文がめぐる。少し外側に張り出した底部には2箇一対の円孔が穿たれている。調整は内外面とも丁寧なヘラミガキで仕上げている。461・462は甕で、口縁部はくの字状に外反させ、端部はわずかに拡張する。これらの土器は百・中・Ⅱに属すると考えられる。(平井)

註

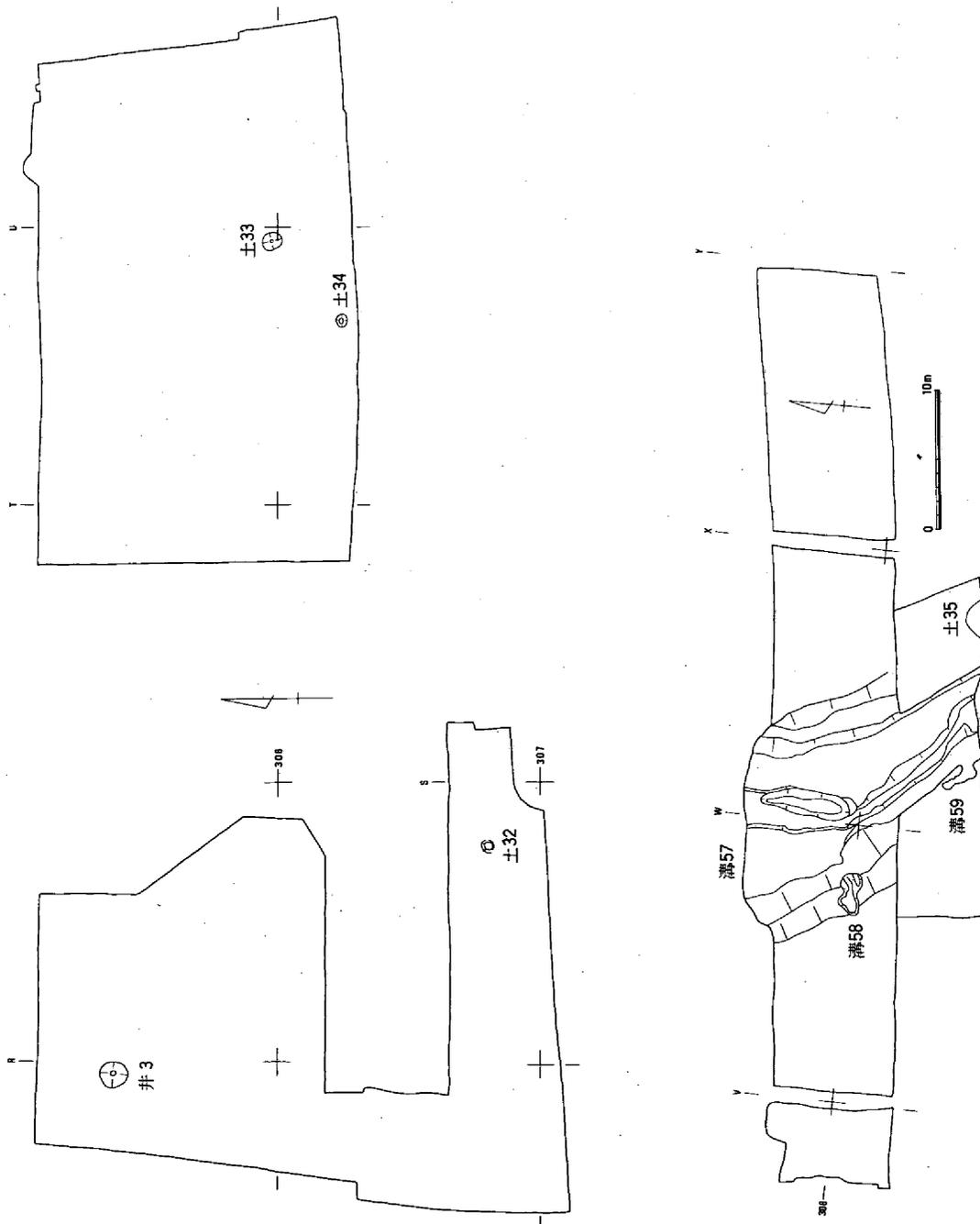
註1 高畑知功「水田遺構Ⅳ田植えと収穫量」『百間川原尾島遺跡2・岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56』建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会 1984年

3. 古墳時代の遺構と遺物

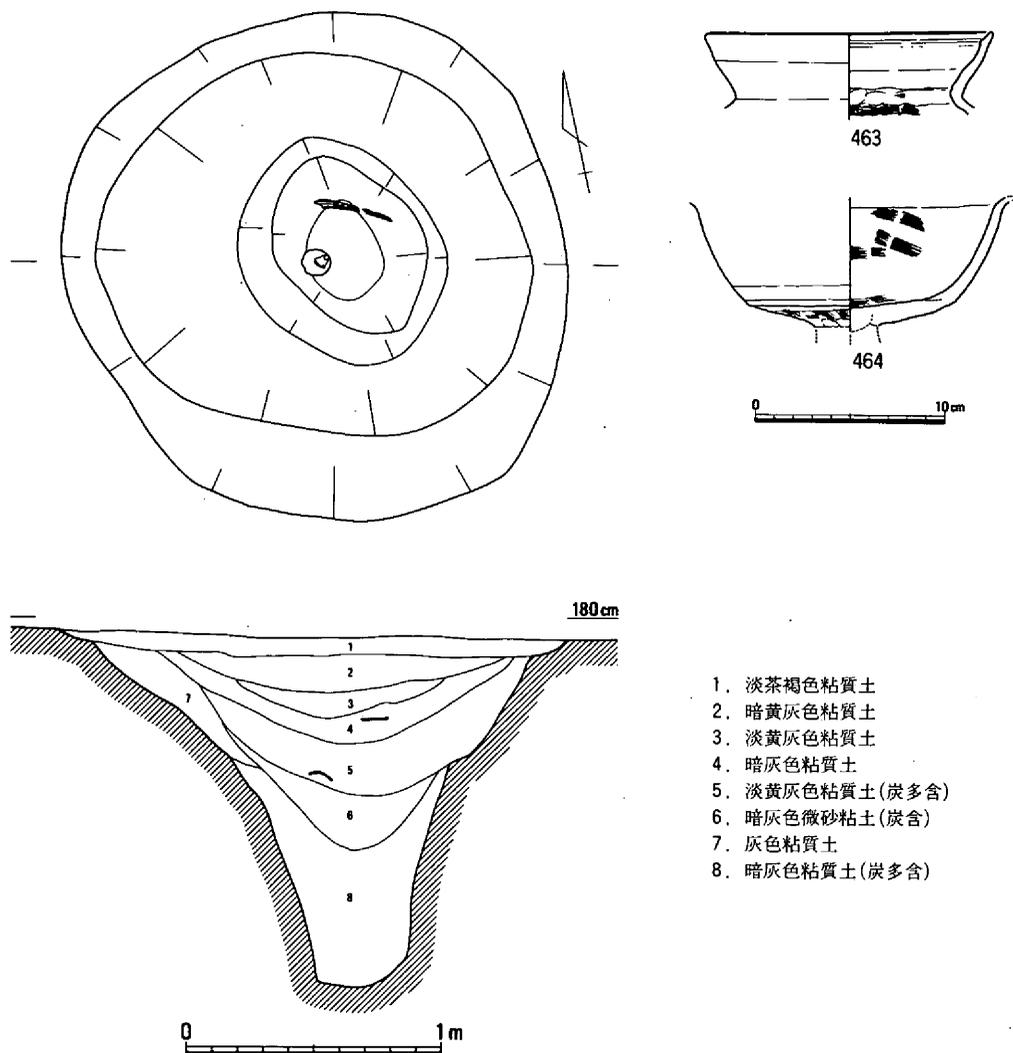
(1) 井戸

井戸3 (第162図、図版31)

305Q区の東端に検出された、ほぼ円形の大形井戸である。径約2m、底径30~40cm、深さ約1.4mを測り、断面形は底に向かって急激にすぼまる漏斗形を呈する。土層の堆積状態からは、一端廃絶ののち再度深さ60cm強の土壌として存在した可能性がある。土器はおもに第5層から、破片のみ出土している。463・464の特徴は百・古・Ⅲを示すが、井戸は少し遡る可能性もある。(江見)

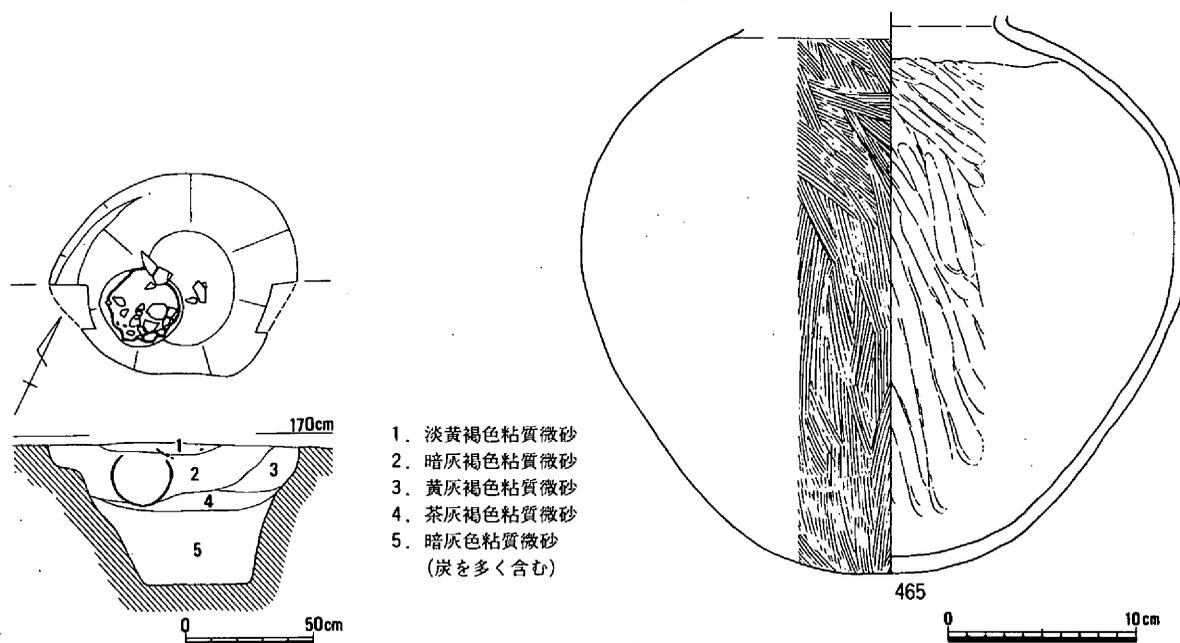


第161図 大地調査区古墳時代の遺構(S=1/500)



1. 淡茶褐色粘質土
2. 暗黄灰色粘質土
3. 淡黄灰色粘質土
4. 暗灰色粘質土
5. 淡黄灰色粘質土(炭多含)
6. 暗灰色微砂粘土(炭含)
7. 灰色粘質土
8. 暗灰色粘質土(炭多含)

第162図 井戸3・出土遺物



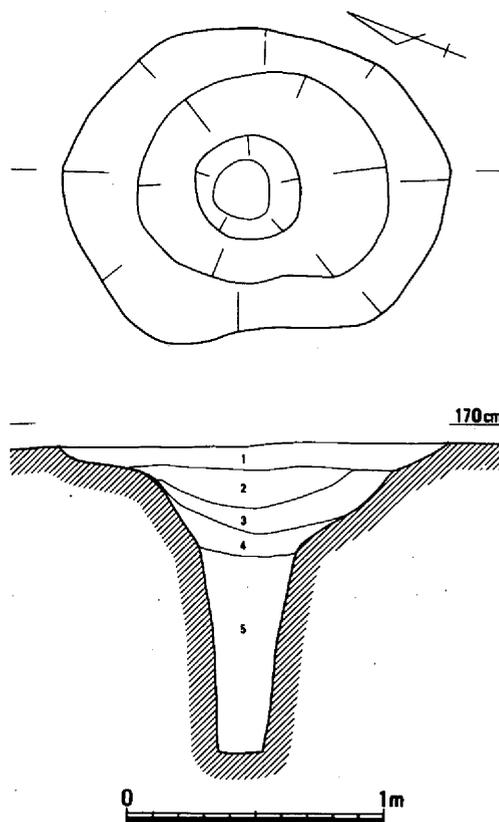
1. 淡黄褐色粘質微砂
2. 暗灰褐色粘質微砂
3. 黄灰褐色粘質微砂
4. 茶灰褐色粘質微砂
5. 暗灰色粘質微砂
(炭を多く含む)

第163図 土坑32・出土遺物

(2) 土 壙

土壙32 (第163図)

306R区で検出された土壙で、平面形は楕円形を呈する。規模は長径95cm、短径80cm、深さ55cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁は急傾斜で立上る。埋土は大きく1～4と5の2層に分かれる。このうち上層からは口縁部を欠くが、胴部はほぼ完形の土器が出土した。465は球形化した胴部をもち、調整は外面ハケメ、内面は指ナデで仕上げている。時期は古墳時代の前半期と考えられる。(平井)



- 1. 淡茶褐色粘質土
- 2. 淡青灰色粘質土
- 3. 暗灰色粘質土(炭含)
- 4. 褐灰色粘質土(炭含)
- 5. 暗灰色粘質土(炭含)

第164図 土壙33

土壙33 (第164図)

305T区の南東隅に検出された、不整楕円形を呈する土壙である。長軸径約1.5m、短軸径約1.2m、深さ約1.2mを測る。上径は広いが、深さ40cmのところでは径約40cm、底では径約20cmと急激に細くなり、3段に落ち込む。埋土は5層に細別されるが、第3層から下部は比較的炭粒が目立つ。遺物は、土器の細片のみ少量ではあるがおもに上部から出土しており、百・古・Ⅲの時期とみられる。

この土壙は井戸の可能性もなくはないが、他に例もなくここでは土壙として扱った。(江見)

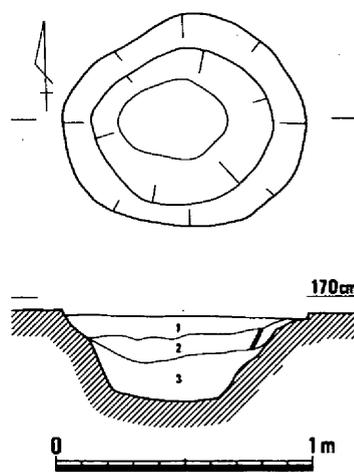
土壙34 (第165図)

306T区の調査区南寄りに検出した、ほぼ円形の小土壙である。径約90cm、深さ約35cmを測る。断面形は逆台形を呈し、2段に落ち込む。埋土は3層に分けられ、遺物は破片のみ第2層から数点出土しているに過ぎない。

検出レベルと土器片から、百・古・Ⅲとみてよい。(江見)

土壙35

調査区の南端で検出した大形の土壙で、推定径2.4m、深さ72cmを測る。西側は溝57の埋土を切って掘り込まれている。埋土は灰色粘性砂質土で遺物は出土しなかった。溝57よりも新しい遺構であるが年代の下限が明確でない。古代まで年代が下降する可能性もある。(宇垣)



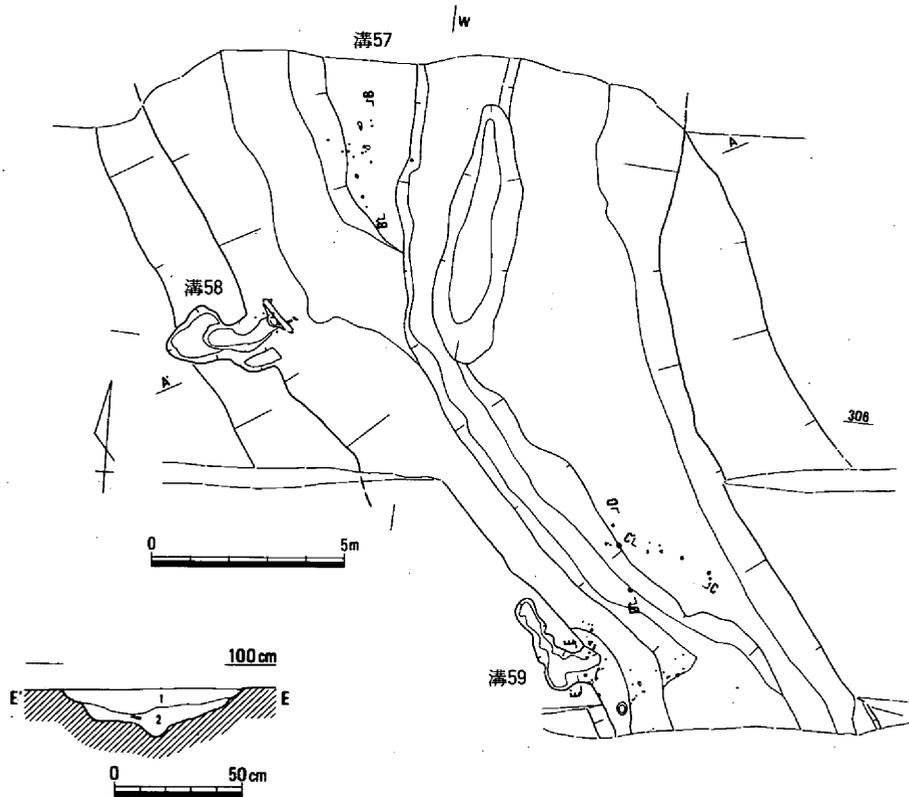
- 1. 淡茶褐色粘質土(炭・Mn)
- 2. 青灰色粘質土(炭微量含)
- 3. 暗青灰色粘質土(炭少量)

第165図 土壙34

(3) 溝

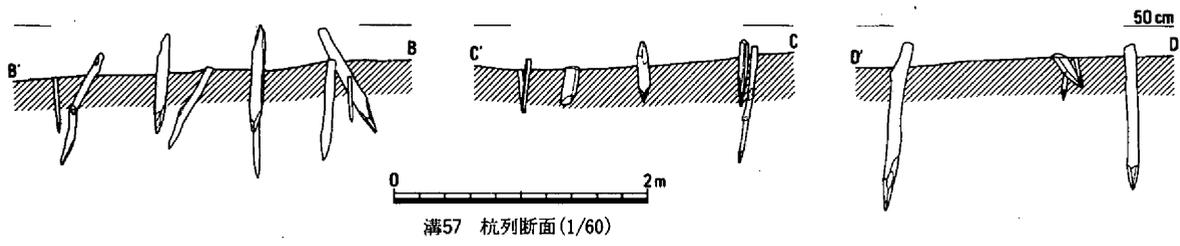
溝57 (第166図、図版31・32)

溝57は調査区内でゆるやかに曲がって北から南東方向へのびる大

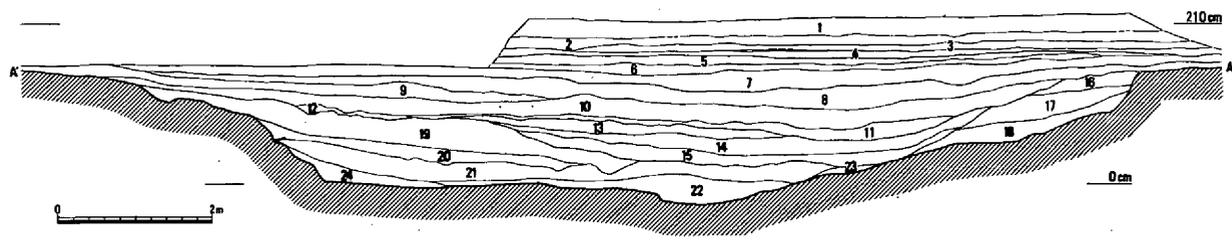


溝59断面(1/30)

1. 暗褐色微砂質土 2. 暗褐色微砂質土(黄色粘土塊含む)

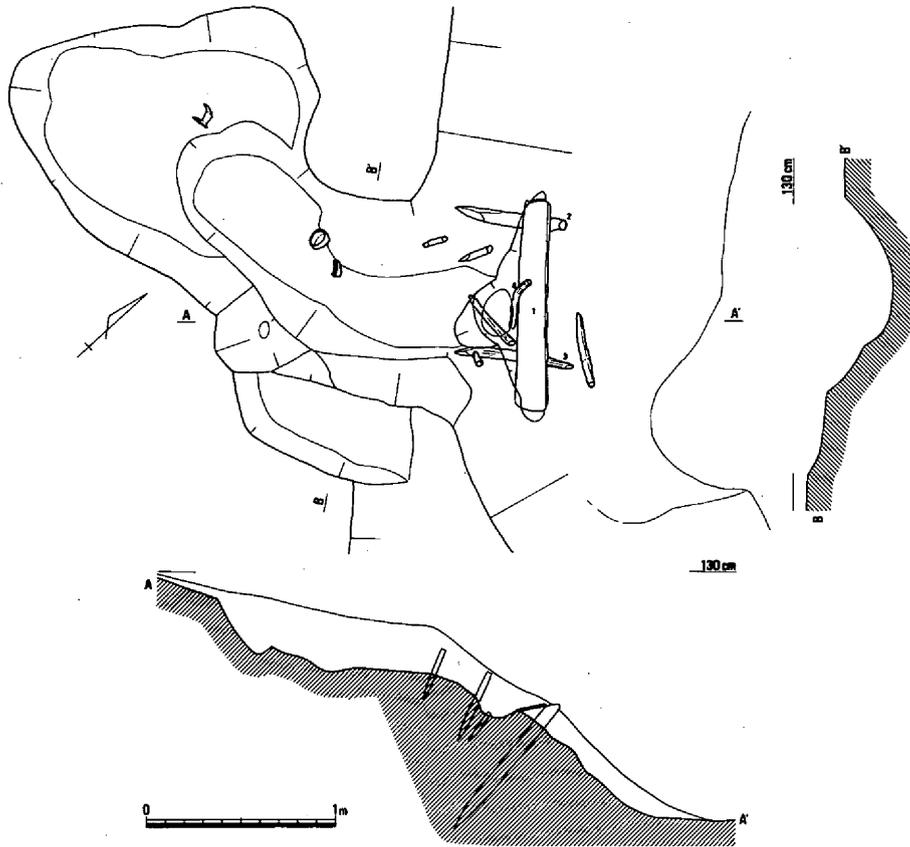


溝57 杭列断面(1/60)



- | | | |
|---------------|-----------------------|---------------------------|
| 1. 明黄褐色微砂質土 | 9. 灰色微砂質土 | 17. 暗灰色微砂質土 |
| 2. 灰褐色粘質土 | 10. 暗灰色粘性微砂質土(木小片含む) | 18. 暗灰色微砂質土(木片・炭含む) |
| 3. 灰褐色粘性砂質土 | 11. 暗灰色微砂質土(木片含む) | 19. 暗褐色粘性砂質土 |
| 4. 褐灰色粘質土 | 12. 灰褐色粘性微砂質土(炭の薄層含む) | 20. 褐灰色粘性砂質土 |
| 5. 暗灰色粘質土 | 13. 暗灰色粘性微砂質土(炭の薄層含む) | 21. 暗灰褐色砂(枝・木片等を多量に含む) |
| 6. 灰褐色粘質土 | 14. 灰褐色粘質土・砂質土の互層 | 22. 灰色砂 |
| 7. 淡灰褐色粘性微砂質土 | 15. 灰褐色砂質土(木片多く含む) | 23. 黒灰色粘性砂質土(枝・木片等を多量に含む) |
| 8. 灰色粘性微砂質土 | 16. 黄色砂質土(洪水砂再堆積) | 24. 黒灰色粘土 |

第166図 溝57・58・59



第167図 溝58

溝である。調査区南半は用水路が掘削されていたため、底に近い部分のみが遺存していた。溝底の高さは北端で0.16～0.06m、南東端で0.08mとほとんど差がないが、溝58・59の合流状況などからみて南東に流下すると考えられる。法面は東側北端付近では傾斜が強いが、基本的に両側とも検出面からゆるやかに下がり、1.0m付近で肩をなして急角度で下降しており、検出面での幅14.3m、肩部分で幅11.1mを測る。上側の緩傾斜部分が本来のものである可能性もあるが、むしろこの部分は埋没の際に崩壊したもので、本来は逆台形に近い断面をなすものであったと考えられ、幅約12mに復元される。深さは現状で1.5mであるが周辺に古墳時代の層が遺存しておらず、これよりも若干深いものになると思われる。

溝の下部に旧河道等は所在しておらず、ほぼ水平な堆積を示す基盤層を掘削して設けられている。調査区で検出した延長は約20mであるが、低水路対岸（北側40m）の法面においてこの溝の延長部分を確認しており、相当の長さにわたって開掘されたものとみてよい。

底面は幅が広く、流水によって生じたかと思われる浅い土壌状のくぼみが認められる。また、北半部分では溝状にやや深くなる部分がY字形をなして合流するような形になっている。調査区北壁の断面では16～18層が第166図断面のそれよりも大きくなり東側の溝状部分に達することからみて、東側からの堆積が進んだために溝の最深部が西側に移動したと判断される。二つの溝状部分に挟まれた北端の三角形の部分は両側よりも約20cm高くなっており、後述の杭列Bはこの部分に設けられている。

堆積土

第166図断面には上部の堆積層を含めて溝の堆積土を示している。1～4層は近世～中世の水田層

である。それ以下の層は5～7・8～12・13～15・16～18・19～24層の5つに大別できる。

11層から完形の須恵器杯身555および壺556が出土したことから6世紀末～7世紀前半の堆積土と判断でき、その時点でもなお溝は埋没しきらずに浅い溝として残っていたようである。またそのことから、8、9層付近が古代、13～15層は溝が機能を失ってある程度時間を経た後の堆積とみることができる。

16層は弥生時代後期末の洪水砂層と同質の微砂であり、17、18層中にもこの微砂が含まれている。これらは肩部付近に位置する洪水堆積層が崩壊・再堆積したものと判断でき、それは溝が機能している間であったとみられる。上記のようにこの堆積によって流路が少し変化している。19～24層は溝の機能中および廃絶後の堆積土であり、21、22層は砂層である。

16層以下の層中には土器・木器以外に流木かと思われる樹枝が含まれており、その量は21、23層で特に顕著であった。樹枝は長いもので2.5m、太いもので10cm程度のももあるが、長さ60～100cm、太さ5cm前後のものが主体をなし、溝のほぼ全域にわたって出土した。多くが樹皮を残すものであるが、端部が杭状に加工されたものが多数含まれている。土器は主に21～24層から土器溜まりをなして出土したほか、溝58の合流部からも多数出土した。

杭列

溝の底には杭列が設けられている。後述のように用いられている杭の大きさは異なるが、主体をなすのは樹皮を残して先端のみを加工したものであり、樹皮を取り去ったものや転用材と思われる面取りのなされたものが少量含まれている。杭列が所在するのは溝北部(B-B')、南東(C-C')、溝58合流部、溝59合流部、溝59合流部東側の5ヶ所である。北部のものは長さ2.4mにわたって水流と平行の南北方向に設けられており、10～5cmの杭を50～80cmの深さに打ち込んである。杭は東西方向には振れがなくほぼ垂直に打ち込まれているが、縦断方向から見た場合(B-B')、両端の杭は斜めに打ち込まれている。これらが上方で交差していたとみるならば、簡単な橋脚等としての機能も考えられる。

南東のものはC-C'、D-D'に示すように逆V字形の平面形をなす。杭の太さはB-B'のものと同様であるが、D-D'両端の杭が深さ1m以上打ち込まれているのに対し他は30cm以内である。これの南側、溝合流部の東側の杭群は明確な列を示さない。用いられている杭は太さ3cm前後の細いものが主体をなし、先端の深さも深いもので30cm、多くは10cm前後である。(宇垣)

溝58(第167図、図版31・32)

溝57の西肩口に流入する幅1m前後の溝であり、合流部付近で深さ35cmを測る。検出した長さは2.5mであるが、西からのびる溝の出口付近のみが遺存したとみるべきである。合流部には板材と杭を用いた小規模な堰が設けられている。板材1は15°と水平に近い角度をなしているが、斜めに打ち込まれた杭2、3で支えられており、本来こうした浅い傾斜であったとみてよい。板材1の西側は径20cmほどの小さくぼみになっており、この部分を中心に水を溜めることを目的としたようである。堰の周囲には細い杭が打ち込まれており、図にはそれらを含めて示したが、溝底よりも上に出ていたのは板材1と杭2、3、4の先端部のみであり、他の杭は地下部分のみが遺存していた。溝埋土中からは高杯、碗36などが出土しており、さらに堰板の上側には溝57に流れ込むような形で土器溜りが形成されていた。こうした土器の流入からすれば、もとは溝58の西側付近にも古墳時代の集落域が広がっており、それが水田によって削られた可能性が強いと思われる。(宇垣)

溝59（第166図、図版31・32）

調査区南端で溝57に合流する溝である。上部を削平されており、現状での深さは15cm以内である。溝57に平行するように延びてのち屈曲し、ほぼ直角に流入している。合流部には径3～1.5cmの細い杭が多数打ち込まれている。 (宇垣)

溝57出土遺物（第168～172・188図）

溝57・58からは多量の土器および木器数点が出土した。分層しつつ取り上げを行ったが、下部の堆積では古墳時代前期末から中期までの遺物が混在した状況であった。なお、土師器に混じって弥生後期の土器が出土しており、それについては第188図に示している。

土器

壺・甕 胎土や色調をもとに以下の3群に区分した。

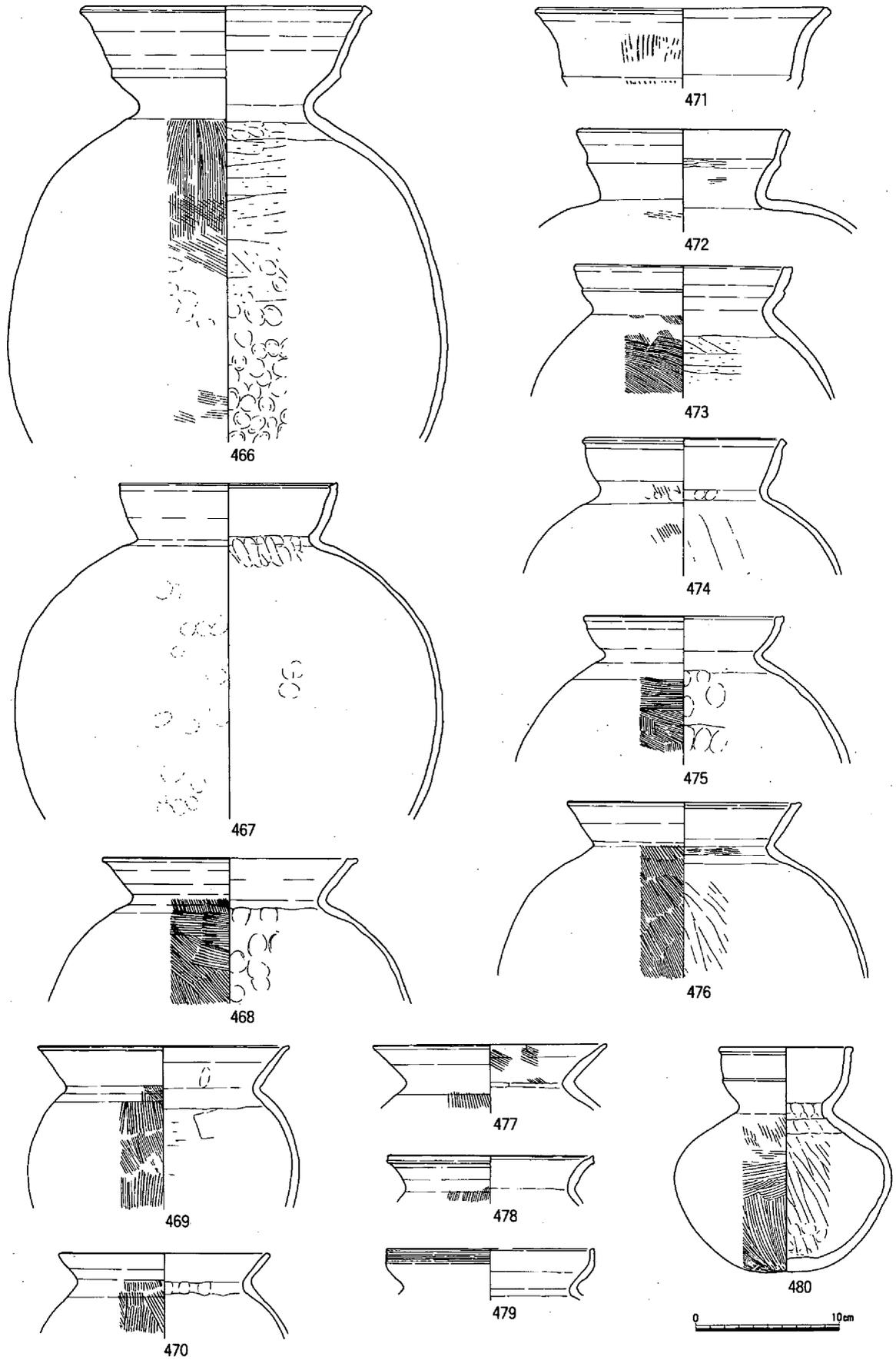
a（466・473・478・479・481）：細砂を含む一群である。466は二重口縁をもつ大形の甕で、胴部は下半部に最大径をもつ。外面肩部はタテハケ、それ以下は斜めのハケをナデ消している。甕481はほぼ完形に復元できた。口縁部はわずかに外反し端部に面をもつ。内面調整はヘラケズリ、外面はタテハケに先行するタタキが認められる。479は口縁部外面に櫛描沈線を施す甕である。この形態の甕の出土量はごく少量である。478は口縁端部を上方に短くつまみ上げてある。473は一応aに含めたが、他とはやや異なる胎土である。口縁部は二重口縁状になり、端面は浅い凹面をなす。内面には丁寧なヘラケズリが施される。

b（467～469・474・476・477・480・485～488・498）：細砂粒を比較的多く含む。467はやや内湾する口縁で端部に面をもつ。胴部内外部の調整は縦方向のナデである。480は小形の壺で体部はやや肩が張り、口縁部は二重口縁状になって端部を丸く収める。内面調整はナデ上げである。甕468～498の口縁形状は多様である。端部に外傾する面をもつ474、外反が強く端部にはほぼ水平な面をもつ468・469・476・485・498、端面がわずかに内傾し、いわゆる布留甕の口縁をもつ486・487、やや内湾し端部を丸く収める488、強く開いて端部を丸く収める477などがある。内面調整は469がヘラケズリの後にナデであるが、それ以外はいずれもナデないしナデ上げである。

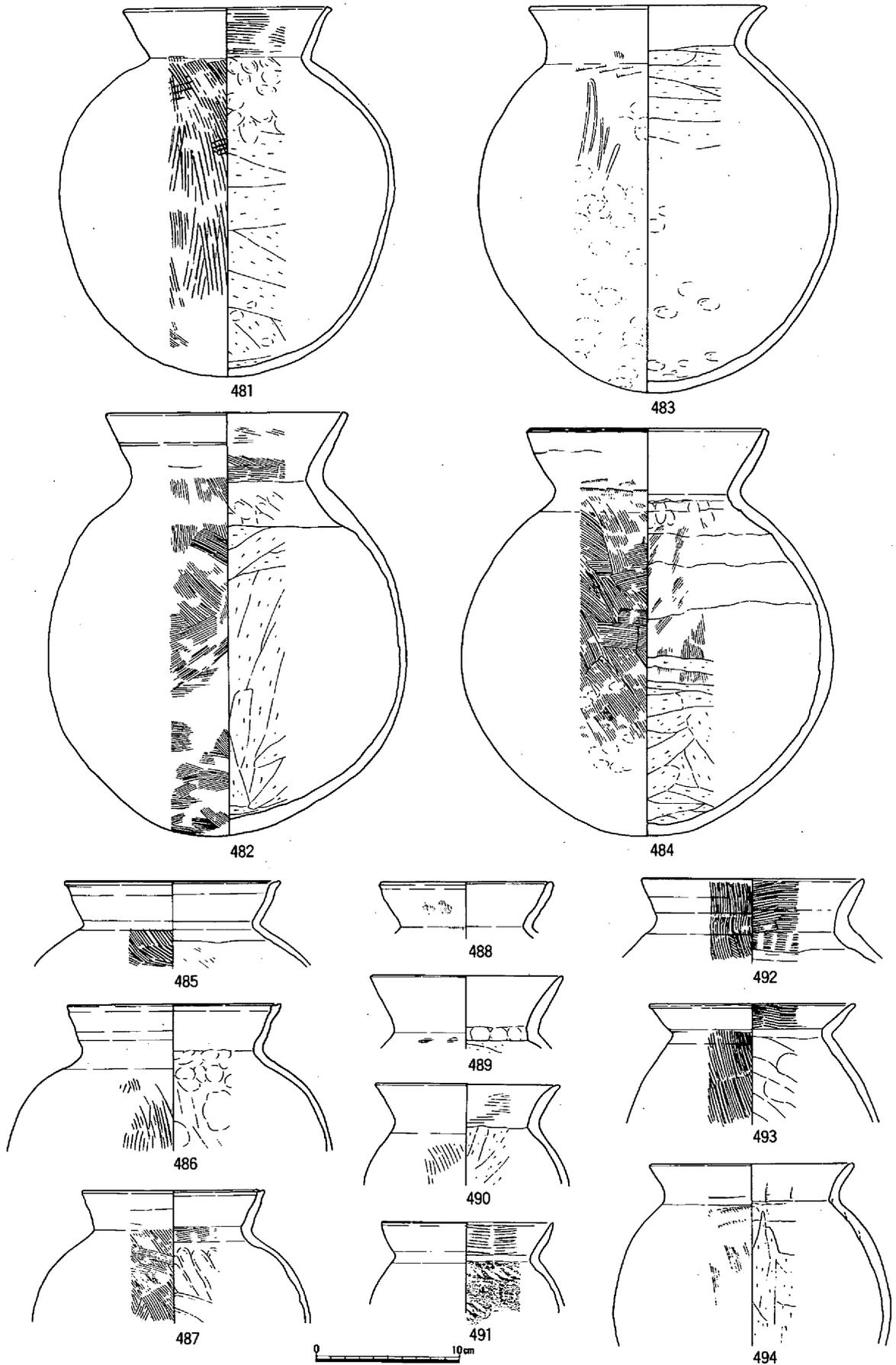
c（470～472・475・482～484・489～497・499）：川砂かと思われる粗砂を含むもの。砂粒の含有量はbよりも少なくなる。471は二重口縁の壺破片である。472は大きく肩の張る壺になるようで、肩部内面はナデ、外面はタタキののちナデかと思われる。小形の壺495は煮沸に用いられたようで、頸部下端から肩にかけての部分以外はススが付着している。甕は475が内湾して端部に水平な面をもつ口縁部であるが、それ以外はいずれもく字に開くものである。外面にハケの施されるものとナデのものがあるが、器表が微妙な凹凸をもつものが多い。482～484は大形の甕で、いずれも器壁はかなり厚い。482の外面は不定方向のハケで、ナデは見られない。内面は粗いヘラケズリである。484は外面上部がハケメ、外部はナデで、内面下半にはヘラケズリを施している。小形の甕497は内面の底部近くに指頭圧痕がわずかに残り、内面全体が縦方向のナデによって平滑に仕上げられている。491ではタタキののちにヘラケズリ、ナデがなされている。470・483・493・494は他よりも砂粒が少なく褐色が強いものである。483の外面調整はナデで肩部にヘラミガキ風の浅い沈線が見られる。内面下部の調整もナデである。

高杯 壺や甕とはやや異なる胎土であるが、以下の3群に区分できる。なお、512は弥生土器である。

a（501・520）：比較的精良な胎土であるが粗砂入る。杯部底面は平坦で口縁部が直線的にのびる。



第168図 溝57出土遺物(1)



第169図 溝57出土遺物(2)

杯部内面の調整は501は粗いヘラミガキ、520はナデである。

b (502~508・521・523) : 甕bの胎土に近い。507は501に似た形態であるが内外面の調整はハケメで杯部中央の成形も充填法である。502は径17.6cmと大きく深い杯部をもつ。503~508は外面に稜をもつ503~505と皿状をなす506・508の2者がある。内外面の調整は斜めハケのちナデ、あるいはナデで、特に内面はヨコナデによって仕上げられている。脚部521・523は比較的細い脚柱部と外反気味の裾部からなり、端部には面をもつ。脚柱部外面には簡単なヘラミガキが施されている。脚柱部内面にはヘラケズリが施されており裾部との境界は強い稜をなす。521には透かし孔はないが523では脚柱下部に4孔が施される。

c (509~511・513~515・517~519・522) : 粗砂の含有が目立つ一群であるがbとの区分は必ずしも明確でない。509・510・514・515・517~519のようにbと同一の型式のものがある。このうちの509は脚を折って鉢に転用して煮沸したのか、外面全体に薄く煤が付着しており一部に煮こぼれの痕跡が見られる。511は内外面に粗いハケメを残すもので、杯部は深くなる。522は裾部内面の調整がハケメで三方に透かし孔を配する。

小形器種 丸底の直口壺、鉢、小形器台などがある。

524・525・528・530はいずれも砂粒の少ない精良な胎土で、軟質の焼成である。鉢530はタタキによって成形がなされている。有段鉢528の内面には細かいミガキが加えられている。

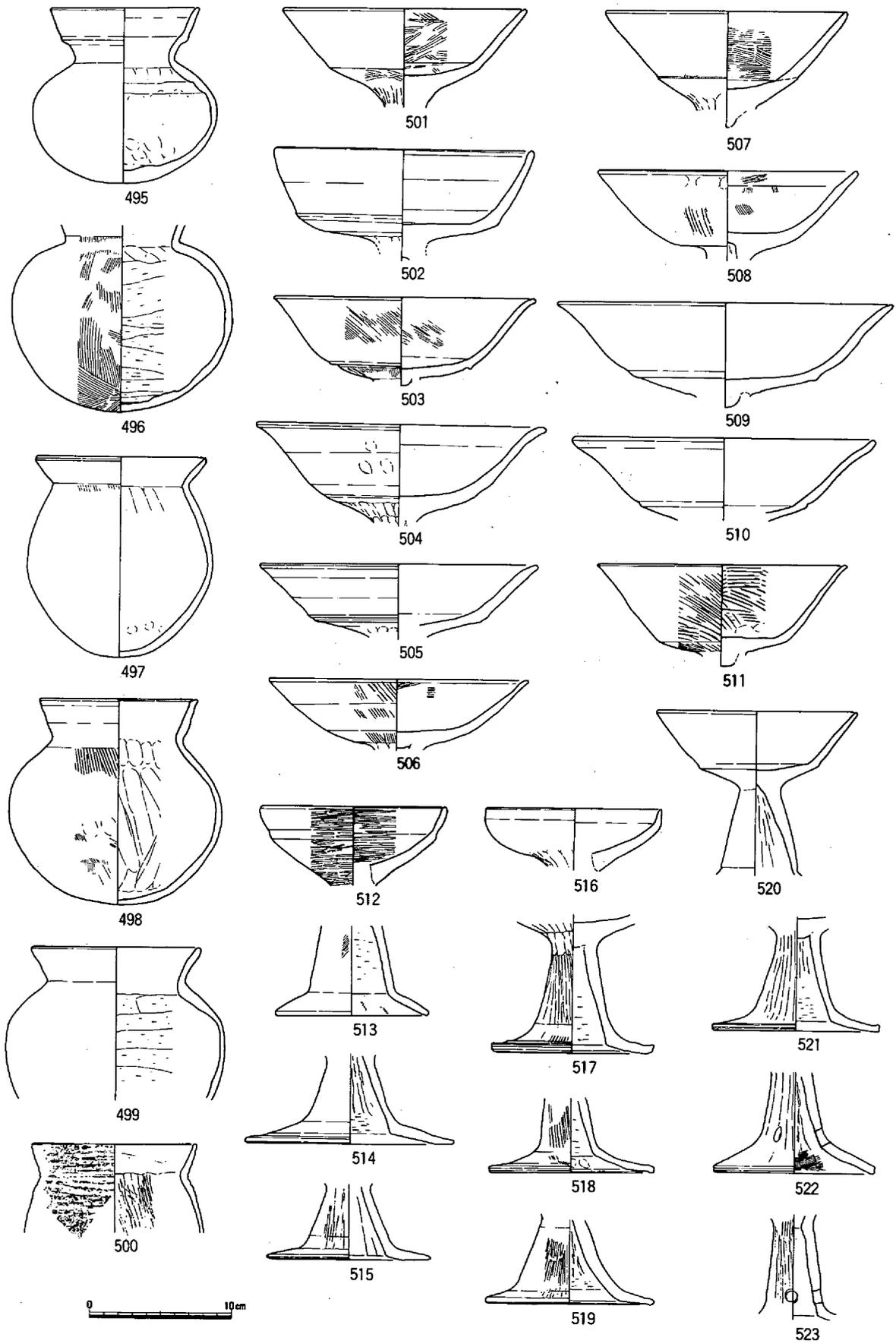
丸底壺529は比較的良い胎土であるが成形・調整はかなり雑である。口縁部の内外のみヨコナデが加えられており、内面はナデ、外面底部はヘラケズリである。小形器台540は円孔を上下交互に脚部に配しており、上下それぞれ6孔ずつとなるようである。鉢535は口縁部はヨコナデ、内面はナデであるが、外面は未調整に近い。胎土は甕bに近い。鉢536も535と同様、外面は簡単なナデが加えられるのみである。

526・527・531~534・537・538は少量の粗砂を含む一群である。このうち531と532は甕497と同一の胎土・色調を示している。531、532は16層堆積後の層(第166図断面では認められない)から出土しており、溝の東側が埋まって流路の中心が西に寄った年代を示す資料である。いずれの土器も外面調整は簡略で、鉢537、538以外は器表にしわ状の小裂が多数認められる。532は端部を短く外反させる鉢で内面はナデによって平滑に仕上げられる。531は532の形態の鉢に脚部を付けたものである。537は粗雑な作りの鉢で口縁端も十分な成形・調整が加えられていない。538では、外面下半と内面上反に粗いハケが見られる。526は底面が未調整、527では底面にわずかにヘラケズリが施される。

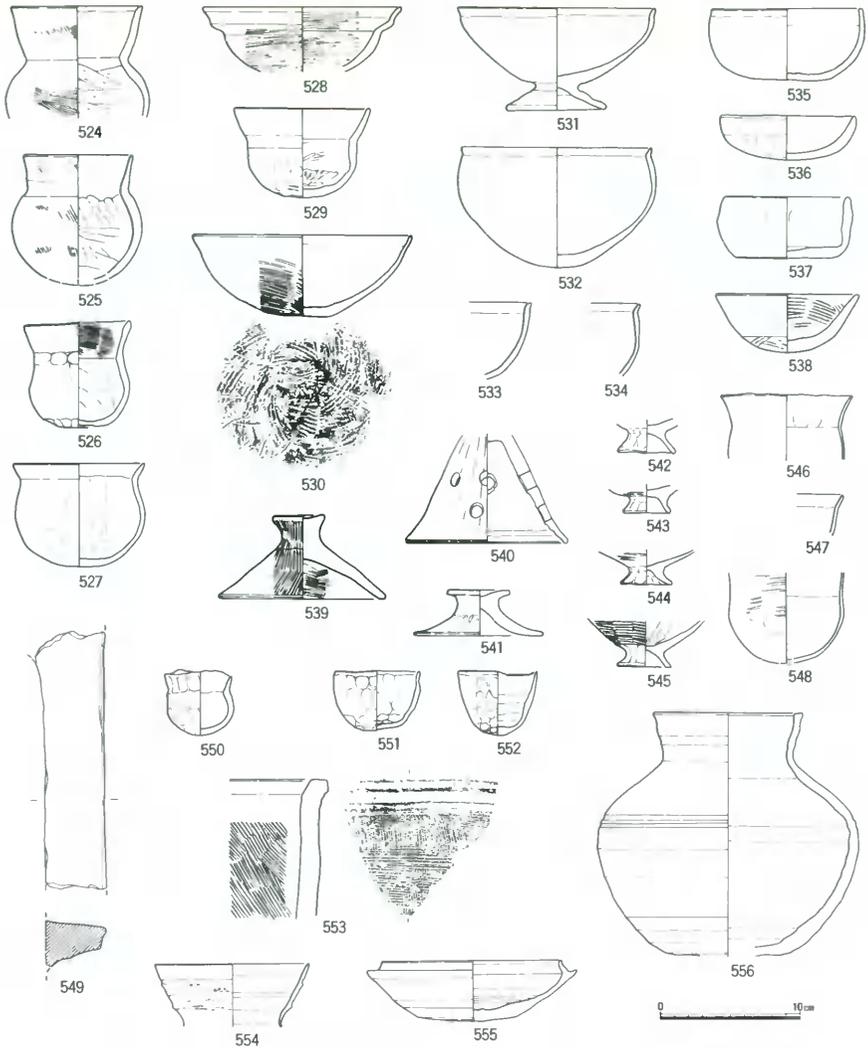
539・541は甕の蓋である。541は小さく、胎土は比較的良い。下面にはヘラミガキが認められる。539の胎土は甕cに似る。上面の調整はハケ、下面はハケのち粗いナデである。

手づくね土器は550が一点出土したのみである。

製塩土器 542~545は倒杯形の脚をもつもので、脚から大きく開く体部が続く。体部には平行タタキが施されている。543は脚部がかなり小形化している。545の内面には工具先端の圧痕が放射状に入っている。546~548は薄手で丸底のものである。546はく字の口縁部をもち、内外面の調整はナデである。548は外面に浅いタタキが施される。551・552は小形の製塩土器であるが、手づくね土器に見まがうような大きさで、内外面の調整も押圧と粗いナデである。551で口径5.8cm、器高4.3cm、552は口径5.5cm、器高4.5cmである。第170図に示した500も製塩土器とみられる。口縁部は浅くく字形に外反しており、外面は口縁部から肩部にかけて平行タタキが施されている。口縁部内面は斜めのナデ、胴部



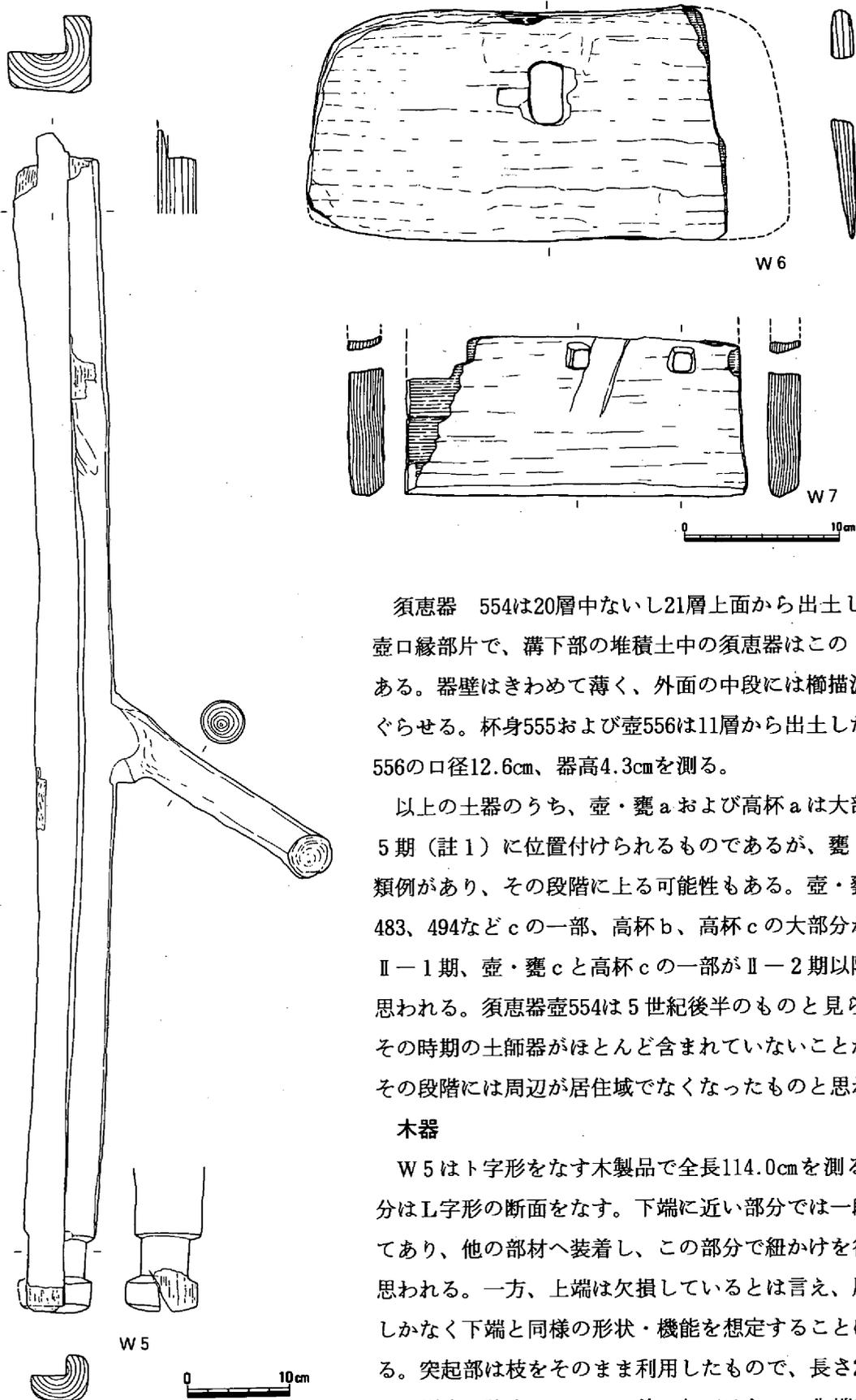
第170図 溝57出土遺物(3)



第171図 溝57出土遺物(4)

内面はきわめて粗い縦方向のケズリが施されている。

埴輪 549は長さ18.1cmの棒状の破片で断面は台形をなす。上面は細かいハケメ調整によって平滑になっているのに対し、側面および下面は粗いナデ調整である。破片左側は接合部で剝脱しておりタテハケの施された本体からはずれたものであることがわかる。形状や大きさから家形埴輪の裾廻台であると考えられる。色調から野焼きによると推定される。553は円筒埴輪の口縁部片で、端部には低い突帯が配されている。外面にはタテハケののちA種とみられるヨコハケが施されており、内面には斜め方向のハケメが施される。外面には黒斑が認められる。



第172図 溝57出土遺物(5)

須恵器 554は20層中ないし21層上面から出土した須恵器壺口縁部片で、溝下部の堆積土中の須恵器はこの1片のみである。器壁はきわめて薄く、外面の中段には櫛描波状文をめぐらせる。杯身555および壺556は11層から出土したもので、556の口径12.6cm、器高4.3cmを測る。

以上の土器のうち、壺・甕aおよび高杯aは大部分がI-5期(註1)に位置付けられるものであるが、甕1は4期に類例があり、その段階に上る可能性もある。壺・甕bおよび483、494などcの一部、高杯b、高杯cの大部分がおおむねII-1期、壺・甕cと高杯cの一部がII-2期以降になると思われる。須恵器壺554は5世紀後半のものと思われるが、その時期の土師器がほとんど含まれていないことからみて、その段階には周辺が居住域でなくなったものと思われる。

木器

W5はT字形をなす木製品で全長114.0cmを測る。本体部分はL字形の断面をなす。下端に近い部分では一段削り下げてあり、他の部材へ装着し、この部分で紐かけを行うものと思われる。一方、上端は欠損しているとは言え、厚さが10mmしかなく下端と同様の形状・機能を想定することは困難である。突起部は枝をそのまま利用したもので、長さ21.3cmを測る。樹皮を除去したのみで特に加工はない。先端は切断してある。W6は長さ14.8cm、復元幅31cmの横楸である。W7は長さ22.1cmの板材で1.7cm前後の方孔を2つ配している。

このほか、図示しえなかったが長さ11cmの鹿角が出土しており、内側が中空になることから刀子柄の未製品と考えられる。また、加工はないがスコリアの小片が1点出土しており、他地域からの搬入品と考えられる。他に、桃の種が多量に出土している。

遺構の性格

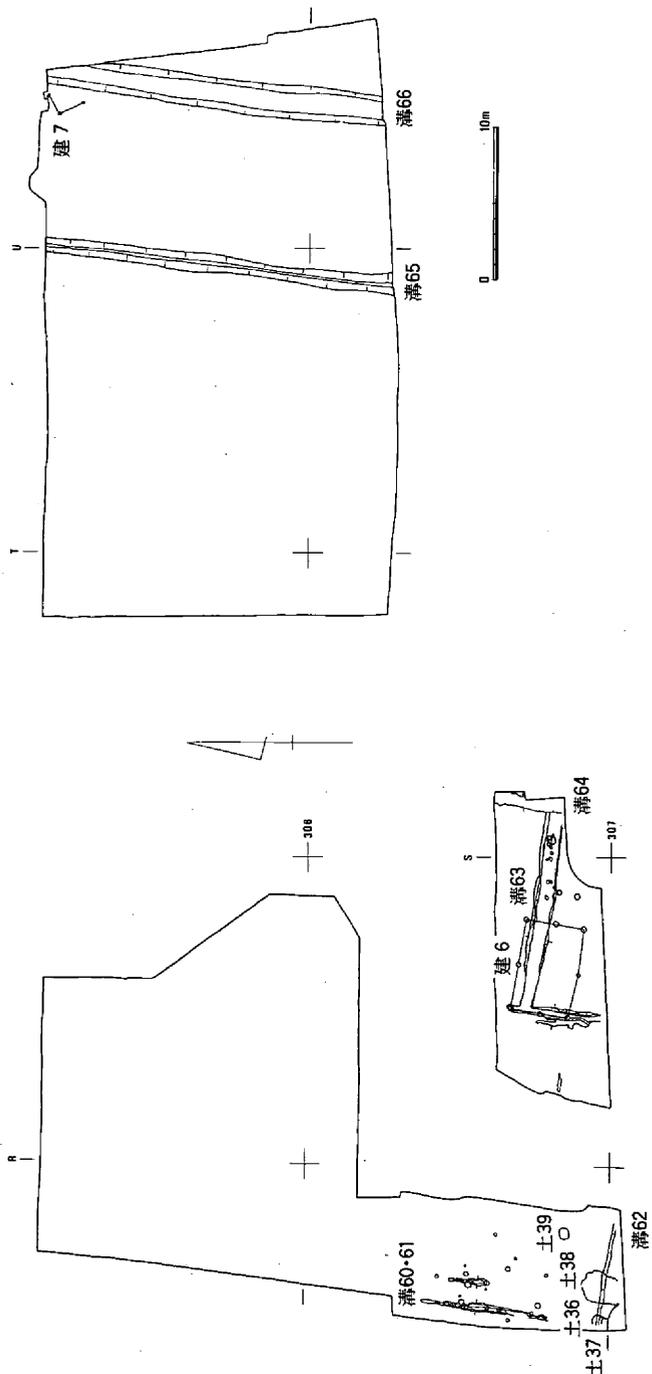
以上のように溝57は幅12m、深さ1.5m以上の大規模な人工の溝で、出土土器から開掘の年代は百・古・Ⅱの末とみられ、5世紀後半には既にある程度埋没していたようである。また、この存続年代幅は兼基・今谷遺跡の古墳時代集落の消長とほぼ軌を一にすることも注目される。

溝が機能していた時期には背後の丘陵上に全長165mの大形前方後円墳・金蔵山古墳の築造がなされている。溝の規模がきわめて大きく一般的な用水路とは考えにくいこと、溝の出土遺物に少量とはいえ埴輪が見られることなどからすれば、この溝は金蔵山古墳の造営に関わるものであったとみることも十分に可能であり、溝は古墳造営の物資を運ぶための運河として構築されたと考える。前方後円墳の築造が墳丘の築造にとどまらず大規模な付帯工事を伴ったことを示す例と言えよう。（宇垣）

註

註1 土師器の編年は下記の文献に拠った。

平井泰男ほか「土師器」『吉備の考古学的研究』(下) 山陽新聞社 1992年



第173図 大地調査区古代以降の遺構<1>(S=1/500)

4. 古代・中世の遺構と遺物

(1) 建 物

建物6 (第175図)

306R区で検出された2間×2間の建物で、主軸を東西方向に向ける。規模は桁行5.68m、梁行3.8mを測る。柱間隔はやや不規則であるが、桁行は2.9m前後、梁行は2m前後である。柱並びは良好であるが、南側柱列の真中だけは南にややずれている。

柱穴は径25cm前後の円形である。柱穴の中には、底に柱の重みで沈んだ痕跡をもつものが認められる。なお柱痕跡を残すものは少ない。時期は検出面および埋土から中世と考えられる。(平井)

建物7 (第176図)

305U区の北寄りに検出された、推定1間×1間の建物である。柱穴は3本しか認められず、位置的には溝66に削平されたとみられる。柱穴1は18×35cmの隅丸方形、他の2本は径20cm強の円形を呈し、深さは5cm前後しかない。柱穴間は約1.4mと約1.7mを測る。柱穴の検出レベルと淡黄灰色粘質土の埋土から、中世とみられる。(江見)

(2) 土 壙

土壙35 (第177図)

306Q区で検出された土壙で、上部は溝62に切られ、南側は土壙36に切られている。平面形は楕円形を呈し、規模は南北60cm、深さ10cm前後を測る。底面はほぼ平坦で、壁は急傾斜で立上がる。埋土は淡灰色粘土である。遺物は出土しなかったが、検出面および埋土から中世と考えられる。

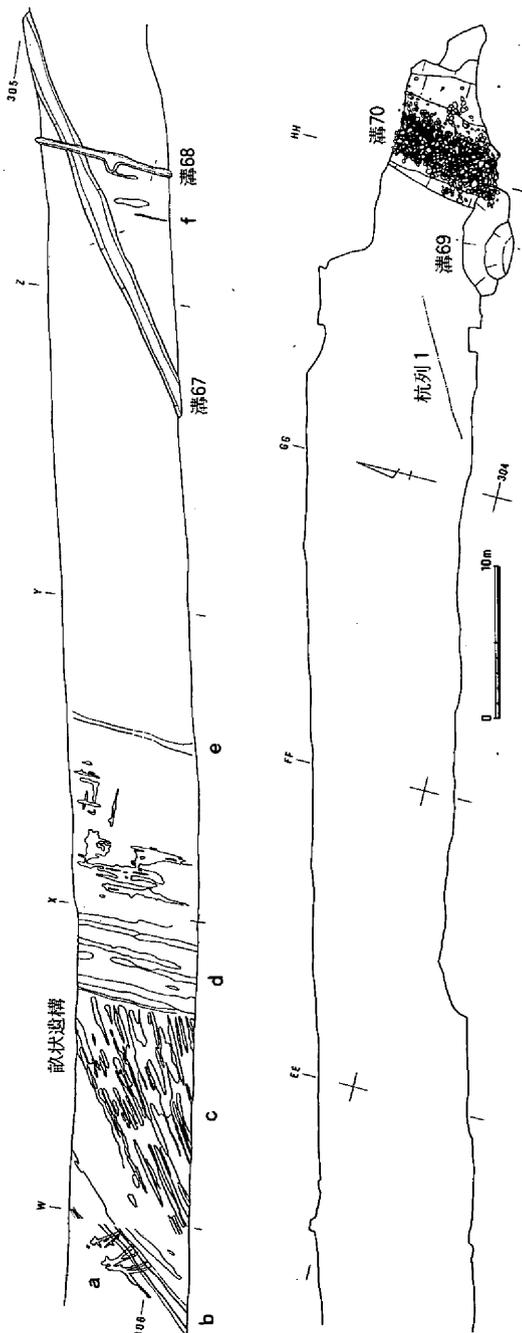
(平井)

土壙36 (第178図)

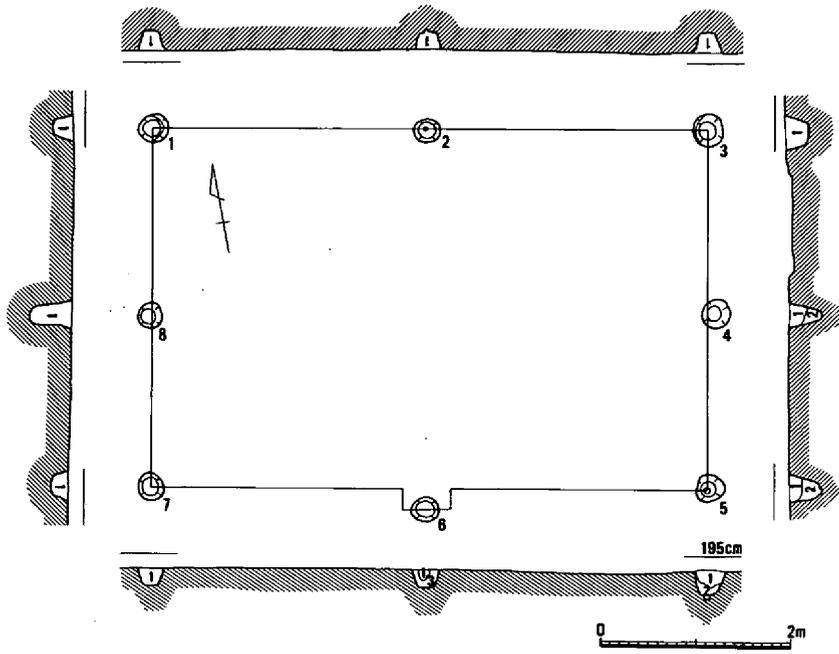
307Q区で検出された土壙で、上部は溝62で削平され、北側は土壙35を切っている。平面形は楕円形状を呈するが、東側がくびれるため二つの土壙が切り合っているようにも見える。しかし埋土は同じであることから、一つの土壙と考えた。埋土は灰色粘土で、遺物は出土しなかった。時期は検出面および埋土から中世と考えられる。(平井)

土壙37 (第179図)

306・307Q区で検出された土壙で、南半部は溝



第174図 大地調査区古代以降の遺構<2>(S=1/500)

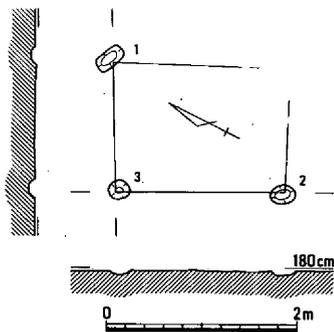


1. 淡黄灰色粘質土 2. 茶褐灰色粘質土 3. 茶褐色粘質土

第175図 建物6

62によって上部を削平されている。平面形は不定形で、南北2.3m前後、東西2m前後の方形に近い掘り込みの北側に、細長く突出する形状を呈する。底面はほぼ平坦で、壁は急傾斜で立上る。

埋土は淡灰色粘土である。遺物は出土しなかったが、検出面および埋土などから中世と考えられる。(平井)



第176図 建物7

土壌39 (第180図)

306Q区で検出した土壌で、平面形はほぼ長方形を呈する。規模は長さ68cm、幅56cm、深さ8cmを測る。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立上る。

埋土はやや暗い灰色粘土である。遺物は出土していないが、検出面および埋土などから中世と考えられる。(平井)

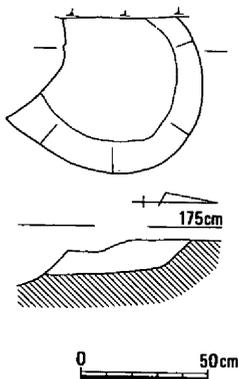
(3) 溝

溝60・61 (第181図)

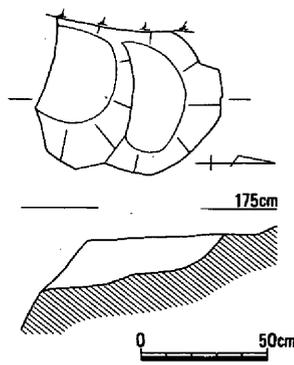
306Q区で検出された溝で、ほぼ南北に流走する。溝60は長さ8.5mにわたって検出された。幅は一定せず、深さも一定していない。

溝61は溝60の東側へ1.5mほど離れた位置に、溝60と平行して流走する。しかし、検出された長さは2.3mと短い。溝61と同様、幅、深さともに一定しない。この二条の溝は306Rの溝63と類似しており、用水路というよりは何かを区画していたものと推定される。

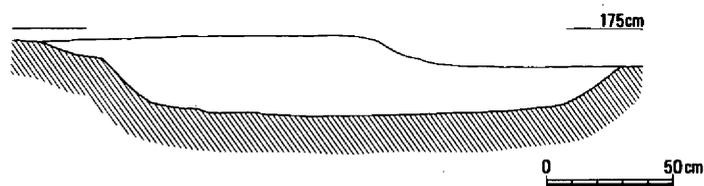
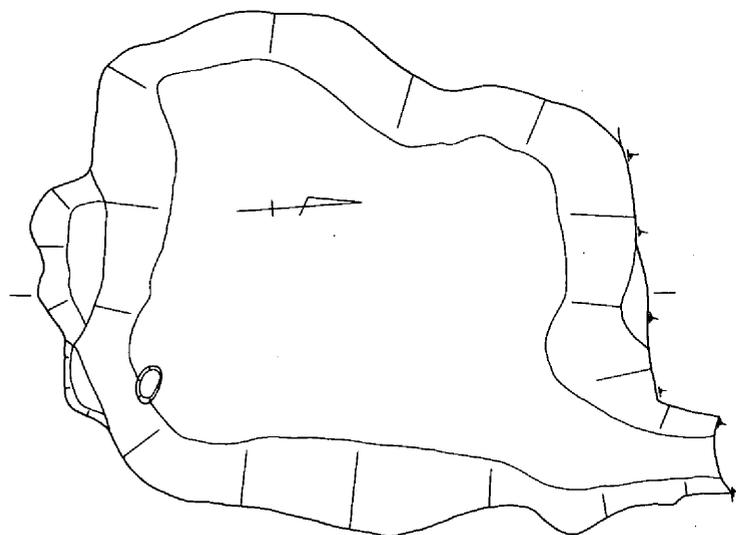
遺物は出土しなかったが、検出面および埋土などから中世と考えられる。(平井)



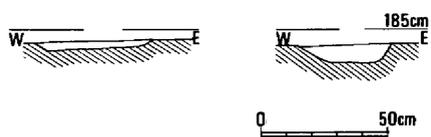
第177図 土壌35



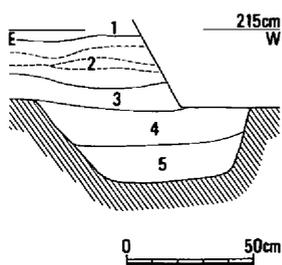
第178図 土壌36



第179図 土壌38



第181図 溝60・61

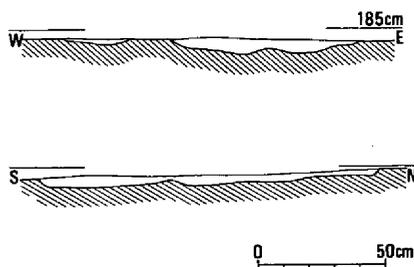


1. 灰黄色砂(近世)
2. 淡灰色粘土
3. 灰色粘土
4. 灰色粘土
(マンガン多く含む)
5. 灰白色粘土
(マンガン多く含む)

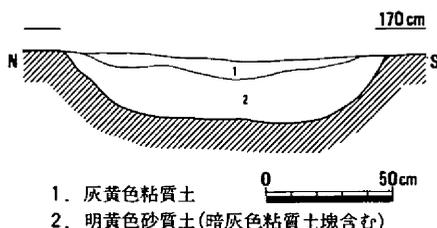
第183図 溝64

溝63 (第182図)

306R区で検出された溝で、南北方向から東西方向に折れ曲る。西辺にあたる南北方向の溝は、幅、深さとも一定しない。南側は調査区外へ延びるが、北側へは6mあまりで途切れ、その少し手前で東に向かって折れ曲る。東西方向の溝は、幅は1.25m前後と一定しているが、深さは一定しない。

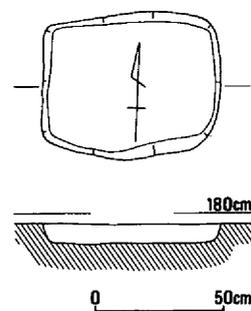


第182図 溝63



1. 灰黄色粘質土
2. 明黄色砂質土(暗灰色粘質土塊含む)

第184図 溝67

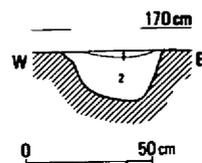


第180図 土壌39

溝62

306・307Q区で検出された溝で、ほぼ東西方向に流走する。調査区の南端に位置するため、南岸は調査区外にあるものと考えられる。おそらく幅1m以上の溝と推定されるが、深さは浅く10cmあまりを測る。埋土は暗灰色粘土で遺物は出土していない。時期は中世と考えられる。(平井)

埋土は明灰色粘質土で、溝は深さが浅いものの、何かを区画するために掘られたものと思われる。時期は中世と考えられる。(平井)



1. 暗黄色粘質土
2. 明黄色粘質土

第185図 溝68

溝64 (第183図)

306S区で検出された溝で、南北方向に流走する。調査区の東端に位置するため、東岸は一部しか検出できなかった。規模は幅85cm、深さ30cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は急傾斜で立上がる。埋土は2層に分かれるが、いずれも灰色粘土を基調とする。

遺物は出土しなかったが、検出面と埋土などから中世と考えられる。(平井)

溝65

305・306T区の東端と305U区の一部にかけて、調査地区をほぼ南北に横切るように検出されている。幅約100cm前後、深さ約4～5cmを図り、古墳時代前期の暗茶褐色粘質土上面に上層の明灰色粘質土が浅く落ち込んでいる状況を呈する。遺物は土器の小片が数点出土しているに過ぎない。

土層関係から、中世の畝状遺構の溝部分の残存と考えられる。(江見)

溝66

305・306U区のほぼ中央を南北に横切って検出された、幅2.2m前後、深さ10cm足らずの浅いU字溝である。溝65と約10m隔てて、ほぼ併行して存在しており、層序的な検出状況も同じである。遺物も少量出土しているが、とくに図示できるものはない。

溝65と同様に、中世の畝状遺構に関連する溝の一部と考えていいだろう。(江見)

溝67 (第184図)

305Y・Z区で検出した幅130cm、深さ26cmの溝で、断面は逆台形をなす。弥生洪水砂上部に形成された包含層の上面で検出した。調査区を斜めに流走しており、磁北に対して60°東に振る。埋土は上層が灰黄色粘質土、下層は暗灰粘質土と洪水堆積層の小ブロックで形成されている。上層内で須恵器小片を検出しているが、溝の年代は明確にしえない。(宇垣)

溝68 (第185図)

南北方向にのびる溝で、溝67と同じ面で検出した。溝67を切って設けられており、幅40cm、深さ20cmを測る。調査区中ほどで西に張り出しがあり、その部分で幅124cmとなる。磁北に対し7°東に振っている。(宇垣)

溝69 (第201図)

調査区の東端、303ⅡG区で検出した。南側が工事によって掘削されているため碗を半裁したような形状となっている。残存部分の差し渡し7.1m、深さ2.1mを測る。最下端付近に底面が残存しており、-1.0mである。池等の可能性も考えられるが大溝の一部と推定した。後述の溝71の延長部分と考えており、その項で再度検討を加えるものとする。堆積土中には枝が比較的多く見られたが、貝は含まない。13世紀代の土師質碗、土鍋等の小片が出土した。(宇垣)

溝70 (第186図、図版33)

溝69の東側、303ⅡH区で検出した南北方向の溝で、西側を除いた三方から掘削を受けている。また、溝の南西部分は溝69に切られており、石積みの一部がそれに落ち込んでいた。

検出延長は7m、深さは60cmで底面の高さは0.45mである。西側肩から調査区の端まで10.4mを測るが東側の肩はそれよりもさらに外側になる。底面は西から5.5m付近で最も深くなっており、その東側はテラス状にやや高くなっている。最下部の堆積は砂層であり、流水があったことを示すものと思われる。

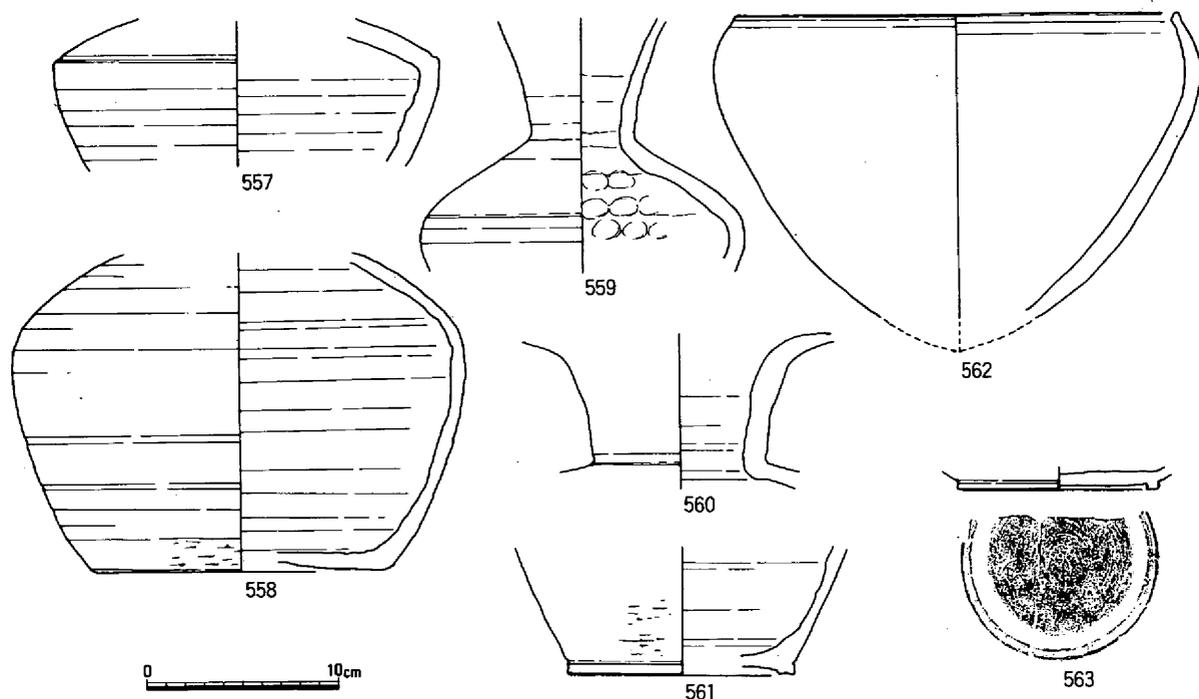
溝の西側にそって角礫が帯状に集積していた。角礫の大きさは長さ50～20cm程度で、すべて花崗岩類であった。角礫の集積は西側が本来の石積みであり、東側に散在するものはそれが崩落したものと

考えられる。西肩から2.5m付近で、直線にはならないが大形の石材が面をそろえて並べられており、これが根石になると思われる。石積みの厚さは30cmである。

石積みの下側は幅1.3m、深さ40cmの溝になっている。溝内には多量の枝が埋め込まれ、さらに上部にはほぼ高さをそろえて丸太材が並べられ、さらにその上面には多数の小枝からなる木質層が認められた。丸太材は径15~8cmで樹皮を取り去ってある。また、溝の両肩および溝内には径5cm以下の細かい杭が打ち込まれており、それが最も多いのは東肩部である。溝内の杭は埋土上面から打ち込まれており、丸太材の固定を企図したもののようなものである。東肩の杭列は丸太材とは少し離れており、石積み



第186図 溝70



第187図 溝70出土遺物

の補強のためであるのか、大溝として使用される過程で打ち込まれたものかよくわからない。丸太材および下方の溝は石積みの下部施設と考えられ、沈下防止のための施設と推定する。

遺物はおもに堆積層下層（2・5層）から出土している。出土土器はすべて須恵器で、壺が多く杯の出土量は少ない。鉄鉢形の鉢562は県内では出土例の少ない資料である。外面下半は回転ヘラケズリおよび縦方向のヘラケズリで、上半部・内面はロクロナデである。563は底部に×形のヘラ記号がある。このほか、堆積土中からウシないしウマの大腿骨破片1点が出土し、石積み下の溝の埋土にはハイガイ1点が含まれていた。

これらの出土遺物からみてこの大溝は奈良時代に構築されたものと判断できるが、特異な下部構造をもつ石積み護岸施設、そして大溝の性格については、残存部分の少なさもあって明確にしがたい。溝の検出延長が短いため軸線を明確にできないが、石積み西端線をとれば磁北にして $N10^{\circ}E$ 前後で、現状の条里軸線（真北方向・磁北に対して $6^{\circ}30'$ 東）にかなり近い。また、条（里）境とみられるL区の現道から東へ約430mの位置となり西から4つめの坪境に合致する可能性がある。ただし、この位置よりも西側の調査区内には古代の溝は認められない。西218mにあたるWライン付近は下部の大溝の沈下によって中世の耕作痕跡がよく遺存しており、古代の遺構も残存する可能性が高いと思われるものの、そうしたものが認められない点が疑問点となる。（宇垣）

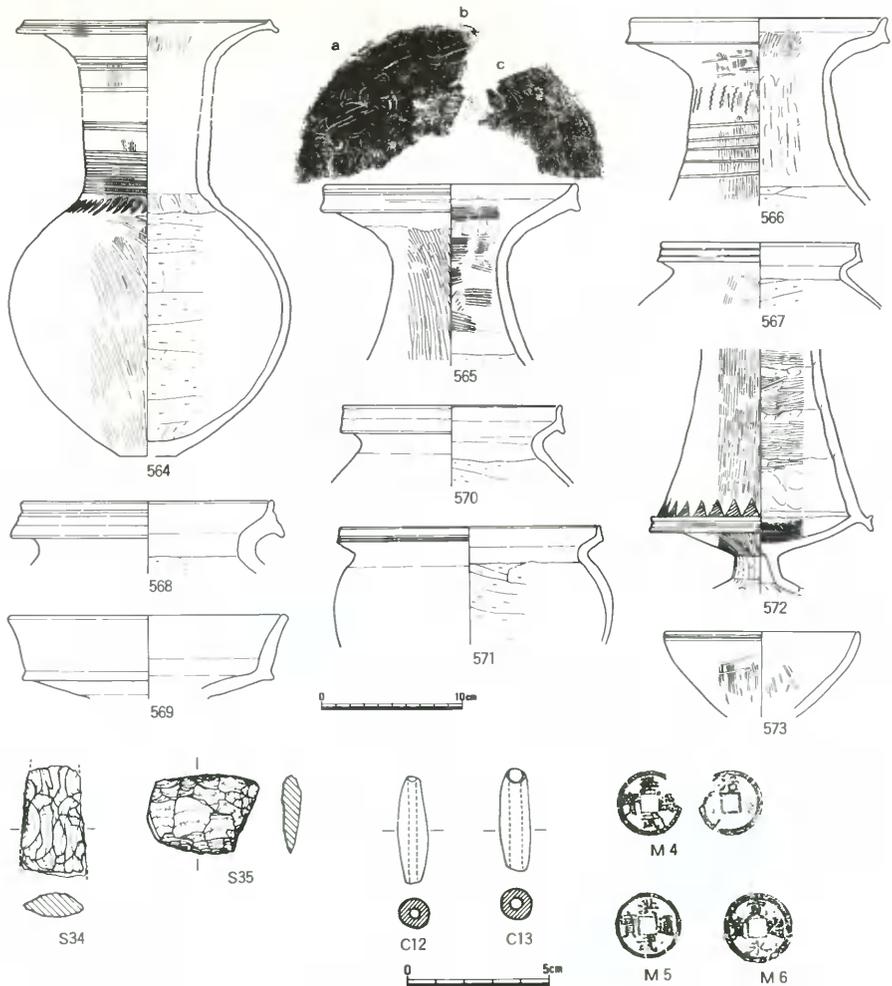
(4) 畝状遺構（図版33）

350V～Z区の中世耕作土層で検出した。V・W区では下に大溝57が所在するために沈下している関係で畝状遺構は明瞭であるが、東側の調査区では徐々に不明瞭となる。

最下面で検出したのはa—南東・北西にのびる浅い溝群である。広がりも狭く、規則性も不明確である。その上になる畔bは幅70cm、高さ3cmで、方位（磁北）は $N44^{\circ}E$ である。畝状遺構cは幅25cm前後、深さ2cm弱の浅い溝が方向をそろえて密集するもので、方位は $N59^{\circ}E$ である。畝状遺構d

はcと同様な規模の小溝が南北方向をとるもので、東側では不明瞭になっていく。方位はN7°Eである。同様のものは溝68付近でも見られる(f)。また、eは水田の境かと思われる段で、東側が7cm下がっている。

畝状遺構等は検出層位等から、磁北に対し44°、60°、7°の順に変遷していると考えられ、それは溝67・68の切り合いからも肯定できる。図示していないが近世水田の溝はN9°Eで、それらが中世までさかのぼる状況も認められず、中世の水田の地割は現在のものとはかなり異なるとみてよい。古代の地割との関係については、前項で述べたように条里遺構が明確にとらえられないため検討が困難である。今後、この地域の資料を総合して古代以降の地割の変遷を検討する必要があるだろう。(宇垣)



第188図 包含層出土遺物

(5) 杭 列

Ⅱ G区で検出した杭列1は太さ8 cm前後の杭6本がほぼ直線に並ぶもので、延長9.7 mを測る。弥生後期水田の畦および水田の上面で検出したが、水田の畦畔と無関係に打ち込まれており、古代ないし中世の段階に上方から打ち込まれたものと判断した。N61° Eで、畝状遺構c、溝67などとはほぼ同じ方位をとる。(字垣)

5. その他の遺構及び包含層の遺物

第188図掲載の土器のうち、565～570・572・573が溝57出土である。564・568のように後期前半のものも含まれるが、主体をなすのは百・後・Ⅳである。なお、長頸壺564は褐色の胎土で角閃石粒を多く含んでおり搬入土器とみられる。

565は口縁受部内面に弧帯文を描いた壺破片である。左側の文様aはS字文の両端に銀杏葉形になる帯表現を3つずつ配するもので、S字中心線→銀杏葉形外形線→S字外線・銀杏葉形内側部分の順に描かれるようである。bおよびcは欠損しているため不明部分が多いが、S字形の帯の巻き込みをきわめて簡略化して表現しているようで、bの左端では外側線が内側に巻き込んでいる。cも先端部はそれと同じ表現になると思われるが、S字自体がさらに大きく曲がっているようである。bでは右下側に弧線があり、もう一つS字形が接続している可能性がある。572は口縁が上方に大きくのびる脚付き直口杯である。

S34は石槍の破片、S35は楔形石器である。

(字垣)

第3節 五ノ坪調査区

1. 調査区の概要

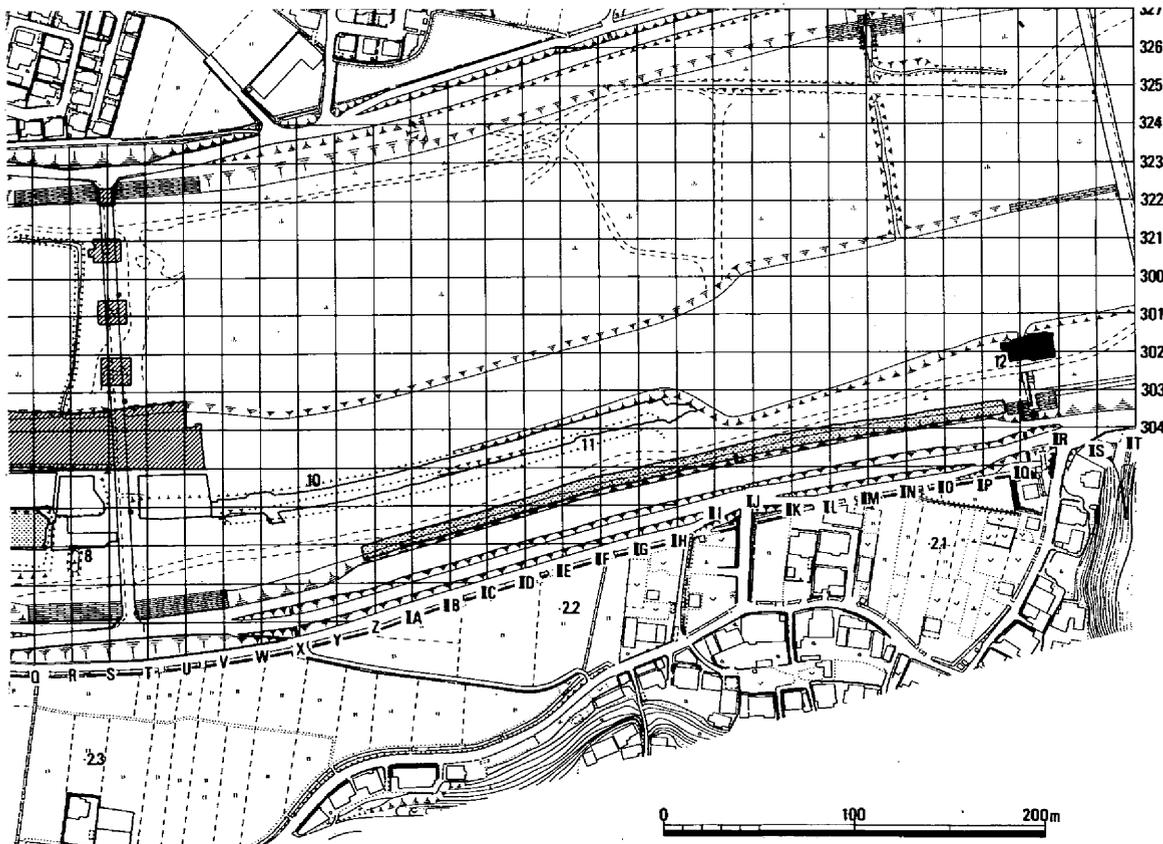
調査位置は今谷遺跡の東端にあたり、大地調査区の調査域から東へ160m離れている。改修工事によって先端が削平されているが舌状の丘陵が北に向かってのびており、調査区はその北西端に近い位置になる。調査区の中央は樋門から流下する水路が設けられており、この部分の壁面に貝層が露呈した状態であった。北側は低水路によって掘削されている。

基盤層は上部が褐色砂質土、下部が暗褐色粘土で、部分的に有機質を含み、量は少ないが弥生時代中期～後期の土器片も認められた。中世の土器とともに示しているが、712・713は溝堆積土中から出土したもので、それぞれ弥生時代後期前半、中期後半のものである。これらも基盤層から流出したものと考えられる。弥生土器はそれほど転摩を受けておらず、南側の山裾付近に弥生集落が所在する可能性が考えられる。

当初、斜面堆積中に形成された貝塚と考えて調査を進めたが、最終的に大溝およびその中に形成された貝塚であることが判明した。大溝の北側の肩が低水路の掘削によって失われていたため、遺構の理解に至るまでにやや時間を要することとなった。

これ以外に溝72・73を検出した。

(宇垣)



第189図 五ノ坪調査区の位置 (S=1/4000)

2. 中世の遺構と遺物

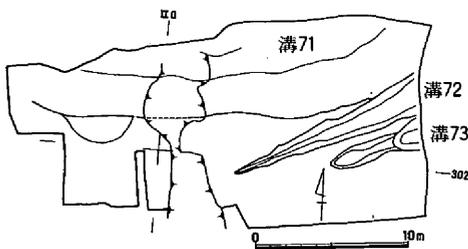
(1) 溝

溝71 (第191~200図、図版34・35・43~45・47)

東西にのびる大溝で、検出延長は26mである。ほぼ東西にのびているが東側ではわずかに弧を描いている。東側は丘陵の先端近くになるため、この付近からゆるやかに曲がって山裾をめぐりながら東にのびると考えられる。前記のように北側の肩が失われているため幅は不明とせざるをえないが、B断面の最も深くなる付近を溝の中央とみるならば上幅7m、底面幅3m前後となる。深さは1.6mで、底面の高さは-0.7m前後である。

法面下方から底面にかけての部分にはほぼ全域にわたって角礫が散在していた。最も大きいものは長さ60cmを測るが、多くは20cm前後の大きさである。西側では大形の礫が多く、また、密集しているのに対し、東側では礫が小さく散漫になっており、西側から流出したものとみられる。西側のものは法面に設けられた貼り石の下部が遺存したものである可能性もあるが、礫の量がそれを考えるには少ないため、肩部付近にあった石積みが崩落したものと推定した。

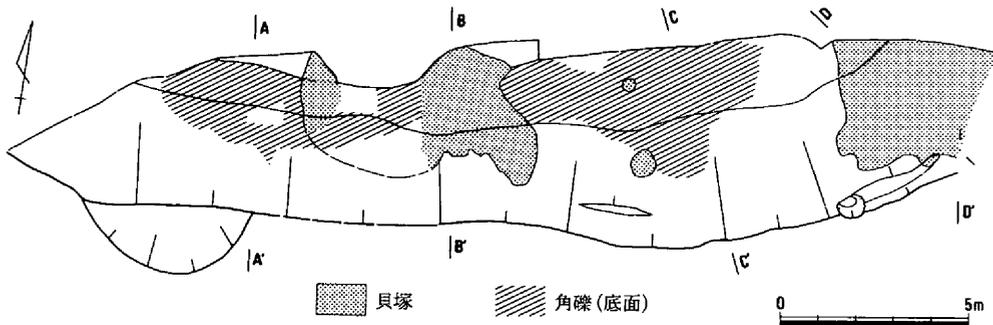
調査区の中央付近と東端に貝塚が広がっている。中央のものは溝が半ば埋没した段階で形成されたものである。水路によって切断されているが東西6m、南北3m以上で厚さ60cmを測る。上部(B断面10層a~c)は純貝層、下部および北側は混土貝層と暗灰褐色土の互層となる。貝層中には長さ20cmほどの角礫が含まれており、一部に炭状の付着物が見られる。東側の貝塚は中央のものよりも高い位置にあり、溝がほとんど埋まった時期に形成されたものである。東西4.2m以上、南北3.5m以上で、厚さは50cmである。いずれの貝層とも貝はハイガイのみである。検出した貝塚はこの2ヶ所である



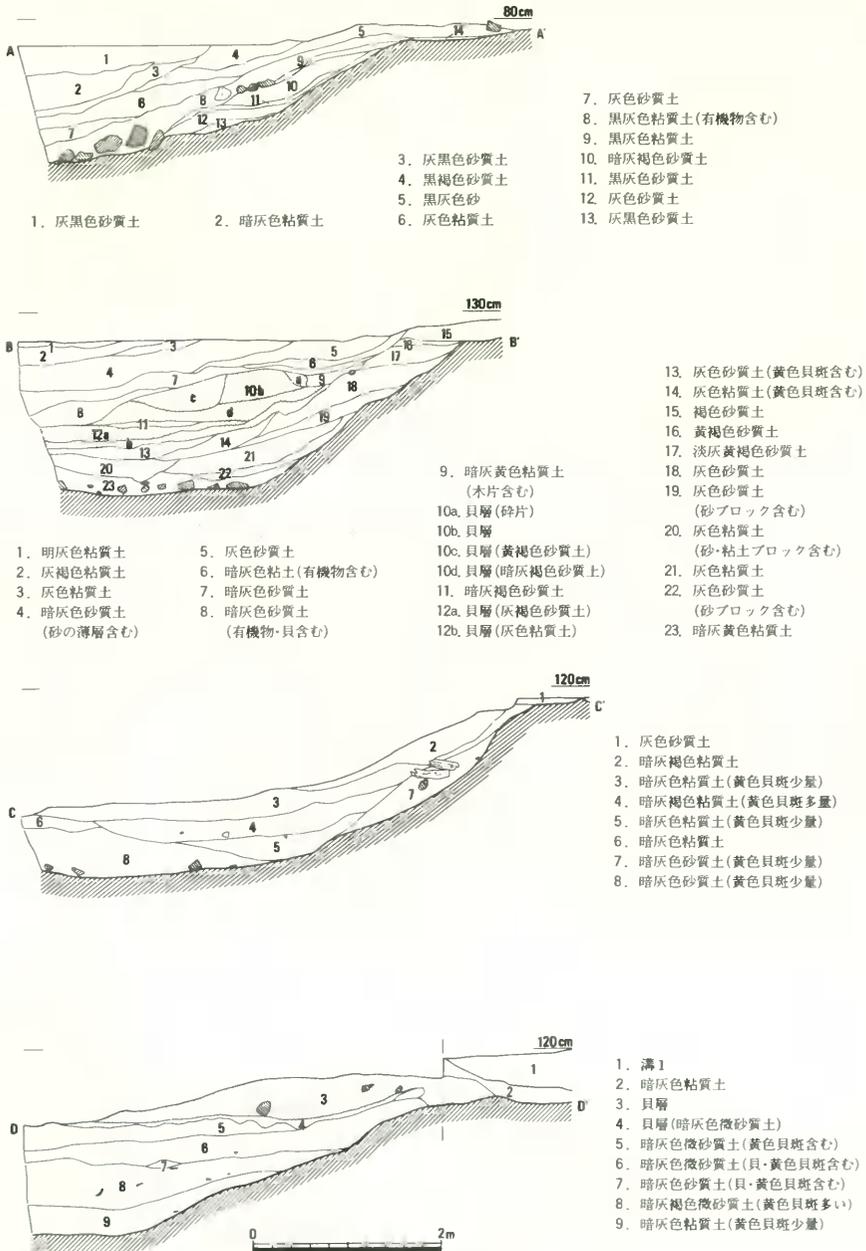
第190図 五ノ坪調査区の遺構全体図
(S=1/500)

が、その間の堆積土(C断面4層等)にも黄色に腐朽して圧痕状になった貝が多量に含まれており、土層自体が黄色を帯びている。したがって、後に形成された貝層は良好に遺存しているのに対し、早い段階に下部に形成された貝層は明確な形で遺存していないとみてよく、溝に投棄された貝の量は膨大なものであったと考えられる。

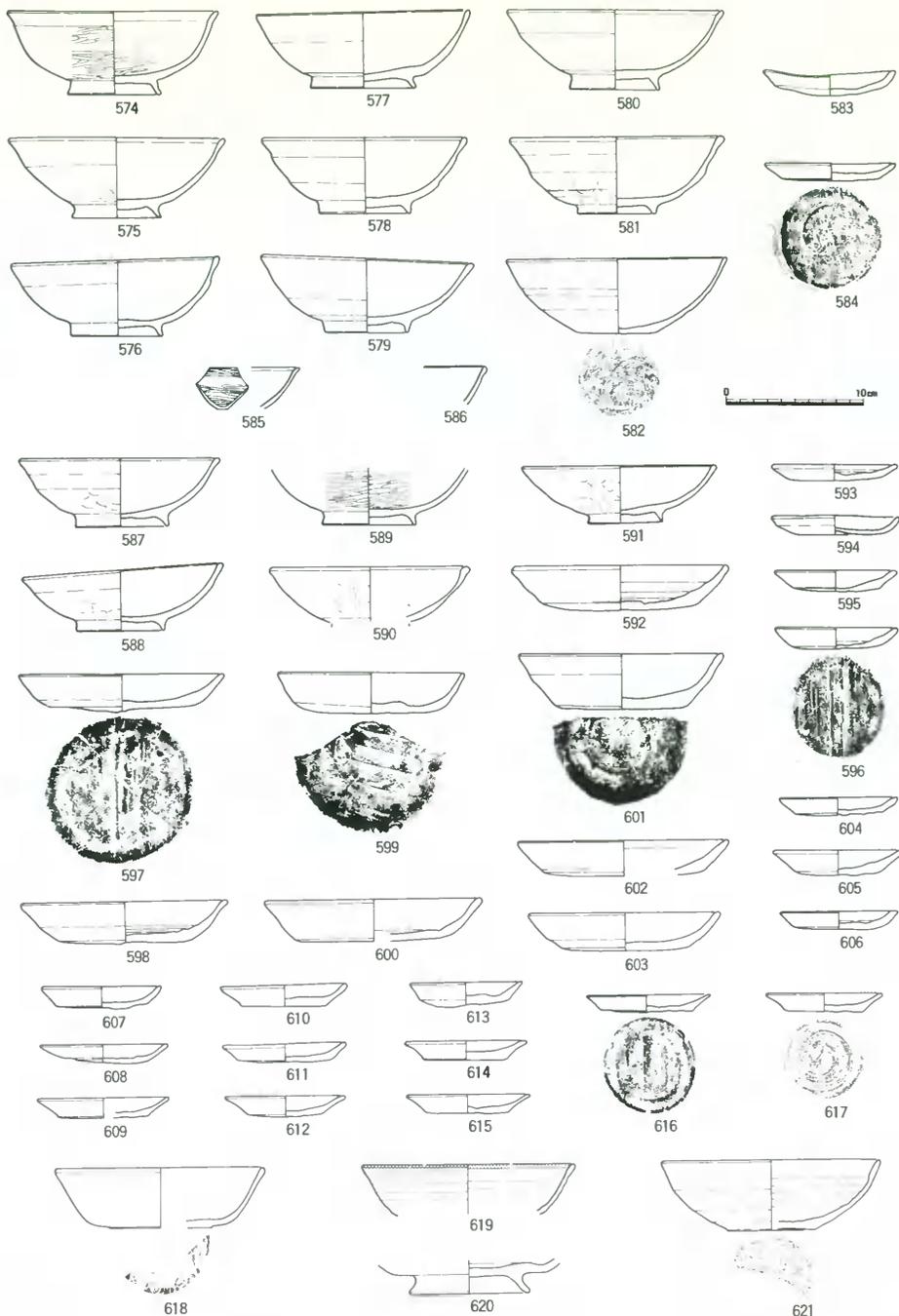
溝西側の肩部には浅いたわみ状の下がりがある。有機



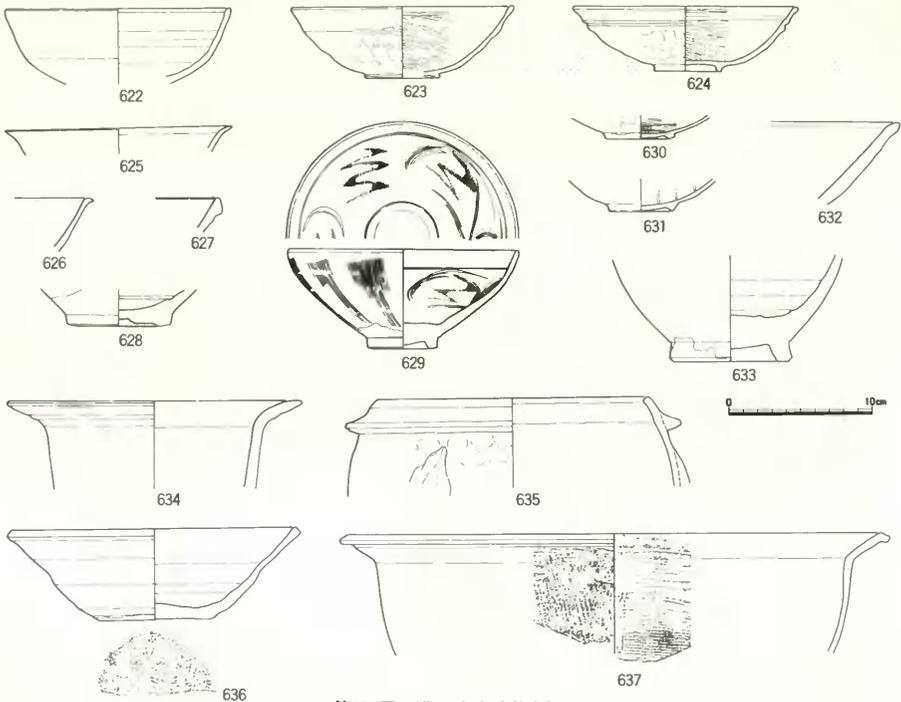
第191図 溝71 (S=1/200)



第192図 溝71断面 (S=1/60)



第193図 溝71出土遺物(1)



第194図 溝71出土遺物(2)

質の薄層が形成されており土師質高台付碗など574～586はこの部分から出土した。かなり早い段階に肩部に形成された堆積なのか、これを切って薄が開掘されているのか明確にできなかったが前者の可能性を考えている。

出土遺物 (第193～200図)

溝71からは土師質の碗・杯・小皿・鍋、瓦器碗、青磁・白磁碗、備前焼、亀山焼、竈・瓦など多量の土器・陶磁器のほか、木器、鉄器、人・獣骨などが出土した。部分によって堆積土の状況がかなり異なるため、ここでは以下の5層に大別する。

土器

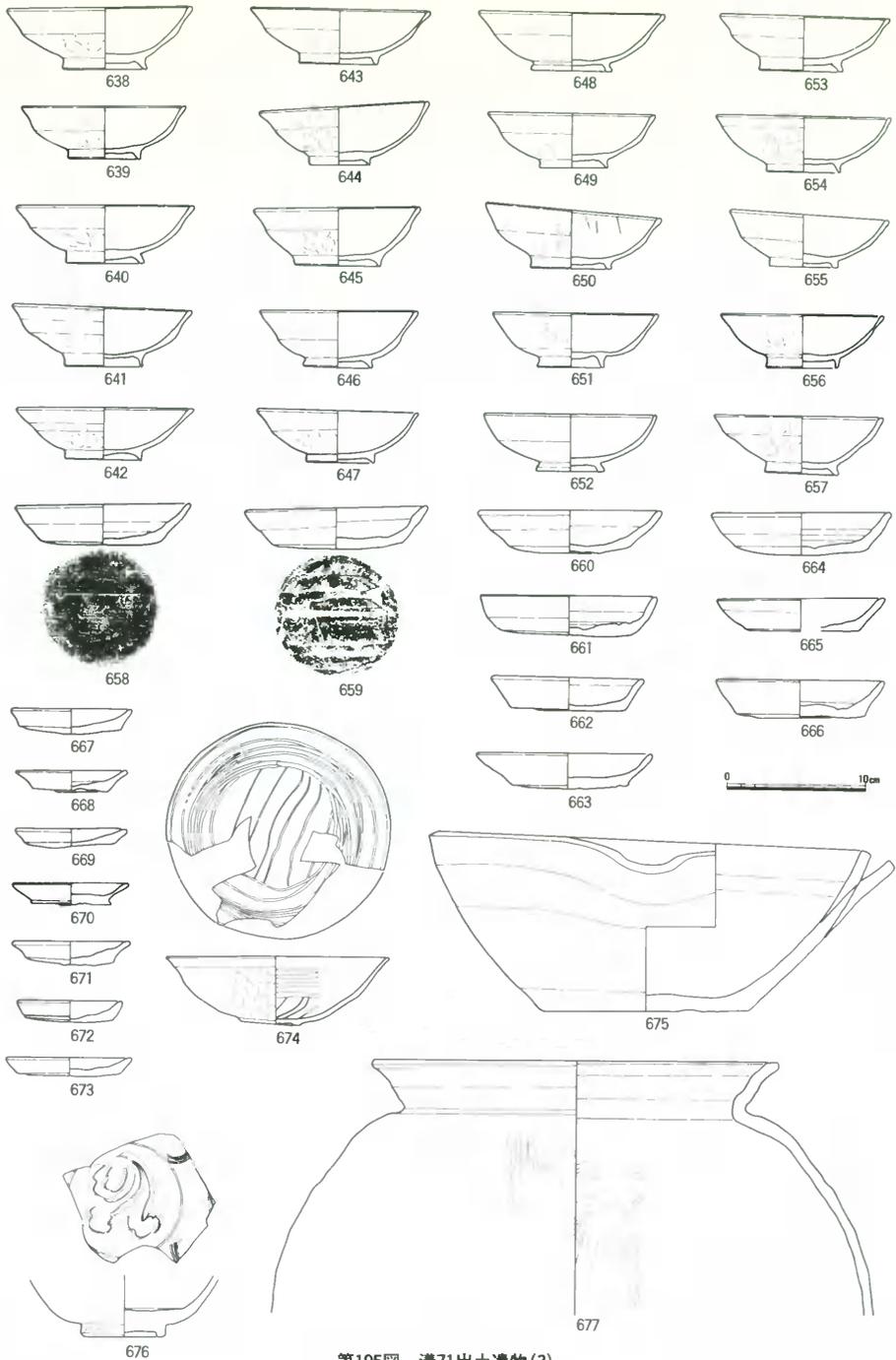
(1)西肩部たわみ出土遺物 (574～586)

たわみ状下がり部分から出土したもので、多くが接合によって完形となる。土師質碗574～581の他に小皿、備前焼碗582、瓦器碗585、白磁碗586などがある。土師質碗は口径15.7～14.4cm、器高6.0～5.3cmと大きく深い。内外面は多くがナデ調整であるが、574ではミガキが施されている。小皿は端部が内湾気味で器高が低い。備前焼碗582は土師質碗とはほぼ同様の口径、器高である。

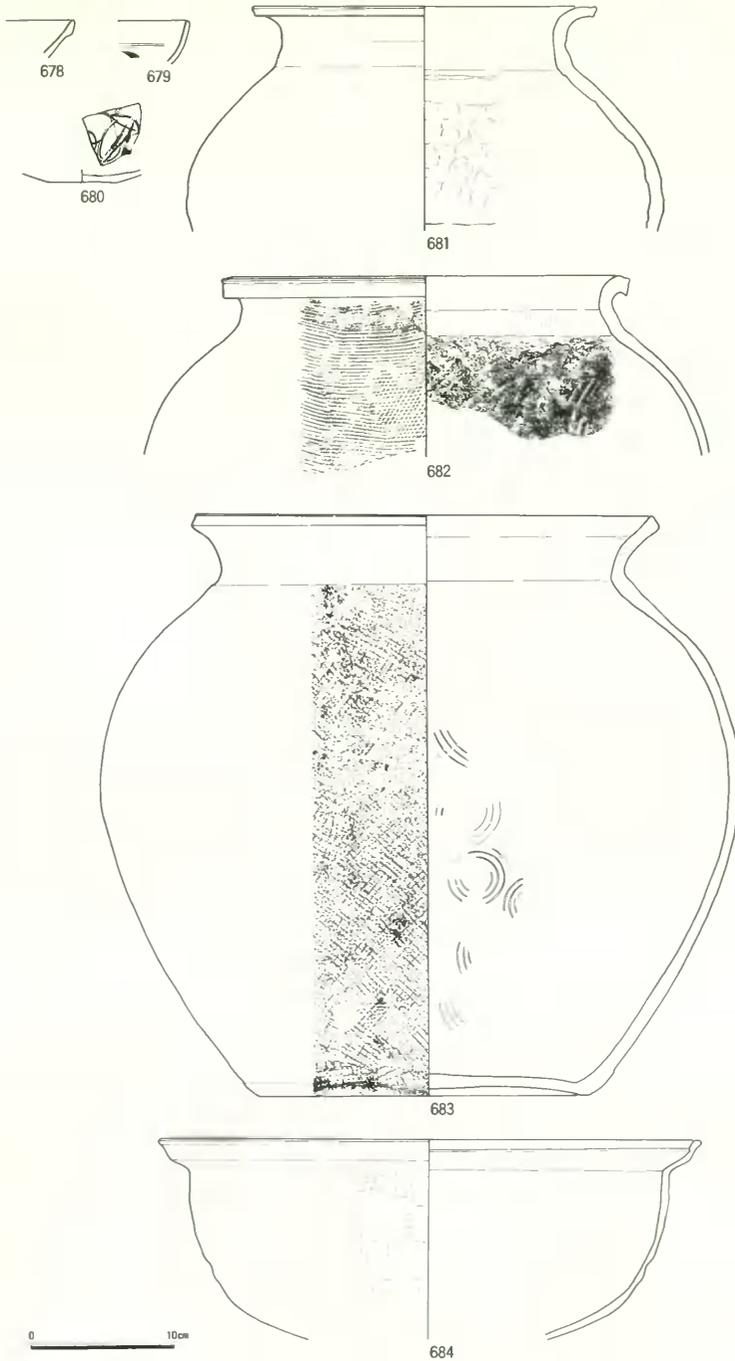
(2)下層 (587～637)

B断面20～23層、C断面7・8層、D断面9層など、おもに大溝底面上の堆積から出土したものである。

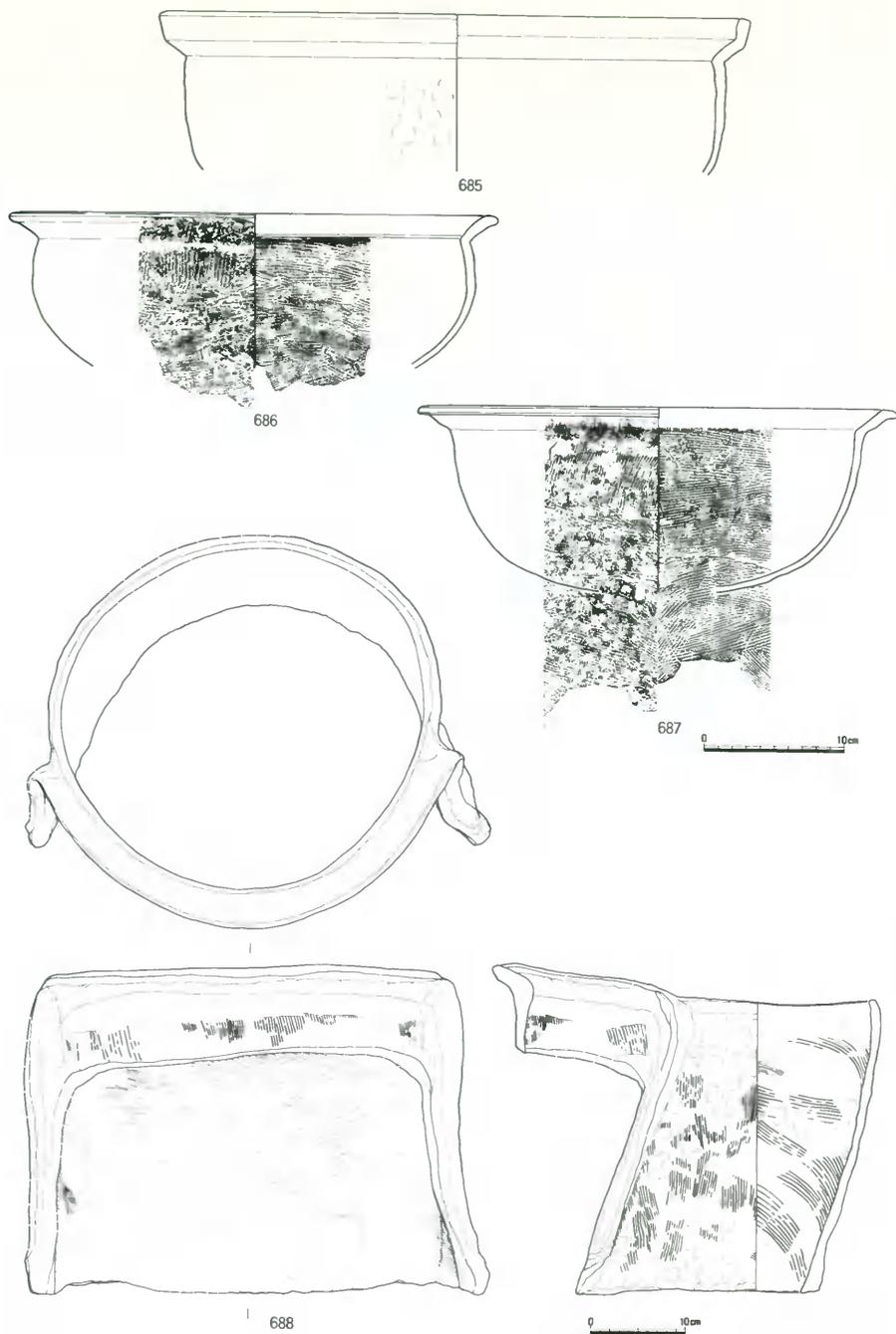
土師質碗は口径14.0～13.7cm、器高4.9～4.2cmである。指押さえ・ナデで器面が調整されるものが



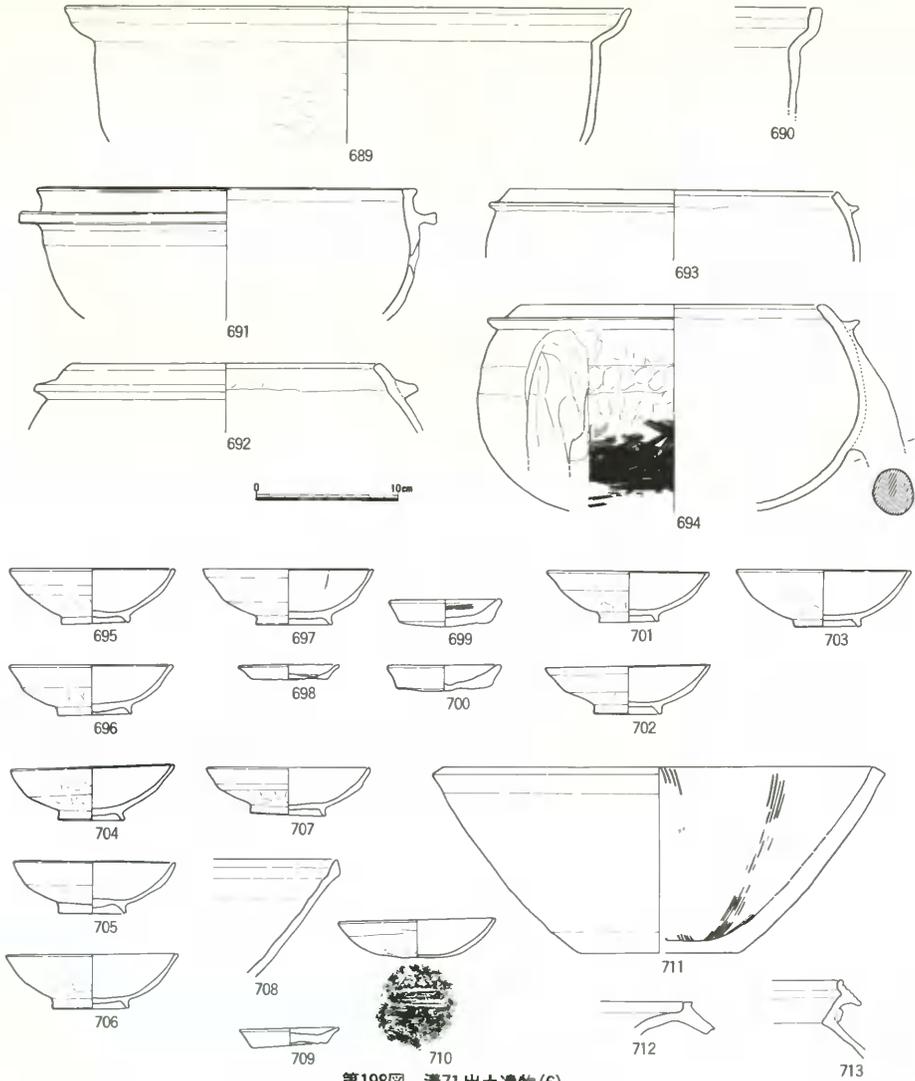
第195図 溝71出土遺物(3)



第196図 溝71出土遺物(4)

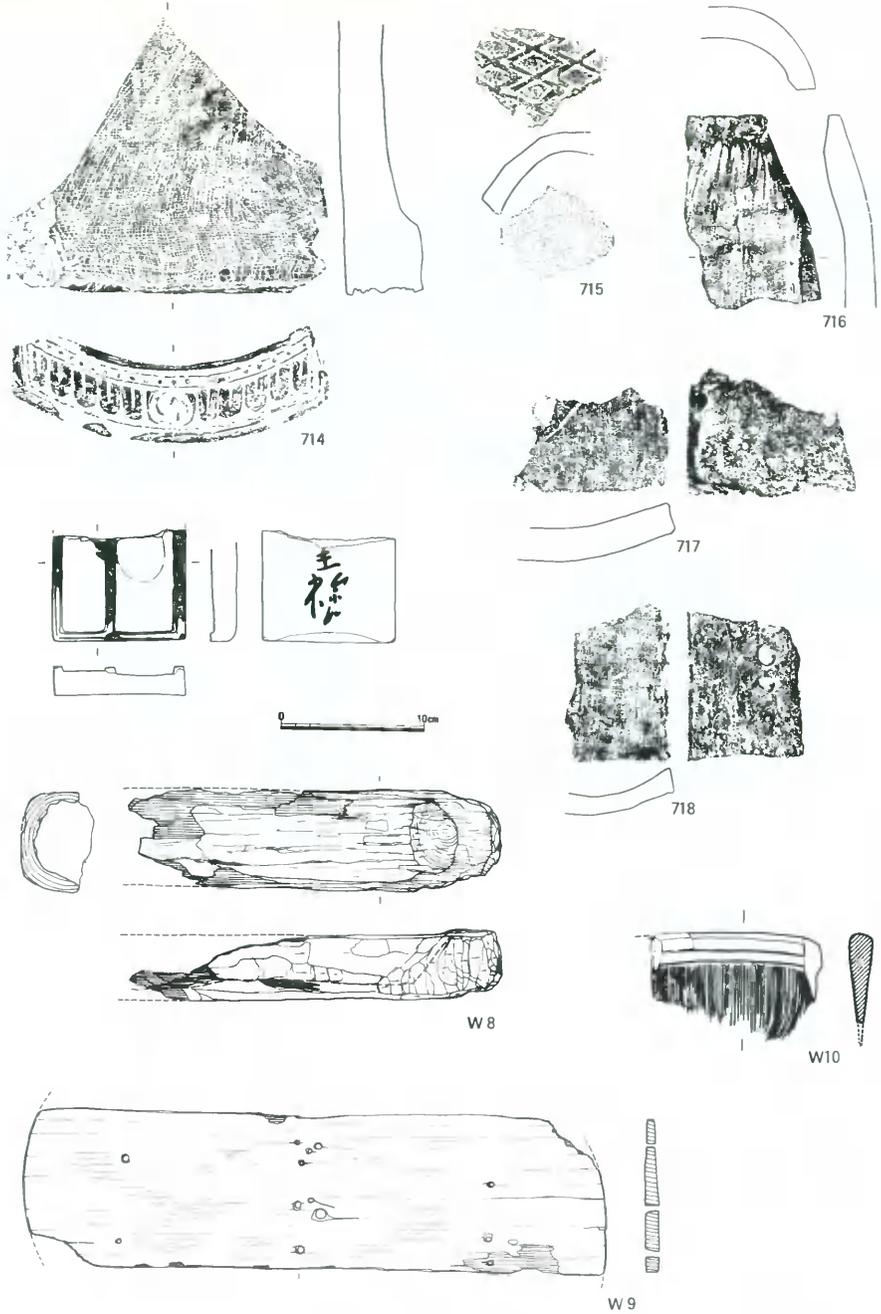


第197図 溝71出土遺物(5)

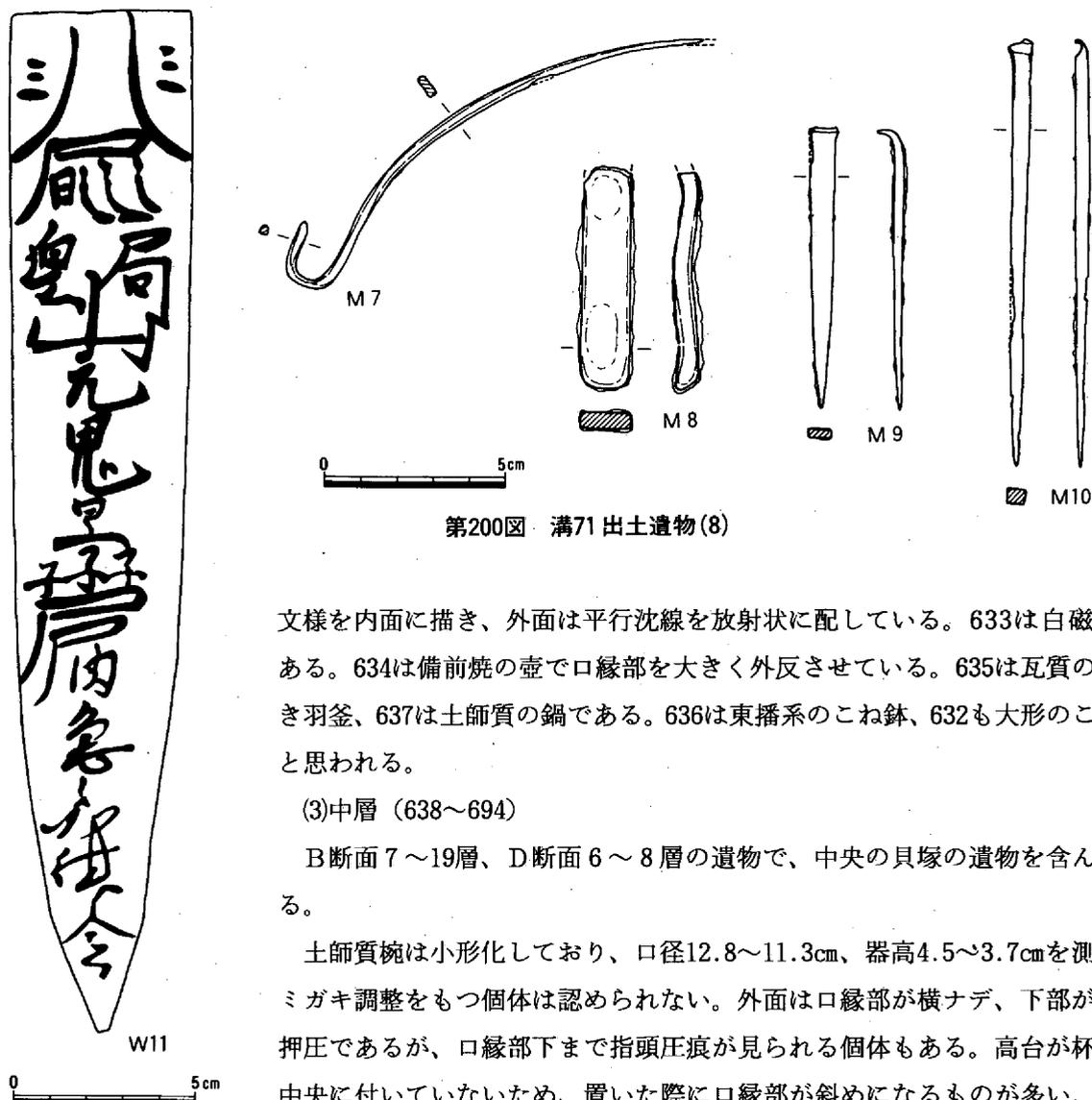


第198図 溝71出土遺物(6)

多いが、589のようにミガキを施すものもある。杯は口径15.2～13.1cm、器高は4.0cmと大きい601を別にすれば3.3～2.8cmである。体部の傾斜はあまり強くなく、内底から口縁部にむかって緩やかなカーブを描くものが多い。底部の調整は基本的に回転ヘラ切りののち板目押圧である。小皿は口径9.0～7.9cm、器高1.8～1.3cmで、口縁部が内湾するものと強くつまみ出されて外反するものがある。底部調整は杯と同様であるが、594は指頭押圧で底部も薄い。618は須恵質の碗、619・620は褐白色～淡灰色で軟質の焼成である。621・622は備前焼碗、623・624・630・631は瓦器碗である。625～628は白磁碗で625・626は口縁端が外反し、627は玉縁状口縁をなす。同安窯系青磁碗629は櫛状工具による曲線



第199図 溝71 出土遺物(7)



第200図 溝71出土遺物(8)

文様を内面に描き、外面は平行沈線を放射状に配している。633は白磁壺である。634は備前焼の壺で口縁部を大きく外反させている。635は瓦質の脚付き羽釜、637は土師質の鍋である。636は東播系のこね鉢、632も大形のこね鉢と思われる。

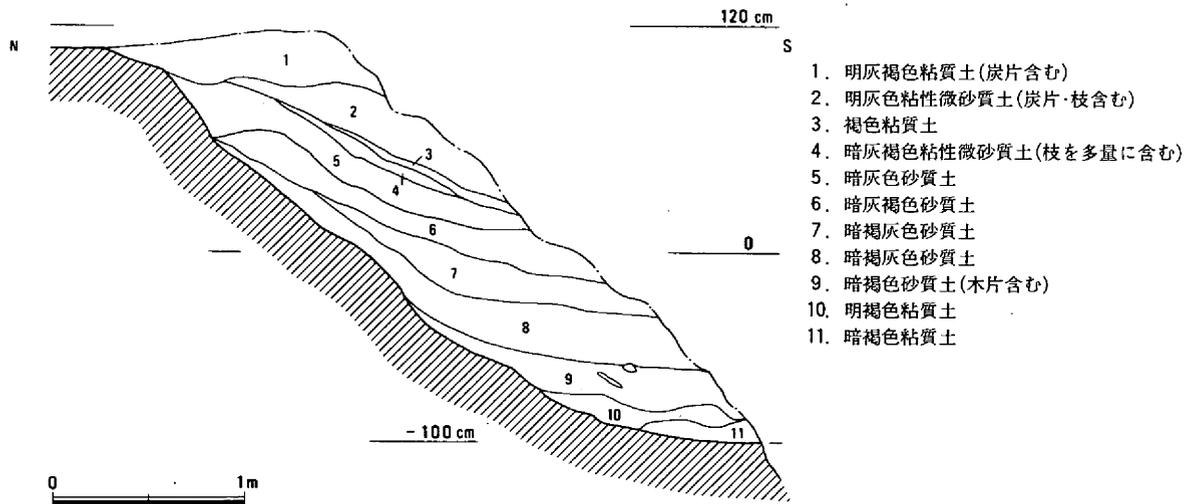
(3)中層 (638~694)

B断面7~19層、D断面6~8層の遺物で、中央の貝塚の遺物を含んでいる。

土師質碗は小形化しており、口径12.8~11.3cm、器高4.5~3.7cmを測る。ミガキ調整をもつ個体は認められない。外面は口縁部が横ナデ、下部が指頭押圧であるが、口縁部下まで指頭圧痕が見られる個体もある。高台が杯部の中央に付いていないため、置いた際に口縁部が斜めになるものが多い。杯も口径12.8~10.8cm、器高3.1~2.4cmと小形になる。下層のものに比べて体部の立ち上がりが強くなるようである。小皿は口径8.0~7.6cm、器高1.6~1.3cmである。

なお別に示した695~697・699~703はD 6層南上端でまとめて投棄されたような状態で出土した一群であり、いずれも完形である。法量は他とさほど変わらないが、体部の稜が弱くなっており、全体に丸みが強い。698はB 7層からの出土である。

674は瓦器碗、676は青磁碗で内底に花文とみられる簡略な文様が彫り込んである。679も青磁碗、680は青磁皿、678は白磁碗である。675は須恵質のこね鉢で、内面下部は使用によってかなり摩滅している。677は備前焼の甕で、タタキ成形の痕跡が認められ、その上に浅くハケメが施される。681は常滑焼の壺で内面には円形タタキの痕跡がよく残っている。常滑焼はこの地域では搬入例の少ないものである。682・683は亀山焼の甕で683はほぼ完形に復元できた。外面は682は平行タタキ、683は格子目タタキである。内面は両者とも浅い同心円タタキが認められる。684・685・689・690は瓦質の鍋であるがいずれも器面はあまり炭素を吸着しておらず淡灰色を呈する。内面はヨコナデであるが、外面は指頭圧痕を顕著に残している。686・687は土師質の鍋で指頭押圧ののちハケメ調整を行っている。い



第201図 溝69

いずれも顕著にススが付着している。688は竈である。691～694は瓦質の羽釜で器面は黒色である。羽釜691は鏝の下方2ヶ所に穿孔を行っているが、2つの孔は近接しており、また、それらと対になる位置には穿孔はなく、その目的はよくわからない。

(4)上層 (704～708・711)

東側の貝塚内(D断面3・4層)から出土したもので、いずれも完形品である。土師質碗はさらに小形化したもので、杯部は浅く、扁平な感じを受ける。口径12.0～11.2cm、器高4.1～3.5cmを測る。708は東播系のこね鉢、711は亀山焼の播鉢である。これらは破片であり、碗と同時期になるかどうか明確でない。711は使用によって内面が摩滅し、条線もわずかしこ遺存していない。

(5)上部堆積 (709・710)

D断面3層上方(B2～4層相当)、溝が完全に埋没する段階の堆積層から出土した。この層からの出土遺物はこの2点のみである。710は口径11.0cm、器高2.7cmを測り、底面には板圧痕が見られる。小皿709は口径6.9cm、器高1.2cmである。

瓦・硯

土器以外の遺物に瓦および硯がある。瓦は小破片が少量出土している。716～718が中層、715が中層最下部からの出土である。軒平瓦714はトレンチからの出土で、下層の可能性もあるが、他の瓦の出土層から中層に属すると考える。714・716が瓦質で表面が黒色を呈するのに対し、他は硬質に焼き上がっており灰色～暗灰色を呈する。714は瓦当面が良好に遺存している。中心飾りに巴文を配し、左右に剣頭文を配している。上側にのみ外区を設けて珠文を配している。715は外面に大形の斜格子タタキが施される。716は行基葺きになる丸瓦である。714・716は凸面が丁寧なナデ調整であるのに対し、717・718はいずれも粗いナデである。

硯は瓦質で上半部を欠損している。硯面は2面に分かれており、右の面が広くなる。右面は使用によって摩滅し上方が低くなっている。一方、左面はあまり減っておらず、上方が下側よりもわずかに高い。裏面には墨書があるがかなり薄く判読は困難である。上側は主とも見えるが文字の上部が欠損している可能性もある。下の文字の左側は示偏のように思われる。中層からの出土である。

木器ほか

W8は舟形木製品で前部を欠損している。幅7.0cm、残存長さ26.0cmと比較的大きい。上層（D3層）から出土した。W10は中層から出土した櫛である。W9はB12b層から出土した板材で、径2～8mmの円孔が3列に設けられている。両端が浅く弧を描いており曲げ物容器の底板と考えられる。

W11は中層（B14層下面）から出土した呪符である。長さ27.9cm、上端幅5.0cm、厚さは上端で2mm、下端で1mmである。保存状態は比較的良好であるが、書かれた時点で墨が滲んでいるため読みとりにくい文字もある。上方には局、鬼等の文字がある。下端の文字は急々如律令になると思われる。呪文の種別は不明であるが、災厄を払うまじない札とみてよい。なお、呪符はもう一点出土したが保存できなかった。この呪符よりも一回り小さく、上崩に薄く墨書の痕跡が残るものであった。

鉄器には釘M9・M10、鍋の釣り手状の破片M7などがある。また、鍛冶滓と推定される鉄滓が、少量ではあるが各層から出土している。

これらの遺物のほか、獣骨、人骨が出土している。獣骨は牛・馬のもので解体痕跡を残しており、基部を釘で打ち付けて解体したとみられる肋骨もある。人骨は小児の頭・顎骨である。いずれも土器等とともに投棄されたものである。また、桃の種も多量に出土した。

年代と機能

以上の出土遺物は、土師質碗の編年にもとづけば西肩部たわみが12世紀前半、下層が12世紀末ごろ、中層が13世紀中ごろ、上層が13世紀後半、上部堆積は14世紀前半となろう。溝の開掘年代は明確にできなかったが、西肩部の遺物が早くに形成された堆積とするなら12世紀以前となり、完全に埋没してしまうのが14世紀となる。13世紀には貝塚を形成しながら埋没が急速に進んでおり、すでにそのころには溝としての機能は失われていたとみてよいであろう。

貝塚は長期間にわたって形成されたものであり、季節的に貝の採集がおこなわれていた可能性が考えられる。溝71の南側に中世の遺構は検出できなかったが、遺物量の多さからみてかなり近い位置に集落が所在したと考えられ、水田の造成がなされる以前にはこの付近にも遺構が広がっていた可能性が強いと思われる。

溝の規模が大きく、底面は海拔以下の深さになっており、単に農業のための用排水路と考えるよりも、運河として機能をもつ溝であったと考えるのが妥当ではないかと思われる。この溝がいずれに至るか明確でないが、西の303Ⅱ-G区で検出した溝69が出土遺物から同時期とみられ、深さも同様であることから、これに続いている可能性がある。溝69は調査区に碗状に食い込んだような形状であることから溝の屈曲部ではないかと思われる。溝71と69は直線でつながるのではなく、屈曲しながら西へのび、さらに屈曲しつつ西へ続いている可能性が考えられる。 (宇垣)

溝72

東に深くなりながらのびる溝で、東端で幅220cm、深さ48cmを測る。埋土は灰色砂質土である。溝が完全に埋まって後に設けられており、中世後半ないし近世のものと思われる。遺物は出土しなかった。 (宇垣)

溝73

溝72に平行する溝で、東端で幅140cm、深さ50cmを測る。埋土は灰色砂質土である。溝73と同様、遺物は出土しなかった。溝72と同様の時期であろう。 (宇垣)

第5章 まとめ

本報告書掲載調査区は、東西に長大なトレンチ状をなしているため、集落の様相などを理解するにはやや情報不足といえよう。ただ、大上田・東苗代・大地調査区の北側の一部は、すでに「百間川兼基遺跡1・百間川今谷遺跡1」（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』51 1982年）として刊行されており、その成果を重ね合わせながら若干のまとめを行なう。

百間川兼基遺跡と百間川今谷遺跡（以下兼基・今谷と略す）の中心は同一微高地上にあり、弥生時代から中世にいたる遺構・遺物が発見されている。このうち本報告書掲載調査区で最も古い時期を示す遺物は、黒中調査区から出土した弥生時代前期の土器であり、遺構は明確でないものの、この微高地が利用されたことをうかがわせる。

弥生時代中期の遺構・遺物は低位部を挟みながら、調査区全域へ拡大しているが、特に集中するのは黒中・和佐田調査区から「兼基・今谷1」の大地調査区にかかる北西から南西方向の範囲である。「兼基・今谷1」の大地調査区で発見された大形建物群は、南に接する本報告の大地調査区からは全く認められないばかりか、その他の遺構についても検出されていない。おそらく「兼基・今谷1」の溝14が、微高地のやや低くなる南縁を流走するものと思われ、その北側の安定した場所へ建物群が集中するのであろう。

弥生時代後期の遺構・遺物もあまり多いとはいえないが、水田および溝などが検出された。水田は黒中・和佐田調査区の低位部と、大上田調査区の西側、そして大地調査区の東側に広がることが確認できた。大上田の西側に広がる水田は沢田遺跡の微高地との間に広がる水田の一部で、北側に位置する黒中・和佐田調査区の水田との関係は明確でないが、やや複雑に入り組みながらつながっているものと思われる。大地調査区の東側に広がる水田は、今回初めて確認されたもので、北および南側へどう広がっていくのかは不明であるが、調査区域内で水田が終わっていることを考えると、東側へ大きく拡大していくようには思えない。

なお、「兼基・今谷1」においても洪水砂の溜りとして認識されていた、微高地上のやや低い部分であるが、今回も東苗代から大地調査区にかけての範囲に見られ、洪水砂を除去すると当時の自然地形が確認できた。この自然地形を見ると、決して平坦な地形ではなく、随所に自然の高まりが認められた。これは丁度、後期の水田にしばしば見られる島状高まりに類似している。おそらく水田が作られた低位部も本来はこうした自然地形が広がっており、水田開発時に土量などとの関係で、全て削り取ることができなかった自然地形の高まりが、水田中の島状高まりとして残されたのではなかろうか。そのなかには削平し残したものばかりではなく、逆に捨て場のない残土を自然地形の高まりへ盛り上げたものもあったと考えられる。事実島状高まりの中には、断面からそうした痕跡が確認できるものも少なからずある。

また後期の水田から、稲株痕跡と考えられる小穴が発見されたことも注目される。明確に田植えを示すような整然とした小穴の並びは見えないが、部分的には1m前後の幅で直線ないしわずかに弧を描いて並んでいるように見える場所もあることから、その可能性は強いものと思われる。さらに小穴の検討から、稲株の痕跡であるということをより一層明確にし得た。ただ、こうした稲株痕跡が全

ての水田に認められるわけではなく、広大な水田の一部に認められることから、その解釈が今後の大きな課題であろう。

古墳時代の遺構・遺物もあまり多いとはいえないが、竪穴住居、井戸、土壇、溝などが発見されている。

黒中調査区では古墳時代初頭の竪穴住居や井戸などが発見されているが、その広がりについては明らかにし得ない。大上田調査区では竪穴住居が3軒みられることから、集落の一角を占めていたと推定されるが、「兼基・今谷1」の大上田で確認された、建物と竪穴住居で構成された集落の中心からははずれている。

大地調査区で発見された幅12mの大溝は、古墳時代（百・古・Ⅱ）前半期のものであるが、単に用水路として機能していたとは思えない。兼基・今谷遺跡の南側丘陵に築造された墳長165mの金蔵山古墳の築造時期とも重なることから、おそらく古墳造営の物資を運ぶための運河として掘削されたのではなかろうか。

古代の遺構は極めて少ないが、大地調査区で奈良時代の大溝が発見されている。溝内に護岸施設と考えられる石積みをもつ大溝で、流走する方向は明確でないが、現行の条理と重ね合わせてみると坪境にあたる位置にある。

中世の遺構は調査区全域で認められる。このうち五ノ坪調査区の大溝は、米田遺跡から操山の山裾に沿って兼基・今谷遺跡から沢田遺跡に向かううちの一部にあたると考えられる。大溝の南側の近接した場所に集落があったものと考えられ、そこから投棄された貝が溝内に厚く体積しており、土器類なども多く見られた。溝の底部は海抜以下の深さになっており、農業用の水路としての利用もあったかもしれないが、主たる目的は運河ではなかろうか。

(平井)

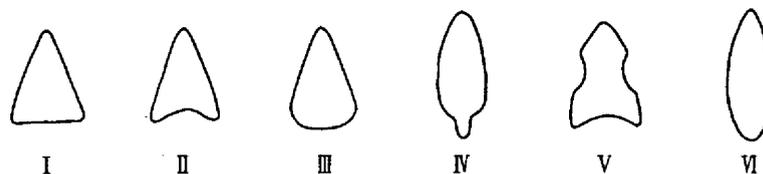
一 覧 表

1. 石器一覧表

2. 新旧遺構名称対照表

凡 例

1. 石器一覧表の番号は整理番号であり、掲載番号が本報告書掲載図の番号にあたる。
2. 各一覧表の時代・時期は遺構の時期を示しており、必ずしもその遺物の時期を示すものではない。
3. 石製品の形式は、石鏃についてのみ以下の分類を行なっている。
I. 平基式 II. 凹基式 III. 凸基Ⅰ式 IV. 有茎式 V. 抉り入り式 VI. 凸基Ⅱ式



4. 新旧遺構名称対照表の新名称は報告書作成時に付したもので、旧名称は発掘調査時のものである。

1. 石器一覧表

番号	掲載番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	型式	計測最大値(mm)			重量(g)	石材	残存	備考
							長	幅・径	厚				
1		黒中E1	灰褐色土層	弥生	削器		44.0	22.5	7.0		サヌカイト	欠	
2		黒中E1	茶褐色	弥生	削器		14.0	32.5	5.8		サヌカイト	欠	
3		黒中E2	黄褐色粘性土層	弥生	楔		22.0	28.5	8.5		サヌカイト	完	
4		黒中E2	灰褐色土	弥生	楔		25.5	35.0	9.5		サヌカイト	完	
5		黒中W3西半	溝(Na1)	弥生	楔		29.0	34.5	9.0		サヌカイト	完	
6		黒中W3西半	遺構検出中	弥生	楔		21.0	20.0	5.0		サヌカイト	完	
7		黒中W3西半	Na2	弥生	石斧		168.0	82.5	46.0		安山岩	完	未製品
8		黒中W3西半	南側側溝		削器		72.0	45.0	14.0		サヌカイト	完	
9		黒中W3西半	南側側溝		石包丁		121.5	44.0	14.0		サヌカイト	完	
10		黒中W4東半	側溝		石包丁		101.5	42.0	8.0		サヌカイト	完	
11		黒中W4東半	北側側溝		削器		39.5	31.5	5.5		サヌカイト	欠	
12		黒中W4～5	北側溝(暗灰色粘土層)	弥生	沈子		74.0	45.5	41.0		軽石	完	
13		黒中W8	海拔0m	弥生	削器		44.5	36.0	8.0		サヌカイト	完	
14		黒中W8西半	海拔30～50cm	弥生	削器		39.0	37.0	8.0		サヌカイト	完	
15		黒中W8	海拔0～28cm	弥生	石鏃	II	24.5	23.0	4.0	2.1	サヌカイト	完	
16		黒中W8	海拔0～28cm	弥生	削器		65.0	60.0	9.0		サヌカイト	完	
17		和佐田E10東半		弥生	削器		79.0	35.5	7.0		サヌカイト	完	
18		和佐田E10西半		弥生	楔		25.0	33.0	9.0		サヌカイト	完	
19		和佐田E10西半		弥生	楔		20.5	30.0	6.5		サヌカイト	完	
20		和佐田E10西半		弥生	削器		34.5	38.0	5.5		サヌカイト	完	
21		和佐田E10西半		弥生	削器		31.0	23.5	7.5		サヌカイト	欠	
22		和佐田E10～11東半	水田層	弥生後期	削器		46.0	51.0	8.0		サヌカイト	完	
23		和佐田E10～11	側溝		楔		39.0	36.0	13.0		サヌカイト	完	
24		和佐田E10東半、E11西半	側溝		石包丁		49.0	32.0	11.5		サヌカイト	欠	
25		和佐田E11東半	暗灰色粘土層 土器溜	弥生	削器		63.5	35.5	6.0		サヌカイト	完	
26		和佐田E11東半	暗灰色粘土層(②層)	弥生	石包丁		47.0	33.0	8.0		サヌカイト	欠	
27		和佐田E11	暗灰色粘土層上面	弥生	楔		21.5	19.0	8.0		サヌカイト	完	
28		和佐田E12	水田層	弥生後期	削器		63.5	33.0	6.5		サヌカイト	完	
29		和佐田E12	淡褐色砂質土	弥生	削器		25.0	24.0	5.0		サヌカイト	欠	
30		和佐田E12西半	灰青緑色粘性砂質土層	弥生	削器		77.0	40.0	10.5		サヌカイト	欠	
31		和佐田E13	側溝		削器		50.0	34.0	9.0		サヌカイト	完	
32		和佐田E13東半	Na4	弥生	楔		21.5	26.0	7.5		サヌカイト	完	
33		和佐田E13東半			石斧		84.0	47.0	20.0		安山岩	完	未製品
34		和佐田E13	土壇Na41	弥生	楔		25.0	22.0	6.5		サヌカイト	完	
35		黒中E2	暗灰褐色粘性土層	弥生	楔		44.0	35.0	14.0		サヌカイト	完	
36		黒中W2	大溝西側斜面		削器		53.0	51.0	5.8		サヌカイト	完	
37		黒中W2	大溝第6層		石鏃	I	24.0	16.0	4.3	14.0	サヌカイト	欠	
38		黒中W2	大溝第6層		削器		53.5	26.0	8.9		サヌカイト	完	
39		黒中W2	大溝第6層		楔		45.0	30.0	10.5		サヌカイト	完	
40		黒中W2	暗茶褐色砂質土	弥生	削器		60.0	30.0	9.0		安山岩	完	
41		黒中W2	大溝第6層		石槍		71.0	30.0	7.5		サヌカイト	欠	
42		黒中W3西半			削器		31.0	24.0	4.0		サヌカイト	欠	
43		黒中W3東半			削器		62.0	48.0	11.0		サヌカイト	完	
44	S7	黒中W3東半	土壇1	弥生	石鏃	II	20.5	13.0	3.0	0.7	サヌカイト	欠	
45		黒中W3西半	井戸		石鏃	II	31.0	17.0	4.0	1.8	サヌカイト	欠	
46	S6	黒中W3西半	側溝		石包丁		81.0	42.0	13.0		サヌカイト	欠	
47	S3	黒中W3	住居址埋土		石鏃	I	16.5	11.5	2.8	0.6	サヌカイト	欠	
48		黒中W3西半			削器		50.0	32.0	4.5		サヌカイト	完	
49	S4	黒中W4西半	暗灰色粘土水田層下30まで	弥生	削器		74.0	58.5	9.5		サヌカイト	完	
50		黒中W5東半	暗茶灰色粘土層	弥生	石錘		77.0	29.0	16.5			完	
51	S8	黒中W5西半	水田面-10～-40まで	弥生	楔		25.0	25.0	9.0		サヌカイト	完	
52	S9	黒中W5西半	水田面-10～-40まで	弥生	楔		26.0	30.0	9.0		サヌカイト	欠	
53	S1	黒中W5東半	大畦畔～その西1m水田層	弥生	石包丁		59.0	51.0	9.0		サヌカイト	欠	
54		黒中W8西半	海拔-24cm	弥生	削器		40.0	45.0	9.7		サヌカイト	欠	
55		黒中W8西半	海拔-24cm	弥生	削器		65.0	43.5	9.6		サヌカイト	完	
56		黒中W8西半	海拔-24cm	弥生	石鏃	V	25.5	15.0	2.8	1.8	サヌカイト	欠	
57		和佐田E3	黄褐色粘性土層	弥生	削器		53.0	36.5	9.7		サヌカイト	完	
58		和佐田E9	④の上層	弥生	削器		32.0	31.0	7.5		サヌカイト	完	
59		和佐田E9			石鏃	I	30.5	17.0	3.6	1.8	サヌカイト	欠	
60		和佐田E9	6層	弥生	石包丁		24.0	26.5	8.2		サヌカイト	欠	

番号	掲載号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	型式	計測最大値 (mm)			重量 (g)	石材	残存	備考
							長	幅・径	厚				
61		和佐田E9			楔		37.0	32.0	9.3		サヌカイト	完	
62		和佐田E9			削器		56.0	49.0	9.5		サヌカイト	欠	
63		和佐田E10西半			石鏃	I	18.0	11.0	2.0	0.5	サヌカイト	欠	
64		和佐田E10西半			石斧		52.5	48.5	10.0		安山岩?	欠	
65		和佐田E10西半			削器		25.0	39.0	6.0		サヌカイト	欠	
66		和佐田E10~11	灰色土	弥生	削器		40.0	23.0	7.0		サヌカイト	欠	
67		和佐田E11	P-16	弥生	石鏃	I	26.5	14.0	5.0	1.3	サヌカイト	完	
68		和佐田E11			削器		98.0	42.0	10.0		サヌカイト	完	
69		和佐田E11	暗灰色粘土層	弥生	石鏃	I	24.0	20.5	4.4	1.4	サヌカイト	欠	
70	S12	和佐田E11	住-1	弥生	削器		48.5	33.0	7.0		サヌカイト	欠	
71	S10	和佐田E11	住-1	弥生	石鏃	III	21.0	18.0	4.5	1.7	サヌカイト	欠	
72		和佐田E11	暗灰色粘土	弥生	石鏃	VI	24.5	10.5	3.2	0.7	サヌカイト	完	
73		和佐田E11東半	暗灰色粘質土 土器溜り	弥生	石鏃	I	19.0	11.0	2.7	0.5	サヌカイト	欠	
74		和佐田E11東半			石包丁		67.0	57.0	8.0		サヌカイト	欠	
75		和佐田E11東半			削器		134.0	68.0	16.5		サヌカイト	完	
76		和佐田E11東半	暗灰色粘土層	弥生	削器		42.0	24.0	4.5		サヌカイト	欠	
77		和佐田E11東半			石錐		38.5	28.5	7.0		サヌカイト	欠	
78		和佐田E12	淡褐色砂質土	弥生	石鏃	II	18.0	17.0	3.0	0.8	サヌカイト	欠	
79		和佐田E12、13	琥珀色砂質土	弥生	石鏃	II	20.5	13.5	2.4	0.6	サヌカイト	欠	
80		和佐田E12、13			楔		21.5	29.5	11.7		サヌカイト	完	
81		和佐田E13東半	黒灰色土	弥生	石鏃	II	29.0	22.0	4.7	2.8	サヌカイト	欠	
82	S13	和佐田E13東半	No.6	弥生	削器		70.0	43.0	6.2		サヌカイト	完	
83		和佐田E13東半	溝5下	弥生	楔		49.5	49.0	17.5		サヌカイト	完	
84		大上田305I	包含層	弥生	削器		29.0	44.0	5.0		サヌカイト	完	
85		大上田305KIII	土器溜り	弥生	石包丁		57.0	42.0	9.5		サヌカイト	完	
86		大上田305G	畝状遺構排出中		石鏃	VI	22.5	10.5	4.0	1.0	サヌカイト	欠	
87		大上田305M	茶灰色粘質土	弥生	石鏃	I	26.5	12.0	2.5	0.8	サヌカイト	欠	
88		大上田G	P3	弥生	削器		33.5	29.5	6.5		サヌカイト	完	
89		大上田F	茶褐色土	弥生	削器		30.0	36.5	8.5		サヌカイト	完	
90		大上田305F	基盤層	弥生	石包丁		46.5	43.5	9.7		サヌカイト	欠	
91		大上田305I	No.102溝下	弥生	石鏃	I	19.0	15.5	3.2	0.9	サヌカイト	欠	
92		大上田305I	5群	弥生	石鏃	II	29.5	14.0	3.0	1.6	サヌカイト	欠	
93		大上田305J~L			石鏃	II	34.5	16.0	3.8	1.8	サヌカイト	欠	
94		大上田305J	L:160まで (No.101検出)	弥生	石鏃	IV	39.5	15.5	5.5	3.4	サヌカイト	欠	
95		大上田305KM	土器溜り	弥生	石鏃	IV	42.5	12.5	5.8	2.5	サヌカイト	欠	
96		大地306W	拡張区 大溝下層上部3	弥生	石鏃	II	26.0	17.0	4.0	1.6	サヌカイト	欠	
97	S34	大地305X	中7層	弥生	石鏃		39.0	22.5	9.0		サヌカイト	欠	
98		大地304II B	弥生後期 生活面	弥生	石鏃	I	22.0	14.0	3.5	1.0		欠	

2. 新旧遺構名称対照表

報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	担当者	年度
水田	水田	黒中W 8~W 4	井・浅・柳・岡・平・古	1982
建物 1	P 20・21・22・23・24	黒中E 2	柳・岡	1982
建物 2	P 29・30・33・34・37	黒中E 3	柳・岡	1982
土器棺 1	壺棺	黒中W 1	平・古	1982
土壌 1	P 8	黒中W 3	柳・岡	1982
溝 1	Na 3	黒中W 3	平・古	1982
溝 2		黒中W 3	平・古	1982
溝 3	D 1	黒中W 2	柳・岡	1982
溝 4		黒中E 1	平・古	1982
溝 5		黒中E 1	平・古	1982
溝 6	Na 26	黒中E 3	柳・岡	1982
溝 7	Na 27	黒中E 3	柳・岡	1982
溝 8	Na 28	黒中E 3	柳・岡	1982
土器溜り 1	土器溜り	黒中W 3	柳・岡	1982
土器溜り 2	土器溜り	黒中E 3	柳・岡	1982
竪穴住居 1	H 1	黒中W 3	柳・岡	1982
竪穴住居 2	H 2	黒中W 3	柳・岡	1982
井戸 1	Na 1	黒中W 3	平・古	1982
井戸 2	井戸	黒中W 1	平・古	1982
溝 9	大溝	黒中W 2	井・浅	1982
溝 10	Na 12	黒中E 2	柳・岡	1982
溝 11	Na 9	黒中E 2	柳・岡	1982
溝 12	Na 8	黒中E 2・3	柳・岡	1982
溝 13	Na 11	黒中E 3	柳・岡	1982
柱穴列 1	Na 20	黒中E 2	柳・岡	1982
水田	水田	佐和田E 7~E 12	柳・岡・井・浅・平・古	1982
竪穴住居 3	H 1	佐和田E 11	柳・岡	1982
竪穴住居 4	住居址	佐和田E 13	平・古	1982
土壌 2	P 26	佐和田E 11	柳・岡	1982
土壌 3	P 24	佐和田E 11	柳・岡	1982
土壌 4	P 25	佐和田E 11	柳・岡	1982
土壌 5	P 21	佐和田E 11	柳・岡	1982
土壌 6	P 19	佐和田E 11	柳・岡	1982
土壌 7	P 12	佐和田E 11	柳・岡	1982
土壌 8	P 13	佐和田E 11	柳・岡	1982
土壌 9	P 10	佐和田E 11	柳・岡	1982
土壌 10	P 9	佐和田E 11	柳・岡	1982
土壌 11	P 8	佐和田E 11	柳・岡	1982
土壌 12	P 3	佐和田E 12	柳・岡	1982
土壌 13		佐和田E 12	柳・岡	1982
土壌 14	P 1	佐和田E 12	柳・岡	1982
土壌 15		佐和田E 13	平・古	1982
土壌 16	Na 14	佐和田E 13	平・古	1982
溝 14		佐和田E 5	平・古	1982
溝 15		佐和田E 6	平・古	1982
溝 16	Na 7	和佐田E 6	平・古	1983
溝 17	Na 6	和佐田E 6	平・古	1983
溝 18	Na 5	和佐田E 7	平・古	1983
溝 19		和佐田E 10	平・古	1983
溝 20	Na 4	和佐田E 13	平・古	1983
溝 21	Na 3	和佐田E 13	平・古	1983
溝 22	Na 9	和佐田E 13	平・古	1983
溝 23	Na 5	和佐田E 13	平・古	1983
溝 24	Na 1	和佐田E 13	平・古	1983
土壌列 1	Na 4	佐和田E 6・7	平・古	1982
竪穴住居 5		大上田305K	柳・岩	1983
土器棺 2	壺棺	大上田305F	平・古	1983
土壌 17	土壌 13	大上田304・305E・F	平・古	1983
土壌 18	Na 10	大上田304L	柳・岡	1983
溝 25	溝 103	大上田305H・I	柳・岩	1983
溝 26	溝 101	大上田305I~L	柳・岩	1983

報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	担当者	年度
溝27	溝102	大上田303・305 I・J・L	柳・岩	1983
溝28	No. 8	大上田304 L	柳・岡	1983
溝29	No. 7	大上田304 L	柳・岡	1983
溝30	No. 9	大上田304 L	柳・岡	1983
水田	水田	大上田304・305 B~E	平・古	1983
土器溜り3		大上田305 K	柳・岩	1983
土器溜り4		大上田305 I	柳・岩	1983
竪穴住居6	住居1	大上田305 F	平・古	1983
竪穴住居7		大上田305 H	柳・岩	1983
竪穴住居8	No. 6	大上田305 K・L	柳・岡	1983
土壇19	土壇8	大上田305 E	平・古	1983
土壇20	土壇6	大上田305 E	平・古	1983
土壇21	P13	大上田305 E	平・古	1983
土壇22	土壇12	大上田305 F	平・古	1983
土壇23	土壇11	大上田305 F	平・古	1983
土壇24	土壇7	大上田305 F	平・古	1983
土壇25	土壇10	大上田305 J	平・古	1983
土壇26		大上田305 I	柳・岩	1983
溝31	溝9	大上田305 C・D	平・古	1983
溝32	溝5	大上田305 E	平・古	1983
溝33	溝3	大上田305 F	平・古	1983
溝34	No. 4	大上田303・304 L	柳・岡	1983
溝35	No. 3	大上田303・4 L	柳・岡	1983
柱穴列2	No. 5	大上田304 L	柳・岡	1983
水田	水田1・2	大上田305 E~G	平・古	1983
建物3	建物4	大上田305 F	平・古	1983
土壇27	土壇2	大上田305 F	平・古	1983
土壇28	土壇4	大上田305 F	平・古	1983
土壇29	土壇5	大上田305 F	平・古	1983
土壇30	土壇3	大上田305 F・G	平・古	1983
土壇31	土壇1	大上田305 F・G	平・古	1983
溝36	溝7	大上田304 C	平・古	1983
溝37	溝6	大上田304・5 C	平・古	1983
溝38	溝4	大上田305 E	平・古	1983
溝39	溝1	大上田305 E	平・古	1983
溝40	溝2	大上田305 G	平・古	1983
溝41	No. 1	大上田303・304 L	柳・岡	1983
溝42	No. 2	大上田303・304 L	柳・岡	1983
溝43		大上田305 K・L	柳・岩	1983
溝44		大上田305 L	柳・岩	1983
畝状遺構		大上田303~305 F~L	柳・岩・平・古・岡	1983
自然高まり		東苗代305 M~Q	江・山	1983
溝45	305下層溝	東苗代305 O・P	江・山	1983
溝46	305下層溝	東苗代305 O	江・山	1983
溝47	305下層溝	東苗代305 O	江・山	1983
溝48	305下層溝	東苗代305 Q	江・山	1983
溝49	305下層溝	東苗代305 Q	江・山	1983
土器溜り5		東苗代305 M	江・山	1983
建物4	305 M建物	東苗代305 M	江・山	1983
建物5	305 O建物	東苗代305 O	江・山	1983
溝50	溝9	東苗代305 N・M	江・山	1983
溝51	溝8	東苗代305 M	江・山	1983
溝52	溝7	東苗代305 O	江・山	1983
自然高まり		大地305・306 Q~V	柳・宇	1983
水田		大地303・304 I C~I G	柳・宇	1985
溝53		大地305 W~Z	柳・宇	1985
溝54	橋脚西下層溝	大地305 Q・R	江・山	1983
溝55	橋脚西下層溝	大地305 Q・R	江・山	1983
溝56		大地305 Q~S	平・高	1986
井戸3	井戸1	大地305 Q	江・山	1983
土壇32		大地304 R	平・高	1986
土壇33		大地305・306 T	江・山	1983
土壇34		大地306 T	江・山	1983
土壇35		大地306 W	柳・宇	1986
溝57		大地305・306 V・W	柳・宇	1985
溝58		大地305・306 V	柳・宇	1985
溝59		大地306 W	柳・宇	1985

一 覧 表

報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	担当者	年度
土壌35		大地306W	柳・宇	1985
土壌36		大地306Q	平・高	1986
土壌37		大地306Q	平・高	1986
土壌38		大地306・307Q	平・高	1986
土壌39		大地306Q	平・高	1986
建物6		大地306R	平・高	1986
建物7	中世柱穴状土壌	大地306U	江・山	1983
溝60		大地306Q	平・高	1986
溝61		大地306Q	平・高	1986
溝62		大地306・307Q	平・高	1986
溝63		大地306R・S	平・高	1986
溝64		大地306S	平・高	1986
溝65	溝2	大地305・306T・U	江・山	1983
溝66	溝1	大地305・306U	江・山	1983
溝67		大地304Y・Z	柳・宇	1985
溝68		大地305Z	柳・宇	1985
溝69		大地303I G	柳・宇	1986
溝70		大地303I G・I H	柳・宇	1986
畝状遺構		大地305・306V～X	柳・宇	1985
杭列3		大地303I G	柳・宇	1986
溝71		五ノ坪301I P・I Q	柳・宇	1986
溝72		五ノ坪301・302I Q	柳・宇	1986
溝73		五ノ坪301・302I Q	柳・宇	1986

担当者欄の柳は柳瀬昭彦、宇は宇垣匡雅、平は平井 勝、高は高田恭一郎、江は江見正己、山は山本明雄、岡は岡本寛久、古は古谷野寿郎、井は井上 弘、浅は浅倉秀昭、岩は岩崎仁司の略である。

報告書抄録

ふりがな	ひゃっけんがわかねもといせき ひゃっけんがわいまだにいせき							
書名	百間川兼基遺跡 2 百間川今谷遺跡 2							
副書名	旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査							
巻次	Ⅻ							
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	114							
編著者名	平井 勝・柳瀬昭彦・岡本寛久・宇垣匡雅・浅倉秀昭・江見正己							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-01 岡山県岡山市西花尻1325-3 Ⅷ 086-293-3211							
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700 岡山県岡山市内山下2-4-6 Ⅷ 086-224-2111							
発行年月日	西暦 1996年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査 面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひゃっけんがわかねもと 百間川兼基	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 かねもと 兼基	33201		34° 40' 5"	133° 58' 30"	黒中・和佐田（左 岸用水）1982 大上田（低水路） 〈305B～G〉1983 大上田（低水路） 〈305H～K〉1983 大上田（低水路市 道下）〈303・304 L〉1983 東苗代（低水路） 〈305M～Q〉1983	1720 1070 1590 330 1800	旭川放水路 （百間川） 河川改修に 伴う事前調 査
ひゃっけんがわいまだに 百間川今谷	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 いまだに 今谷	33201		34° 40' 5"	133° 58' 40"	大地（低水路） 〈305Q～U〉1983 大地（低水路） 〈306・307Q～S〉 1986 大地（低水路） 〈303～304ⅡD～ ⅡH〉1985 大地（低水路） 〈304～306U～ ⅡC〉1985 五ノ坪（低水路） 〈301・302ⅡP・ ⅡQ〉1986	460 260 880 1400 300	
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
百間川兼基 百間川今谷	集落 生産遺跡	弥生時代中期	竪穴住居 建物 土壇	2軒 2棟 15基 17条	弥生土器、土師器、 須恵器、石製品（石 包丁・石槍・石斧・ 砥石・双孔円板）木 製品、土製品（分銅 形土製品・人形土製 品・紡錘車）玉類 （管玉・小玉）	島状高まりと関係す ると見られる自然地 形の高まりを検出 稲株痕跡を検出 最大級と考えられる 弥生中期の分銅形土 製品が出土 弥生後期の土器溜り から人形土製品が出		
		弥生時代後期	竪穴住居 土器棺 土壇 溝 水田	1軒 2基 2基 15条				
		古墳時代	竪穴住居	5軒				

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
			建物 2棟 井戸 3基 土壇 12基 溝 17条		土
		中世	建物 3棟 土壇 9基 溝 22条 水田 畝状遺構		

1. 黒中調査区弥生時代後期の水田（東から）



2. 黒中調査区後期水田の畦畔と土層断面（南から）



図版2



1. 黒中調査区の建物1（北から）



2. 黒中調査区の建物2（北から）

1. 黒中調査区
の土器棺1
(南から)



2. 黒中調査区
の溝



3. 黒中調査区
土器溜り2
(北から)



図版4



1. 黒中調査区
竪穴住居 1
(南西から)



2. 黒中調査区
竪穴住居 2
(南から)



3. 黒中調査区
井戸 1
(西から)

1. 黒中調査区
井戸2
(西から)



2. 黒中調査区
溝9
(南西から)



3. 黒中調査区
柱穴列
(南から)



図版6



1. 和佐田調査区弥生時代後期の水田（東から）



2. 和佐田調査区E11区（東から）

1. 大上田調査区
の調査風景
(南東から)



2. 大上田調査区
の土層断面



3. 大上田調査区
の土層断面



図版8

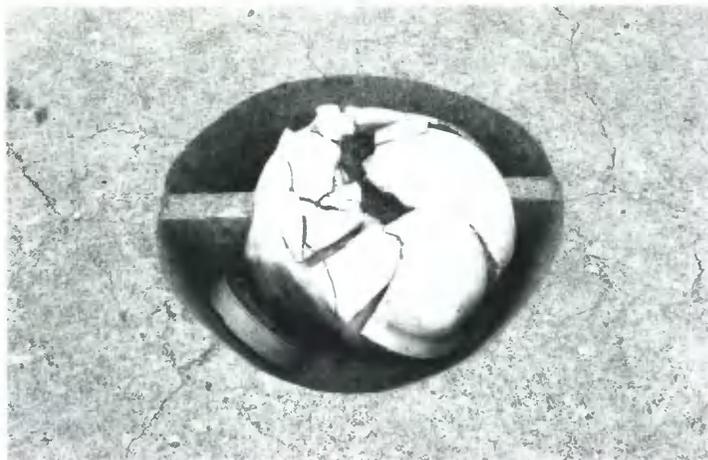


1. 大上田調査区の竪穴住居5（南東から）



2. 大上田調査区竪穴住居5の遺物出土状態（東から）

1. 大上田調査区
土器棺 2
(北東から)



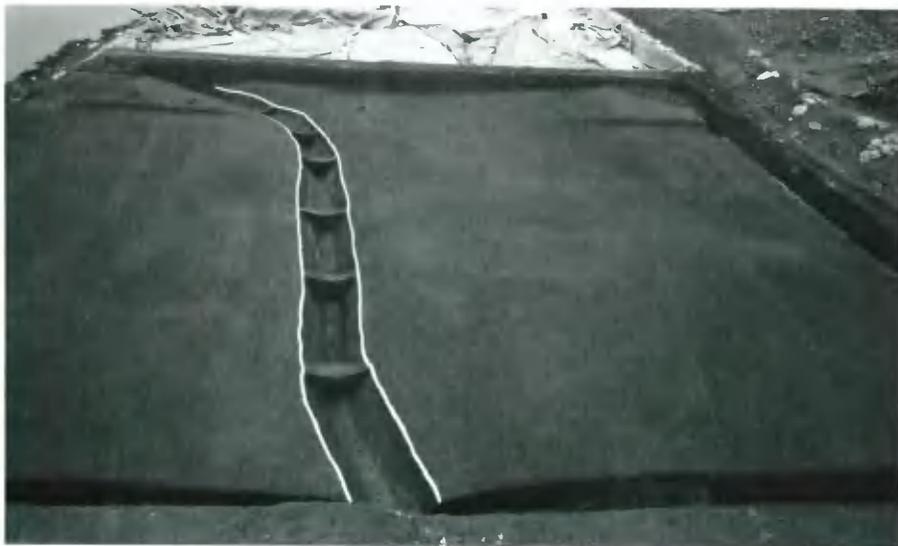
- 2 大上田調査区
土壙17
(北から)



- 3 大上田調査区
洪水砂除去後の
自然地形
(西から)



図版10



1. 大上田調査区溝27 (西から)



2. 大上田調査区溝25・26・27 (西から)

1. 大上田調査区溝27 (303 L)
(北から)



2. 大上田調査区
溝25断面
(北西から)



3. 大上田調査区
溝27断面
(南西から)



図版12



1. 大上田調査区弥生
時代後期の水田
(東から)



2. 大上田調査区弥生
時代後期の水田
(南西から)



1. 大上田調査区土壌18・溝30 (西から)



2. 大上田調査区溝29 (南西から)

図版14



1. 大上田調査区
土器溜り検出
風景



2. 大上田調査区
土器溜り3



3. 大上田調査区土器溜り3



1. 大上田調査区土器溜り4



2. 大上田調査区土器溜り4の人形土製品出土状態



3. 大上田調査区土器溜り4の人形土製品出土状態

図版16



1. 大上田調査区竪穴住居 6 (南東から)



2. 大上田調査区竪穴住居 7 (南から)

1. 大上田調査区
竪穴住居8の
遺物出土状態
(南から)



2. 大上田調査区竪穴住居8の櫛出土状態



3. 大上田調査区竪穴住居8 (南東から)



図版18



1. 大上田調査区303・304L区の遺構（北から）



2. 大上田調査区溝35（北西から）



3. 大上田調査区溝34（西から）

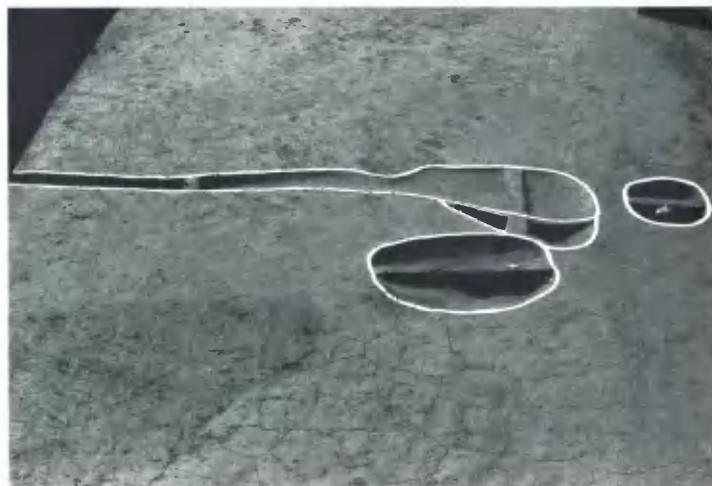
- 1 大上田調査区
土壙22
(西から)



- 2 大上田調査区
土壙21
(南から)



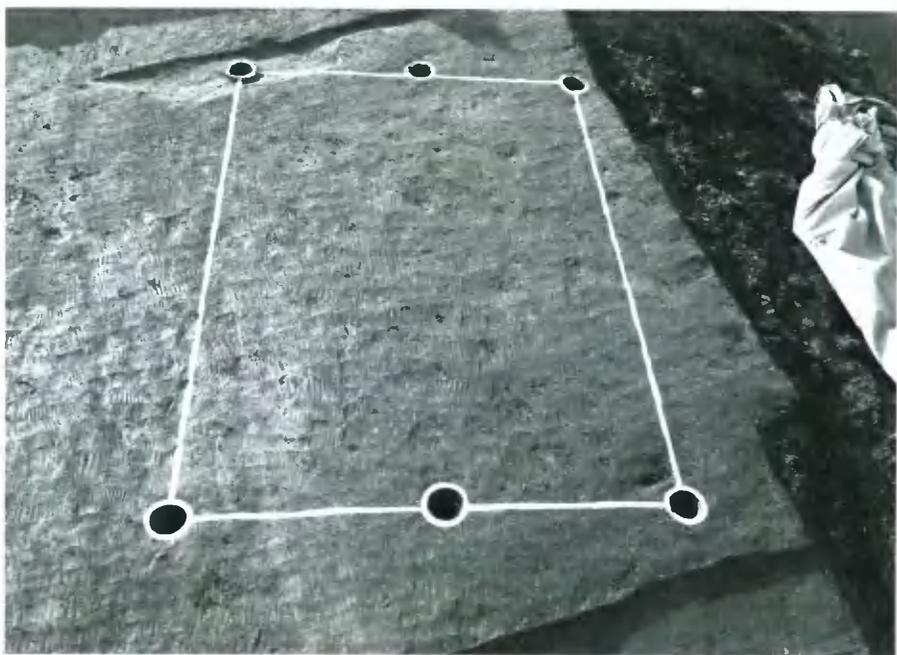
3. 大上田調査区
土壙19・20、
溝32
(東から)



図版20



1. 大上田調査区の中世水田（西から）

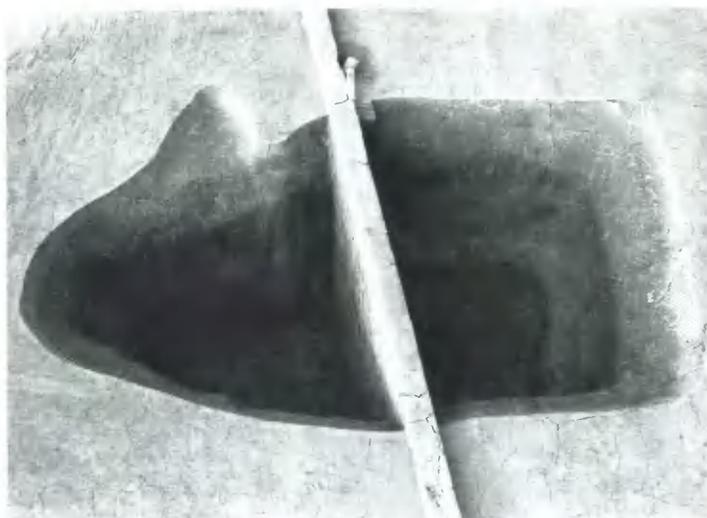


2. 大上田調査区建物3（東から）

1. 大上田調査区
土壌27
(東から)



2. 大上田調査区
土壌30
(南から)



3. 大上田調査区
土壌31
(南から)



図版22



1. 大上田調査区の畝状遺構(303・304 L)・溝41・42 (南から)



2. 大上田調査区溝43
(北から)



1. 大上田調査区の畝状遺構 (305 H・I) (西から)

2. 大上田調査区
の畝状遺構
(305 H)
(南から)



図版24

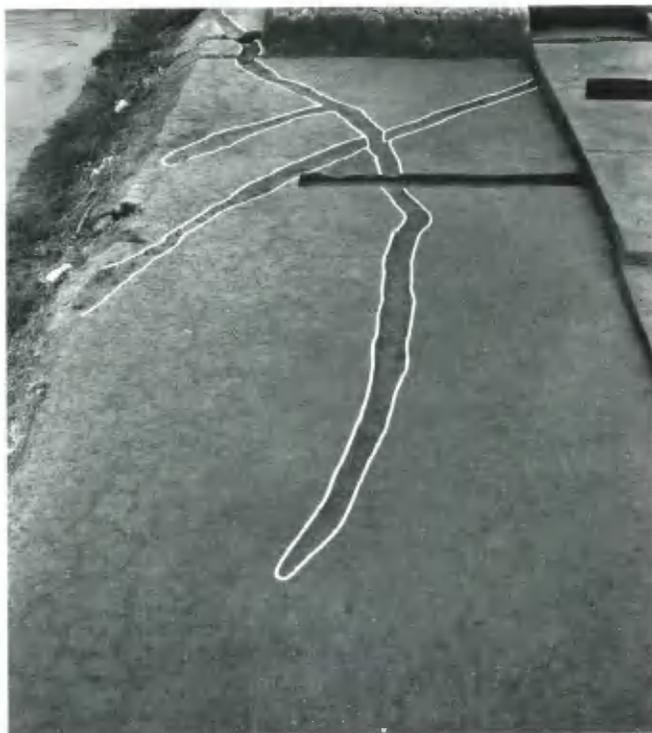


1. 東苗代調査区洪水砂除去後の自然地形（東から）



2. 東苗代調査区洪水砂除去後の自然地形・溝50・51・土器溜り5・建物4（東から）

1. 東苗代調査区溝45・
46・47
(西から)

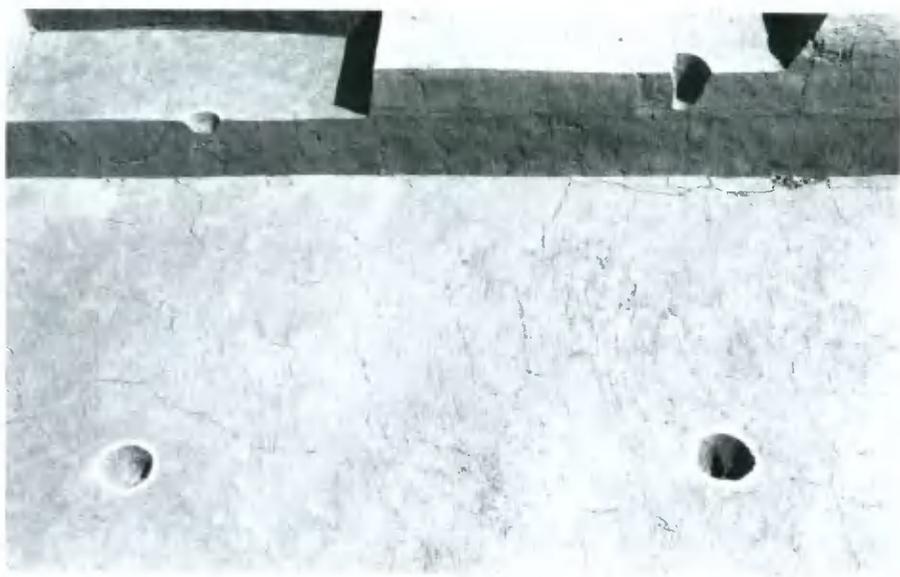


2. 東苗代調査区土器溜り5 (北から)

図版26



1. 東苗代調査区建物4

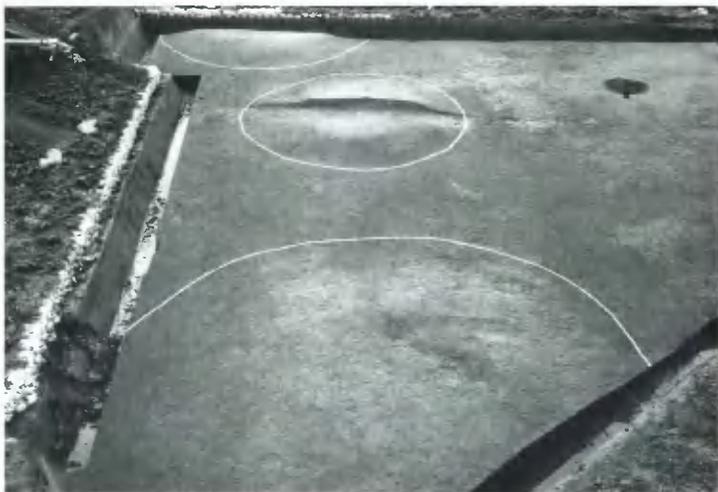


2. 東苗代調査区建物5 (西から)

1. 大地調査区
洪水砂除去
後の自然地形
(西から)



2. 大地調査区
洪水砂除去
後の自然地形
(東から)



3. 大地調査区
洪水砂除去
後の自然地形
高まり土
層断面



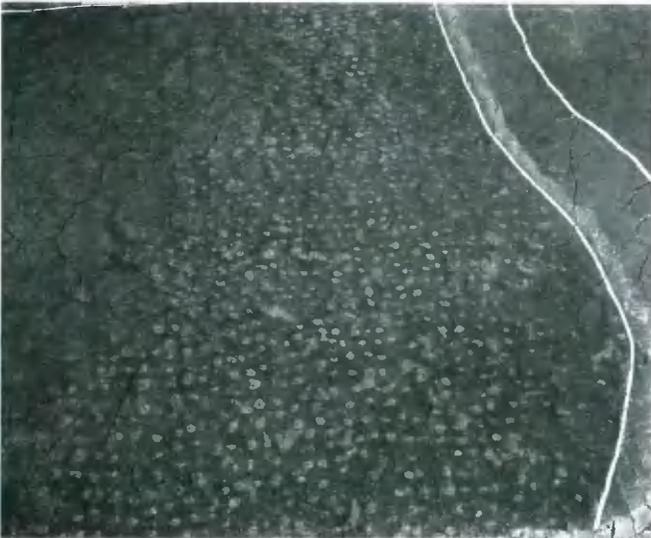
図版28



1. 大地調査区弥生後
期水田（南から）

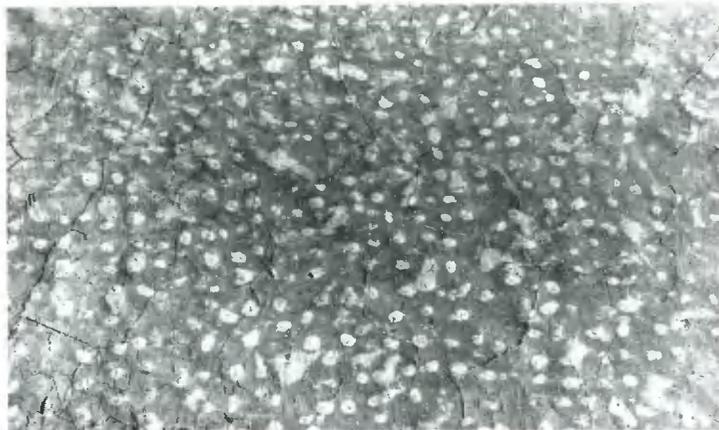


2. 大地調査区弥生後
期水田（西から）



3. 大地調査区弥生後
期水田の稲株痕

1. 大地調査区
弥生後期水
田の稲株痕



2. 大地調査区
弥生後期水
田の稲株痕



3. 大地調査区
弥生後期水
田の稲株痕
C



図版30



1 大地調査区
弥生後期水
田の稲株痕
b



2 大地調査区
弥生後期水
田の稲株痕
断面
e



3 大地調査区
弥生後期水
田の稲株痕
断面
a



1. 大地調査区井戸3



2. 大地調査区溝57・58・59（東から）

図版32



1. 大地調査区
溝57・58・59
(南から)



2. 大地調査区
溝57の遺物
出土状態



3. 大地調査区
溝58
(北西から)

1. 大地調査区
溝70
(東から)



2. 大地調査区
溝70の丸太
材検出状態



3. 大地調査区
畦状遺構 C
(305・306
V～X)
(西から)



図版34



1. 五ノ坪調査区溝71作業風景 (西から)



2. 五ノ坪調査区溝71 (東から)



1. 五ノ坪調査区溝71の土層断面（東から）



2. 五ノ坪調査区溝71の遺物出土状態



5



6



11



16



12



17



37



42



48



73



86



47



66



68



102



104



99



106



107

图版38



114



137



184



140



242



244



247



248



252



279



282



285



283



286



287



288



289



291



290上



294



295

图版40



296



298



301



302



303



306



310



312



300



313



316



317



334



335



365



419



425



424



421



429



440



430



435



437



438

图版42



466



474



481



480



482



483



484



495



497



498



503



520



530



531



532



535



537



575



597



594



610



579



581



588



629



616



611



624

图版44



638



641



644



662



664



667



671



673



711



683



687



694



688



696



700



714



698



707



703



710



C 14



W1



W2



W3



W4



W6



W7



W8

図版46



S21



S10



S7



S18



S23



S22



S8



S6



S19



S4



S5



S1



S13



S26



S9



S12



M1



M7



M8



M9



M10



J7



J2



J6



J1

1. 玉類



S25



S24



S29



S28



S30

2. 有孔円板



C2



C3



C1



C6



C10

3. 土製紡錘車

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告114

百間川兼基遺跡 2 百間川今谷遺跡 2

旭川放水路（百間川）改修
工事に伴う発掘調査 XII

1996年3月20日 印刷

1996年3月31日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3

発行 建設省岡山河川工事事務所
岡山市鹿田町2-4-36
岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6

印刷 友野印刷株式会社
岡山市高柳西町1-23